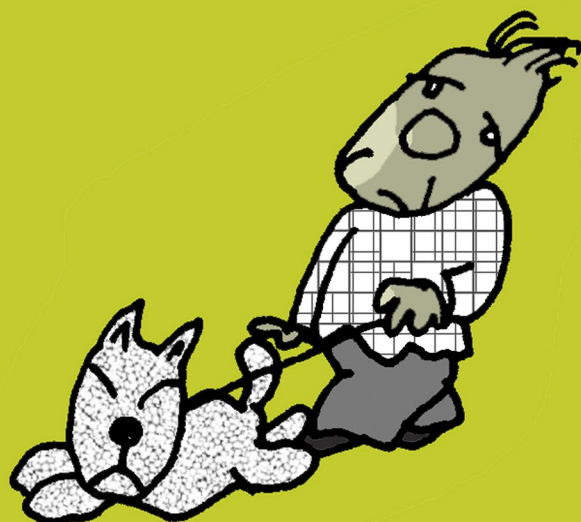


連載専門誌

対人援助学マガジン



vol. 15 No.3

第59号

JUNE 2024

対人援助学会

No.59 M O K U J I

目次		002-003
ハチドリの器	見野 大介	004
執筆者@短信	執筆者全員	005-015
障害者福祉援助論	千葉 晃央	016-019
臨床社会学の方法 (47)	中村 正	020-029
カウンセリングのお作法 (41)	中島 弘美	030-032
晩年 D・A・N 通信	団 士郎	033-048
幼稚園の現場から (59)	鶴谷 主一	049-056
福祉系対人援助職養成の現場から (59)	西川 友理	057-064
ああ、相談業務 (19)	河岸 由里子	065-067
きもちなことばを探している	水野 スウ	068-071
路上生活者の個人史 (13)	竹中 尚文	072-074
スポーツおじいさんになりたい! (3)	國友 万裕	075-082
臨床のきれはし (27)	浅田 英輔	083-085
発達検査と対人援助学 (18)	大谷 多加志	086-088
講演会&ライブな日々(41)	古川 秀明	089-095
療育手帳の向こう側 (1)	坂口 伊都	096-099
周辺からの記憶 - 東日本大震災家族応援プロジェクト - (45)	村本 邦子	100-124
精神科医の思うこと (35)	松村 奈奈子	125-127
バインダー 蜘蛛の糸	柳 たかを	128-136
馬渡の眼	馬渡 徳子	137-138
心理コーディネーターになるために	山下 桂永子	139-141
そうだ、猫に聞いてみよう	小池 英梨子	142-147
先人の知恵から (46)	河岸 由里子	148-154
うたとかたりの対人援助学 (31)	鵜野 祐介	155-158
ああ結婚 (32)	黒田 長宏	159-162
PBL の風と土 (31)	山口 洋典	163-168
接骨院に心理学を入れてみた (30)	寺田 弘志	169-177
現代社会を『関係性』という観点から考える (30)	三浦 恵子	178-188
保育と社会福祉を漫画で学ぶ (26)	迫 共	189-192
「余地」—相談業務を楽しむ方法— (29)	杉江 太朗	193-195

統合失調症を患う母とともに生きる子ども	松岡 園子	196-197
私の頭の中のまだエンピツ（新連載）	川畑 隆	198-202
応援、母ちゃん（19）	玉村 文	203-206
HITOKOMART（18）	篠原ユキオ	207-211
川下の風景（16）	米津 達也	212-214
こころ日記『ぼちぼち』PartⅢ	脇野 千恵	215-216
父が自分の身を呈して教えてくれたこと	高名 祐美	217-218
一語一絵（16）	畑中 美穂	219-221
対人援助をリポートするこの一冊（27）	渡辺 修宏	222-223
こかげのにちじょう（10）	鳴海 明敏	224-225
私はここにいる－現象学としての書道－（10）	櫻井 育子	226-227
教室の窓から	來須 真紀	228-230
社会科の授業を対人援助学の視点から	内田 一樹	231-235
ある訪問看護師のアタマの中	山岸 若菜	236-238
人生は対応のバリエーション	宮井 研治	239-243
けふばあちゃんからの手紙	乾 京子	244-245
心理臨床における多重関係を考える（新連載）	本林 友梨	246-251
生殖医療と家族援助	荒木 晃子	252-254
編集後記	編集長&編集員	255-256

ハチドリの器 42

見野 大介

Mino Daisuke



右上：個展 in 若葉屋

右下：個展 in Café Funchana

左上：企画展 in つぼみ



本林 友梨 新連載

皆様、はじめまして。2016年に立命館大学応用人間科学研究科を修了し、現在は地方総合病院で心理士をしています。心理士になりたくなった理由は今でもあまりよく分かっておらず(きっかけはたくさんあるけれど、これといったきっかけはない)、大学院に入って初めての臨床心理学の授業で、「大変なところにきてしまった」「自分に合っていないぞ!」と蕁麻疹が出たことを覚えています。そんな私も2年間の心理士教育で、それなりに心理士脳になり、臨床心理学のことを考えても蕁麻疹が出なくなりました(教育ってスゴイ)!

そんな私が、今、悩んでいることがあります(というか社会に出てからずっとです)。それは臨床実践で、大学院で習った“そのまま”を使えない場面が多いことです。例えば、心理面接は個室で行うことが当たり前と習ってきましたが、現場のいろいろな事情で個室の確保が困難だったりします(個室の確保の仕方教えてほしい)。そんな中でもいろいろ工夫しながら臨床を行っているのですが、行えば行うほど習ってきたことと実際の間に“ズレ”を感じます。蕁麻疹は出なくなりましたが、劣等感は募るばかりです。

社会に出てそろそろ10年になりますが、いよいよその“ズレ”に対してしんどさが爆発しそうになってきました。今後も心理士

を続けていくために、この“ズレ”に向き合っていかなければいけないと思い、執筆を決意しました。執筆を通じ、自分の問題意識に対し関心を高め、学んでいけたらと考えています。

心理臨床における多重関係を考える P246~

高名 祐美

2024年も残り僅かとなった。この1年を振り返る。なんといっても元旦に起きた能登半島地震。まさかの出来事だった。自宅は準半壊、ブロック塀が壊れ地面が割れた家の前。断水が続く、トイレ・炊事・洗濯・お風呂に手間と時間を費やす。毎日が不便の連続だった。10ヶ月たった今、屋外の修復はなんとか終えたが、家の中は様々な箇所が未修理のまま。そして土蔵がくずれかかっている。それでも日々の暮らしを家でできていることに感謝する。

私の住む七尾市ではようやく解体が進んできた。あちらこちらで家屋が解体され更地になり、街の景観が大きく変わっている。そんな町並みを眺めながら、2025年はどんな年になるのだろうかと思う。あの日を思い出して「まさか」が再び起きるのではないかと心がざわつく。来年のお正月が、無事に家族とともに過ごせることを心から願う。

父が自分の身を呈して 教えてくれたことⅢ P217~

水野 スウ

なぜかこのひと月間、千客万来。県別で数えると、大阪から4人、東京から4人、千葉から2人、愛知から4人、埼玉から3人、瀬戸内海の伯方島から、一番遠くはイギリスから、and more。この中には、能登に行く前に、行った後に、寄ってくれた人たちもいれば、「紅茶の時間」恒例の宮沢賢治さん紅茶や、クッキングハウスの松浦幸子さんのSSTワークショップに参加するため、はるばるわが家に来てくれた人たちもいます。

松浦さんとのSSTは石川で17年目になりました。今回のマガジン原稿はその時の気づきや新しく学んだことのミニレポートです。PTSDからPTG(心的外傷後成長)へ——Gはgrowth、心に受けた傷や悲し

みをいっぱい悲しんで、それを受け入れ、認めた時に次の希望がみえてくる、というPTGがテーマの一つでもあった今年のワークショップ。そのことを人に説明できるほどはまだまだ理解できてないのだけど、今の段階で感じて言葉にできたことを綴っています。

つい先日、金沢で一週間だけ上映された「私は憎まない」という映画を見てきました。ガザの難民キャンプで生まれ、医師になってイスラエルの病院にガザから通い、イスラエル人の赤ちゃんもパレスチナ人の赤ちゃんも同じようにとりあげる産婦人科医、イゼルディン・アブエライシュさん。彼の仕事分野である医療を用いて、イスラエルとパレスチナの分断の架け橋になりたいと強く願っている医師の、ドキュメンタリーです。

そう願う彼の愛する3人の娘が、2009年、イスラエル軍の砲撃によって、彼の目の前で犠牲になりました。たえ難いほどの悲痛、苦しみを想像します。「それでも、私は憎まない」とアブエライシュさんは言うのです。どうしてそんなふうに言えるのだろう、思えるのだろう。彼の魂の在りどころを知りたくて、彼の言葉をタイトルにした『それでも、私は憎まない I shall not hate』(亜紀書房)を映画館で購入。いま読んでいるところです。

きもちは言葉をさがしている P68~

馬渡 徳子

もう師走なのか…。孫から、「ぼちぼちクリスマスツリーを飾ろうよ。」と急かされ、ふと気が付いた。

例年は、ハロウィンが終わるや、わくわくしながら「今年はどんながに飾るかね」と連れ合いと孫と相談しながら出窓を飾ってきた。



「犬の散歩のときに、季節ごとの出窓の

デコレーションに足を止めて癒されています。」「クリスマスツリーは町内の灯台のようで気持ちが温かくなります。」と町内行事の折に感想をいただくこともあり、励みにしてきました。

今年は、孫に声をかけられるまで、心が動かなかった。「うんうん。そうやね。明日の明日の明日にするかね。」

そうした次の週、私の心もちを察したのか、孫がモールツリーをつくって持ってきてくれたことで、腰が上がった。早速玄関に飾った。

そうだった。私の好きな言葉は「継続は力なり」だったつけ。

11月16、17日に、水野スウさんと17年前から共同開催を継続してきた「松浦幸子さんと学ぶ SST」には、両会場に二次避難をされておられる方や、実家やきょうだいが被災をされた方も来られた。

地震と豪雨で一年に二回も激震災害指定となった珠洲市での開催歴もあり、当時ホストを務めてくださった元医療ソーシャルワーカーさんも参加された。

珠洲市には住民運動で原発誘致を阻止した歴史がある。2007年の地震、2019年から続いた群発地震、元旦の地震、豪雨災害により、更なる多様な甚大な被害が生じていたことだろうと想像すると、先達の方々のご選択に頭を垂れるばかりである。(2024年3月15日配信の対人援助学マガジン第56号水野スウさんの本文をご参照ください)

ふりかえりの時間に、講師の松浦幸子さんから、ご紹介いただいた著書がある。精神科医 蟻塚亮二氏の『悲しむことは生きること-原発事故とPTSD-』風媒社。

早速一気に読了し、何でも読み返している。人のもつ力の深さに感服するとともに、私たち世代が未来に何を選択し何をつなぐのか、真剣に問われていると心に刻んだ。

晩年認知症と悪性腫瘍とともに生きた亡き父が、自由なお外廻りの時に足を止めて花を添えていた「お寺の掲示板」を思い出した。

きっかけは、2011年3月のマギー司郎氏の『生きてるだけで、だいたいオッケー』という掲示板。

「天国のお父さん、激動の一年がもうすぐ暮れるよ。石川県民が、全国の皆さん

が、安全に過ごせますように。心穏やかに過ごせますように。合掌」

馬渡の眼
P137~

乾 京子

ダブルラッキーセブン(77歳)になってから、少々体のあちこち故障を起こすことも増えました。ちょっと疲れているなあと思いつつ、遠出の運転、長い石段の上がり降り、主催する行事の準備に本を運ぶ…そんなことが重なっていたら、ある日、朝方トイレに起きようとするのに立ち上がれない。右足に体重をかけると激痛！さすがの医者嫌いの私も整形外科に行ってみれば、「ああ、軟骨が減ってきていますね。いわゆる膝関節炎の状態ですね。お水抜きますか？痛いし、完全に抜けるわけではないですが・・・」「長いこと使っているんだから仕方ないですね。まあ、あんまり無理をしないことと周りの筋肉を鍛えることですなあ。」やれやれ、老いてきている自分を自覚しろと体が言っているようです。こんな日々ですが、これからの季節、琵琶湖の周りではしばしば虹が出ます。今週、琵琶湖の上に大きな弧を描く虹に出逢いました。その翌日は、半分の虹。いくつになっても虹を見るとうれしいものです。きっと、いいこともあるのでしょう。

じゃりんこ文庫
P244~

宮井 研治

台湾へ行ってきた。

縁あって、息子が台湾の娘さんと結婚することになり、奥さんとともに式に出席するためである。台湾は2度目であるが、前回は台北、今回は台南。息子から台北と台南では、人の気質や街並み、食べ物(良いほうに)が随分違うと聞いていたが、おおよそ聞いた通りであった。ノスタルジックな雰囲気、昔の日本を想像させるような、こうしたガイドブック的説明はまさにその通りであった。人が優しいというか、おせっかいというか。街中で何かたずねても、嫌な顔をされることは1度もなかったといっている。ただ、英語の片言でさえ(こちらも英語が怪しいのでさらに)通じないことがあった。あるレストランで、注文に困っていた時にたまたま隣の席の中年男性が通訳を買

って出てきてくれた。「わたし、にほんご、すこし、しゃべります。」のノリである。たしかに、その店のご主人は、何を聞いても顔を赤らめる(暗かったので、たぶんではあるが)ばかりだったが、その人の通訳もいまいわからなかった(でも、感謝しています)。取り皿がほしかったのだが、もう一皿、サラダが出てきた。おなかいっぱいだったが、台日友好のために詰め込んだ。こんな素朴な温かい国がずっと平和でいてほしいと、切に願った。



どこか、そこでお祭りあり。爆竹が鳴っていた。



手書き看板が有名な映画館。たしかに写実的ではない(似てない)



滞在したホテルのちょうど道をはさんで正面にあった林百貨店。たしかに映えます。

人生は対応のヴァリエーション
P239~

山岸 若菜

9月になっても10月になっても暑かったのに、11月も終わりになって突然寒くなりました。この時期みんながかかる病は『急性何着たらええかわからん病』です。ところが特に女性は年を重ねると『慢性何着たらええかわからん病』にもかかることを知りました。40歳を超えるとそれまで着ていたカジュアルテイストの服が似合わなく

なるんです。あれ何なん？

ずっとカジュアルで生きていたから、何を着ればいいのかほんとにわかりません。幸い私は転職してちょっとそれまでよりお堅めの服を着ないといけなくなったので、周りの先輩方をキョロキョロ見回して勉強しています。『慢性何着たらええかわからん病』に季節的な急性症状も合わさり、何をどうしていいかわかりませんが、これまたありがたいことに年を重ねると『その辺にあるものでなんとなくやり過ごす術』が身についてるんですね。

なんだかんだバランスよくなるようにできてるんだなあと思う今日この頃です。

ある訪問看護師のあたまの中
P236～

内田 一樹

忙しすぎて目の前の日々をやり過ごしながら、気づいたら1年が終わろうとしています。今年は石巻市へのスタディツアー、水俣病についてオンライン講演会、ふくしまへのスタディツアーと本当の意味で「東北」「復興」についての講座になってきている1年でした。一方で対人援助学を学ぶ前段階としての高校での学びをどのようにつくるのかについてはまだ霧の中でした。

社会科の授業を対人援助学の視点から
P231～

櫻井 育子

「風の時代」がいよいよ本格的になった、と言われている。どうやら「水瓶座の時代」らしい。生まれたこと自体、あまりにもそこには「わたしの意思」などは到底入る隙間もないところから「わたし」が始まっている。だから、もう「わたし」というものを思い通りに動かそう、などという考え自体がナンセンスなのではないか、とすら思う。複雑になることが発達だとしたら、なおのこと、いろいろなことが「ありがたい」のだ。

わたしは「水瓶座」なのだが、ここ数年で出会った書家、水彩画家、陶芸家、の素敵な方々がなんと全員、「水瓶座」だったということから、その名も「水がめ座4人展」というグループ展をする運びになった。いろんなものに乗っていこうと思う。(期日: 2025.1.21~1/26)

場所: SARP アーティストランプレイス

宮城県仙台市青葉区錦町 1-12-7)

生涯発達支援塾 TANE 代表

shukou0122@gmail.com

<https://ikuko-sakurai.com>

わたしはここにいる

P226～

鳴海 明敏

今年の青森の秋は、これまでに経験したことのないような秋です。例年だと、10月の中旬頃から曇りの日が続く、雨がいつのまにかみぞれに変わり、車のタイヤを冬用に履き替えるタイミングを見計らっているうちに、朝起きてみると路面が真っ白で慌てる、ということを繰り返しながら、いつの間にか本格的な冬になっているという感じなのですが、今年は、連日お日様が顔を出していて、気温もそれほど下がっていません。陸奥湾を震源とする地震や十和田湖周辺の火山活動など、不安材料もありますが、銀杏や落葉松、満天星躑躅の紅葉を長い間楽しめました。

9月の末に、軽い脳梗塞を患って、10月の初めに2週間ばかり入院しました。現在は、退院して職場復帰しているのですが、車の運転についてドクターストップがかかっていて、その解除手続きが遅れていて、不便で仕方ありません。

私には全く自覚がないのですが、主治医からは、こんなに軽くすんだのは、運が良かったとしか言いようがない。あのまま死んでいてもおかしくないし、多くの場合は寝たきりになっていたんだよ、と言われました。

このような幸運に恵まれたのは、現在の仕事をさらに頑張れという、何ものかの意志だろうとも思ったのですが、しばらくして、落ち着いてきたら、この幸運は、今の仕事を滞りなく次の代に引き継ぎなさいということで与えられた時間の猶予なのかなあと思うようになってきました。

児童心理治療施設の園長室から
～こかげのにちじょう～

P224～

畑中 美穂

夏の初めに外国のお土産でいただいたアロマのろうそく。今年は暑さが長く続いたと思ったらいきなり「冬」になり、初めてスト

ーブを焚いた日の夕方、「そうだ。ろうそくも」と思い点けてみた。夏にも点けないことはないけれど、陽が落ちるのが早い時期のろうそくにはほっこりする。淡いグリーンガラスの器に入った香りのよいろうそく。ろうそくを「育てる」とも言うらしい。これから点ける日も多くなるだろう。どのように育っていくか、楽しみである。

一語一絵
P219～

山下 桂永子

先日、友人と栃木県に旅行に行きました。目的は那須どうぶつ王国という動物園にいるマヌルネコに会いに行くことでした。4年前にコロナ禍で家でゴロゴロしながら毎日のように見ていた「マヌルネコのうた」という動画でマヌルネコという存在を知ってからすっかりファンになってしまい、いつか会いに行こうと思ってやっと念願が叶った旅でした。マヌルネコ以外にもたくさんの動物と近距離でふれあい、那須はおいしいものもたくさんあり、とても楽しい旅でした。そういえば、今年は夏に北海道の旭山動物園にも行きて、最近旅の目的が動物園になりつつあります。子どものころは特に動物にも動物園にも興味がなかったのにこの年になって動物園が楽しめるなんて思ってもみなかったのも、自分の変化に驚きつつ面白がっている今日このごろです。今回の話とはあまり関係がないですが、読んで頂ければ幸いです。



会いに行ったマヌルネコのボルくんです
心理コーディネーターになるために
P139～

渡辺 修宏

「日課にしていた(簡単な)筋トレをやらなくなった。なんだか手首が痛かったからである。少し休めば痛みがひくと思いきや、一ヶ月たってもどうも今ひとつ…そうこうし

ているうちにトレーニング再開のタイミングを逃し、はっと気づくと体重増。恐ろしや……」

対人援助実践をリポートする この一冊 P222～

米津 達也

やっちゃった…。原稿提出締切りの話だけではない。本文で書いた通り、引っ越し作業の定番、ぎっくり腰である。ここ数年は、半年に1回ぐらいはある。元来、姿勢も良くない。腰痛が出ると、そこを庇うように肩や背中に負担が掛かる。結果、全身がガチガチに凝ってしまっただけでどうにもならない。エコロジカルとシステムの話、溜息をつきながら我が身を思う。

川下の風景 P212～

玉村 文

今年もあと1ヶ月。年末年始には、新居への引っ越しという大イベントが控えています。乳幼児3人を連れての引っ越し…一体どうなるのか？何に気をつけたいのか？と不安でいっぱい。そんな時、「AIにも聞いてみよう」と思いつきました。

AIはこれまでのやりとりを覚えていて、「5歳、3歳、0歳の子どもがいるわたし」に合わせた最善のアドバイスを提示してくれます。気づけば、問題解決の選択肢の一つとして、さらには最初に相談する相手としてAIが頼れる存在に。そんな2024年11月、育休期間中の生活を過ごしています。(この文章もAIに修正してもらいました)

応援 母ちゃん！ P203～

川畑 隆

やっぱり止(や)められませんでした。新連載です。タイトルは、映画『私の頭の中のケシゴム』のモジリですが、最近はこのしきのことでも自分の中で点検の目が光ってしまいます。モジリはいいとしても、ケシゴムを否定していないかという懸念です。否定しているのですが、何というかその一、ケシゴムが表しているものを否定すること

になっていないかですね…。でも「まだ」が自分で気に入っていることもあって、そして自粛がイヤなこともあって、まあいいかと始めることにします。

原稿の最後に「宣伝」として載せましたが、前連載のファイナルで予告したとおり、YOUTUBEに『ターチャンのオリジナルソング』の投稿を始めました。

若い頃に作った曲を若いターチャンすなわち私が歌っていて、①②を投稿済、⑥⑦くらいまで続けるつもりです。チャンネル名は「京都のターチャン」です。よかったら覗いてみてください。

動画を自分で撮ってそれに曲をのせ、字幕で歌詞を付けました。この編集作業を初心者の私に簡単にこなさせてくれたのは、「CAPCUT」というフリーソフトです。実にシンプルでビックリするぐらいよいものに仕上がりました。

ターチャン、なかなかやるじゃないと思わせてくれました。

私のあたまの中のケシゴム P198～

杉江 太郎



児童の福祉分野で働く杉江です。この前、家の前に「おむすび」が落ちていました。おにぎりと呼ぶのではなく、「おむすび」と言うのには理由があり、まんまるで、海苔などにも巻かれておらず、形を取っても大きさを取ってもまさに「おむすび」だったからです。とはいえ、なぜおむすびが落ちていたのでしょうか。どこかに穴があって、その下ではネズミが歌っていたかもしれません。(葛籠もらえるかな?)それとも遅刻しそうな高校生が、おむすびを口にしながらぶつかってしまい、そのときに落としてしまったのでしょうか。(良く口にしているのは食パン)誰かが毒入りのおむすびを…？その場合は警察に連絡するのでしょうか。相手にしてもらえるのか。そもそも何か具は入っていたのでしょうか…？入れるなら梅干し？昆布？おかか？…

なんてことを考えていましたが、結局謎に包まれたまま、カラスの餌になってしまい、カラスにも異常は見られなかったので、毒入りではなかったことだけがわかりました。世の中には、不思議なことがあるものです。真実が何かあるにしても、そのことを知る術はなく、想像するしか出来ません。そんな日常のちょっとした疑問を見つけては、いろいろと想像しながら一人で楽しんでいきます。

「余地」-相談業務を楽しむ方法- P193～

浅田 英輔

いつも「短信なに書こうかなー」と思って前回の皆様のものを参考にしたりするのだが、見事に「暑い」が並んでいた。青森はすっかり冬である。里に初雪も降り、冬タイヤに履き替えた。クルマ好きとしては、スタッドレスタイヤは柔らかくて気に食わない。履き替えるたびに「早く夏タイヤにしたいなあ」と思うのである。

臨床のきれはし P83～

三浦 恵子

先の執筆者短信で紹介されていた「システム・クラッシャー」、映画館での視聴はかないませんでしたが、11月にブルーレイが発売されることを知り、早速予約をしました。

今年は東日本大震災関連の映画を勉強会や単館系映画館で震災関連の映像に接する機会が多くありました(「生きる」「生きて、生きて、生きろ」など)。特に「生きる」では、身近に大川小学校出身の方がおられたこと、私自身も東日本大震災で親族が被災し、震災直後は被災地となった地域での円滑な業務執行のため他省庁と連携を続け、その翌年には実際に東北に赴任して復興支援に関わったこともあり、視聴後様々な思いが押し寄せて席が立てないぐらいでした。ですから今年の鑑賞した映画はかなりヘビーなものが多かったのですが、「システム・クラッシャー」は、ドイツと日本というまさに「システム」の違いを超え、対人援助場面でありうる共通点が多々盛り込まれ、打ちのめされる思いがしました。

日本でも、たとえば様々な課題を抱えて困

っている保護者を「モンスターペアレント」「モンペ」と称し、その名称の枠組みの中にカテゴライズしてきた歴史があります。確かに相手方保護者に明らかな非がある場合もあるでしょうが、相手を「モンスター」と呼称した時点で、対話可能な人間同士という視点が外れてしまうのではないかと、この危惧を感じました。

そしてこの「システム・クラッシャー」という言葉が、ドイツで実際に次々と不適應を起こして支援機関や支援者を疲弊させる子どもを示す隠語として使われていることに、衝撃を受けました。

ネタバレを避けるために詳細は省きますが、一度は主人公を自宅に引き受けると述べ主人公である少女をこれ以上ないぐらい歓喜させた実母が、途中で引受けを断念し、そのままケア会議から抜け出していく際「最後のお別れぐらい自分でいいなさい」とソーシャルワーカーが呼びかける場面、支援者との境界線を主人公である少女に踏み越えられた結果、主人公から「自分のパパになってほしい」「あんたの家族を殺したら私の家族になってくれる」という内容の言葉でもって迫られると当該支援者・・・ラストシーンはまさに我々観客に問いを投げかけるような形で終わり、そうした点ではベルギーのダルデンヌ兄弟の作風に似ていると感じました。

執筆者短信は発刊されるとすぐに拝見するものですが、本当に良い映画に出会うことができました。「あ～、映画ってすばらしいですね～」(このネタを知らない世代の方も多いかもしれない・・・)などの「万人受けする」地上波放送枠では決して放送されない映画だと思いますが、多くの方に見ていただきたいと思います。松村様ありがとうございました。

更生保護官署職員

(認定社会福祉士・認定精神保健福祉士)

現代社会を『関係性』という

観点から考える

P178～

迫 共

衆議院選挙では自公政権が過半数を割り込み、某野党が脚光を浴びるとタイミングよく醜聞が吹聴されたり、米国ではトランプ氏が大統領に再選され、上下両院が共和党によって独占されたり、兵庫県

知事選挙ではパワハラとおねだりで不信任となった知事が再選したと思ったら、あっという間に選挙手法の違法性が話題になったり…世の裏側の都合悪いところが捲られる 2024 年後半でした。

勤務校では今年、入試委員を仰せつかったのですが、9・10 月に学科独自でやる謎の入試があり、それで定員の半分くらいを埋めています。試験会場の設営も問題用紙の印刷も全部学科教員だけでやり、事務方はエントリーの受付と結果送付くらいしかしません。他の入試業務でも、問題用紙や解答用紙の仕分け作業が入試委員の仕事だったりします。この謎も捲られる日がくるのだろうか…。

迫メアド：sakotomoya@gmail.com

保育と社会福祉を漫画で学ぶ

P189～

黒田 長宏

推しの清宮幸太郎選手(日本ハムファイターズ)が、今年前半は選手生命の危機かと思っていたら、後半に変身して、訳ありだが全日本に選ばれてしまい、寒くてもまだ野球をやることになってしまった。人生はたった 1 年でもわからないものだ。そういう私なんか今年は 1 月 23 日に急性心筋梗塞で死ぬかと思ったのに。まだこうして書かせていただいている。

<https://konnankyuuujotai.jimdofree.com/>

あぁ結婚

P159～

松村 奈奈子

今年の秋の旅は、富山県南砺市井波町に。日本一の木彫の町で、約 200 人の木彫の職人さんがいるそうです。古い街並みには、仏像や獅子頭、欄間などを彫る様々な職人さんの工房が並んでいます。ガラス戸を通した自然光で彫るので、職人さんの工房はみな道に面しており、彫っている姿を覗き見る事ができます。途中で彫刻刀屋さんがあったりと、町全体が木彫一色で面白い。さっそく、職人さんの工房で木のスプーンを彫る体験に参加して、3 時間硬い桜の木と格闘しました。途中職人さんとのティータイムもあって、この町を気に入って若い人が移住して、カフェや古

着屋をしたり、私たちと同じよう木彫体験をする外国人もたくさん来るという話を聞きました。小さな町でしたが、とっても魅力的でした。

精神科医の思うこと

P125～

村本 邦子

9 月から年末まで休む間もなく走り続けている。還暦過ぎてからは、もっと余裕のある働き方をしようと努力して、(コロナもあつたりして)それなりにうまくやっていたような気がするが、まったく若い時のような動き方になってしまった。いろいろなことがつながって楽しくてしょうがなくて、いつの間にかつい何でもホイホイ引き受けてしまって、息をつく暇もない。来年は気をつけよう。

そうそう、10 月に、この 2 年間インタビューして回っていた婦人相談員の本『婦人相談員物語—その証言から女たちの歴史 (herstory) を紡ぐ』(村本邦子・松本周子著、国書刊行会)が出来上がった。是非多くの方に読んで欲しい。



周辺からの記憶

—東日本大震災家族応援プロジェクト—

P100～

國友 万裕

今年の夏休み、初めてボランティアガイドをしました。ガイドした人はアジア系カナダ人のご家族でした。ご夫婦は 40 代。中学生くらいの娘が 2 人の 4 人家族でした。お父さんのお仕事は外科医なのだそうで、イ

ンテリの品の良いご家族でした。マップも使いこなせる人たちなので、僕がいなくても、アプリとマップで京都見物くらいはできそうな人でした。

伏見稲荷、清水寺に行ったあと、お屋は近くの豚カツ屋で食事。その後午後は金閣寺へ行きました。

トンカツ屋のあと坂のところで、僕は転けてしまいました。すると娘さんたちが心配してくれました。それからスマホの電池がなくなってきたことをもらすと充電器も貸してくれました。そして、終わったあと、お母さんがメイプルシロップのお土産をくれました。



一般に欧米の人は優しさをストレートに表現してくれます。日本人は下手なんですよね。日本人は表向きは親切に見えても裏で何か言ってるように見える。

僕は子供の頃から陰口を言われまくった人生だったので、どうしてもそういう偏見が抜けません。女性に関しても、今は親切でも、ある日突然態度を豹変させて意地悪をされるのではないかとこの恐怖が常にあるのです。

昔から、女の子が子供の頃に男に性的いたずらをされたりしたら、そのトラウマで一生男と付き合えなくなるのではないかと心配する人はたくさんいました。僕はその逆パターン。たくさんの女性に踏みつけにされた人生だったから、女性を素直な目で見れなくなっている。

だけど、そんな男に心配したり、同情したりしてくれる人なんているでしょうか？男性差別はそこなのです。被害男性は被害女性に比べれば少ないのかもしれないけれど、マイノリティであればあるほどトラウマは深刻です。

皆さん、それをわかってください。世の中はまだまだ男社会であるにしても、女性に酷いトラウマを負わされた男は確実に存在するんです。

スポーツおじいさんになりたい！
P75～

西川 友理

大阪キリスト教短期大学で保育者養成をしています。それから、いくつかの養成校・養成施設で、社会福祉士の養成にも携わらせていただいています。

私は近年、寝る事が大好きになってきました。ちょっと前までは寝るのがもったいない、と考え、夜更かしが大好きだったのですが、ようやく「ちゃんと6時間寝ると、心身の調子が整う」ことを実感するようになりました。寝るっていいですよ。って何を当たり前のことを言ってるんでしょうか。でも本当に、「寝る」とか「休む」という事に真摯に向き合うようになりました。

私が主催する支援の当事者研究会における、人気テーマの一つに「休み方研究」があります。休むとは何をする事なのか。遊びに行くことは休むことなのか。じっと寝ているけど気持ちが焦っているのは休んでいるといえるのか…等、皆で語り合うと、ちょっと意外なほどに、人によって「休み」のあり方、捉え方、イメージが違ってくるのがわかります。そして、休み下手の人が結構いるという事にも気付く今日この頃。人間って複雑！！

**福祉系対人援助職養成の
現場から
P57～**

竹中 尚文

門徒さんで精神疾患をかかえて、独り暮らしの人がいる。8月頃から連絡がつかないので、心配していた。9月によりやく会うことができて、様子をたずねた。これまで使っていた携帯電話が古くなって、電波が適しなくなったという。障害を抱えて独り暮らしなので、携帯電話を新しくするように勧めた。新しい携帯電話を持つのは難しいという。いろんな方々に尋ね回って、安価な携帯電話を教えてもらった。携帯電話の契約をしようとしたら、彼はブラックリストに載っているという。彼が携帯電話料金を無視するような人ではない。彼のお母さんが亡くなった時、彼に生命保険を残した。お母さんの友だちと称するおばさんに、そのお金を貸したそう。さらに彼の名義で携帯電話を契約して、料金を払わないまま放置したそうである。また、方々に尋ね回って彼に契約してくれる携帯電話会社を見つけた。

◆10月になって、精神病院のヘルパー

さんから電話がかかってきた。彼の手足がしびれるというので、大きな総合病院に受診したという。頸椎に問題があるらしく、外科の治療が必要になりそうだが、彼が受診を渋るようになった。彼を説得する助けをしてほしいという。とにかく受診に付き添うからといって、私は彼と病院に行くようになった。主治医は頸椎の手術しかないという。そうこうしている内に、彼の手足の動きも悪くなってきた。11月になってからの病院受診は、車椅子の使用が必要になった。彼は「首の手術なんて、怖い。嫌だ」という。このままでは手足を動かすことも不自由で、生涯を寝たきりになっても、手術をしたくないという。入院も手術も傍に付いているからと説得を重ねて、11月中旬に入院して、下旬に手術ということになった。彼は、新たに手に入れた携帯電話で病院に入院・手術の断りをいれた。ガツクリ。

◆再度、彼を説得して、ヘルパーさんが総合病院に掛け合ってくれた。外科医はキャンセルになっていた予定を復活させてくれた。入院してから「怖い、嫌だ」というのを説得しに通った。外科医も説明を重ねてくれて、さらに「この病院は手術をしてあなたを途中で追い出したりしないから、安心して欲しい」といつてくれた。彼は、かつて交通事故に遭って、顎を骨折して緊急手術を受けたことがある。手術の後、私は投薬の依頼をした。その病院は、薬名を見て彼の入院を拒否した。そんな経験もあって、彼は手術を怖がる。数日前、彼の頸椎手術は成功した。昨日、彼に「みんなを信用して、よかったね」と話した。勇気を振り絞って信じてよかった。

**路上生活者の個人史
P72～**

坂口 伊都

前回、マガジンで猫の病氣と動物病院について書きましたが、9月初旬に白血病を発症して逝ってしまいました。7歳でした。早すぎるお別れです。小康状態を保ってくれたので覚悟はできていたつもりでしたが、いざいなくなると家のあちらこちらに猫の面影が浮かんで涙が出てきます。

私は傷心でいたのですが、夫が「待っている子がいるのだらう。連絡を入れてみて」と言い出しました。もうですか？と驚きまし

たが、気持ちを落ち着かせてから猫から目線の小池さんに連絡をしました。すると、すぐに茶トラの子猫と1歳を超えた姉妹猫を写真付きで紹介してくれました。夫が言い出しっぺなので、どの子がいいか尋ねると「姉妹猫かな」と即答でした。「大きくなっている子の方が、貰い手を見つけるのが大変だろうから家に来てもらおう」と言うのです。夫は、本当に待っている子に思いを馳せていました。

我が家に来てくれた姉妹猫は、興味津々でゴミ箱に突入したり、モノを落として壊したり元気一杯です。姉妹猫を通して、亡くなった子も思い出しています。少しでも、長生きしてねと願っています。



療育手帳の向こう側
P96～

河岸 由里子

【巷の小話その2】

- ① 筆者の住む千歳は、人口10万弱の市である。現在そこに、ラピダスという、半導体の大きな工場を建設中である。千歳空港の隣にあるので離着陸時に飛行機の窓からも見える。広大な原野に大きなドームのようなものが立てられているのだ。その煽りで、千歳市、隣の苫小牧市、恵庭市、そして北広島市も含め、地価が一気に上がっている。この半導体工場は、2ナノプロセスの製品を作ることを目的としているそうだ。2ナノといっても実際にその大きさの半導体を作るという意味ではないそうで、これだけの面積に対して、これだけの処理能力を持つという感じで、それが2ナノレベルということらしい。専門家ではないので詳しいことはわからないが、とにかくそれだけの性能の物を一個作るにも機材が500億円とかするようで、それが一台では量産することはできない。500億とかする機材を何台も必要とするわけで、それだけの資本

が集まるのかという疑問もある。政府がいくらテコ入れするとはいえてある。あちこちの地価が上がり、様々な企業が事務所を求めて、不動産の争奪戦を行っている。家屋もアパート等不足しているので、空き地には次々アパートが建っている。6000人規模という人口の流入が本当に実現し、工場が順調に稼働すればよいが、上手くいかなかったらゴールドラッシュ後のゴースタウンのようなことになるのではという懸念は捨てきれない。上手くいってくれと祈るばかり。

- ② ここ1年ほどで、千歳駅の表側、裏側が整備された。その際に、大きな木が何本も切り倒された。更に、駅前交番を拡張するために、桂など大木をまた数本切るという。それに反対している方々の一人とお話する機会があった。長年夏には心地よい日陰を提供し、自然の美しさを駅の殺風景さに加味してくれていた大木を切り倒すのは心が痛いとその方は嘆いていた。しかし、街中の木は放っておいてよいものではなく、手入れをしなければならない。その手入れをする人が居なくなったので、若木に変えたほうが良いという考えなのだそうだ。大木が処理する二酸化炭素と若木が処理するそれとは大きく違うだろうに…。①でアパートに変えるために雑木が切り倒されていることも含め、悲しい。

公認心理師・臨床心理士・北海道
かうんせりんぐるうむ かかし 主宰

ああ、相談業務

P65～

先人の知恵から

P148～

大谷 多加志

短信に何を書こうかと悩むことも多いのですが、前号からの3か月間は、なぜだか色々新しい体験がありました。①人生で初めて英語で論文を書き無事掲載されました、②新聞の取材を受け記事が掲載されました、③勤務校での学会開催があり大会事務局スタッフとして関わりました、という感じです。どれも何度も経験がある人からすれば大きなことではないのかもしれ

ませんが、私にはひとつひとつ新鮮でした。というわけで今回の連載では③の大会スタッフ記を書いておきます。

発達検査と対人援助学
P86～

鶴谷 圭一

お話あそび会の動画解説第2弾をレポートしました。

弊園を結婚退職した保育者が、夫の赴任地で公立の幼稚園に就職し、園長に頼み込んで「発表会」のときに「お話あそび会」形式でやらせてもらい保護者からも大変喜ばれたというエピソードを聞いたことがあります。

最後の完成形は同じように見えても、それまでのプロセスで子どもたち自身が楽しんでいけば、本番でもその楽しさが滲み出てくるのではないかと思います。取り組んでくれる園が増えてくれればいいな、と願っています。

原町幼稚園 <http://www.haramachi-ki.jp>

メール office@haramachi-ki.jp

インスタ haramachi.k

ツイッター haramachikinder

幼稚園の現場から

P49～

中村 正

最近、1日が早く過ぎていくように思える。若い時と比べると時間の感覚が異なるのだろうか。できることは限られているのになにかもやろうとも思わないし、できることをただやっているだけなのに。それでもやはり何かをやろうという思いがあり、客観的にはいろいろ手を出しているからそうなのだろう。やはり新しいことをしてしまうのは、退職後に始めた一般社団法人UNLEARNの運営についてである。実務的なこと全般は知り合いのバックオフィスに委託をしているのだがそれでも実務はゼロではない。脱暴力事業もいくつかの要請がある。展開しようと思えば際限ないほど社会に暴力が溢れているということだろう。

こんなことも友人から聞いた。彼は大手企業の管理職。その部下が南米のある国に出張中、銃をもった二人組に襲われ金品を奪われたという。何とか命は無事だったが帰国命令をだすかそのまま現地で留ま

らせるか逡巡したという。さらにその管理職はトップに相談した。人事のトップは即刻帰国させろという。仕事をさせるなど。兵士と同じように心が傷ついているはずだし、そんな事態になっても仕事を続けろという会社だと思われると社員全体の心理的な安心が確保できないからだと言われたと。ハイな状態で何とか仕事はできると思うことでその傷を癒そうとしているのでそれはのちに傷を悪化させることになる。銃を向けられた者、その中をなんとか生き延びた者、想像を超えるがそうした事態は世界のあちこちにあるのだろう。そして敵というよりも味方のなかに暴力が潜んでいる日常があり、脱暴力の要請はそうしたところからだ。これもつらい。

臨床社会学の方法 P20～

団 士郎

『正しいことを言っているのだから、敗北にも怯むことはない。真実を語っているのだから、一時の結果などに振り回されることはない』、そんな世代感覚の周辺で、本音と建て前の人も跳めながら生きてきた。この多様さが世界だと思ってきた。

のではあるが近年、世の中がどんどん悪くなっているような気がしてならない。そこには我ら団塊世代の、『連帯を求めて、孤立を恐れず・・・』のあの感覚がネガティブに作用しているのではないかと思われて仕方がない。

多数派の談合によって正義が窮地に追いやられてきた結果だと今を嘆くこともできるだろう。しかし忘れてはいけないのは、現実にはそんな全員を含んで構成されている。

自分以外皆、愚か者！ そうそういっていないと言えるだろうか？ 自分だけは分かっている、我こそが正しいと自惚れる人は大昔からいた。「この頃の若いのは・・・」と上世代が語るのと似た様相だ。その結果が今ということだ。

私は自分が何かを分かっているなんて思いう切れない。多分、意味のある選択の一つだろうと思うことはあって、それを続けてはいるが確信的な行為ではない。

世の中には長らく、賢明だと思っている人々の意見も流布してきたはずなのに、今がこんな状況でしかないことに責任を感じな

いで、誰かを馬鹿にし続けていられるのは相当な傲慢ではないのか。

晩年 D・A・N 通信 P33～

中島 弘美

年が明けると 2025 年。大阪では関西万博が開催される、そして、阪神淡路大震災から 30 年の大きな節目となる。

当時、私は、自宅にいて被災した。さらにもろもろの出来事があり、1995 年 4 月までの約三か月、立ち止まってじっくりと考えた。そして、所属していたところを退職し、カウンセリングオフィス中島をスタートした。

CON は 2025 年秋に 30 歳になる。これまで、やりたいと思うことを自分のペースで続けることができた。ありがたいことだ！ 感謝です！ これからも、積み重ねていきたいと願う。

カウンセリングのお作法 P30～

篠原 ユキオ

赤ペン先生

夏の私の個展で素敵な出会いがあった。大昔、私が中学校の美術教員をしていた時期に同寮だった人のお孫さんだ。小学6年生の女の子は私の作品はネットで見つけて知っていたという事だったがその理解力に驚かされた。

大人でも意味が理解できない人も少なくないのだが展示していた作品の全てが理解出来ていて、周りの大人たちに丁寧に説明して見せた。

子どものファンとは殆ど縁の無かった私の作品がちゃんと理解されている事にちょっとした感動があった。その日は彼女の似顔絵を描いてプレゼントし、帰りには描いているマンガがあったら見せてねと伝えて別れた。

数日後、彼女から似顔絵のお礼とともに自作の4コマ漫画が数点入った封筒が届いた。絵やアイデアはまだ稚拙だったが、ここをこうすればわかりやすい。これはこう描くと良くなる。という風にアドバイスをいろいろ書きこんで返事を送った。数日後には早速アドバイスを参考に練習していますと嬉しい報告があった。大学で学生たちに教えていた時とは全く違う充足感が

あった。

『教える』現場から離れて早くも 6 年が経つ。1コマ漫画の描き手や読者は少なくなっているし大学もカートゥーンコースの学生募集を停止した。まさに1コママンガの危機である。こうなったら子どものための1コママンガ教室を開くしかないなという気持ちが強くなっている。誰か協力してくれる人いないかなあと真剣に考えるこの頃である。



HITOKOMART P207～

鶴野 祐介

11 月 30 日(土)朝9時、嵯峨野の大河内山荘を訪ねました。その錦繡はまさに絶景かな。

うたとかたりの対人援助学 P155～

松岡 園子

母は大阪での生活にも段々と慣れてきたようです。外では杖をつき、家でもゆっくりの歩行ですが、自分のことは自分でできます。神戸ではデイサービスを利用して入浴介助サービスを利用していましたが、こちらではお風呂に段差がないためか、介護サービスを利用しなくても自分でお風呂に入ることができ、日常生活を送ることができています。

毎朝の洗濯のあと、ラジオ英会話の放送を聴き、朝ごはんを食べ、筋トレをして、掃除をして……と見てみると、毎日同じことを同じ時間に、同じ順番で繰り返しているように見えます。「変化の少ない毎日で退屈しないのかなあ？」と気になるのですが、母は毎日同じリズムの生活を送ることで安心しているようです。英語の勉強も、足腰を鍛える目的で始めた筋トレも、毎日続けてすごい！ これからも、その生活が

守られるよう支えていくことができればと思います。

統合失調症を患う母と ともに生きる子ども

P196

脇野 千恵

現在の地に居を構えて 35 年になる。その頃は、周り是一片田園風景。夜は真っ暗で、星が比較的良好見え。ある住宅メーカのモデル住宅地区で、15 軒の小さな団地。転居当初は色々な人が住宅見学に来ていた。

昔からのいわゆる田舎集落地なので、私たちは「入りびと」と言われたりして、自治会での居心地はあまりよくなかったが、自然豊かな環境に、育ち盛りの子ども達はとて気に入りてくれた。都会育ちの子は田んぼのことは知らない。田植えしたての田に入り、生き物を取ってくる団地の子どもたちは、よく農家の人に叱られた。

米がどうやってできるか、恥ずかしながら私自身も、この地に住み初めて知ることが多かった。今やこの辺りも専業農家はない。しかも家の裏を眺めると、荒れている田が多くなってきている。事情を知らない者が「もったいないな」と嘆くのは無責任な話だが。

今子どもたちはそれぞれ独立し、家々は静かになった。周りを観察すると、いわゆる「地の人」の家屋敷の空き家が目立つようになってきた。大きな立派な構えの家も、人の気配がないと何とも寂しいものだと思う。しかしここ 2、3 年、空き家の大きな家が、ある時忽然と消え、更地になっている光景を目にすることが増えた。広い敷地に若い世帯向けの住宅が数件建つ。そして荒れ地の田畑も次々に住宅地に変身している。ベッドタウン化しているのか、若い世帯の入居も増え、自治会の世帯数は 4 倍に増えた。

人口増はいいことだと思うが、人目当てに大きな商業施設がいくつもでき、何かしら騒がしい。人は勝手だ。私達も「入りびと」扱いされ苦労したのに、新たにまた「入りびと」があると、またそれはそれで不協和音が起こる。高齢化が進むなかで、私の住む地域はまた違った様相で変化していることに、ここはそんな風になってゆくのだと思う毎日だ。

こころ日記「ぼちぼち」

P215～

岡崎 正明

人生 2 回目の休載である。主な理由は 2 つ(誓ってネタ切れではない)。

1 つは以前もここで少し書いた、父親の自伝作りが進んでおり、その準備で何かとバタバタしているのだ。本を作って出すというのは、こんなにもいろいろなことがあるのだな〜と、改めて自分の知らない世界に足を踏み入れてみての気づきや発見に、日々面白がらせてもらっている。

もう 1 つの理由が実は結構厄介で、最近この病に本当に困らされている。特効薬は無いらしく、あれこれ手を尽くしているが、なかなか改善は乏しく、日々の生活で他人のお世話になるほどだ。病の名前は「四十肩(または五十肩)」というやつである。



今、「なんだそんなこと…」と思った方。舐めてはいけない。これに悩まされている人は、実は結構いたりする。おそらく年間何十億の経済的損失を社会にもたらせている(と思う。私の感覚では)。「腕が上がらない」はもとより、「痛みでつらい」「利き腕が使えなくて生活で困る」など、症状は人によって様々。私は利き腕の右腕の可動域が極端に狭くなり、力も入りにくくなってビンの蓋も開けられないし、字を書いてもヘロヘロの頼りない文字。寝返りもうてず、夜も熟睡できない。しまいには上着の脱ぎ着ができなくて、家族や職場の仲間に「あの〜、ちょっと着せてもらえるかなあ？」と頼むこともある、ADL の自立にも「？」がつく有様だ。

名前のせいで深刻さとか苦労が伝わらないところが、四十肩のもうひとつの課題だろう。他にもそういう不遇を受けている病気は、イボ痔、水虫、いんきん、手足口病、りんご病など、結構ある気がする。あんまり怖そうな名前もいかかとは思いますが、もう少し同情を買えるようなシリアスな名

前をお医者さんにはお願いしたいと思う。どちらの学会に頼んだらいいのだろうか？

役場の対人援助論

休載

来須 真紀

早いもので、もう 12 月。昨年の今頃は、なぞの症状(多分、コロナの後遺症)に悩まされておりました。あれから 1 年。こんなに元気になれるとは！改めて、家族や職場のみなさんに感謝しております。先日、わが子の子ども会のキャンプについて行きました。正直、乗り気ではなかったのですが、行った先で県によっては絶滅危惧種の植物「シラヒゲソウ」に出会いました。単純なもので、それだけで帰った時には、「行ってよかった」と思っている私でした。来年もこんな小さな喜びで「やってよかった」ケースワークを積み重ねていきたいものです。

教室の窓から

P~228

山口 洋典

「あの日」から 1 年を迎えようとしています。また「あの日」から 30 年も、まもなくやってきます。1 つ目の「あの日」は令和 6 年能登半島地震、2 つ目の「あの日」は阪神・淡路大震災を指しています。少なくとも私にとって折に触れて想起す「あの日」は、直接被災をしていないことも重なり、今日という「この日」を丁寧に生きているかを見つめ直す大切な日となっています。

先日、詩人の谷川俊太郎さんが亡くなり、NHK ラジオ R1「高橋源一郎の飛ぶ教室」では晩年に親交を重ねていた伊藤比呂美さんをゲストに迎え、追悼特集が放送されていました。この番組によくゲスト出演されているブレイディみかこさんと、その谷川俊太郎さんとの共著による『その世とこの世』(岩波書店、2023 年)があります。その中には谷川さんによる『その世』と題した詩も収められているのですが、「あの日」でも「この日」でもない「その日」に思いを馳せ、改めて今日という日を丁寧に生き、充実した人生を送りたいと願う、2024 年の年の瀬です。

PBLの風と土

P163～

千葉 晃央

対人援助学会第 16 回年次大会が終わりました。参加者の方々、登壇者の方々、ワークショップエントリーの方々、ポスター発表の方々、大学関係者の方々はじめ、お世話になったすべての皆様、本当にありがとうございました。いろいろなご縁から、演者側として発信をしてくださいました。知識、体験、経験の共有などいろんな相互作用をあちこちで感じました。その作用の連鎖を起こすこともこの学会の使命と感じています。

団士郎編集長による「木陰の物語 掛け軸漫画展」も行ってくださいました。団先生も当日椅子を作品のところに置いて鑑賞している方と話してくださいました。展示は前日から大会期間に行われ、団先生がいない時にもたくさんの方が作品に触れました。「私も先生に習いました」と何人かの方にも突然話しかけられました。「私たちでもです」とこたえました。いろんなところにつながっていきました。

対人援助学の対象は「暮らし」です。行儀よく収まっているばかりが暮らしではありません。そういう意味で、私が登壇した理事会企画Ⅰ「多様な学びの創造 一動機づけを生み出す仕掛けを探る」(河村昌樹先生、山本昌平先生、大谷編集員と私)では、新しく作っていくこと、その時にはまずやり始める！なんなら勝手にやり始めるでもいい！ぐらいの姿勢が…という話にもありました。こういうところが私の大好きな部分です。話題にできてよかったです。

大会テーマを「やりがいい、生きがいのある対人援助を次代につなぐ」としました。元千葉ゼミの現場バリバリ卒業生、同僚、元受講生、私が習った先生、現役院生…、たくさんの方と時間を共にし、これからの対人援助について考えました。やりがいいにつながる、明日からできる工夫もあちこちの企画でとりあげられていました。ありがとうございました。

昨年は広島大会の事務局、今年は京都大会の共同大会長…2 年間の多くの時間を対人援助学会の大会にかかわることになりました。次の大会も価値ある大会になるよう、みんなで作り上げましょう。よろしく願いいたします。

家族支援と対人援助 **ちばっち**

chibachi@f2.dion.ne.jp

090-9277-5049

障害者福祉援助論

P16~

見野 大介

学童保育でドラゴンボールと出会った小1の息子。今日はレッドリボン軍について語り合う。良い作品は、いつの時代も人を楽しませてくれる。

ハチドリ器

P4

柳 たかを

前号(58 号)で、拙作「やぶにらみ日記」シリーズはひとまず終了です。同作は平成時代に自分のウェブサイトに連載したものです。注文がなくても毎日描き続けることを目標に、毎日 4 コマ漫画 1 本描いてアップロードしていました。誰も知らなくてもかまわないと、コツコツ子供時代の思い出を 4 コマにしていました。4 コマにするとき、話を単純化しないといけないので、記憶のドロドロしたややこしい感情は削ぎ落とされ、楽しい記憶だけが残りやすいです。涙をながすにしても、嬉し涙、嬉し泣きを描くほうが自分も癒され、また描こうという気持ちになります。描いているマンガに作者が励まされる気持ちがしました。今号からは、作者お気に入りの名作物語をマンガにしたものをウェブ用に編集し、掲載させていただこうと思います。過去にわたしが影響を受けたお話を中心に連載したいと思っています。タイトルが変わります、第 59 号からの 4 回は「蜘蛛の糸」(芥川龍之介)。

蜘蛛の糸(1)

P128~

荒木 晃子

数年前には、カウンセリング、研究活動、執筆の 3 拠点に同時進行で取り組んでいた自分が懐かしい。いずれの業務・活動も楽しく、自分がやりたいことができていたからだ。日々時間に追われていても、体力(体重?)にも自信があり、他者からの評価は別として自分自身では問題なく充実した日常を送っていたように思う。

しかしここ数年で、自分を再確認し、改めて日常を振り返り、生活リズムに変化を加えた。「一度に二つ以上のことに手を付けない。プライベートな時間を優先して確保すること」。これが今の生活リズムであり、心身の健康を維持するために守っていることである。



もともと調理が好きなので、やむを得ない場合を除き外食はほとんどしなくなった。自宅で自分が食べたいものを調理し、場合によっては近所へおすそ分けする。今まで時間がなくて作ることができなかった料理にチャレンジする。転居して 4 年目にして、やっと近隣に関心を持ち、組合の役員を引き受けた。徒歩 5 分にある障がい者のグループホームで調理ボランティアを始めた。などなど、忙しいことに変わりはないが、心身に負担なく、本当にやりたいことだけを厳選した日常を送っている。

他方、勤務する生殖医療施設も 18 年目を迎え、新たな当事者を迎えるための冊子作製にも着手しており、その内容は来年度、何回か学会報告する計画もある。所属する大学では客員研究員の継続も 18 年目の更新手続きを終えた。毎年開催される、奈良県広陵町での家族理解 WS も今から楽しみである。

こうやって書き出してみても改めて思う。自分のやりたいこと・好きなことだけを選んで日常を送っていることを、「しあわせに暮らしている」というんだろうな。

生殖医療と家族援助

P252~

小池 英梨子

学校にいるのは SSW(スクールソーシャルワーカー)、社会福祉協議会にいるのは CSW(コミュニティソーシャルワーカー)、病院にいるのは MSW(メディカルソーシャルワーカー)。

様々な分野で、困難を抱える人の支援をしたり、社会資源とつなげていくお仕事。そのラインナップの中に NSW「ネコソーシャルワーカー」をくわえたいと思う。(真剣)人もねこも一緒に支援プロジェクトの NSW 絶賛活躍中！



「多頭飼育崩壊」の背景には、飼い主さんの社会的孤立や経済的・心身面等の課題があり、多機関連携が求められます。社会福祉士として仕事をしながら、「人もねこも一緒に」プロジェクトのNSWはソーシャルワーカーとしても活動する2人が講師になり、社会福祉と動物愛護両方の側面から、「多頭飼育崩壊ガイドライン」を読み解いていきます。崩壊するその前に、何ができるのか一緒に考えてみましょう！

対象
◆動物愛護ボランティア、団体・対人援助職者・行政職員 など

内容
◆14:00～ 『理論編』 分厚くて読しそうなガイドライン、噛み砕いてみました。
講師：岡嶋 時子 氏 (社会福祉士／精神保健福祉士)
◆15:10～ 『実践編』 現場その「前」でできる連携を考えてみましょう。
講師：中村 重香 氏 (社会福祉士／介護福祉士／保育士)
◆16:10～ 質疑応答

ご予約・お問い合わせはこちら
☎ 電話での予約 [10:00～21:00]
050-3390-8460
WEBからご予約 [24H]
QRコードからお申し込みください

人・ねこ 主催 NPO法人 LIFE FOR CATS IN NARA
共催 人もねこも一緒に支援プロジェクト

そうだ、猫に聞いてみよう P142～

寺田 弘志

隣の県の選挙なのに、11月の兵庫県知事選挙は、私の接骨院でも随分と話題になりました。

既存のマスコミは、元知事に不利な情報(中には完全なデマ)を流して、対立候補の優勢を伝え続けました。

一方 SNS 上では、テレビや新聞の偏向報道が次々とあばかれていきました。

最終的に斎藤知事が再選を果たし、オールメディアの敗北と言われました。

私もはじめは斎藤知事を、パワハラ知事、おねだり知事などと思っていました。

しかし SNS を通して、また、クチコミでもいろんな情報が入ってきました。

実は巨大な利権があって、斎藤知事がストップをかけて、教育に予算を回した。

すると利権に群がっていた人たちの斎藤降ろしが始まって、中傷ビラがまかれた。

出所が判明し、ビラを作った局長のパソコンが押収され、局長は3か月の停職になった。

局長は自殺し、パワハラとされた。しかし、

3カ月の停職が、自殺するほどのパワハラだったのか？

局長は人事権を笠に着て10年で7人の女性職員と関係を持っていた。

その記録や画像が公用パソコンに保存されていた。

自殺の原因は、それが明るみに出されるのに耐えられなかったからではないのか？

県議会やマスコミは、必死にそれを隠そうとし、パワハラのせいにしたがった。云々かんぬん。

選挙戦を見て、世の中の変化を感じた人も多いのではないのでしょうか。

いままでマスコミが報道しなかった情報に、だれもがアクセスしやすくなりました。

SNS を規制すべきだという意見もありますが、だれもが自分で考えるチャンスが増えるのは良いことだと思います。

ただ、SNS 情報も信じ切ってはいけないなと、ときどき思い出するようにしています。

以前、接骨院では政治と宗教の話はタブーと言われていました。

もちろん勧誘や決めつけは NG ですが、そういう話題が出て大丈夫な時代になってきているようです。

接骨院に心理学を入れてみた P169～

古川 秀明

小学2年生の授業観察をしていると、子ども達が「誰のおじいちゃん？」「どこのおじいちゃん？」と聞いてきます。もうおじいちゃんにしか見えないんだなあ、と何年前にはショックでしたが、今ではすっかり慣れてしまいました。

そのうちある女の子が私を見ながら「いけい」と言いました。そしたらみんなも釣られて一緒に「いけい、いけい」と大合唱になりました。そんなに私はイケずなじいに見えるのか？あるいはイボ痔と持っているじいさんに見えるのか・・・。

その女の子にいけいの意味を聞くと、なんと「イケメンのおじいさん」ということでした。生まれてから今までイケメンなどと言われたことがなかったので、嬉しいというよりも、こんな年になってから言われてもなあ・・・という思いの方が勝ちました(笑)

ささいな言葉に気持ちが上がったり下がったり、いくつになっても成長しない自分があります。

講演&ライブな日々 P89～

原田 希

今年是这样いう年、と決めて牧場に缶詰め。春から始まった哺乳修行も100頭になりました。小さくても元気な双子、やむをえずの死産、帝王切開で巨大な子牛の誕生もありました。毎日の悲喜こもごもが100通りの経験値になったので、新たに生まれる子たちに返していけるなあと思っています。畜産業界にもアニマルウェルフェアの考え方が急速に浸透しています。家畜が、誕生から死を迎えるまでの間、ストレスの少ない健康的な生活ができる飼育法を続けていきます。やむなくお別れした子牛にも「またウチに生まれておいでよ」と声かけしてるのですが、次も我が家を選んでもらえる気がしています。

原田牧場Note 休載

野中 浩一

突飛な話である。

今の仕事を発展させて、うどん屋を始めようかと思っている。安全が感じられて、食べることに困らず、話し相手がいる。誰が店員で、誰がお客だか分からないくらいに、お客も働く。そんなうどん屋である。

これまで18年間経営をしていた感覚からすると、採算が取れる気はしない。しかし思いついたからには、やってみようかと思っている。

突飛な話である。

「島根の中山間地から Work as Life」 休載

障害者福祉援助論

- これから現場に行くあなたに！ -

第10回

家族支援について考える

千葉 晃央

これまでを理解する

障害を持った子どもさんがおられる家族に出会ったときに、理解しておくべきことがある。それはハンデのある子どもを産んだことを母が責められているかもしれないことである。支援者はご本人にかかわっていると、家族に「もっとこうしてくれたらいいのに…」と思いがちである。その矛先になりがちなのは母だろう。そして、支援者が家族への要望を短絡的に向けること自体は避けなければいけない。

母は十分に自分で自分自身を責めていることがほとんどである。妊娠前に飲んだ薬がよくなかったのではないか、ぎりぎりまで働きすぎたのではないか、自分が遺伝的な要素を持ち合わせていたのではないか、あの時転んだからではないか、たばこを吸っていたからではないか…。こうした考えに明確な答えは出ないし、出せない。だからこ

そ、永遠にぐるぐると頭の中で回り続ける思考なのである。その思考も持ちながら、我が子を日夜育ててきた。

さらに周囲からの視線や問いかけにもさらされた経験があることも多い。息子があの嫁をもらったから、こうなったのではないか…と夫側の実家親族からの声をきいた母も少なくない。特に障害者への理解という考え方が広がる以前であればさらに強い。上世代の方々はこうした障害への理解を学ぶ機会も少なく、その結果としての辛辣な態度や物言いは際立つこともあるように見える。

出生順位とケア役割

きょうだいは、ある時期までは上の子が下の子の手伝いをすることがある。その時に上の子が女の子であれば、特におままごとの感覚で自然とそ



うなることもある。上が兄であれば、ボスのように「面倒をみる」こともあるだろう。しかし、逆に面倒くさがることもあるだろう。それでもできる人が不慣れな人をサポートするのは、自然な行動として生起する。そこにはベースに親の期待や指示もあるかもしれない。また、親の姿を見ているからサポートするのは自然ということもあるかもしれない。こうした下の子どもさんがハンデを持つことがあれば、それは自然発生的に年長者から下のきょうだいへのサポートが起こりやすい。

逆に上の子にハンデがある場合、ある時まですごかった兄や姉を下の子が追い越す時が来る。それまでに、もし意地悪をされたや偉そうにされたなど下の子が感じていたならば、自分の方ができることが増えても手伝おうということになりにくい傾向が起こるだろう。

この頃は、「きょうだい児」という言葉が障害を持つきょうだいがいる境遇を表現して、普及して

いる。きょうだいのケア役を期待され、一方的にその役を押し付けられた経験を語る方もいる。ヤングケアラーにもカテゴライズされ、また注目がされている。

こうした家族間での力動を危惧して、ハンデのあるきょうだいへのサポートを一切きょうだいにはさせないと頑張る親にも会うことがある。

集団圧力の強い国、ニッポンでの決断

1970年に横浜市金沢区で起きた母親による障害児殺害事件があった。ケアの負担、制度の不備の中で母に同情が集まり、地元町内会等による減刑嘆願運動も起こった。それに対し障害当事者の方々が自分たちは殺されてもいい存在なのか、命の価値が低いのかと抗議し、厳正判決を求める運

動も展開され、障害者当事者運動の契機の一つとなった。背景として、地域社会の障害者差別意識こそが母を追い込んだということも指摘された。

現代では、出生前診断に関する医療技術が進み、妊娠中に胎児に障害がある可能性を診断することもできるようになった。とはいえ、当然 100%ではない。その中で、検査をするのか？結果が分かれば、産むのか？産まないのか？判断することが親には求められる。そんなことは、人類史上初めての人間への問いである。医療技術の進歩が私たちに新しい判断を課しているのである。このあたりは対人援助学マガジンの荒木晃子さんの連載が詳しい。ぜひ、合わせて読んでもらいたい。

つまり、よい命と悪い命があるのか？生まれていい命と生まれてはいけない命があるのか？それを親が自ら決めることができるのか？それを誰がきき、誰と共有し、誰と決めるのか？すべては命がけの話である。

このあたりでのカップルのズレは大きな影響を及ぼすことも多い。父の対応への母側の不満は、母は一生忘れない。人生の2つの命(母と我が子)がかかる一番のピンチをカップルでどう向き合ったのかである。そこには、上世代からの介入、医療に関する判断、費用のことから立会出産か否か、こうした希望が母にはあったのか、その結果当日はどうなったのかなど様々なことが関連している。

2つの命をかけた子育てへの敬意を示す

里帰り出産なのか、しかも母の地元での出産なのかによっても母のソーシャルネットワークの量も質も大きく左右される。気を遣う父側の実家での出産であれば、それがどう決まったのかも物語が必ずあり、その影響も大きい。



1970年代の映像では、都会の駅でのラッシュ時に車いすを担いで階段をあげてくれないかと、障害者自身が頼むシーンがある。現在では、エレベーターがある駅が当たり前になりつつあるが、その契機は、当事者や、その家族からの電車等の交通機関への働きかけによるものといっていよい。こうした歴史も理解し、その歴史経過の中で目の前の家族がハンデを持つ子と向き合っていることを忘れてはならない。

第1子でハンデをもって子どもが生まれた時に、次の子どもを設けることを躊躇することもみられる。できれば元気に生まれて、育ててほしいと思うのは親心として当然あり、自然であろう。その上で、現実に対して夫婦で子どもを設けることに関して、どう考えて、どう取り組んでいくのかもテーマになる。何らか夫婦で決めていることも多い。

「どんなふう乗り越えたのですか?」「どんな工夫があったのですか?」「誰が協力してくれたんですか?」「何が助けになったのですか?」…こうした解決志向アプローチ、ナラティブアプローチで用いられる質問も面接ではぜひ使って欲しい。家族支援の目的は自分たちで家族のことは乗り越えられると思えることも一つのゴールである。家族は実際に現在まで何とか切り抜けて、子育てをし、家族を営んでいる。そのストレングスが意識できることが家族の自信であり、未来へのエネルギーになる。そうした面接ができるよう心掛ける必要があるだろう。

BACK ISSUES

「障害者福祉援助論」

対人援助学マガジン 43号／2020年12月～

「付け加えることができる価値は何か?」

対人援助学マガジン 52～58号／2023年3月～2024年9月

「援助職の未来 1～2」

対人援助学マガジン 41～42号／2020年6月～2020年9月

「対談企画 教育と福祉の連携を模索する」

対人援助学マガジン 16号／2014年3月

「障害を持つ友達と過ごすとは? 巻末座談会」

対人援助学マガジン 6号／2011年9月

「1 工程@1 円～知的障害者の労働現場 1～40」

対人援助学マガジン 1号～40号／2010年6月～2020年3月

臨床社会学の方法

(46)社会病理学と臨床社会学

中村 正

1. 社会病理学と臨床社会学の関係

社会病理学という言い方がある。日本社会病理学会もある。しかし大学の科目として開講されているところは少ない。そもそも社会を語る際に医学の言葉を用いること自体が嫌悪されるので、社会病理学という言い方はあまり好まれなくなった。社会病理学は社会学が母体となっている。つまり社会批判の学でもあることから自らの知的立ち位置に敏感かつ省察的な学問であるから社会学の内部でも社会病理学という言い方には消極的なように思える。社会病理という言い方は医学のメタファーで社会を語るので社会構造由来の側面を免責してしまうことになるのだと指摘されるのである。社会に由来する諸問題は社会構造を起点にしていることもあり、社会問題という言い方で把握されてきた。これで十分ではないかということだ。

これとは別に個々人の、何らかの問題行動を把握するために精神医学が対応してきた。その精神医学のあり方も社会学は批判的に位置付けてきた。社会に由来することの多い個々人の精神病理的行動の把握の仕方についてである。

しかし社会病理学という言い方は廃れていない。こうしたなかでも一定数の支持がある。それは人間の行為や行動に現出する問題を社会構造に由来する社会問題とだけ言い切

れない面があるからだ。社会病理学の対象として取り上げられることの多い犯罪、非行、暴力などがそうだ。現前化するのは個々人の行動である。不登校、ひきこもり、いじめも社会問題であるが、個々人の行為や行動として現出する。まとめていえば「行為動詞」がとらえる事態なのだ。「状態を記述する社会問題研究」とは異なり、「行為・行動を記述する社会病理研究」だと1980年代頃までは棲み分けを指摘されてきた(真田是『現代社会問題の理論』青木書店、1978年)。社会構造を掘り下げていく社会問題研究としてマルクス主義的な社会科学が相当な影響力をもっていた時代のことである。社会学はいまほど浸透していなかった。社会構造を独自の位置付けで扱うマクロ社会学や、社会関係や社会的行為を扱うというミクロ社会学が分化し、心理学とも異なる人間を扱う分野として存在感を高めつつあった。どちらかといえばミクロな相互作用を扱う社会学への関心とともに行為・行動を対象化することへの関心が社会病理学研究者にはあった。今では質的研究として体系化されているが、個々の事件や事例を扱う研究はその切り口にシャープなものがあつた。典型的には時代を表現するような犯罪や非行の事例研究である。

社会の矛盾を把握するために必読文献となつたほどの論文がある。見田宗介の「まなざしの地獄」論文(見田宗介『まなざしの地獄』河

出書房新社、2008年)である。永山則夫事件を考察したものだ。

1968年(昭和43年)10月から11月に東京都・京都府・北海道・愛知県の4都道府県で発生した拳銃による連続殺人事件である。事件当時19歳の少年だった永山への死刑適用の是非が争点となった。永山は第一審(東京地裁)で死刑判決・控訴審(東京高裁)で無期懲役判決を受けたが、最高裁での破棄差し戻し判決(1983年)を経て1990年に死刑が確定し(少年死刑囚)、1997年に死刑を執行された。

この犯罪の詳細を網走で生まれた彼の人生の軌跡に即して社会学的に分析したものだ。それは犯罪心理学的研究とは明確に異なるもので、生きることに内在して考察を加える刺激的なものだった。実存的な描写は文学的でさえあった。量的研究と対比される質的研究というだけでもない独自の手法だった。貧困と差別と都市化・近代化という社会の動態を背景に個人史に内在して犯罪を考察したもので、社会構造を背景にした行為と行動を記述する手法として社会学だけではなく影響を与えた。個人の出来事をおしてそこに容赦無くたたみ込まれていく社会の重層構造があり、それに抗い、従い生きている個人を社会学的なマクロデータも入れながら描く手法で、行為と行動と社会構造がバランスよく描かれていた。この手法は圧巻であった。

社会病理学者も刺激を受けた。社会構造や状態を描くことと個人とその行為を描くことが犯罪事象をおして鮮やかに統合されていたからだ。個別の出来事をおして社会を解釈していく経験的研究は、「まなざしの地獄」という哲学的で文学的な表現も含めて私には魅力的だった。医学のメタファーとしての社会病理という言い方問題とも重なるが、個人の生き方を

とおして社会構造を表現するのに、社会問題というだけではなお届きえない世界があると思ったものだ。個々人を問題行動へと追いやる社会構造を見据えながらその経過を事例に即して考えていく。さらにそこには何らかの社会からの働きかけがたたみ込まれていく。その個人のもつ脆弱性というか個性というかそうしたものが、それを捉える概念が欲しかった。ソーシャルワーク、教育作用、心理臨床、司法による矯正と強制、家族の力、社会の暗黙的な規範などが総体として、つまり社会として関与している諸相を切り取りながら、必要な対応を考えていくことを視野に収めたいと思った。そこにあるライフストーリーの把握である。

2. 臨床社会学の提唱へ

ここから臨床社会学の発想へと向かう。精神医学的で臨床心理的な表現を取り入れつつも、マクロな社会動態を退かせることではない言葉として、臨床社会学という表現を用いることにした知的な背景である。こうして社会病理学から臨床社会学の提唱へと向かった。本連載ではそこまで述べてこなかったが、さらに遡った経過である。

こうしたことを紹介しようと考えたのは、2024年3月に立命館大学を退職したことがきっかけで企画した退職記念のミニシンポジウムがあったからだ。以下のように関係者に協力してもらい、その記録が全文記載されている。(退職記念シンポジウム「臨床社会学の可能性——いまでもとこれからを考えながら」『立命館産業社会論集』第60巻第1号2024年6月)。
https://www.ritsumei.ac.jp/ss/sansharonshu/assets/file/60-1_2-08.pdf

以下はこのシンポジウムの冒頭部分の紹介と

さらに追加した説明である。全文はこの記録を読んでいただければと思う。この趣旨はこうだった。

1) その趣旨

定年退職者を記念する特集号に関係者の論文を寄せてもらうことが常となっていますが、今回はシンポジウム風の研究会を開催してそれに代えることとしました。1989年4月に着任し、産業社会学部に35年間勤務した中村正が担当していた「臨床社会学」の講義にちなみ、「臨床社会学の可能性—いままでとこれからを考えながら」と題したシンポジウムを開催したのです。立命館大学の社会学研究科、応用人間科学研究科・人間科学研究科(2018年度に再編)で臨床社会学を研究してきた研究者に参加をお願いしました。報告者のみなさんは、臨床社会学的なリサーチをもとにした研究で学位を得た研究者たちです。私が勤務してから、年代順に初期、中期、後期に研究をしていた人たちです。京都府立大学教授の中根成寿さん、関西医科大学教授の大川聡子さん、日本学術振興会特別研究員(PD、千葉大学)の西井開さんをお願いしています(所属は当時のものです)。さらに同僚で、私が大学の役職に就いている時、産業社会学部で臨床社会学の講義とゼミを担当していただいていた村本邦子さん(立命館大学大学院人間科学研究科教授)にディスカッサントとして参加してもらいました。

2024年2月29日(木)の午後3時から午後6時まで、立命館大学朱雀キャンパス217号教室で対面式にて開催されました。関係する院生や研究者にはオンラインで聴講をしてもらいました。以下は報告と討論の記録です。なお、小見出しの有無や文献の書き方など個人に委ねたので統一はしておりません。あらかじめご了承ください。

その基調となる報告を私が提起し、みなさん

が学んだ経過とともに回顧してもらった。その報告は以下のものである。その論集の私の最初の発言部分の引用であるが、適宜、段落のあとにコメントを加筆している。元の文章はですます文体であるが、ここでのコメントはである文体にしている。

2) 臨床社会学の創生

「臨床社会学の創生」として報告します。もともと「臨床社会学」という言葉はないといえないし、あるといえはある。学会はありません。臨床社会学と名付けて創生に向かったポイントは4点です。

第1は社会病理学との関係です。1985年に「社会病理学会」が創設されました。私が大学院生のD2の時です。今もそうですが、社会病理学という言葉は矛盾をはらんでいるのです。何をもって病理とするのか、病理という医学モデル的な言葉を使うことへの批判です。病理があれば生理がある。異常と正常がある。何よりも社会有機体論的な発想で考えることになるので、「社会病理学の研究対象は何か」という根源的な問いがあります。たとえばもともと離婚などは関係性の破綻で、増えていく傾向にあります。しかし勝手に「家族病理」という言い方をすると、学校に行けない不登校の子どもたちを「病理扱い」にすることになる「機能不全」とか「不適応」という言葉が流通しています。こうしたことが前面に出やすい言い方になります。「解体地域」とかの名付けもありました。一言でいえば差別的な「学術用語」がまかりとおっていました。当然ですが、「そういう言い方でいいのか」ということになります。また別の言い方をすれば英語にならないのです。英文名称と日本語表記が異なる学会です。そのまま訳すと「ソーシャル・パソロジー」ですが、国際的には通用しないのです。パソロジーという言葉はありますが、ソーシャルという形容はできないので、英文名称は社会問題研究学会、「Japanese Association of Social Problems」

としているのです。

「社会病理学会」をつくる時の創立大会は未だに覚えていますが、騒然としていました。社会病理学会ニュースに明治学院大学で開かれた創設大会について記述があります(「日本社会病理学会ニュース第89号(2020年1月24日)」)に記載した「学会創生期を知る人から」という記事です。

(<http://socproblem.sakura.ne.jp/introduce/news89.pdf>)。

学会創立は1985年です。その際の報告に「こんな名称の学会をつくるつもりか」と、特に差別問題研究をしていた人たちから批判的発言があって、結構、騒然としていました。それは「臨床心理学会」が分裂していくあたりとも重なっています。そのちょっと前は精神医学領域でも学園紛争が起こったりして騒然としていた名残りの時でした。名称をどうするのかは何を研究する組織なのかという意味なので今でもこうしたことはくすぶっており、一つの方向性を考えていくために臨床社会学という言い方で社会病理学会の当初からの課題を引き受けようと考えたのです。

さきに述べたように社会病理学はもともと波乱含みでスタートした学会だった。単なる学問名称としてはそれぞれが議論をしていればいいのだが、学会を組織するとなると公論が巻き起こるし、英文名称と日本語表記が異なるのだからそのズレは大きい。その後、社会構築主義が社会学をはじめとして学会を席卷することになるが、社会病理はその典型として批判的な眼差しを受けることになる。何をもって社会病理と定義するのかという基本問題が社会病理学の名称問題だけではなく存在理由の次元から問われていた。続けてマイクロ社会学的な関心との関係についてこう述べた。

3) マクロとミクロの統一へ

第2は、マクロとミクロのリンクの課題です。私はもともと法学部で弁護士になろうと思っていたんですが、法学部で弁護士になったとしても「社会的不正義、そこにある社会問題現象」についてやりたいなと思っていたんです、社会的差別の法社会学的な研究です。それには社会学的な分析が必要になると思って社会学研究科にきました。社会的差別の問題はマクロ的な社会構造分析が関心事ですが、差別行為は人と人との間に起こることで、ミクロな側面をどうするかということが欠かせないからです。そこで着眼したのがミクロな社会学、社会学の中でも、人と人との相互作用に焦点に定める「エスノメソドロジー」とか「現象学的社会学」とかがあるのですが、そういうところに関心がありました。そこに記述されていることは大事なことはないかなと思って勉強していました。社会病理学のなかでは烙印理論(ラベリングセオリー)への関心でした。これは単なる相互作用の研究ではなく権力勾配を含む非対称的な関係性を扱うからでした。

ところが1980年代は、マルクス主義の影響が相当に強かったのです。「社会学はどんな学問なのか」という問題提起があり、経済学中心で土台と上部構造というフレームで社会科学の中でも経済学が大きな存在感をもっていました。それに比べて「社会学は何を研究するのか」という雰囲気が強かったんです。学術研究にも政治的な対立が持ち込まれてきます。差別問題研究の領域ではそれが顕著でした。平和運動もそうでした。公害への批判的な研究もです。今ではそれぞれ学術的に語られていますが、当時は社会問題研究をしようすると政治的な問題がそこに還流してくる状況でした。そこで院生たちは悩みます。「どうアプローチをすべきか」と。「マルクス主義と社会学」と枠内でのポジショニングですね。

立命館大学ではマルクス主義的なアプローチの先生方が存在感を持っていました。私としてはミクロな相互作用として臨床的に問題を解決したい。法学部の

思考もそうで、ケースで問題解決しないといけないことに関心があったのです。そういうわけで立場性という点ではシビアな大学院生の時代でした。70年代後半から80年代の学問をめぐる事情は今とはまったく異なります。1985年、「社会病理学会創設」の頃、思い起こすと、そういうことがありました。臨床社会学を創生すべきという関心はこうした時代背景が大きいのです。

1980年代の社会学をめぐる動向の反映である。社会問題研究はマルクス主義的なアプローチによる社会科学の主たる対象となっており、とりわけ貧困問題や公害問題など社会構造を扱う領域は大きく存在していた。それに対して、行為や行動を対象にして、たとえば対人暴力、社会的差別の問題を社会学的な社会問題研究は対象に取り上げていくべきだと考えていた。社会病理学研究も後者への力点をもっていたように思う。この限りでは、社会学的な社会問題研究として包含できる面もあった。

その後社会学は多様な学際領域を広げていく学問として意義を発揮していきます。なかでもジェンダー研究は社会学分野と重なりあうし、広くマイノリティ分野の研究も社会学的な思考と重なる部分が多かった。そのなかに、心理主義化せずに個々人の問題行動を扱う臨床の領域をいかに位置付けるべきかという課題を私は感じていた。その点を以下のように発言した。

4) 1990年代の社会の混沌

第3に、その後、臨床や心理というミクロなアプローチが存在感を大きくしていくこととのかかわりです。草創期の社会病理学会の喧騒とは別に、社会学的な見地が存在感を増してくる時期となります。社会病理学会以外にもいろんな枝学会が設立されていきます。社

会学会のなかにあった差別問題部会のような研究集団が存在感を持っていき、学会もできていきます。ジェンダー問題をフェミニズムの隆盛とかかわり大きな運動や学術が対象とするようになっていきます。従来の社会科学では十分扱ってこられなかった問題を扱う社会学の重要性が醸成されていきます。障害者問題もそうですね。「一方的に社会システムの方から何が病理か、機能不全かということを決めるのはおかしい」ということの延長にも重なります。解放社会学会、障害学会なども創設されていきます。他には、なお対人支援の分野でも争点が継続し、たとえば社会福祉学研究とは異なる視点をもつ福祉社会学研究が存在感を得ていきます。社会学の批判的精神を生かしてクリティカルに読み解くという意味では社会福祉学と福祉社会学は大事な分岐的になります。

その頃、立命館に就職でき、職を得て、その後、どんな学問していくかと悩みながらいた時にサバティカルでカリフォルニア州立大学バークレー校に在外研究の機会があり刺激を受けます。また、1995年には阪神・淡路大震災やオウム真理教問題がおこります。1997年には少年「A」事件（いわゆる神戸連続児童殺傷事件）をはじめとした事案もあるなかで社会問題研究も活発になっていきます。プライベートにも1989年頃から夫婦別姓も実践し始めたのです。1980年代はまだ「女性学」ということで「ジェンダー」という言葉もいまほどは流通していませんでした。事実婚や社会制度上の諸問題と生き方がバッティングすることも多く、そんなことを1990年前後、私生活的にも経験してきました。

混沌としていく時代に学問を志したのはいいけれども「私は何をすべきなのか」と悩みながらいた時に、フェミニズムや女性学との関係では、男性性ジェンダー問題が視野に入ります。私はマジョリティの側なので「何をすべきか」と悩みつつ、当時、「メンズリブ研究会」の男性たちといっしょに「マジョリティとして何ができるか」を考えながらサンフランシスコに行こうと思ったのです。サンフランシスコは男性問題研究や暴力研究の歴

史があるところだったので。

行ったのはいいのですが、1995年、阪神・淡路大震災とオウム真理教サリン散布事件が起こります。それで「社会病理学は、こうしたことにこそ何をなし得るかを考えないといけないのではないか」という思いに駆られました。目の前で災害、被害、事故や事件が発生しているのに診断とか解釈とか評論とかをしていていいのかという思いも強くなり、私なりに考えて日本社会の中に、まだ十分拓かれていなかったNPO活動とかボランティア活動とか「自発的な市民発の能動性を、どう引き取っていけばいいか」と、当時、震災後の市民活動をしていた学生たちと、今、40代半ばですが、一緒に「ボランティアをしたい」ということで活動を始めました。「NPOを、どう社会に活性化させていくか」というテーマになりました。これは私にとっての市民活動で、ここをもとに社会をどう構成しうるか、何よりもこれまでにないソリューション、問題解決思考が強く、臨床だけではなく、社会の中で生じてくる社会システムの中で対応しきれていない問題を、ある種、メタレベルで扱うことができるかということと目の前の困りごとに、どうつなげてミクロとマクロの問題をつなぐ視点とか、オウム真理教問題は大学にとってもインパクトがあり、それなりに知的な人たちが「ああいうことを起こすとはどういうことか」と考えていました。臨床ではなく臨場・臨地という概念として浮上します。社会学の言葉でいえば「合理性の飽和」ということで「合理主義社会が極まったことで、いきなり非合理なものへと転化していく」と解釈されていくのですがそれとは別の脱合理性のありかを考えていました。自由からの逃走のフロムとよく似ているなと思いましたが、いろんなことをオウム真理教事件が考えさせてくれました。単なる「カルトの問題」としてではなく、社会問題を起こす、「社会病理」として、名称や言葉としては、まだ決着はつけていないけれど、「こういう問題こそ研究者は語らないといけないのではないか」と思ったわけです。この二つの出来事は種類はまったく異なりますが、私にとってインパクトのあるもので

した。臨床社会学として創生させるべき方向性を示唆してくれたのです。

1990年代、この時期は社会病理学と臨床社会学について考えさせられることの連続だった。阪神淡路大震災、オウム真理教事件などのカルト問題、社会的差別や偏見の問題、ジェンダーにまつわる諸問題、少年「A」事件、宮崎勤連続幼女誘拐殺人事件、自殺・自傷行為の問題など、やはりどうしても行為と行動を対象にして、社会構造の描写だけには終わらず、しかも自己責任や心理問題にしないかたちで臨床的な解決の仕方も展望できる知のあり方を求めている。そのために臨床社会学という言葉方を提唱した。さらに臨床の課題が生成する過程に存在する社会的な関係性の捩れや違和感や歪みを表現するために社会病理という言葉方は使いやすかった。社会的な構築であるにせよ、人々が感じる問題の貯水地のようなものを掬い取る言い方として都合のいいボックスのようなものとして活用できた言葉として社会病理があった。さらに、臨床の方にも問題提起ができた。それは臨床の社会性を問うという点である。構造と行為を統合するために対人援助という言い方でプラットフォームを創設した。

5) 対人援助学への展開

第4は、2000年代にはいつの大学の創造との関係です。学会創設以来現在でも社会病理学という名称に懐疑的な事態は続いています、それに代わる概念が生成してきたわけではないのです。なんと名づけるのかはいったん保留しています。しかし実践の科学はたくさんあります。わかりやすいのは社会福祉学や臨床心理学です。なかでもミクロな相互作用、コミュニケーション問題、事例分析をどう位置づければよいの

かなど、臨床系の課題をどうするかが私にとっては大切なものとして浮上してきました。この時に文部科学省から「スクールカウンセラー養成」「心のケア」などとして政策課題が指摘され、大学の定員政策が変化していくのです。実践の諸学が問題解決をすべきだとなります。臨床といえば臨床ですが、関心はあったんだけど、社会問題を視野にいれた臨床心理的問題領域があり、医学モデル的な社会病理学ではなく、問題解決の仕方も組み込んでいくことや事例や個人に対応できる、しかし社会政策だけでは還元できない事項を対象化する知の枠組みを構築すべきと考えたのです。

そのためにも既存の学問を塗りかえないといけない。たとえば、ジェンダー問題が大きくなることはわかっていましたが、そこに「男性問題」をどう入れ込むかとか考えると穴だらけの状態、実践的にも学問的にも、自分の私生活の生き方を定めるにも穴だらけで、これは自分で考えていかないといけないと思ったのです。

当時の大学は定員抑制が厳しくて自由に学部や研究科をつくれなかったんです。ところが「心のケア」ということで「心理分野や教育分野でスクールカウンセラーを養成します」と転換され、阪神・淡路大震災とオウム真理教問題などがあり、社会の問題をきっかけに社会の制度の欠落が見えてくるのです。立命館大学でもそれを埋めておくべきだと思って、2000 年に入り、大学全体の創造のなかで、「人間科学分野の研究をやっていこう」となって「社会科学だけだもの足りず、人間や文化の研究をそこに入れよう。大学院をつくろう」となっていました。私はまだ 40 代でしたが、「若い人に任そう」と大学の幹部がいい、「人間研究分野の領域を拓けないか」ということで託してくれました。その一つに応用人間科学研究科をつくりました。産業社会学部の中に福祉系の学科をつくったり、「人間発達」と「社会福祉」ということで「社会福祉学科」をつくるのではなく、「人間発達の危機」といいながら「心理と福祉をどう交差させるか」ということをやってきました。それ以降も、教職大学院、総合心理学部、人間科学研究科、

そして研究の拠点としての人間科学研究所などの開設に尽力してきました。社会の心理化とともに臨床心理士ブームになることはわかりきっていました。しかしそのままほっておくと従来型の個人を中心とした臨床分野になってくるので、それを社会の問題と交差させ、「社会問題を解決しうる立ち位置を無視しない心理臨床分野」と考えて応用人間科学研究科をつくったんです。

臨床化する社会を予期し、「社会が成熟していけばいく程、メンタルヘルス問題が大きくなる」とわかっていたので、それをクロスさせた大学院創設に向いました。主に文学部と産業社会学部が協働するかたちで大学院を開設しました。「臨床社会学」を産業社会学部に置いて、それと接合するようにして「新しい臨床心理士養成」という形を銘打ちながら、個人を扱うだけの心理臨床に傾かない、「社会のことがわかる臨床家の人材育成を目標にしたい」と「臨床社会学」という科目を置いたのです。産業社会学部出身で応用人間科学研究科に進学し、臨床心理士になる人もでてきました。大学院では「社会病理学」という言い方で教えていました。臨床心理士の養成科目にあるので、それを活用したということです。

1990 年代の混沌とするような社会的な事件を受け、それを社会病理学としてくるかどうかという議論の前に、学問がこれらの出来事にどう応答すべきなのかが問われていると考えた。臨床という実践分野を生成させ、そこに社会と人間を考察する知の連携と融合を企てることとした。学知として生成する前の社会的現実それ自体に学ぶこととして、立命館大学での人間科学研究分野を開拓してきた。教育学、心理学、社会福祉学、臨床心理学、社会学などのいわゆる人間科学分野の知を総動員し、単なる学際知ではなく「対人援助の学知と実践」というプラットフォームを構築し、アカデミアと実

践者が連携できるようにした。ここに参画し、研究者として育った人たちをこのシンポジウムで45ページにわたる読み応えのあるものとなっている。

3. 対人援助学のフロンティアへ

なお、こうした対人援助学のための本拠地としてこの学会が存在していることは述べるまでもないが、臨床社会学の提唱の経過と並行して理解してくださるとこの「臨床社会学の方法」という連載の意義がわかるかと思う。そしてこれはたとえば次のような企画としてもなお活発である。最後に掲載した資料は財団法人大学コンソーシアム京都のリカレント教育委員会の企画である。私が責任者を務める委員会が組織している講座である。対人援助学はこうして生きている。

なかむら ただし(立命館大学)
社会病理学・臨床社会学



2024年度京カレッジ
リカレント教育プログラム

最新版

対人援助のフロンティア

— よりよく生きるための支援とは何かを考える —

プログラム概要

生きにくい社会になりつつあるように思います。多様な災害にも備えなければなりません。こうした現代社会の課題に
答するため、人間の安寧と幸福を実現する社会課題に取り組む諸実践が進みつつあります。医療、看護、教育、心理、福祉、
司法など、伝統的な職域に分けられている諸分野では、多職種が連携・協働した取り組みが要請されています。学術分野
でも、新しい領域への挑戦があります。これらを「対人援助」として統合し、人間の可能性を探るフロンティアの知に学
びます。実践・学問・臨床が交差する知の展開です。専門職者の視野を広げます。学び続ける社会人の皆様、受講をお待
ちしています。

参加方法

オンデマンド講義 全8コマ

視聴期間：2024年8月1日(木)～2025年1月31日(金)
※視聴方法等の詳細は下記「申込から受講までの流れ」を
ご確認ください。

受講料 9,000円 (税込) **定員 100名**

定員に達しましたら、募集終了となりますので、
予めご了承ください。

演習(対面) 全1コマ

開催日：2024年12月15日(日) 13:30～15:00
※開催場所等の詳細は開催日までにメールでご案内します。

受講対象

- 社会福祉士、精神保健福祉士、臨床心理士、公認心理師、保健師、看護師、管理栄養士、保育士など対人援助の職にある方
- 企業の人事・総務などヒューマンサービスに関係する担当者
- 医師、弁護士、教師などの広い意味での援助に関わる専門職の方
- ボランティアコーディネーターなどNPO・NGOで活躍する方
- これらの分野の人材育成に関わる大学教職員の方

申込期間

2024年 8月 1日(木)～ 8月15日(木)	2024年 9月1日(日)～
2024年 8月16日(金)～ 9月15日(日)	2024年10月1日(火)～
2024年 9月16日(月)～10月15日(火)	2024年11月1日(金)～
2024年10月16日(水)～11月15日(金)	2024年12月1日(日)～

※視聴終了日は、いずれも2025年1月31日(金)となります。
本プログラムはオンデマンド講義8コマ+演習1コマのパッケージとなっております。
申込定員は先着順で100名であり、講義単位でのお申し込みは受け付けておりませんので、ご注意ください。なお、演習は本プログラム受講者のみ参加可となります。

STEP1 右記をスマートフォンで読み取り、お申し込みください。すべての項目をご入力の上、送信ボタンを押すと、お申し込み時のメールアドレス宛に「お申し込み手続き完了メール」が自動配信されます。

※重要

※「@google.com」のドメインからメール受信できるような設定をお願いします。
※メール不達などのトラブル防止のため、登録時のメールアドレスには、携帯キャリアメール(例：@docomo.ne.jp, @softbank.ne.jp, @au.com, @nifty.ne.jp, などはなるべく使用しないでください。
※ご登録いただくメールアドレスは、GmailやYahoo!メールなどのフリーメールアドレス、もしくはインターネットサービスプロバイダが提供するもの、その他オリジナルドメインの使用を強く推奨します。

STEP2 申込締切日以降に受講可否通知をメールにてお知らせいたします。



▲お申し込みフォーム

STEP3 [受講可となった方]
受講可否通知メールに添付の案内に沿って期日までに受講料をお支払いください。

STEP4 受講料の入金が確認できた方を対象に、事務局から視聴方法等を記載したメールをお送りいたします。

■期日までに支払手続きが完了していない場合は、参加の意思がないものと判断し、申込を廃止とします。
■開講中止の場合を懸念して、受講料の返金はいたしかねますのでご了承ください。

**京カレッジ
会員について**

お申し込み時に希望された方は、受講料のご入金確認後に**京カレッジ会員証(会員費：無料)**を発行いたします。京カレッジ会員の特典として、京カレッジ募集ガイドに記載されている**各大学・各短期大学の図書館が利用可能**となります。(利用については、各館の規程や指示に従ってご利用ください。)
※会員証発行にはお時間を要する場合がございます。予めご了承ください。

※都合により講座の延期や中止、内容変更等が生じる場合がございます。変更の際には、大学コンソーシアム京都ホームページの「重要なお知らせ」及びお申し込み時のメールアドレス宛にご連絡いたします。



大学コンソーシアム京都
The Consortium of Universities in Kyoto

講師紹介

黒瀧 安紀子氏

京都橘大学
看護学部 准教授

井戸 由美子氏

京都女子大学 家政学部
食物栄養学科 教授

徳永 祥子氏

立命館大学 /
ウェスタンシドニー大学
客員研究員

西谷 裕子氏

弁護士・大阪弁護士会所属
リハビリ総合法律事務所

斎藤 真緒氏

立命館大学
産業社会学部 教授

朴 希沙氏

在日コリアンカウンセリング&
コミュニティセンターカウンセラー、
臨床心理士、公認心理師

丸一 俊介氏

在日コリアンカウンセリング&コミュニティセンター長、障害福祉
サービス事業所ほっとハウス 所長、精神保健福祉士・公認心理師

西井 開氏

立教大学・日本学術振興会
特別研究員 (PD)

中鹿 直樹氏

立命館大学
総合心理学部 教授

コーディネーター

中村 正氏

大学コンソーシアム京都リカレント
教育企画検討委員会委員長・
立命館大学特任教授

講義概要

対人援助職の受援

～COVID-19、能登半島地震の経験を通して～

災害時や感染症蔓延下で、その地域や組織だけでは対応が難しい時、健康や生活を守っていくために受援するということが増えてきたように思います。COVID-19下でのIHEAT活動、令和6年能登半島地震での医療支援の経験を踏まえて、対人援助に関わる専門職の受援についてお話ししたいと思います。

[講師] 黒瀧 安紀子氏

生まれた家庭から離れて暮らす子どもの
ライフストーリーワーク

生まれた家族と離れて暮らす(社会的養育)子どものおかれている状況について解説した後に、「ライフストーリーワーク」について詳しく取り上げます。「ライフストーリーワーク」とは、家族から離れて暮らす理由を含めた過去、現在の自分につながる情報を子どもが知り、等身大の自分と家族について理解した上で未来について考え、歩んでいくための支援です。

[講師] 徳永 祥子氏

ヤングケアラー／ケアラーの視点から考える家族まごとの支援

近年注目されている「ヤングケアラー」を導入としながら、ケアをする人を支える「ケアラー支援」に関する論理と具体的な支援の体制について考えます。超高齢社会を目前として、(ケアする／ケアされる)関係全体を支えることの意義、ケアフルな社会に向けた課題について考えます。

[講師] 斎藤 真緒氏

第三者に何ができるか？

～目の前で起るハラスメントへの介入方法を学ぶ～

目の前でパワハラやセクハラが起きた時、周囲にいる第三者の介入が重要だと言われています。しかし、加害者が自分の上司で口出ししにくい、周りの反応が気になる…など、様々なためらいが発生します。そうした障壁を乗り越えて、いかにハラスメントに介入できるのか、具体的な方法と合わせて紹介したいと思います。

[講師] 西井 開氏

対人援助における心身の健康と精神栄養学的アプローチ

人間の日常的な健康を考える時、生活習慣が重大な要素になるのは当然のことですが、その中で食事は身体の構成や機能維持、そしてそれらに関連して精神的・社会的な健康にも影響を及ぼします。本講では精神栄養学の観点から、近年注目されているうつ病や認知症などを含めた、心身の疾患と栄養管理との関係性について述べ、また栄養学的なかわりが全人的な健康の維持や改善、及びそれらへの予防的取り組みを行う上で果たす役割をお話したいと思います。

[講師] 井戸 由美子氏

人間的な刑事裁判を目指して～治療的司法の取り組み～

刑事司法では、とても合理的な人間像が描かれており、個人が自由で合理的な意思決定により犯罪を遂行したのだから、その責任はすべて個人にあると考えられてきました。しかし、実際には、生い立ちや環境など様々な要素が影響を与えています。心理や福祉の観点を刑事司法の場に取り込もうとする治療的司法の実践についてご報告します。

[講師] 西谷 裕子氏

「多文化」カウンセリングとマイクロアグレッション：
ラポール形成を阻害する無自覚な差別の存在

属性が異なる者の間、特にその集団間において対立や力の不均衡が存在する場合、そこに所属する「個人同士」が信頼関係を築くことは、いかにして可能となるのかを考えます。そこにはいくつもの障壁、困難があり得ますがそれを可視化する概念のひとつにマイクロアグレッション(microaggressions)があります。

[講師] 朴 希沙氏 丸一 俊介氏

学生ジョブコーチによる

就労支援の取り組みから考える対人援助

ジョブコーチ(職場適応援助者)とは、障害のある人が職場で働くことを支援する専門職です。立命館大学では学生・院生がジョブコーチ役を務める学生ジョブコーチの取り組みを実施してまいりました。応用行動分析学に基づく支援を実施する中で見てきた対人援助の機能について実例とともにご紹介いたします。

[講師] 中鹿 直樹氏

演習 対人援助のフロンティア

[講師] 本プログラム講師陣

※講師の中には参加できない者もありますので、予めご了承ください。

オンデマンド講義を受講いただいた上で、受講者どうし対面で意見交換をさせていただいたり、講師の方々へ直接質問できる場として、「演習」を開講します。本プログラムのコーディネーターである中村氏をはじめ、オンデマンド講義を担当された講師の方々に参加いただきます。

講師も含め、日頃から異なる分野で対人援助に関わっておられる方どうし意見交換をする中で、新たな発見や人脈の形成に活用いただけます。

■お問合せ先



公益財団法人 大学コンソーシアム京都 京カレッジ担当

〒600-8216 京都市下京区西洞院通堀小路下るキャンパスプラザ京都内

TEL:075-353-9140 FAX:075-353-9121

【お問合せ受付時間】火～土曜 9:00～17:00

<https://www.consortium.or.jp/> 京カレッジ 検索SUSTAINABLE
DEVELOPMENT
GOALS2050
SDGs文化
京都へ

主催：京都市・公益財団法人 大学コンソーシアム京都

発行：京都市総合企画総務局政策課

京都市印刷物 第064144号 令和6年5月

※この印刷物が不要になれば「雑がみ」として古紙回収等へ

カウンセリングのお作法 第41回

CON

Counseling Office Nakajima

カウンセリングオフィス中島 中島(水鳥)弘美

～クライアントとカウンセラーとの信頼関係～



前回は、家族カウンセリングを行う相談機関と学校の関係性について話しました。その前の回は、医療機関などの関係機関との連携について取り上げました。

今回は、細部に注目をして、カウンセラーと相談に来られるクライアントの関係について話します。

この人になら話してもいいと感じてもらえるか

カウンセリングのスタート時、もっとも重要なことは、クライアントとカウンセラーの間の信頼関係です。カウンセラーがクライアントさんから信頼を得るためには、クライアントさんが伝えたいと思っていることを理解し、受けとめることですが、たやすいことではありません。

クライアントさんにこのカウンセラーなら安心、大丈夫、信頼できると感じて、さまざまな思いを語っていただける存在になることが求められます。そうなるために、カウンセラーはさまざまな訓練を重ねますが、より信頼関係を築きやすい状況があるとすれば何か要因があるのではないか、という点から考えてみます。

年上のお兄さんお姉さんのような存在

現在、学校にはスクールカウンセラーが配属され、心理的支援が必要な児童生徒や保護者と面談をし、教員と連携をとりながら支援をしています。そのスクールカウンセラーが、比較的若く、年齢的に児童生徒さん達に近い場合は、話しやすい年上のお兄さんお姉さんのような立場になれる可能性が高いです。ただ、保護者との面談の場合は、若いカウンセラー＝経験が少ない、と最初は、受け止められることもあります。子どもが話しやすいと親しみを感じている様子を見て徐々に安心していく過程で、より保護者との信頼関係が築かれていきます。

男の先生が苦手？男の先生がいい！

児童生徒さんとカウンセラーの関係を考える場合、例えば、男の先生が苦手とか、男の先生の方がいいとか、事前に何か情報が入っている場合があります。それまでに得られている子どもさんに関する情報で、例えば、ある中学生女子は、男の先生がクラス担任で、日ごろから苦手意識を持っているなど思春期の子どもたちの敏感な部分が明確になっていれば、できる限り、男性カウンセラーではないことを前提に、可能な範囲でこの生徒さんと話しやすい対象を検討します。

父親との関係が家ではとても良好なので、男性のカウンセラーの方が適していると考えられる場合などももちろんあり、面接が始まるまでの情報は、初回面接スタート時の関係づくりの準備につながります。

スクールカウンセラーの年齢、男性女性を想定して考えてみましたが、これらは、子どもの問題で相談に来られた、家族面接の場合にも同じことが言えます。まずは、子どもが面接場でカウンセラーの問いかけなどに対応ができるのか、話せるのかがポイントのひとつとなります。

どんな人なの？何をきかれるの？

これまで面接に来られたクライアントさんやご家族のなかには、どんなカウンセラーなのか、何をきかれるのか、事前にいろいろと不安を持っている場合があります。そのような場合は、まず、親御さんだけが最初に来所され、どんな担当者なのかを確かめて、いただきます。そのあと、親からカウンセラーの様子をきいた子どもさんが、次の回は参加したということもありました。中には、子どもにどんな人なのか説明をするために顔写真を求められたこともありました。視覚的な情報がほしいということでした。

カウンセリングに向かうまでの不安要素を少しでも解消することで、来所しようとする気持ちが増えるのであれば、できるだけその希望に応じるようにします。

一対一の個人面接は同性？同世代？それとも年齢差？

次は、個人面接、一対一の大人のカウンセリングの場合です。

クライアントとカウンセラーは同性が良いのか、年齢が近い方が良いのか、それとも、年齢が比較的離れている方がいいのか、一概にまとめることは難しいのですが、次のような場合を考えてみましょう。

例えば、若い女性のカウンセラーと若い女性のクライアントさんのカウンセリングの場合、年齢が近く、友達のような親しみを感じることがあるかもしれません。しかし、クライアントさんの中には、

「私は困難な状況なのに、カウンセラーは仕事をてきぱきとこなしている、うらやましい」

などと、比較をして、立場の違いが明確になることがマイナスに作用することもあります。

若いクライアントさんの場合は、少し年上のカウンセラーが見守るような立場になることが、クライアントさんにとって話しやすいということも考えられます。

もちろん、同性で同世代ということがとても良い方に作用することもあります。

例えば、年配のカウンセラーの場合、クライアントさんも同世代であれば、若いカウンセラーよりも話しやすいと感じてもらえる可能性が多いと想像できます。

カウンセラーとクライアントとの出会い

このようにいくつかの組み合わせをあげてみましたが、実際は、このような調整ができる状況ばかりではないようです。

しかし、どのカウンセラーが担当するのが適しているか、コーディネート上手な紹介者や、その組織のなかの受付担当者の判断で、フィットする関係が考えられているように感じます。

カウンセラーとクライアントとの出会いは、さまざまな要因が重なり合って成り立っています。

晩年

D・A・N 通信

No.10

2024.08.21 (77歳3ヶ月) ～2024.11.20 (77歳6ヶ月)

団 士郎

2011年2月からずっとX(旧ツイッター)とfacebookに記述を続けて今に至る。本連載はそこにアップしたモノを一部整理したり、書き加えたりしたものだ。SNSで見えていただいている方には、同じものかよ！ということになるだろう。ゴメンナサイ。SNS版になったこと、特に先ずツイッター(x)に書くことで、記述内容が文字数制約の中にあることになり、事実、出来事中心に変化した。それをコピーしてfacebookにも貼り付けているのだが、これが14年変わらないスタイルになった。

他の人が書いたものも、日誌形式のものには無条件に心引かれる。読書日記や映画日誌、映画監督や作家の日誌など、面白くて仕方がない。

8/21



朝一番、京都・出町座で映画を観てきた。ウーマンラッシュアワーの村本大輔のドキュメンタリー。面白かった。人前で話者としての

自分のことを考えた。スタンダップコメディのことを久々に思い出した。そんなこと言う人が見当たらなくなっていたなあと思った。コンプラがのさばって批評が廃れた。今スタンダップコメディアンといったら立花孝志か。

8/22

告知です。宮城エリアにお住まいの方、この時期にお近くにお越しになれる方へ。8/24(土)から二週間、初めて塩竈で家族漫画展開催です。9/1(日)は現地に寄せていただいて、漫画トークも開催します。ぜひお運びください。

8/31(土)は例年の福島県白河図書館で漫画ト

ーク&漫画展開催です。

会期：令和6年8月24日（土）～9月5日（木） 9:00～21:00
（休館日はのぞく）

場所：ふれあいエスパ塩竈 2階展示ギャラリー（宮城県塩竈市東玉川町9-1）



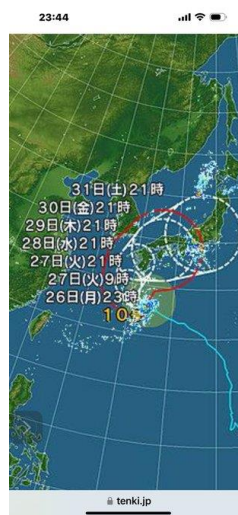
8/23

仕事場で目覚め、そのまま制作作業して一息ついた。途中、youtube 見たり、無駄な時間も過ぎていたら夕刻を過ぎている。夕飯に出かけるのにここは便利だ。京都市内の繁華街に5分。何食べようかと迷って結局定番に。その後、あまり来ない時刻、21時過ぎにタリーズで読書。空いている。



8/26

次々届く対人援助学マガジン原稿の整理をしている。その間に珍しく学会事務局から連絡。関東の大学院生からマガジン掲載の記事について、問い合わせがあった。丁寧にすぐ返答しておいた。もう1本、マガジンに新規連載の打診が施設職員の人からあった。歓迎！昨日今日、台風情報が騒がしい。



8/27

ストレッチの後、ドトールで台風の数値、進路を睨みながら、週末予定の東日本家族応援プロジェクト+（白河&塩竈）の講演レジュメを作る。用心はわかっているが最近、気象予報士がやたら侵入的だ。この調子だとノロい台風に先んじて福島、宮城入りし、迎え撃つことになるのか？JRの運行計画はいかに？

8/28

台風がなかなか動かないので、結果的に予定通り大阪に。漫画集団ぼむの定例会。駅に人影は少ない。普通に列車は動いているし、お客も乗っている。風があるので暑さは随分マシだ。この後どんどん厳しくなるのだろう。明日以降の予定もJRの運行判断に左右されざるを得ない。仕方ないか。

現代画廊は大阪市内、老松町の古いギャラリー。京都ぼむ展に移るまで、40年も続けてき

たところ。みんなの人生にいろんなことがあって今だなぁとしみじみ。



8/29

新幹線、JR 東海は今日のところ通常運行。待合室の TV 画面とのギャップは大きく落ち着かないが。東日本家族応援プロジェクトの 14 年目前乗り。東京乗り継ぎで福島に着いて合流の恒例三人車旅。先ずはいつもの極久里珈琲で店主夫妻と歓談。その後、五色沼に向かう。



8/31

いろいろと中止や延期になっている中で、福島県白河市図書館で漫画トーク。福島県内巡回展を終えた掛け軸を会場の壁面に掛けて準備。行動自粛ムードの台風気配の中で、参加者はあるのやら。振り返れば、2011 年大船渡で、二、三名の参加から始めた会だから。現在のところ風、雨、共にそんなに強くない。

9/1

宮城県塩竈市、ふれあいエсп塩竈は図書館の回廊形式の広い展示。この数の展示はなかなか出来ない。掛け軸とパネル作品両方が。ここで漫画トークも今から。



9/2

一日中フィールドワーク。被災地沿岸部を巡る。南相馬、小高にある「おれたちの伝承館」館長、写真家の中筋氏のガイドであちこち。請戸小学校から東日本大震災、原子力災害伝承館へ。そして被災で街の消えた路上で、昔あった商店街の再現パフォーマンス。分かりにくい場所にフレコンバックの山。





9/3

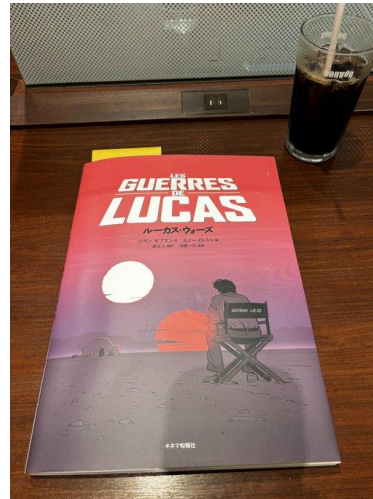
好天の中、フィールドワーク最終日。放射線量の高かった夜ノ森地区の残存蔵解体作業の窓には、作業員がしたのだろうか、肖像写真が。はるか関東エリアの電力のために、今も変わらず一杯のパネルと送電線。伝言館には亡くなった早川和尚への安斎育郎さんの思いと決意の額。

9/4

今夜は対人援助学マガジン 58 号の編集会議に千葉、大谷揃って来訪。原稿はほぼ集まっているが、数人、未着なのか今回パスなのか。段取りはついているので、恒例の COCO 壱番のカレーを食べながら話はあちこちに広がる。こういうのが楽しいねえ。

9/5

ストレッチの後のいつものコースの高島屋蔦屋でグラフィックノベルの新作「ルーカス ウォーズ」(キネマ旬報社刊)を手に入れ、読み始める。映画監督ジョージ ルーカスの一代記。出だし快調である。



9/6

読み終えたコミックノベルがとても面白かったので、スターウォーズ第一作を何十年ぶりかで再見。劇場でもそう思った記憶があるが、やっぱり好みに合わなかった。世界的大ヒットなものになあ。気分直しに Amazon プライムでこの韓国映画を見たらこちらが面白かった。映画は好みの問題だからなあ。



9/8

東北二カ所から戻ってくる掛軸とパネル作品の宅配を待つ週末。マガジンの原稿、目次ペ

一ジ割も決まった。編集作業をしながら横のPCで、初めて名を聞いた歌心りえさんの韓国での音楽番組を流す。なんだか歌を聴いているなあとしみじみ思う。昭和歌謡なのか、良い歌が多い。

9/11

たまにやることだから諦めている。予感があったがやっぱりなあ。中国から同じものが三つも届く。SNSに流れた広告が目についた。つまらないものだったが、買ってみようと思った。paypalとやらで決済しようとしたが上手くいかない。三度やってもダメそうなのでやめた。そうしたら同じモノが三つ届いた。



9/11

葡萄と林檎が好きだ。ただし美味しいモノに限る。なかなか独り言で美味しい！なんて声は出ない。近くのコンビニに「藤稔(ふじみのり)」という名の葡萄が並んでいた。大きな期待はせず、それでも、今年は美味しい葡萄食べてないなあと思っていた。美味しいとは思いますが「社員」好きではない。冷やして一粒、口で弾けて大絶賛。店に三度買いに行った。

沼津市の原町幼稚園誌「はらっぱ」が届く。隔月刊で50ページある立派なモノだ。この9月号に木陰の物語最新作3点が連載されている。長年掲載されていて、愛読者もいっぱい

いるようだ。卒業してからも、どこかで再会して懐かしく思ってくれる親子があるに違いない。ずっとそこにあり続けるモノ。



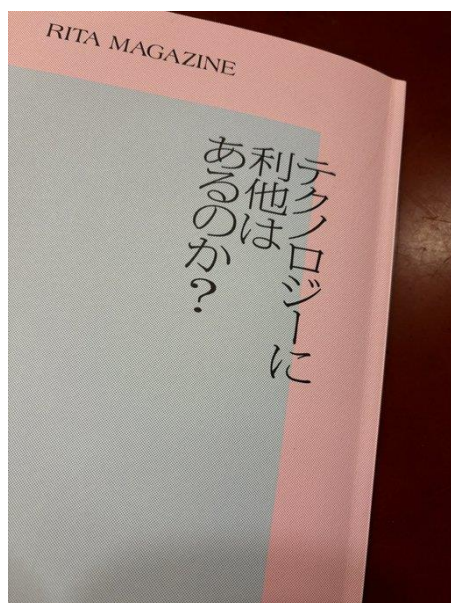
9/15



週末、京都に来ている長男父子と行動を共にする。なかなか行く機会のなかった琵琶湖テラスに。曇って見えなかった琵琶湖が、時と共に晴れてきて絶景。息子に誘われてジップラインにも初挑戦。ここの設定は二時間で6本。スタッフにこれまでで最高齢だと言われる。思った以上に体力と反射神経が必要だった。

9/17

準備中の新刊の大きなテーマは「家族と境界」だ。先月のWSでは、この綻びがいろんな家族に噴き出していて、ちょっと驚いた。そういう時代かと思っていたらSNSで目にした本の表紙文言がこれ。書店で手に取った雑誌の巻頭には「境界が余りに強い所には恵みも、出会いも、気配も生まれない」とあった。



9/21

いくつか仕事が片付いて、自宅で暇にしていた。なんの予備知識もなく、Netflixのちょっと古い韓流ドラマを見始めた。1話一時間ほどのシリーズを16話、最後まで観てしまった。時間があつたのもあるけれど、こういうのが好きなんだろうなあ。



9/24

人間ドック➕で大腸ポリープの内視鏡手術後、仕事場に。眠っている内に、夢の中で痛いような気がしていたが、目覚めないからわからない。消化の良いものをとコンビニのお粥を食べつつ、お薦めの「落下の解剖学」を観る。TVではこんな話題、何を今頃と思わないでもない。



9/25

YouTubeの夜更かしをして朝寝していたら、クリニックから「経過はいかがですか？」の電話で起こされた。一応、ポリープ三つ取りの手術後なので消化の良いものなど選んで食しながら、後はいつものタリーズで来月号の原稿下書き。また写真加工アプリなど買ってしまったので試しに使う。



9/28

今朝は珍しく西に向かって新幹線。毎年、この時期に実施している広島WS。ここは「家族のトリセツ」のタイトルで1日五時間プログラム。京都から一時間半の出張だから、懇親会にも顔を出して、夜遅くには帰宅する。昔の人間だから、感覚的には広島に日帰りするなんてしっくりこないのだが。

9/29

こんなノートがあって、実現するかどうかはともかく、作品作りのプランをダラダラ書いている。今日もそんなことをしていたら、突然、そうだ！と思ったことがあった。そこで、日曜日だ！が家を出て、仕事場に来た。shiro-san.comというホームページの新しいコンテンツ制作を試してみる。



10/1



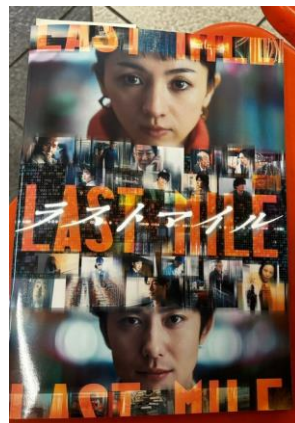
今月号の連載に描いた「子ども旅」。その連想で30年余り前の連載マンガをカラーにして再構成する案を思い

つく。せっかくだからスマホ画面サイズ9:16の縦長サイズでレイアウト。見てもらえる日が来るかな？

ゴミメールが連日届く。そのせいで大事な知らせを見過ごしたり、一緒に削除してしまうことがないでもない。しかし、大事なメールだけになったら、もうそれほど届きはしない。そうしたら見なくなってしまうかもしれない。掃除するためにはゴミがある方がやってる感が出る。それで良いか。

10/2

何も知らなかったけれども、SNSの記事でふっとその気になって、20時50分からのレイトショーに出かけた。面白かった。物流の事など興味があって、アマゾン配送センターのルポなども読んだことがあった。日本社会のスムーズに行くはどういうことか？消費者の一人として思うところ大だった。



10/6

昨日は亀岡へ。学びの森北村さんのところで連続講座の十回目。5年も経ったのだ。終了後、南つつじが丘のすぐ近くには昔の先輩同僚Hさんが住んでいるので、久々に会う。お互い良い歳になっているから、いつでも次回はないかもしれないと思いつつ楽しむ。秋もマンガ展、zoom講座、講演会、など、各地でいろいろやっています。相変わらずなこ

と、目新しいこと、基礎的なこと、さまざまに語ります。興味があればHPを覗いてみてください。スケジュールが出ています。参加いただけると嬉しいです。

10/9

さあまた始まった草津の勉強会。二十数年、繰り返している。今回も初参加2名を含んで、続けることが一番だ。そのためには私も元気でないとね。

2024年度後期
「家族理解」ワークショッププログラム 主催 草津家族療法研究会

ご案内
対人援助職に就いておられる方、「家族」への対応について悩んでおられない方、
今、社会の変化と共に家族機能も徐々に変化してきています。学校現場や福祉施設などでは、今までと違った「家族」への柔軟な理解と対応が求められているのではないのでしょうか。
この講座は、それぞれの現場における家族問題の扱いについて、「家族療法」の持つ知恵をどう活かせるかを考え、実践するプログラムです。家族を理解し、問題解決の糸口を見つけることを目指します。現場に何かを持ち込み、元氣になりたいと考えている参加者を募ります。

日程 2024年 ①10月 9日(水) 18:30~21:00
★②11月20日(水) 18:30~21:00
③12月11日(水) 18:30~21:00
2025年 ④1月 8日(水) 18:30~21:00
(毎第2水曜日・一部変更あり)

会場 草津コミュニティ支援センター 2階ホール
*駐車場はありませんので、近隣の有料駐車場をご利用下さい。

プログラム内容 横濱家族療法士の基礎的学習です。受講者の事例から家族への理解と介入・援助方法について考え討論していきます。

講師 団士郎(仕事場D・A・N主宰・家族理解WSトレーナー・立命館大学客員教授)



10/10

来年1月13日から30日まで、京都衣笠にある平和ミュージアムのギャラリーで家族マンガ展をする。その会場下見に世話人のHさんと出かけた。結構広い空間で、今の装飾は全て取り外せるもので、相当な作品数が展示可能だ。京都では久々の大きな作品展になるだろう。またお知らせします。

10/12

ふたつのPC画面の並んだ仕事場デスクで、本日も引き続きこんなことをしている。大谷、

今日は打ってないけど、トータルにいい仕事をしているなあ。私も自分のできることを頑張ろうなんて思わせてくれる。やっと秋になった京都市内に、夕飯を求めて出かけようかな。



10/13

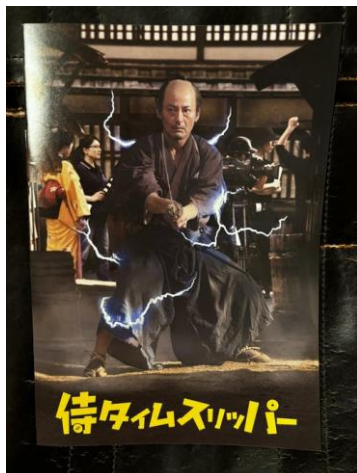
連休は自宅か仕事場に籠もる。金曜の夜にzoom講座の一回目を無事終えて、急ぐ要件もないので、受身の数日にaudibleは好都合だ。どこかで名を見かけた初めての作家。よくあるパターンの男女入れ替わり人生の話。なのに、ディテールが楽しい。穏やかなこういう話が最近の好みだ。



10/16

ストレッチに行った後、話題になっているのが目に留まった映画の一日一回上映時間がピッタリなのでmovix京都へ。平日昼の座席が半分ほど埋まっていた。自主制作の一館上映時代劇が全国上映に展開しているらし

い。「カメ止め」現象が再現なのか？



10/18

久々に立命館茨木キャンパスに。東日本家族応援プロジェクトの12月報告会の準備会。なかなか面白いことが連想されてくるような報告が続く。15年近く経っても、変わったとは言えないこともたくさんある被災地。能登のことがずっと意識の中で揺れる。



10/19

午後、雨の伊丹空港をでて雨の新千歳空港に着いたら、気温は10℃。昨夕はまだ半袖で十分だとか、それは寒いとか話題にしていたのに。予報の中には札幌市は明日、明後日の最低気温は0℃とかも表示される。まあ屋外仕事じゃないから、天気は関係ないけれど。冬到来か？

10/20

日曜日朝の札幌。ホテルから会場に向かう。気温は6℃らしい。ユニクロのコンパクトにたためるダウンを持ってきたのを着る。会場は

いつもの「かでる2.7」10人で和気藹々と楽しんでもらえたかな？

10/21

寒くなったニセコから羊蹄山を見ながらドライブ。狐、蝦夷鹿など姿を見せる。初めてこんなことをしてみた。なかなか嬉しい仕上がり。ガラスなんてあまり触ったことがなかったなあ。きれいだ。



10/23

街で見かけたポスターに惹かれてこれを見る。「国境ナイトクルージング」、タイトルがいい。私にははるか昔になってしまった青春の数日の物語だった。あんな感覚とか、眼差しとか、

ウンザリとか、いっぱい同じものを見たような。
だがそれももう遠い彼方の、共感もしづらい頃
の記憶になった。



10/24

翻訳のタイトルがこうなることに、いろいろ想い
が巡る。長い間関わってきたことが、いろん
なところで実りになっているのだろう。振り返
ると、30 年前に属していた相談機関主催の研
修会で、事例検討の新たな試みをしたところ
から、変化は始まったように思う。



10/25

今夜は zoom 講座の二回目。明日は草津市
で開催中の家族マンガ展とマンガトークに。
その準備は済んでいるので、午後は生協に買
い物に行って、お気に入りのスロークッカーで
カレー作り。店で目についたおはぎを食べた
ら満足して、今夜用に買った別の素材調整に
思案。講座終了後に食べるかな。

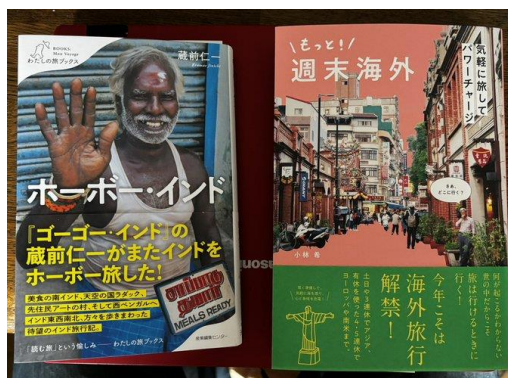
10/26

草津キラリエで漫画展&講演会。世の中にあ
れやこれやの行事、イベントが目白押しの時
期に、足を運んでくださった方々、ありがとうご
ざいました。掛軸漫画の展示、綺麗だなあ。



10/27

昨日夕刻、草津駅前のジュンク堂をぶらぶら
した。目的の本があったわけではない。ホー
ー・インドは蔵前さんの新刊だから気にしてい
た。その側にあったもう一冊も購入。手にして、
まだ機会があれば海外を旅したい気持ちはあ
るのだなあと思った。実現は微妙だが、インド
は行ったことがない。



10/28

夜遅くまでの選挙速報を、久々に面白いもの
を見たなあと思いつつ寝て、すっきり目覚めた
月曜日。月例の新作の下書きをいつものタリ

ーズで。三時間も居座っているのだから店は迷惑だよ。キリのいいところまでごめんなさい。

10/30

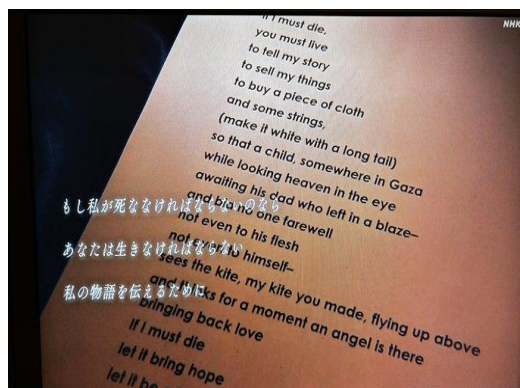
高校の喜寿同窓会。亡くなった人も少なくない歳。出かける前に久々に卒業アルバムで名前を確認してみたが、同じクラスでも半分くらいは忘れている。そんな具合だから出席しても、知らない人が多いような、変な気分。550人中、本日 88 名の参加。記念撮影終了後、馴染み



の 3 人でお茶。

10/30

録画してあった NHK スペシャルの If I must die を見て、強く気持ちが動かされた。ガザの詩人。私にとって、生き残って伝えなければならない物語はなんだろう。それを果たしているか？と自問してみた。



11/2

京都光華女子大学での第 16 回対人援助学会に参加。漫画展をやってもらっている。木陰の物語を愛読していて、保健師さんたちに

薦めてきたと、記念講演の講師さんが伝えにきてくれる。家族理解講座 DVD を授業で見てくれた学生が、ああ、生(ナマ)団先生だと。有難い限りである。



11/3

漫画展で 掛け軸を見ながらメモしている女性が。「気になる所ありますか？」と話しかけると、「今の自分が抱えている状況にピッタリで...」と話が始まった。作者として作品の背景も絡めて話すと、お目にかかれてよかったとお礼を言われた。東北被災地でもたまにこんな事があったなと思い出した。

無事、学会の終了後、あちこちから参加のおじさん四人で夕飯に。ところがなかなか入れる店がない。連休だしなあと諦めムードの時に、町中華のカウンターだけの夫婦でやっているお店に飛び込んだ。これが美味い美味い。なのに安い。また食いたい餃子。チャー飯グー

11/5

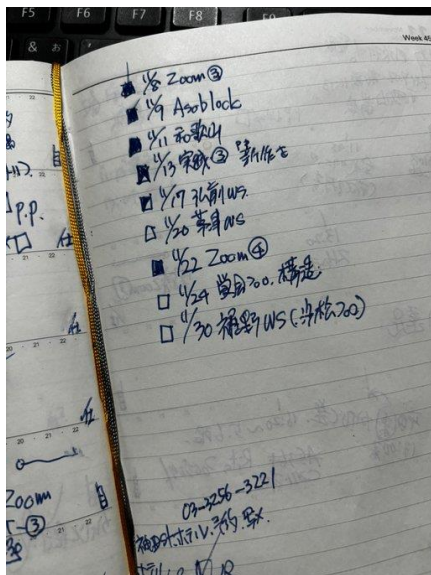
MRI 検査を受けに西陣病院に出かける。データを受け取って街にでると、千本釈迦堂がすぐ近く。長く京都にいるが行ったことがない。

特別拝観をしているのでのぞく。快慶作の釈迦十大弟子像が十体揃っている。棟方志功の版画は何度か見ていたが、観音菩薩も六体揃っていたが半分知らない。仏像がずらっと圧巻。



11/8

11月は出向くところも多く、zoom 講座も併せてパワポ作りに多忙だ。やることがあるのはいいことだが、納得のいく準備に時間がかかるようになった気がする。結果としてまあまあだったのは仕方ないが、準備段階でそう思うのは嫌だから時間を食う。エンタメになってないとダメだしね。



11/9

家族理解 WS in 東京、神田の日本教育会館で。16名の参加で六時間。今は三グループに分かれてのミーティング。



11/10

昨夜は少し早寝したので、7時頃に目覚めた。それならばとホテルの部屋で、チェックアウト時刻まで新刊ゲラの校正を始めた。タブレットで見ているせいもあるかもしれないが、新たにレイアウトされた自作漫画がキレイだ。とても読みやすい。「グラフィック版 家族理解の教科書」発行間近。

旧知のよくやる失敗として笑っていた事態に自分が。昨夜、友人と息子の3人で食事して、お勘定となった時に財布が見当たらないのに気づいた。落とし物？盗難？？現在のところ不明だが、多分自宅のテーブルにある気がする。もしなかったらあれこれ手続きが山積みの緊急事態。で、午前中に急ぎ帰路に。

自宅に戻ったが心当たりの場所にはなかった。それなら新幹線京都駅で弁当を買った売店だろうかと JR 西日本に電話。すると新幹線構内は JR 東海だと知る。そちらも丁寧な対応ながら財布はない。いよいよ心当たりもなく盗難か！カード全部停止か！と思ったら、自宅の別のところに転がっているのを発見。



11/11

さて本日は、このようなケバいい列車で和歌山県御坊市で教員の集まりでの講演に日帰り。滅多にいくことがないのが和歌山県。新大阪発の特急くろしお。前には、京都発があった気もするのだが、たまにしか乗らないと何ごととも変化する。車中は例の新刊の校正。半分くらい済んだ。



講演終了後、なんの用もないが、JR 御坊駅から出ている超短い紀州鉄道の終点駅に降りてもらった。日本一短い私鉄らしい。帰路の JR 特急は遅い目を選んでおいたので四時間ほど御坊市に滞在。



縁のない和歌山の地方都市を散策、というほど何もないがラーメンを食べた。



11/12

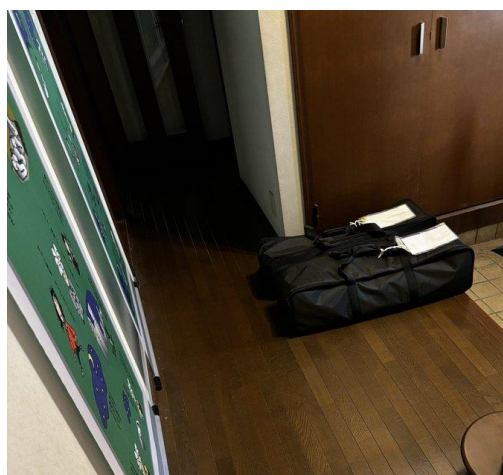
先日、MRI を受けた結果のディスクデータを持って、人間ドックを受けているクリニックに。胆嚢ポリープが前からあったのだが、それが大きくなっている懸念を指摘されて精密検査に。結果、まあ様子を見ておいて大事ななかろうということで一安心。



11/14

恒例のNくんとドライブ遠足。早朝、迎えに来てくれて奈良方面に。今回は行先も何も知らずに同行。まず入江泰吉写真美術館。奈

良公園の鹿と外国人の戯れを横目に、次に大和文華館での呉春展。そして松柏美術館で上村松園の凄い絵を見た。結果として、なかなか面白い芸術散歩だった。



11/16

去年も見たはずなのに、今朝、こんな大きさになっていて初めて気づいた。玄関を出てすぐのところ。毎日、どこ見て歩いてるんだらうと思う。そして空港ロビーの飲食ゾーンでPC作業。明日の用意はできているから、次の日曜日の家族心理学会 zoom 一日 WS の準備を



11/15

クロネコ集荷を待つ掛軸 12 作品梱包。今年最後の家族漫画展は 13 ヶ所目になる青森県むつ市。随分いろんなところで見てもらえる機会が増えた。その分、お世話になる方も増えて感謝、感謝だ。感想もあちこちから載けて励みになる。来年のスタートは 1/13 から立命館国際平和ミュージアム展からです。

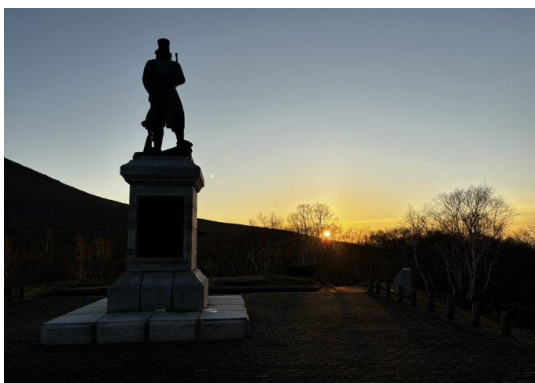
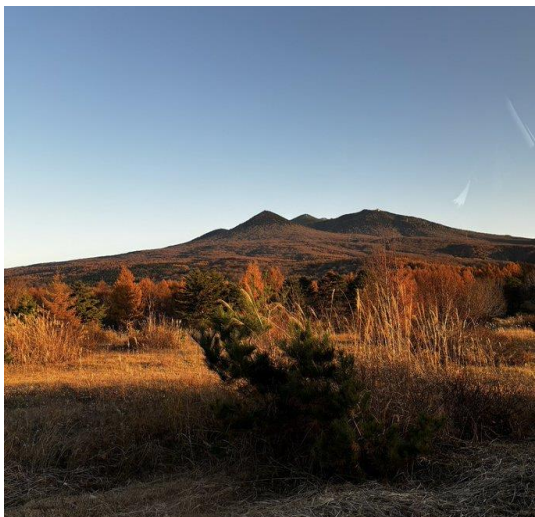


する。空港は雨。



前乗りの弘前。お迎えの二人に晩秋の八甲

田山麓のドライブに誘われた。緑深い青森の山は何度か来たことがある。しかし雪中行軍遭難記念碑付近は初めて。人影も少なく、熊が出たら嫌だねと語りながら、なんとも素晴らしい秋の夕景に感激。



11/17

14人で1日青森・弘前WS。楽しく過ごしてもらえたと思う。会場がいつものところが行事で詰まっているようで、旧相馬村の温泉施設の隣。町村合併で弘前市になったところらしい。林檎農園の隣に収穫したリンゴを収めるケースが山のように積まれていた。



11/18

正午に大阪・福島の間府宅で漫画集団ぼむのカレーご飯会。彼が6人分のカレーランチを用意してくれて、美味しくおかわりしながら喋る喋る。何度も訪れた彼の別宅なのに、ふとJRの大阪駅の次は塚本だったなあなどと車中で勘違い。環状線に乗り換えて福島駅だ。このところ行動全般の劣化が著しい。

実はまた忘れ物で少々うんざりしたのだ。昨夜の帰路、暑かったので、空港バスの網棚に上着を置いた。下車後、着ていないのに気づいた時には遅かった。諦めようかと思ったが、問い合わせ先のメモがあったので今朝電話してみたらずぐに見つけて、大阪の帰りに八条口まで取りにいった。皆さんのお世話になります。

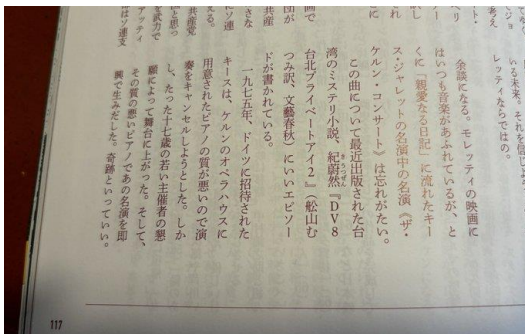
11/19

出張スケジュールの合間に入れるものではなからうが、今日は二回目の大腸ポリープの内視鏡手術。13時半頃、麻酔で眠り込んだら今、15時半過ぎに起こされるまで気づかない。痛みも違和感もなく、絶食に腹が減っているだけ。まあ無事終了らしい。しばし用心のおかゆ生活だなあ。



先日、数人での会食の席で、NY カーネギーホール前を通りかかった時、「残り1枚！」とコールするコンサートチケットを買って、劇場最前列右端の席でキース・ジャレットのコンサートを聞いた話をしていた。

「ケルン・コンサート」に思い入れが強く、南ドイツを旅したとき、ケルンにまで足を伸ばしたことがあった。今日、久々に書店でキネマ旬報を手にして読み始めたら、川本三郎さんの連載にこんな記事が。



59・お話あそび会動画解説2 《年中組》

原町幼稚園園長 鶴谷主一（静岡県沼津市）

《マガジン58号《解説1・年少組》に続き第2弾です》

1991年から「生活発表会」に疑問を感じて発表会の形を変え→「劇あそび会」→試行錯誤しつつ1995年から「お話あそび会」という名称を使い始めて今年度で29年。マガジン24（2016年3月号）～26号に取り組みをレポートしてから8年が経ちました。方針は全く変わっていませんが保育者のキャリアが延びてノウハウが蓄積されてきた感があり、1年でいちばんタイヘンな活動ながらも、園児の人数が減って職員数は増えてきたお陰でサポート態勢も充実し、以前のようにプレッシャーのかかる状況ではなくなった気がします。

成熟期を迎えたのかもしれませんが。マンネリは後退のはじまりですから気をつけていかねばと思っています。自分たちの未来のためにもこの活動を記録していく必要があると感じ、さらに従来の発表会に何かしらの疑問をお持ちの方、保育を変えていきたいという思いをお持ちの保育者の方にも参考にして頂けたら幸いです。そんなことを考えて動画で解説を試みています。

「お話あそび会」は、子どもたちが楽しいのはもちろん、指導する保育者は練習練習の呪縛から解放され（違う意味での苦労はありますが）、保護者への視点を変えることで子ども本来の表現力に目を向けてもらえるアピール力もある活動です。

「お話あそび会」の詳しい取り組みについては、以前のレポートを参照していただければ、概要はお分かりいただけると思います。

◆マガジン24号「発表会の意味とは？」

保育施設で年間行事として行われる「発表会」表現活動としての意味は？

発表という舞台に追い込まれる先生、追い込まれる子どもたちの構造について考える。

▶<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol24/13.pdf>

◆マガジン25号「お話あそび会実践レポート」

お話あそび会の園内提案（計画書）を紹介し、取り組みへの具体的な内容をレポート。

この内容を頭に入れつつ動画をご覧いただくと良いと思います。

▶<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol25/14.pdf>

◆マガジン26号「保護者への伝え方」

新しく行事を改革するときには保護者への説明と共感を引き出すことは必要不可欠になります。具体的なクラス便りなどを紹介して、その方法をレポート。

▶<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol26/12.pdf>

◆マガジン25号の再掲になりますが、今回紹介する動画「年中組」のやり方を紹介します。

まずは、保護者向け特集号に記載する文章を紹介します。

端的に書かれているのでイメージがつかみやすいと思います。

年中児は、年少児よりはストーリーの理解も役柄の理解もできています。でも、子どもたちだけでお話を進めるのはちょっと難しいんです。そこで保育者が一部の役を演じることで子どもたちを参加させていきます。セリフはあまり重視せず、音楽をふんだんに使って、場面や動きのきっかけを作り、ストーリーを展開していきます。次の場面をドキドキして待つ、そんなワクワク感を大切にしたいです。ストーリーをみんなが理解して、「ここではほんとうはやりたくなかったけどお話の筋だから仕方がない、やられてやろう」と、納得して自分の気持ちとは違う演技をできることも、成長の表れです。

◆保育者向けには提案に詳しく取り組み方が書かれています。

◆年中児のお話あそび

保育者の助けを得ながら、全員がストーリーを理解し、
自分の役割を楽しみながらお話あそびを楽しむ。

年少児同様に保育者が劇中の登場人物になり、進行をサポートしながら、子どもたちの表現を促します。クラスの全員がお話の筋や、登場人物の役割をきちんと把握していることが前提で、年少児より先生の出番は控えめになり、子どもたちだけでのセリフのやりとり、歌、ダンスなどが表現されると良いでしょう。キャストも大人数ではなく、役も数役づくり、役柄のイメージもクッキリとさせます。セリフや動きのタイミングも先生の進行だけではなく、効果音や音楽を聞いて動けることも年少児との違いです。

シナリオ作りの9割は先生が行いますが、「こんなときはどうしようか？」と劇中の登場人物にもし自分がなったらどうしようか？といった投げ掛けから返ってきた子どもたちの意見をアイディアに生かすとシナリオがイキイキしてきます。年少同様、練習中に子どもたちが思わずおふざけで表現したアイディア等も取り入れることも良いでしょう。

※年少、年中のお話あそび会には、ナレーターは基本必要なし。

では、実際にご覧いただく動画の資料です。
保護者に事前に配布する「特集号の表紙」



日程	開始	クラス	テーマ
1月25日(水)	10:15	年少めろん組	まいごのたまご
1月27日(金)	10:15	年少いちご組	ドーナツペンタくん
2月1日(水)	10:15	年中 ばら組	ももたろう
2月3日(金)	10:15	年中 ゆり組	かぐやひめ
2月8日(水)	10:40	年長 つき組	美女と野獣
2月10日(金)	10:15	年長 ほし組	そんごくう

※開始時間に遅れないようにおいで下さい。⚡

★お話あそび会の日には平常保育です。あそびっこも平常です。⚡

★参観はお子さんのクラス、そのほか他のクラスも参観可能です。⚡

★その日の解説をしますので、開始時間には必ず会場にお入り下さい。⚡

★本番は業者さんの撮影によりBD、DVDにてお楽しみ下さい。⚡

○つき組は原小学校参観日との調整で開始時間が遅くなっています。⚡

☆欠席が多いため、配役は変更することもありますのでご了承下さい。⚡

《新型コロナ感染対策》⚡

①発熱など感染が疑わしい方は参観ご遠慮下さい。・②マスク着用・③手指消毒⚡

④大きな声で会話しな。⑤玄関からわくわくホール以外には立ち寄らない⚡

⑥終了後は速やかに帰宅⚡

以上の項目をお守りください。⚡

📺はらまちようちえん📺

例年、年少組から1日1クラスずつ発表を行います。

今回ご紹介するのは
ばら組の動画です。

年明け3学期が始まってすぐに本番です。導入は2学期に行っていますが、短期間で遊び込み、本番に持って行きます。

※動画は本番前日のリハーサルの映像で、保護者公開用に編集加工したものに解説を加えています。

担任は経験7年目です。
私、鶴谷は撮影係です。(^^;)

◆保護者向け冊子（特集号）のページより（担任が粗筋などを書いてお伝えします）

ストーリーはお話を忠実に再現するのではなく、年中組での一年で経験したこと（たとえば運動会で踊った踊りや、音楽会で演奏した曲や演出などを取り入れて、それぞれのクラスでオリジナルストーリーをつくっています。

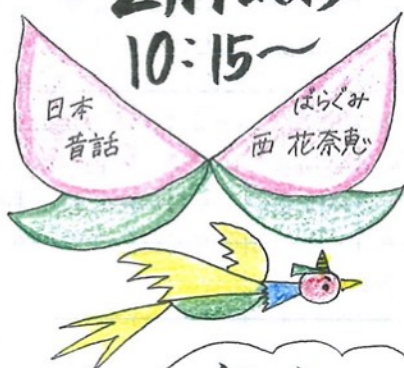


2月1日(水)

10:15~

日本
昔話

ばらぐみ
西花奈庵



舞台

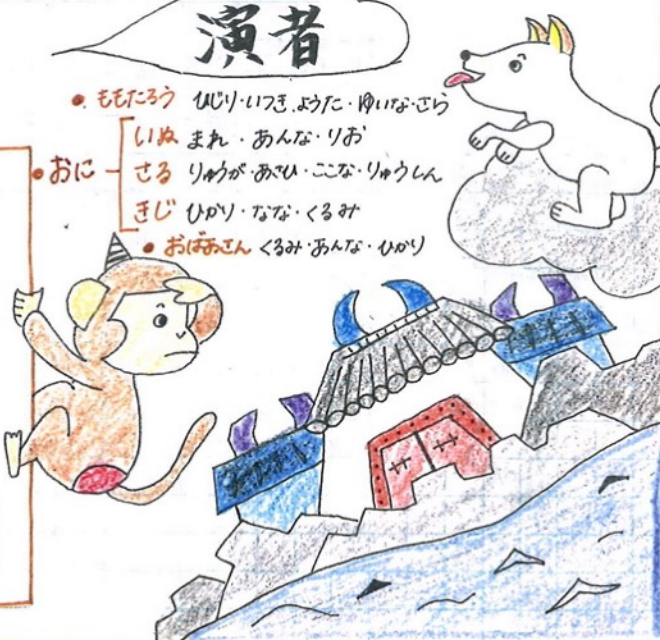
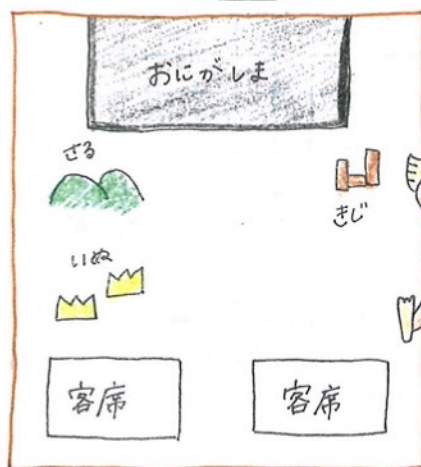
昔々、おじいさんとおばあさんが川で洗濯をしていると、川上から大きなももが流れてきました。ももからうまれたいももたろうは鬼ヶ島へ鬼退治に向かいました。その頃、鬼ヶ島では、ももたろうのうわさを聞きつけた鬼たちがももたろうを捕まけようとして金みます。ももたろうにバレないように、いぬ、ざる、きじに変身して鬼たちをそれぞれももたろうのじやまします。はたしてももたろうは無事に鬼ヶ島にたどりつき、悪い鬼たちを捕まけることができるのでしょうか...!!
ばらぐみオリジナルの新鮮なももたろうをお楽しみに!!!

演者

●ももたろう じじい・つぎ・ふた・ゆい・なごら

●おに
いぬ まれ・あんな・りお
ざる りやが・あひ・こな・りやうしん
きじ ひかり・なな・くるみ

●おばあさん くるみ・あんな・ひかり



◆資料（舞台図とシナリオ）

担任は、舞台の構成からシナリオ、演出、衣装に大道具小道具、音楽まで決めていきます。創造的な活動になりますので、いままで行ってきた園の蓄積の中から選んだり、アレンジを加えたりしながら作っていきます。大変な作業なので一人で行わず、先輩が相談に乗って一緒に考えていきます。この「ももたろう」も担任は「何が正解かわからない中で進めていた…」とあとでコメントしていましたが、そのようなマインドで進めていくのがこの活動の難しさかもしれません。「こうやりたい！」という担任の気持ちがあることが成功へのカギだと思います。

つるや先生 おねがひしや

2022年度 お話あそび会舞台図 (ばら 組) 提案日 (試案 最終版) NEW!!

テーマ ももたろう	実施日時 2/1	年 中児 15 名	担任 西
	伴奏 稲葉	補助 りえT	

■道具/出す場面ごとに記入

* にじいろマット 2

* 岩 2

* 草 2

* フタモ

□ 2 □ 1 △ 1

* 茶色の箱 2

* ピンクマット

* バナナ

* モじうちわ

① * 川

② * 動物帽子

* まきもの

③ * 看板

④ * サイト

* 幕

* マット

* 丸マット 2

* 戸

⑤ * ウチわ

■場面の大きな流れと道具の出し入れ、補助等について箇条書きにしてください。

① おばあさん、ももたろう
お川/回収もねがひしや

② おねがひ
お川、おねがひ、おねがひ
着替え補助もねがひしや
おねがひ回収して下し

③ ももたろう、動物帽子
おねがひ回収して下し
おいで下し
おねがひ回収して下し

④ うみ
おライト お幕 お戸
お丸マット おマット
下し下し

⑤ 戦い
おライトON、幕回収

[illegible]

53

No.	お話あそび会シナリオ【テーマ ももたらう】		組(担任)
役	台詞	動き・設定	音楽
まじ	♪ ～ワゲン ～ワゲン ～ワゲン (お家までー) ～よ (いにしえ)		♪ワゲン
ト	もーきびん		
もも	やーめー！		
まじ	ごめんごめん ウンシン	① 機材 ② 見線	
まじ	♪ ももにさーん おにいさー おにいさーはさー おにいさー いーいさー いーいさー おにいさー いーいさー いーいさー		♪ ぐんぐん
ま	おにいさーん しゅぽー！		
ま	♪ ゴーゴー ゴーゴー ももにさーん こんどおにいさー おにいさー	中場前部機材おおいさー ・ライト ・看板 ・マフ ・P ・スポット ・幕 ・幕	♪ ジョージア
ト	だーん！		
もも	はー！		
いーい	まー！		
ま	どー！	① 機材 (おおいさー) 中場前部機材おおいさー	♪ ジョージア
ト	おかい！		
もも	どー！		
おにい	♪ おにいさー！ おにいさー！	中場前部機材おおいさー	♪ ジョージア

No.	お話あそび会シナリオ【テーマ ももたらう】		組(担任)
役	台詞	動き・設定	音楽
ト	いぬは？	中場前部機材おおいさー	
おに	いぬい！		
ト	さるは？		
おに	いぬい！		
ト	さるは？		
おに	いぬい！		
もも	だましのなー！		
おに	ちんち		

■2022年度年中ばら組 お話あそび会前日リハーサル■

『ももたらう』解説動画

本番前日に、他クラスの子どもたちにお客さんになってもらってリハーサルを行います。
保護者に公開するために多少編集してありますのでご了承下さい。



YouTubeが再生されないときはこちらのURLをブラウザにコピーして下さい。

https://youtu.be/OrVdxa_Z4PY

■ 「ももたろう」 通し練習の解説動画 ■

通し練習とは、ある程度ごっこ遊びやクラスでの練習（キメの歌や動き）を覚えた頃に、本番を行うホールで一通り場面をつないで行う練習です。年中児だと練習といっても半分はごっこ遊びの延長という感じでやりますので、担任も役になりながら子どもたちに言ってほしいセリフや動きを覚えていってもらいます。



リハ＆本番の動画を見てから見ると、どういうふうに仕上げてきたのかなんとなくわかります。YouTubeが再生されないときはこちらのURLをブラウザにコピーして下さい。

https://youtu.be/Vq8tk3U_Ybl

■ 「ももたろう」 お話あそび会当日（本番）の動画 ■

保護者を招いての本番を定点で撮影しています。子どもたちの表情や動きは、リハよりちょっと緊張しています。開始前の園長前説、副主任の前説（これまでの取り組み）、担任挨拶（取り組みと思い）なども加わっています、裏方サポートのスタッフの動きなどもわかりますので、良かったら参考までに。



YouTubeが再生されないときはこちらのURLをブラウザにコピーして下さい。

<https://youtu.be/XF8VVx92yig>

詳しく様子などを聞きたい方は遠慮なくご連絡ください。

2024年度の本番実施は2025年1/21（年少組）、1/29（年中組）、2/5（年長組）午前10時の予定です。

リハは前日になりますが見学可能です。

「幼稚園の現場から」ラインナップ

- | | |
|---------------------------------|--|
| 1号 エピソード (2010.06) | 31号 幼稚園の音楽教育 (その2・こどものうた) 2017.12 |
| 2号 園児募集の時期 (2010.10) | 32号 幼稚園の音楽教育 (その3・コード奏法) 2018.03 |
| 3号 幼保一体化 (2010.12) | 33号 (休載) |
| 4号 障害児の入園について (2011.03) | 34号 働き方改革・一つの指針 (2018.09) |
| 5号 幼稚園の求活 (2011.06) | 35号 働き方改革って難しい (2018.12) |
| 6号 幼稚園の夏休み (2011.09) | 36号 満3歳児保育について (2019.03) |
| 7号 怪我の対応 (2011.12) | 37号 満3歳児保育・その2 (2019.06) |
| 8号 どうする保護者会? (2012.03) | 38号 プールができなくなる!? (2019.09) |
| 9号 おやこんぼ (2012.06) | 39号 跳び箱 (2019.12) |
| 10号 これは、いじめ? (2012.09) | 40号 幼稚園にある便利な道具〈紙を切る〉
(2020.03) |
| 11号 イブニング保育 (2012.12) | 41号 コロナ休園 (2020.06) |
| 12号 ことばのカリキュラム (2013.03) | 42号 コロナ休園から再開へ (2020.09) |
| 13号 日除けの作り方 (2013.06) | 43号 ティーチャーチェンジ (2020.12) |
| 14号 避難訓練 (2013.09) | 44号 除菌あれこれやってみた (2021.03) |
| 15号 子ども子育て支援新制度を考える | 45号 マスクと表情 (2021.06) |
| 16号 教育実習について (2014.03) | 46号 感染予防と情報発信 (2021.09) |
| 17号 自由参観 (2014.06) | 47号 親子ソーラン節 (2021.12) |
| 18号 保護者アナログゲーム大会 (2014.09) | 48号 親子コンサート (2022.03) |
| 19号 こんな誕生会はいかが? (2014.12) | 49号 うんちでたー! (2022.06) |
| 20号 I Tと幼児教育 (2015.03) | 50号 子どもが育つ園庭・その1 木登りとブランコ
(2022.09) |
| 21号 楽しく運動能力アップ (2015.06) | 51号 子どもが育つ園庭・その2 砂場 (2022.12) |
| 22号 (休載) | 52号 子どもが育つ園庭・その3 スライダーと
Tonka (2023.03) |
| 23号 大量に焼き芋を焼く (2015.12) | 53号 リスクと安全・園庭編 (2023.06) |
| 24号 お話あそび会その1 (発表会の意味) 2016.03 | 54号 夏の音楽会・動画 (2023.09) |
| 25号 お話あそび会その2 (取り組み実践) 2016.06 | 55号 クリスマス劇・動画 (2023.12) |
| 26号 お話あそび会その3 (保護者へ伝える) 2016.09 | 56号 こいのぼり製作 (2024.03) |
| 27号 おもちゃのかえっこ (2016.12) | 57号 この頃、気になること (2024.06) |
| 28号 月刊園便り「はらっば」 (2017.03) | 58号 お話あそび会動画解説《年少編》 (2024.09) |
| 29号 石ころギャラリー (2017.06) | 59号 お話あそび会動画解説《年中編》 (2024.12) |
| 30号 幼稚園の音楽教育 (その1・発表会) 2017.09 | |

▶気になる記事・ご感想質問等ありましたら気軽に連絡ください。✉ office@haramachi-ki.ed.jp



こもれびのながのおはなし

はらまち
HARAMACHI Kindergarten
est. 1957

福祉系対人援助職養成の現場から

西川 友理

「それって余計なことやってん」

随分前の話です。ちょっと大変な子ども時代を過ごし、まだその名残を引きずった生活をしている若者と話をした時の事。子どもの時には気づかなかったけれど、「あの日あの時、自分は一時保護になる一歩手前まで行ってたんだ。大人たちはそういうふうに動いてたんだ」という出来事があった、と話してくれました。

「みんな何とかしようとして来てくれた。でも、そんなことして欲しくなかった。それって余計なことやってん。」そう言った自分の言葉の強さに、自分で気づいたように、慌てて否定しました。

「いや、もちろん、何とかしてやろうと思ってくれていたのはわかるよ、善意でやってくれていたのもよくわかってる。自分があの時、周りにいた大人だったとしたら、きっと何とかしようとしたと思う。」

そして、ひとしきり否定した後に、

「大人の気持ちもわかるけど…別に、自分は保護してほしいなんて言ってなかったし。」

と言いました。そして、

「ただオヤジが、暴力をせんでくれたら

それだけでよかったです。ただやっただのに。なんで家庭内暴力の問題で、大人の暴力の問題なのに、子どもが家から離されて生活せなアカンねん。意味わからへん。」と言いました。

「支援職」になる教育とのギャップ

“こども家庭福祉論”や“社会的養護”という、いつもの講義で使っている保育者養成や社会福祉士養成の教科書、支援の必要な子どもへのケアや保護についてのテキストには、そんなことは書かれていません。被虐待児の恐れがあれば役所に通報、必要とあれば一時保護。それがセオリーです。でも、心身がギリギリの状態にある時に、急にことが動くとなったら、先の見えなさに恐れおののくのは当然です。ちょっと想像したらわかる事なのに、私もそこまで、想像力がありませんでした。

「そうか……そういう時って、あれやこれやとしない方が良かったんか……」
という、若者は

「そうかも。いやまあ、わからんけど。」と返します。

大変な目に会っている子どもの支援に入ろう、助けよう、何とかしよう、特に子どもの心身が危険であれば、なおのこと、すぐに介入して、迅速に対応して、何ならその場からびゅっと連れさっしてしまおう。そのように行動に出られれば出

られるほど、その若者は怖くなったとのことでした。家族と一緒にいられなくなる。兄弟と離れなければならない。わけのわからない事態がはじまってしまう予感がする。そんなところに、足を踏み入れるくらいなら、今何とかやり過ごせている、このサバイバルを続けて、きちんと力をつけて自分なりに納得してから、この状況から出たい。だからそれまでは、放っておいてほしかった。

みんな助けたがるからね。

「…逆にさあ、どんなことがあったら一番良かった？」

と私は聞きました。するとその若者は言いました。

「うーん、こんなふうに、聞いてくれるだけでよかった。大変やなあ、つつって、こんな話でも聞いて、一緒に困ったなあ、って言ってくれる場所があったら、それでよかった」

「なんせ、あの当時は……思い切っただれかに言ったら、必ず動こうとされたからねえ。」

「勝手に動かれたらもうホンマややこしいねん。そんな変化求めてないねん。だからだれにも話が出来なかった。」

心や体が危機に面している子どもに対し、行政や警察が動いて、その子どもを保護する。専門職の判断を本人に伝え、出来るだけ寄り添いつつも、速やかに行動する。このような対応が必要な場面は

絶対にあります。そういう仕事は必ず必要です。でも、それには大きなエネルギーや負荷や、ストレスや不安が生じます。こと、措置とか保護といわれるようなことに関しては、どうしても強い力は働いてしまいがちです。周りの積極的な支援体制が、その子どもに助けを求めることを躊躇させた。こういう場面は、あまり珍しいものだとは思えません。支援、福祉、医療、教育といった「誰かを助ける」場で、実は日々起こっていることなのではないでしょうか。

「いやあ、なんせ皆、優しいからねえー」
そう言って、苦笑する若者です。

自分を受け止めてくれる所。ここにいていいと思える所。みんなとともに、1人で過ごせる所。ここにいていいと思わせてくれる人たちと繋がりながら、自分でいられる所。伴走型支援という言葉がありますが、走らなくてもいい、ともにいてほしい、その場やその人たちを信頼することができれば、歩き出す力や安心感が湧いてくる。と、その若者は言いました。

だれかにとってそういう場所になるかもしれない取り組みを、私はいくつか知っています。地域の中で必要を感じて、そういう場を作る人と、近年出会うことが多くなりました。もしかすると、そういう場所が世の中にとっても必要とされているのかもしれない。

みつかるみんなの輪の部屋 輪屋

私がお話のイベントや、支援職の集まる場を開催する時に使用している場所は「みつかるみんなの輪の部屋 輪屋」(以下、輪屋と記します)というコミュニティスペースです。ここを主催しているのは、清水千鶴さん。専業主婦の清水さんが、自分の人生経験をもとに「ああ、地域に気軽にみんながお喋りできる場所があればなあ」と思い悩み、そして「ほな作ろうやないか」とひょっこり作ってしまった居場所です。地域の空き家を借り、何かイベントがしたいという人がいれば場所を貸し、特に用事がなくても集えるおしゃべり会や、クリスマス会、ちょっと遠出する勉強会なども自ら企画し……と、地域の人々の居場所として、みんなに知られている場所です。

みんなが持ち寄ったお菓子があ、お茶があり、清水さんが自宅から何かつまめるものをもって来てくださって、ゆるやかにおしゃべりが始まります。あらゆる活動やお店のチラシやパンフレットがあり、ここに集まる人たちが持ち寄った本がたくさん置いてあり、常設のフリーマーケットがあり、冷蔵庫の中身は名前が書いて無ければ 100 円で購入できます。冬には毛布、夏には蚊取り線香、さりげなく居心地よさを整えてくださる清水さんです。会の参加者も、それぞれ居心地がいいように、テキトウに自分勝手にモノを動かすのですが、特にこれはし

ないでほしい、といった禁止事項はありません。皆にとって居心地のいい場所だから、皆も無茶苦茶な使い方はしないのです。あるひとが「輪屋って、実家じゃないけど、すごい実家感ある。」とおっしゃっていました。穏やかでゆるく、という自分でいてもいい、実家にいる時に自分のように過ごせる場所です。

輪屋の会員には、今月はどんな活動が行われているのか、毎月月末頃に清水さんから「輪屋のたより」が郵送されてきます。A4 サイズにびっしり、清水さんの手書きの文字と切り貼りしたイラストが描かれています(絵心がないから、とイラストは別の所からもってこられますが、そのチョイスが清水さんらしくあたたかい!)。今年 2024 年 12 月の分の「輪屋のたより」で 295 号になります。毎月発行されているので、なんと 24 年以上続けていられているという事になります。

小さな長屋を借りられているので、家主さんのご都合で引っ越しせざるを得ないこともしばしば、実は現在の場所は 5 代目となります。半径 1~2 キロくらいの範囲で、あっちへこっちへと引っ越しが続いた輪屋です。直近の引っ越しは私たちの仲間もすこしお手伝いをさせていただきました。

清水さんと輪屋の近くの商店街を歩いていると、10 メートルごとに「あ、清水さんや」「清水さんこんにちはー」「こないだ、ありがとー」と声がかかります。ほんの 100 メートルを歩くのに時間のかかることかかること。皆清水さんを知っ

ています。お弁当屋さんでも、八百屋さんでも、パン屋さんでも、お店で「清水さんが…」というと、「ああ、はいはい、清水さんね、お世話になってるねん。」と仰います。

輪屋のイベントには、いろんな人が来ます。何を仕事としている人なのかわからないなどという人はザラで、どこに住んでいるのかもわからない人、本名もわからない人がいます。もしかしたら闘病中かもしれない、という方もいます。“センセイ”と呼ばれるような職業の方も来ます。もうしなくていいという苦勞を沢山してきた人もいますし、ずっと気楽に機嫌よく過ごしてきた人もいます。色々あったからこそ、いまはずっと気楽に機嫌よくすごしている方もいます。お金持ちも生活苦のあるひと、障がいのある人もない人も、おしゃべりな人も寡黙な人も、とにかくいろんな人がやってきます。清水さんはただ「お茶飲む？」とお茶を出して、相手と自分が居心地よく過ごせるように、なんとなく場所を整えて、「はて？」と思った時にちょこっと聞いてみる、「あれ？」と思った時に意見を言う。とにかく、相手に対して、自分の出来るオープンな姿勢を、出来る範囲で地域に開く。ただそれだけを、ほぼ4半世紀にわたり、ずっとずっとやってこられました。いつの間にか、ここに集う人たちがたくさん増えました。

こんなに地域に知られている人だから、と地元の役所で清水さんについて話をすると、これがなんと全然知られていない

のです。「清水さん？輪屋？きいたことないですね」と首をひねる役所の皆様。社会資源として名前の付いているものではないからでしょうか。あるいは、社会福祉分野の名がついているところではないからでしょうか。

インターネットにも、この場所の情報は載っていません。広報は、「輪屋のたより」のみ。ただただ、皆の居場所として、この地域の人たちの生活の傍らにある場所として、確実に皆に必要とされている場所だと感じています。

ほんむすび

ある時、たまたま見つけてしまった「ほんむすび」という場所があります。この場所を運営・主催しているのは、“すみちゃん”こと起田陽子さん。理学療法士であり、建築士でもある起田さんは、「みんなの図書室、ときどき保健室」というキャッチフレーズで、みんなの図書館としてのお店を始められました。みんなの図書館とは、1人1棚のオーナーとして本棚を担当し、自分が置きたい本を置く、皆で作る私設図書館です。このオーナーたちが持ち回りで、あけられる時間だけ、店員さんとして場所をオープンします。この場所で本を読むだけなら無料で利用できます。本を借りたいと思ったら、初回のみ500円（中学生以下は200円）でカードをつくり、ひとり2冊2週間まで借りることが出来ます。

とてもいごこちのいい公園に面したお店です。本を読むのはもちろん、ぼーっとしたり、お茶しにきたり（ちょっとしたお茶やお菓子を出しているオーナーもいます）、何という事もなく過ごせる場所です。たまに地域の人々とともにイベントを開催することもあります。

オーナーにはいろんな人がいますが、「ほんむすび」のスタッフの幾人かには、医療福祉従事者がいます。時々、予約が入り、貸し切り状態で相談室としての機能を果たすことがあります。病院に行くほどでもないけど、何とはなしに具合が悪い、少しだけ話を聴いてほしい、という人などが予約をして、あるいはふらっと立ち寄って、相談に来ることもあります。健康相談だけでなく、社会的処方もしています。社会的処方とは、ほんむすびのHPによると、「孤独に対して地域での繋がりを処方すること」とのこと。例としては「退職後、生きがいを失った人に趣味の園芸を生かした地域ボランティアを紹介」「精神疾患の人に自助グループや公的制度を紹介」等が書かれています。

私はこの場所を知って、まだ数か月なのですが、なんとも居心地よく、気持ちよく、すてきな場所です。それは、医療福祉従事者が多くかかわっているから心身の健康に配慮した場所になっている、というところもあるかもしれませんが、それよりなにより、いろんな人が関わっている、という事自体が大きいポイントではないかと思っています。各オーナー

がケア的な場所を提供しているというより、起田さんをはじめとしたオーナーも店員さんも、お客さんも、またこの地域の近所の人も、皆がゆるっと繋がれるんだという思いを持ち寄ることで、結果的にケア的な場所になっているのです。店員がお客さんをケアする場所というよりは、店員とお客さんが相互に、またお客さん同士が相互に、またこの店を介して地域の人々が相互に、緩やかなかわりの中で、お互いに安心して居ることが出来る場所、という不思議な場所になっていると感じます。

これらは何の場所なのか。

この2つの場所は、ケアの場所をメインにうたっているわけではありません。ただ居心地がいい、ただこの場に居たいと思える場所です。近年、このような場所を始める地域の人が増えてきたように感じています。

一応、居場所事業とよばれるものが子どもの分野にはあります。また、高齢者の分野ではもう30年ほどにわたり、ふれあい・いきいきサロンという介護予防に関する事業として、高齢者の集いの場、通いの場が実施されています。しかし、そのように対象を限定したものではなく、地域の中の誰もかれもがなんとなく集まれるような場所や取り組みが増えてきているように感じています。

福祉的な視点から見れば、これは「地

域共生社会」に資する「重層的支援体制整備事業」の中で展開される活動に近いのかもしれませんが。

地域共生社会と 重層的支援体制整備事業

平成 29 年に厚生労働省が出した「地域共生社会の実現に向けて」という文書報には、地域共生社会について「制度・分野ごとの「縦割り」や「支え手」「受け手」という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が「我が事」として参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えて「丸ごと」と繋がることで、住民一人一人の暮らしと生きがい、地域を共に作っていく社会」と説明されています。今の厚生労働省は、この言葉をキーワードとして、様々な展開が考えられています。発表された当初、平成の終わり頃に案として出されていた、地域共生社会を実現するための手段を見てみると、「地域課題の解決力の強化」「地域丸ごとのつながりの強化」「地域を基盤とする包括的支援の強化」「専門人財の機能強化・最大活用」などが改革の骨格となっています¹⁾。なんだか随分勇ましい感じがします。「解決力」「つながりの強化」「支援の強化」「最大活用」…「解決」や「強さ」を強く目指している印象がありました。

しかし近年、その地域共生社会に関する取り組みの方向性が少し変わってきま

した。

2021 年に、地域共生社会の文脈から「重層型支援体制整備事業」がはじまった年に開設された厚生労働省の地域共生社会についてのポータルサイトには「これまでの福祉政策が整備してきた、子ども・障がい者・高齢者・生活困窮者といった対象者ごとの支援体制だけでは、人びとが持つ様々なニーズへの対応が困難になっています」「その一方で、地域の様々な動きに目を向けると、人と人とのつながりや参加の機会を生み育む多様な活動を通して、これまでの共同体とは異なる新たな縁が生まれています」「その中には、特定の課題の解決を念頭に始まる活動だけでなく、参加する人たちの興味や関心から活動が始まりそれが広がったり横につながったりしながら関係性が豊かなコミュニティが生まれている活動もあります²⁾」と書かれています。

つまり、先述した輪屋やほんむすびのような取り組みが生まれてきているような社会の変化を踏まえて、厚生労働省が設計したものが「重層的支援体制整備事業」なのです。

この事業は「①すべての人びとのための仕組みとすること、②これまで培ってきた専門性や政策資源を活かす設計とすること、③実践において創意工夫が生まれやすい環境を整えること」という 3 つのポイントがあります。「従来の分野別の支援体制ではカバーしきれない複雑化・複合化した課題に対応できる体制をつくること」を目的とし、必須項目として、

誰一人取り残さないことを前提とした「属性を問わない相談支援」、相談者と社会とのつながりをつくるための「参加支援」、場や居場所を整備する「地域づくりに向けた支援」の三つを挙げています。

「ありのままでいられる」ための支援

ある学生が書いた、子どもと保護者への支援についての小論文に、

「(支援対象が)社会的に「あるべき姿」ではなく、「ありのまま」でいられるようになることが、ケアの到達地点だと考える。」という一文がありました。

誰かが考える、社会的に望ましい「あるべき姿」、そこに近づこうとすることは、いったい誰の、何のための要望なのか。前を、上を、高みを、社会性を目指す前に、まずは「ありのまま」でいられるようになること、自分であることに満足できている状態にいること、それがケアの到達地点であるとする。そのようなことが書かれてありました。

「これ、この言葉、すごいね……どうやって紡ぎだしたの。誰かが言ってたの？何かに書いてあった？」

と聞く私。するとその学生は、

「私が考えた。なんかそう思うから。ありのままの自分でいられる状態になれば、あとはその人が歩き出す力は湧いてくるから。」

冒頭に挙げた若者の「その場やその人たちを信頼することができれば、歩き出

す力や安心感が湧いてくる」という言葉が、この学生の言葉にリンクします。

このエピソードは10年ほど前の話です。しかし、上記に例として挙げた2つの取り組み、さらには今まさに厚生労働省が考えている「重層的支援体制整備事業」などは、あの当時の学生が提案した、「ありのまま」でいられるようになるための支援であるように思うのです。

大きく、強く、賢く、深くなることが目的でなく、もっと多様で、それぞれが自分のありのままでいられて、ありのままということは、時には小さく、弱くあるときでも、だれもが皆とともに、地域の中で、生きていくことが出来る仕組み、仕掛けづくりのような取り組みです。

とて、輪屋もほんむすびも、「～事業」と名が付くような運営をしようとしているわけではありません。ただ地域の中で必要だ、大切だと考えたことについて、自らの方法でもって、地域のつながりを作っています。行政の事業の一環として実施する便利さ、安定感、余裕、制限、不自由さ、なども考え、どのような形で運営するかを考えた上で、今地域では様々な団体が、自分たちなりの姿で活動しています。

先述した輪屋の清水さんがおっしゃいました。

「輪屋の活動が続けてられるのは、家族や大家さん、ご近所さんや利用者さんの

協力の賜物。主催者として、清水千鶴がやりたいようにできる、それは、平和と生活の基盤があってこそ。ありがたいことです。いけるとこまで続けます。」

場を作る人、場に来る人、この場にかかわるあらゆる人の関わり合いと支え合いの中で、その場と地域が、育っていきます。

ありのままでいられると、
人は開かれ、成熟していく
(のかもしれない)

竹端寛先生の著書『ケアしケアされ、生きていく』に「「共に考え合いながら〇〇する」相互依存的関係性を通じて、関わる全ての人々が、人間的に開かれ、成熟していく」³⁾という一節があります。相互依存的関係性の中で、「ありのまま」でいられるようになると、もしかすると人間的に開かれ、成熟していくのかもしれませんが。

ことこのような地域の取り組みに、対人援助職を目指す学生たちが何らかの形で関わる事が出来ないかと現在画策中です。なにせテキストの中の対人援助職養成といえば、専門性を高め、価値倫理技術を磨き、支援職としてのプロであるにはどうすればいいか、という話に終始しがちです。専門職であるためには、それも確かに大切です。というか、専門職としての知識や技術を使った支援が出来るようになる事は絶対に必要なことです。

これに加えて、地域の中の一員として、地域の中で「ありのままでいられる関係性」を築く実践にも触れていくことが大切だと考えています。

参考文献・引用文献；

1) 厚生労働省「『地域共生社会』の実現に向けて（当面の改革工程）」（平成29年2月7日）

2) 重層的支援体制整備事業について | 地域共生社会のポータルサイト | 厚生労働省

<https://www.mhlw.go.jp/kyouseisya-kaiportal/jigyoku/>（2024年11月23日確認）

3) 竹端寛『ケアし、ケアされ生きていく』 ちくまプリマー新書 P164

ああ、相談業務

～ 由佳さんの話 ～

かうんせりんぐるうむ かかし

19

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

子どもの相談を受けていると、子どもの問題より保護者の問題が大きいということも多々ある。今回はそのような話をさせていただく。

家族

由佳さんの家は母子家庭で、長男17歳、長女15歳、次男13歳、次女11歳の5人家族。父親は由佳さんに対するDVで離婚していた。また、長男は、由佳さんとの関係が悪く、実母のところに預かってもらっている。実母は再婚していて、継父と由佳さんとの関係は悪くはない。由佳さんには優秀な弟が一人いて地方に住んでいる。

由佳さんは、働きながら子育てをしているが、子どもたちにはそれぞれ発達の問題が見られた。

相談にいらしたのは次男のことだったが、長男にもADHD、長女及び次女にもADHDやASDの傾向が見られた。ただ、次男が一番重症ではあった。

相談経過

由佳さんと最初に出会ったのは、由佳さんの次男さんの発達障害の相談であった。次男さんについては、知能は高く、学校の勉強で困ることは全くなく、サッカーが好きでクラブチームで頑張っていた。ADHDとアスペルガー症候群の診断があり、忘れ物が多く、母親があれこれ細かく手を出す状態で、本人の自立を考えるとやりすぎ感があったので、対応についての助言をしながら、息

子さんと母親との関係などを先の見通しを主体に伝えたりしていた。そんな中、医療から、カウンセリングの対象を由佳さんでお願いしたいと連絡がきた。と言うのも、由佳さんの解離状態が激しく、薬だけではどうにも上手くいかないからとのことであった。

由佳さんは小柄で、痩せ気味の方で、運送会社の事務職をされていた。彼氏がいて、時々彼氏との喧嘩があってその度に解離症状が激しく出現したが、また仲直りしてと、結局離れずに過ごしていたが、最終的には彼氏彼女の関係は清算し、友達として付き合うようになった。カウンセリングにも彼が連れてきてくれたし、彼が、彼女の様子を教えてくれたりした。

由佳さん自身も自閉症スペクトラム障害とADHDの診断を受けていて、投薬も受けていた。解離性同一性障害との診断もついて、ストレスが高くなると由佳さん自ら入院を希望し、病院に入院したりということもあった。

由佳さんとのカウンセリングを始めて、家族について聞いたときに、「母親の自分への対応がとても嫌だった」と語った。子どもの頃、由佳さんは余りひらひらした服を着るのは嫌だし、ピンク色などの服も嫌だったのに、母親の好みでひらひらした服やピンク色の服を着せられた。また、父親からは殴る蹴るの虐待を受けていたという。性的虐待を受けていたかについては、否定も肯定もせず、わからないとの答えだった。おそらく何かしらあったのではと推測された。そういうバックグラウンドを持っていたからこそ、解離が起きたのだらうと推察した。

由佳さんは元夫のDVをきっかけに解離症状が悪化し、人格が4人出現するようになった。

一人は、幼い小学校低学年の子「あや」、一人は高校生の子「かおり」、一人は男の人格「たつや」、もう一人は少し年上の女性「まちこ」である。

「あや」は色々なことをお話ししてくれる子で、由佳さんが孤独感を感じる時に出現したように思う。よく「一人で寂しい」とか「お父さん怖い

よ、痛いよ」と訴えていた。「かおり」は、由佳さんの精神状態が落ち気味な時に出てきて、元気をアピールしてきた。スポーツが得意な子で、勉強は数学が得意だと話していた。学校の成績は良いほうだが、友達関係は悪いそうだ。「たつや」は乱暴者で、由佳さんが彼氏や実母と喧嘩した時や、職場で理不尽な思いをしたとき、つまり怒りを感じた時などに出てきて、乱暴な運転をしたり、首を絞めて死のうとしたりする。最後の「まちこ」はおっとりした、常識的なお大人の女性で、多くは「たつや」が何かした後に出てきて、事態の収拾を図る役割を担っているようだった。由佳さん本人には自覚はなく、人格交代するときは一瞬寝落ちする感じであった。従ってそれぞれがどのようなことをしていたかを由佳さんは把握していなかった。これらの人格の把握は、それぞれの人格が、付き添ってくれている彼にメールを送っていて、その様子を彼の方から筆者に伝えてくれていたからできたのである。

由佳さんとの話し合いの中で人格統合を図っていった。「あや」「かおり」「まちこ」は比較的スムーズに統合することができたのだが、とにかく「たつや」が収まらず、職場で嫌なことがあるとひどい言動があり、職場にいらなくなってやめ、次の職場に行っても、対人面でもめると「たつや」が出て滅茶苦茶なことをしてしまうのでまたいらなくなるということを何回か繰り返していた。仕事を続けるのが難しい状態の時に、ある福祉施設から声がかかり、そこの事務職を担うことになった。もともと数字には強く、パソコンを使うことにも慣れていたので、そこではとても重宝されて、由佳さん自身も気持ちよく仕事をすることができ、しばらくは「たつや」も収まっていた。

ところがその職場に、意地悪な女性職員が入ったことから、関係性が悪化、由佳さんが再び自殺企図を繰り返すようになった。「たつや」は、「由佳を殺してやる」「由佳はダメなやつだ。こんな奴はいなくなった方が良い」と訴えた。筆者が「由佳さんが死んだらあなたも死ぬよ」と「たつや」

に伝えるが「それでもかまわない。とにかく殺す」と言い張った。その頃から、由佳は「由佳でなくになりたい。名前を変えれば生きていける」と訴えるようになった。自分自身を否定し、生まれ変わりたいという思いが強くなってきたのである。

主治医ともいろいろ相談しながら進めてきたが、名前を変えることで本当に自殺企図がなくなるのかと言う話し合いをした結果、名前を変える申請を家庭裁判所に出してみる事となった。医師と筆者の双方から意見書を提出することになり、それぞれが書いて由佳さんが裁判所に持っていった。「由佳さんはどんな名前にしたいの？」と聞くと「咲奈^き」にしたいという。その名前にしたい理由とは聞くと「かきくけこが入らない名前の方が優しい感じがするから」だそうだ。

医師とは、そう簡単に認めてくれないかもしれないと話していて、由佳さんにもそう伝えていたが、結果的に名前の変更は認められ、由佳さんは咲奈さんに改名した。

その後、仕事は辞め、生活保護を受けるようにし、ストレスがかからないようにしたこともあって、自殺企図はなくなった。彼の方にも「たつや」から怒りのメールが届くことも無くなった。面談で人格交代が起こることも無くなった。

子どもたちは成長し、長男は高校を卒業し大学に進学、長女は地元の高校に進学し、卒業後は看護学校へ進んだ。次男は中学でも勉強に困らないため地元高校へ進学。特別に配慮を受けながらも常にトップの成績を保っている。次女も中学校に進学し、普通学級で頑張っている。

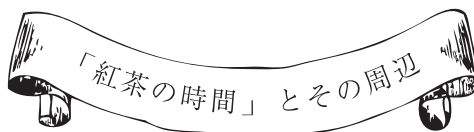
まとめ

改名を希望される方は時々いる。親との関係が悪く、早く自分の名字を変えたいから結婚したいという女性もいた。今回は名字ではなく下の名前なので、変えることに対して、家庭裁判所はさほど問題なく許可してくれた。勿論医師の意見書もあったからだろう。名前を変えるだけで、状態が

良くなるというのであれば、それはやってみる価値がある。根本解決になるかは定かではない。おそらく、咲奈さんの中には、（由佳さん）が残っているのではないかと思う。今のところ安定しているので出てきてはいないが、何かストレスがかかればきっと出てくるだろう。ただ、「たつや」だけが大人しくしてくれていればということになる。「たつや」はメールの中で、由佳さんを守ってほしい、守ってくれないのかという訴えを彼に何度も繰り返していた。由佳さんは、彼との関係を元のような関係に戻したかったのかもしれないが、今の関係の方が安定していて良いと感じた。彼も優しい人なので。

こんな風に、人格解離を起こしている保護者のもとで育つ子どもは大変である。急に変わってしまう母親をどう受け止めるのか。ある意味、この子たちに発達の問題があって、気持ちの切り替えが上手な子や、自分の趣味興味に没頭できる子など、特性が功を奏して、子どもたちの状態が悪くなることは無かったのはよかった。何が幸いするかはわからないが、どんな中でもプラスのことと言うのはある。それを考えながら家族支援をしていると、新たな気づきや学びがあるものだ。

きもちは、 言葉を さがしている



第 54 話

水野 スウ

石川でのSSTワークショップ

東京調布にあるレストラン、クッキングハウスの代表で精神保健福祉士の松浦幸子さんを石川にお迎えして、年に一度、SSTワークショップを開催しています。

相手にも自分にもきもちのいいコミュニケーションの取り方を学ぶSST（ソーシャル・スキルズ・トレーニング）。クッキングハウスでは、精神障がいのメンバーさんたちが日常茶飯にSSTで対人関係の練習をしながら、それぞれのペースで自分らしく働いています。

クッキングハウスで実践しているそういったコミュニケーションを私たちも学んでいこう、ということからはじまった松浦さんとのワークショップ、今年で17回目です。

1日目の会場は「紅茶の時間」をしているわが家で。2日目は、このマガジンに「馬渡の目」というタイトルで連載を書いている友人、ソーシャルワーカーの馬渡徳子さんが子ども食堂などで関わって

るスペースで。参加者の中には、援助職の人もいれば、金沢大学の学生さんも何人か、SSTはこの日が初めて、という紅茶つながりの人たちもいます。東京や埼玉、愛知からやってきた人も。

SSTはいつもこの日集まった人たちと一つの輪をつくることから始まります。この円陣の中はセルフヘルプグループの場合、ここはあなたの居場所ですよ、と語る松浦さんのおだやかな声と自然な笑顔に、初参加でドキドキしていた人たちの緊張が徐々にほぐれていくのが表情を見ていてわかります。

マインドフルネス・リスニング

1日目の午前中は、マインドフルネス・リスニングという聴き方のワークをしました。二人ひと組になって、いま感じているきもちを相手に話してみる。片方が話している時は口をいっさいはさまず、集中して、ただ共感的な反応だけで聴く、というワークです。

時間にしたらほんの5、6分。それでも、何一つ

介入されずにただただ聴いてもらっていると、あ、まだ話し続けていいんだ、一言ひとことがちゃんと受けとられている、という安心感でいっぱいになっていきます。この日の私はなんだかとても長くとっぷり話せた気がしたし、お相手からも、たった5分でこんなに！と感じるほどの深い話を聞かせてもらえました。

それぞれのお弁当（松浦さんのはわたし謹製）を食べながら、午後は実践的なSSTのワークの時間。「何かみんなに聞いてもらいたいことがある人はいますか？ または、こんなこと練習課題になるかどうかわからないけど話してみようかな、と思う方はいますか？」と松浦さんが問いかけます。

すると、これ午前中に聞いてもらったことなんですけど……と前置きつきで話し始める人が何人か。もしかしたら、まずはじめに一人の他者に話してみたことで、その声を自分の脳もしっかり聴いていて、さえぎられずに受け止められた安心体験が背中を押して、この話、みんなの前でやっぱりもう一度だしてみよう、と思えたのかもしれません。

気持ちの交通整理

SSTでは、悩んでいること、迷っていること、つらいことを誰かが話したとしても、それに対して松浦さんが答えをくれるわけではありません。松浦さんはその人と向き合って、いくつかの問いを投げながら、たいていの場合まだごちゃごちゃしている気持ちの交通整理、問題のきりわけをしていく係です。

その人が一番大切にしたいと思っていることって実は何なのだろう、どうしたらちょっと楽になれるだろう、未来に向かって具体的に今ここで練習できることはいったいなんだろう——。そういったことを目の前の人と対話しながら探っていくのです。

松浦さんとのそんなやりとりの中で、ある瞬間にその人が、あ！と何かに気づき、そこから勇気を出して実際にその場で練習をしてみる。たとえば、ずっと胸のうちにあったことを、家族に話してみる練習、友人にメールで伝える練習、または公的機関に電話をかけて相談する練習。その一連の流れを輪の

中の私たちは見守りながら、時にはその人が練習する際の相手役にも。そして、短いロールプレイが終わったら即、今その人がしてみた中でよかったところを、仲間たちが次々伝えていきます。

そういう練習を通して、話す前の自分と練習した後の自分のきもちがかわっていく。ああ、そうか、家族やまわりからの期待を背負って、自分一人で全部を引き受けようとしなくていいんだ。そこに思いが引きずられる前にまず、自分は今どこに立っているのか、現在位置確認をしてみる、自分にとって大切なことは何かをみきわめる、優先順位をつける、自分からヘルプを出す——。

そんなふうに通してその人の中でいろいろな変化が生まれてくる瞬間を、そこに参加している一人ひとりが感じあっていくのです。

ほどほど音頭

この日参加した仲間の一人に、強い責任感や仲間からの期待、プレッシャーをたった一人で抱えこみ、不安マックスになっていた人がいました。彼女とのSSTが終わると、松浦さんはその彼女にある歌を贈ることを提案。クッキングハウスのスタッフとメンバーさんたちがつくったオリジナルソングの「ほどほど音頭」です。

私も大好きな歌で、ほかにもこの歌を知っている人がたまたま何人かいたので、声を合わせて一緒に歌いました。こんな歌詞です。

♪何事もほどほどに 夢中になってもやりすぎない
考えないで早く寝る 続いていることが大事だよ
ゆっくりほどほど 人生無理せず ^{あした}明日があるさ～

重い荷物は背負わずに 軽い気持ちでいきましょう
やさしい想いを大切に 生きてみるのも大事だよ
ゆっくりほどほど 人生無理せず ^{あした}明日があるさ～

歌っているうち、歌声を聞いているうち、その人の涙が笑顔にかわっていく空気感をその場のみんなと共有するような、そんな大切な時間になりました。

引き受けすぎない

今回のワークで得た私なりのキーワードが、「引き受けすぎない」。というのも、この日出された悩みごとの多くが元をたどっていくと、一人で引き受けようとしすぎたところから始まっていました。その結果ごちゃごちゃになって、もうどうしたらいいかわかんなくなってるけど、そもそも引き受けすぎちゃうこと自体が、実は向き合うべき課題だったんだ。あ、これって私にとっても大切な課題です。

話を聞き始めるときは大抵、一つひとつどれも、個別具体的な問題や悩みごと、と思います。けれどもそれをSSTリーダー役の松浦さんがていねいに解きほぐしていくうち、自分ではない人の問題と自分の問題との間に共通点が見えてきて、時、場所、状況、登場人物、を入れ替えたならそれは誰にも、思い当たることのある／あった悩みかもしれない、と気づいていきます。個別なんだけど普遍、そこがSSTワークのおもしろくて深いところ。この日もそんなふうに感じたのでした。

全員でつくる「曼荼羅」

2日目の午後（あ、参加者さんには1日だけの参加をお願いします、と言いながら、私だけ両日の参加。そこは主催者、世話人ということで許してもらって）。その日のワークのふりかえりシェアリングタイムが終わった後、松浦さんからの提案でこの日の仲間の一人、元旦の地震で被災した奥能登珠洲のKさんに「曼荼羅」をつくってプレゼントすることになりました。

Kさんが小さい時に大好きだったもの、いま大切に思う人、大好きな人、そばにいてほしい人、尊敬する人、今の自分を見守ってくれているもの、をあげてもらいます。それに加えて「未来の自分」と彼女の「守護天使」も登場します。その一人ひとり、一つひとつから、自分になんという言葉をかけてほしいか、Kさん自身にそのせりふを決めてもらうのです。仲間たち全員がそれらの役になって、彼女が望んだ言葉をそのまま、心をこめて彼女に伝える、それがこの日の「曼荼羅」のつくりかた。

私は、彼女が子どもの時に大好きだったというお人形（「サウンド・オブ・ミュージック」でジュリー・アンドリュースが演じたマリアのお人形）の役をさせてもらって、「よくがんばっているね」と彼女に声をかけました。その日の別れ際、Kさんは一言、「今度、珠洲に帰ったらマリアを探してみるわ」と。

SSTのおつり

「行ってみよう、と思ったこと。話を出してみよう、と思ったこと。それだけでもう半分以上、問題は解決しているんですよ」と松浦さんはよく言います。

愛知からはるばる初参加してくれたMさんが、SSTの翌日、参加してよかったとお礼のメッセージをくれたので、お返事に松浦さんのその言葉を伝えました。すると彼女から、「なるほどです。確かに、なぜだかよくわからないけど、帰ってきてから、なんか心が軽くなっているのを感じていました。話すは放す。話した事で、ああ、私が自分で自分のストーリーの中で苦しんでるだけかあ、と、少し苦しいストーリーから距離をおけた気がします。SSTは、その場だけでなくその後にもジワジワ作用していくのですね。不思議です」というお返事が。

話すは放す。以前、私の言った言葉をMさんはずっと覚えていてくれたんですね。そのこともうれしかったし、Mさんが書いてるように、その日だけで終わらないのがSSTの不思議、だと私もいつも思うんです。

松浦さんの言葉、参加した人たちの言葉、その時に私の感じたこと、その日のメモを見返しながらかとになって気づく、SSTは本当におつりがいっぱいあるワークです。

PTSDからPTGへ

今年のSSTワークショップのテーマは「PTSDからPTGへ」でした。PTSDというのは「Post Traumatic Stress Disorder：心的外傷後ストレス障害」、ものすごくつらく苦しい出来事を経験した後に出てくるストレス反応のことだけど、最近では新しくPTGという視点も生まれているのだそうです。

GはgrowthのG、PTGは「心的外傷後成長」と訳されているそうです。深く傷ついて、いっぱい悲しんで、だけどその悲しみを経験した先に、新しい希望が生まれてくることもある。

心の傷をいっぱい負ったけれど、そのことによって他者の痛みに共感できるようになっていけるといいですね、そのためには、悲しみを封じ込めないことが大切、と松浦さん。歯を食いしばって誰にも何も語らずがんばり続けていると、つらかったことがどんどん蓄積されていって、その後何10年も経ってからPTSDを発症してしまうことがあるそうです(晩発性PTSDと呼ぶそう)。

心に深い傷を負った人がPTSDを発症するのはトラウマ体験から半年以内、と考えられてきたけれど、そうとばかり言えないのではないかな。そんな疑問を抱いた蟻塚亮二さんという精神科医さんのことを松浦さんが紹介してくださいました。

蟻塚さんは沖縄で、心の不調を訴える多くの人たちを診てきたお医者さんです。お年寄りの中には、沖縄戦で集団自決の場から生き延びた人、死体を踏みつけて走って逃げた人たちも多くいる。がんばって働いていた若い時は問題なく生きてきたように見える人が、引退後に奇妙な不眠症になったり、死体の匂いが急にフラッシュバックしたり、または、うつ病に似ているようでそうではないさまざまな症状に苦しんだりしている。中には戦後60年も経ってから症状が出た人もいます。

蟻塚さんはそういった人々をたくさん診てきて、それまでの解釈では説明がつかない、晩発性PTSDという概念が確かにあることを調べて報告したお医者さんなのです。今は原発事故後の相馬に住んで、生活者としての患者さん一人ひとりとつきあい、診ておられるとのこと。

こんな誠実な精神科医さんがいるってうれしいですね、という松浦さん、蟻塚さんをととても尊敬しているのが伝わってきます。蟻塚さんの書かれた『悲しむことは生きること～原発事故とPTSD』（風媒社）という本も読んでみようと思いました。

元旦に起きた奥能登の震災から11ヶ月が経ち、

もうすでにつらく、苦しくなっている人たちがたくさんいます。中には、9月の水害で更なる被災を体験した人も。はじめは生きること必死だったけれど、状況が落ちついてきてはじめて、自分が負っていた痛みが気が付く人もいます。

それぞれの人が、悲しみをとじこめずに語る人になれるだろうか。そのために、周りは悲しみを聴く人になれるだろうか。十分にきもちが話され・放され、聴かれたあと、そこからまた新しくgrowthしていくことができるだろうか。

自分のきもちを話す・放す、他者のきもちを聴く。自分の悲しみやつらさを封じ込めない、閉じ込めないで、悲しみをいっぱい悲しんで、話す・放す。他者の悲しみや傷ついたきもちを聴く、アドバイスでなく、支援でもなく、それがマインドフルネス・リスニングだと知ることができたことが、この日の私の希望でした。

誰かが心の奥を語るためには、聴く人、聴く受け皿、聴ける場、そういう関係性をつくっていく努力がきっと必要。マインドフルネスをできるだけ心しながら、ゆっくりとそういう私に育っていただけますように。日常生活の中でも、マインドフルネス・リスニング、何気にもっとしてみようと今、思っています。これもSSTのおつり、なのかもしれません。

2024.11.27



路上生活者の個人史

第 13 回

竹中尚文

甲斐 浩之 氏(仮名)

1984 年生まれ。40 歳

私は神戸で生まれて、育ちました。両親は中国地方から神戸に出てきて、私は長男でした。私の下に弟が一人で 4 人家族でした。公立小学校、中学校、高校と進学しました。高校 3 年生の夏に親と対立して、祖母と叔母の暮らす家に移り住みました。親族間の家出でした。対立の原因ですか？それは進路の問題でした。両親は浪費家だったので進学ができませんでした。

家庭は子どもの頃から経済的に苦しいものでした。だから

私はずっとお金を遣わないようにしていました。お年玉も貯めていたら、いつの間にか父親のお酒に変わっていたこともありました。

高校の成績もそれなりだったので、就職もすぐに決まりました。電気関係の会社に就職しました。おばあちゃんの家に住まわせてもらっていたので、給料から幾ばくかを渡していました。一方で、できるだけ貯金をしていました。一年ほどして、貯めたお金でアパートを借りました。この電気関係の会社は 21 歳まで勤めました。

お金がなくて、1 日 1 食の生活でした。ドンドンと痩せてい

くので、この生活を続けたらダメだと思いました。体重が2〜30 kgほども痩せました。会社を辞めましたが、私たちは氷河期世代ですのでアルバイトを転々としました。24歳の時に食べ物屋さんで働くようになりました。「まかない食」でしっかりご飯が食べられるようになりましたので、体重も元に戻りました。27歳で自動車の中古屋さんに入社しました。30歳まで中古屋で働きました。

30歳の頃に自分の人生を考えました。ワーキングホリデーでカナダに行きました。北米を回れるバスの周遊チケットを買っていたので、バス旅行をしている途中に、事故に巻き込まれました。怪我をして、トロントで治療を受けました。治療を受けながらトロントの日系キリスト教会のお世話になりました。そこで滞在させてもらいながら、教会がホームレス支援

とかをしているお手伝いをしていました。2ヶ月ほど教会のお世話になりました。治療が終わり、帰国しました。

帰国してからキリスト教会に行き、ホームレス支援のお手伝いをさせてもらいました。いろんな教会に行きました。ボランティアをしながらアルバイト生活でした。そんな生活を36歳ぐらいまでしていました。アルバイト生活は経済的に苦しいですから、住宅リフォームの会社で働くようになりました。3年足らずの間、その会社で働きました。

リフォーム会社を辞めて、職業訓練校に1年間、通いました。職業訓練校を終えたら、ちょうどコロナ禍が始まってしまいました。この数年は、いろんな短期のアルバイトで生活をしてきました。そうやって、今があるのです。

家族との関わりですか？ 弟

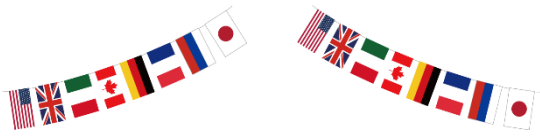
は結婚してから、音信不通になりました。父親が原因なのです。いわゆる外面はいいのですが、身内となると困った人なのです。身内には攻撃的なのです。でも、私にとっては父親なのです。酒は飲むし、ギャンブルはするし、いい親ではなかったですが、私を育ててくれました。19歳で社会に出て、生活するのがとてもラクでした。親と一緒に家庭にいる時の方がずっと苦しかったのです。世の中に出て仕事をしている方がずっとラクでした。そういう意味で

は、私に耐性を付けてくれたのが家庭であったのかもしれませんが。弟は結婚で両親と離れてしまいましたが、私は両親と離れないです。両親が本当に生活に困っていたら援助もするだろうけれど、今はしないです。今、お金を渡したら酒かギャンブルに消えてしまうのが分かっている。でも、自分は長男だし、両親を見守っていきたいと思います。

甲斐氏の話聞いていて、二つのことを考えた。

彼はいろいろな立場に立てる人だと思った。一つの仕事を長く続けられないというのかもしれないが、経歴や学歴で人物評価するところになじめないのかもしれない。彼の力を発揮できる所に立てば、有能さを表現できるように感じた。今は支援を受ける側の列に並んでいるが、すぐに支援をする側にも回る人でもある。支援をする側、される側というのは固定した関係ではない。これからこのようなマルチサイドに立つ人たちが出てくると思う。そうした人たちが社会を活性化していくのかもしれない。

もう一つの思いは、自分の育った家庭に対して、彼の姿勢と弟の姿勢の違いが興味深い。どちらかの是非をいうのではなく、それぞれの考え方の違いがあっているのではないかと考えた。同じ家庭で育っても異なる人間なのだから、その表現は異なるのは当然ではないかと思った。

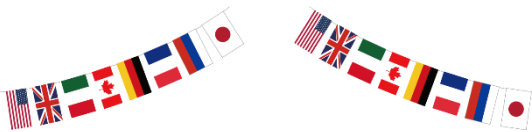


スポーツおじいさんにないたい！③



『チャンプ』

國友万裕



1. ポリープ手術

前回出した原稿依頼、何が俺の人生に起きただろうか。

前回の原稿を提出した直後だったと思う。ミニドックの結果が出て、便の検査に異常が見つかった。と言っても、2日便をとったうちの1日だけである。大したことはないだろうとは思いつつ、早速、近所の病院に行ったところ、ポリープ、最悪の場合は癌の可能性もあるので精密検査を受けることになった。

50代までだったらまだまだ大丈夫という気持ちだったのだけど、今は60歳という年齢がドシッとのかかかってきているので、本当に癌だったらどうしようと心配な日々が続いた。しかも、検査を受ける前は病院で買うように言われた大腸検査前用のレトルトの食事しか食べることができないのでそれが何よりも辛かった。お粥のような、味のしないような食べ物で、美味しくないのである。

いざ、検査当日になってみると、やはりポリープができていたとのことだった。7ミリほどのポリープで、その場でカットしてくれた。ほんの5分くらいの手術だった。そして、その後1時間くらい点滴。

終わったら、美味しいものを食べようと楽しみにしていたのだが、あと3日くらいは油物は避けてくれとのことで、ポリープ手術後用のレトルト食品を買わされることになった。また美味しくないお粥のような食事が続いた。

先生の話だと、おそらく見たところ悪性ではなさそうだったとのことだったが、やはり精密検査の結果がでるまでは気掛かりで

ある。どんより気分が1週間くらい続いたが、検査の結果は良性で、もう通院や検査の必要もないとのことだった。

そのことを普段お世話になっている教会の聖歌隊の人たちに話した。聖歌隊は70代、80代の人が多く、俺なんかまだ若いほうである。「年取ってくるとポリープくらいは誰でもあるよ」と皆んな口々に言ってくれた。こういう人たちが周りにいるのは心強いけれど、それにしても俺も年だなあと思った。

故郷のおじさんは、89歳で透析がだいぶ通りにくくなってきているらしく、施設に入った。86歳の母はこの頃目が見えないらしくて、白内障の手術を近いうちに受ける。歳をとるとだんだんと病気が多くなっていくのだ。悲しい。悲しい。悲しい。人間の健康年齢は70歳過ぎくらいまでなのだそうである。日本人の平均寿命は80歳を超えていて、最近では90歳過ぎまで生きる人はたくさんいるが、頭が呆けたり、体が苦しいのを生き続けていくのが幸せなのだろうか。つくづく、そういうことも考える年齢になった。

クリント・イーストウッドや山田洋次みたいに90過ぎても現役で仕事をする自信は俺にはないのだ。とりあえず、日本では高齢者は65歳からだとして定義されている。ということは、まだ高齢者の域にはいるには4年ある。その間に青春を堪能しようと思った。

本当に人生は長いようで短い。俺の人生は10代の頃がどん底だったので、尻上がりではあるが、10代の頃のトラウマをずっと背負って生きる人生だった。

それにしても俺は故郷が嫌いだ。いつも話す少年時代の体育教師は今故郷のある町

の教育長をしているみたいだが、この間、行き過ぎた指導があったことでちょっとした問題になっていた。あの人もう75歳である。やはり、あの人は変わっていなかったのだ。何人かの人を傷つけても、困らせても、踏み付けにしても、懲りない奴というのはいるのだ。あの人は俺の人生に一生消えないような傷を残したことに気づいているだろうか。考えたこともないだろう。

俺は故郷にだけは帰りたくない。今年の夏も里帰りをしなかったのだった。

2. 男性性の構築

今年の夏休みの一番の思い出は、京大のプールで泳いだことだった。

京大プールは、比較的目立つ場所にある。百万遍のところを曲がったところにある生協の裏側である。50メートルぐらいの大きなプールだ。もう京大で教え始めて12年目のはずだが、教職員があそこを使っていいのかどうか疑問だったし、学生に海パン姿を見られるのは恥ずかしいという気持ちもあって、使ったことはなかった。

しかし、今年の夏休み。昨年の教え子で水泳部の子とメッセージのやり取りをしていたら、「年配の人でも泳ぎに来ていますよ」と教えてくれた。電話で問い合わせたところ、非常勤であっても教職員ならば証明書を見せれば入れるとのことだった。よし、行ってみようかと思った。もう俺も60歳だ。やってみたいことは全部やっておかなくて、いつまで元気でいれるかわからないのだ。

行く前に食事しようということになり、水泳部でかつての教え子だった男子学生 2

人と近所のレトロなお店で食事をした。2人とも体育系とは言っても優しい子たちだ。この頃はアメフトや野球の子に聞いても、昔の体育会みたいな厳しい上下関係はないという。そうだといいいけれど、世の中は変わっていくようで変わらない。彼らとひとしきり話した後、京大のプールでちょっとだけ泳いだ。その後、教え子とツーショットで写真を撮った。楽しかった。

俺の人生は、本当に遅いのである。こういう付き合いを人生の早い時期にできていたら、俺はこんな苦しい人生を歩むことはなかったのだ。

しかし、俺はスポーツができなかった。そのトラウマは延々と続いた。今となっては、俺のことを運動神経が鈍いなんて思っている人は1人もいない。もう15年以上前だが、「先生、なんかスポーツやっていましたか？」と男子学生から聞かれた。

「いや、部活とかはやっていない。ただ、プールは長年通っていたけど・・・」

「そうでしょうね。何かやってそうだなあと思っていました。体ごついですものね」と言われた。

彼だけじゃない。大体俺は体の横幅がでかいので見た目はそんなふうに見られるのである。しかし、少年の頃の俺は体はそれなりにでかくてもいかにも不器用そうでスポーツなどできなそうに見られていたため、散々いじられ、傷つけられたものだった。体育の先生が、平気でできない子の心を傷つけるんだから、子供ができない子を傷つけるような子に育っても仕方がないのである。本当に返す返すも悪夢のような少年時代だった。

今更それを言っても始まらない。世の中

は理不尽にできていて、先にあげた体育教師のような、人の心を壊すことを何とも思わないような男であっても覇権を握る。その一方で、何の罪もない人が、理不尽に早逝したりするのである。まさにこの世はカオスなのだった。

母からは、「あなたの子供の頃の傷ついた経験は、今、あなたの本のネタになっているからいいじゃないの」と言われる。しかし、俺はこれまで4冊本を出したけれど、たいして売れていない。俺の名前なんてWikipediaにだって出ていない。最初の本の時は京都新聞に写真入りで記事が出た。朝日新聞の書評にも小さく記事が出た。共同通信にも北原みのりさんの書評が出た。2冊目の本の際は、週刊文春とサイゾーに記事が出た。3冊目の時はキネマ旬報。だけど、誰も俺のことなんて知らんのだ。

今回の本はまだ今のところ、何の取材もない。おそらく今回はこれまで以上に何の話題にもならず終わっていくのではないかな。別に有名になってチャホヤされなくてもかまわない、ただ、俺がこれまで長年にわたって苦しんできたことを世の中の人にわかってもらいたい。母からは、「だいぶわかってくれる社会になって来ているじゃないの。昔とは相当変わって来ているわよ。もちろん、変わらない人もいるけど。だんだんとあなたが言っていたような社会になって来ていると思う」と言われる。

確かにそうなのかもしれない。先にあげた体育教師みたいな男は今となってはマイノリティ、社会は変わったと思いたいけど、この間、たまたま映画を見に行ったら、『うちの弟どもがすみません』という映画の予告編をやっていて、そこで男の子たちが上

半身裸で騎馬戦している様子が出て来た。まだいまだにあんなことを強制している学校があるのだと呆れてしまったものだ。

そう言いながらも、俺は体育会コンプレックスがあって、今でも体育会っぽいことに憧れている一面もあるのである。ボクシングの練習には今も通っている。10日に1回くらいのペースなので、たいして上達はしていない。ただ、ジムに行くと、20代の若い体育系の男たちと時間を過ごせる。上半身裸になって練習することもできる。あれが俺にとっては喜びなのである。マッサージの人にも例によって来てもらっている。この頃は来てもらうたびに、痛いビンタを喰らわしてもらっている。一瞬はすごく痛いのだが、ビンタされると「男になった！」という気持ちになって嬉しくなるのだ。

アメフト部の教え子2人とも食事に行った。アメフト部とは言っても、決して荒っぽいタイプの子じゃない。むしろ、優しくて、あれこれ気を遣ってくれるし、ソフトである。食べた後は遠回りして、バスの停留所まで一緒に歩いてくれた。

こういう子が俺の息子だったらなあと思う。俺は60歳になって一番の後悔は、子供をもたなかったことなのである。アメリカ映画は父と息子を描く映画が多い。俺は、俺の親父がコミュニケーション下手の人だったので、アメリカ映画を見るたびに、そういう父と息子関係に憧れたものだった。

実際周りの人たちを見ていると、子供がいるからつらいことがあっても頑張れると言っている人は多いのだ。独身の頃はこんな人が親になって大丈夫なのかと心配になるような人でも、子供ができると必死で頑張ろうとする。子供って不思議な力を持つ

ているのである。

しかし、俺は、今となっては息子を持つなんてことは絶対にできない。子供を持つ経験をしないまま俺は一生を終える。俺の遺伝子は淘汰されるのだ。俺は苦しみで苦しんだ人生だったから、こんな遺伝子亡くなった方がいいのだろうけれど。

3. スポーツができる男たちは……

①M くん的人生

俺の中学時代、M君という男の子がいた。

実を言うと俺は彼のことを小学校の頃から知っていた。俺の中学は、二つの小学校が合併した形でできあがっていた。彼は俺とは別のもう一つの小学校の子だったのだが、小学校6年生の頃に通っていたYMCAの英語教室で一緒だったのである。

彼は最初の頃同じ小学校の女の子たちから「おかま」と呼ばれて馬鹿にされていた。俺と似たようなタイプの子なんだろうなあと思っていた。ところが、途中から女の子たちの態度がガラッと変わった。彼は子供の頃からバイオリンをやっていて、それでそのツアーでヨーロッパに行ったとのことだった。それがあってからが女の子たちの彼に対する態度が180度変わったのである。あー、つくづく女はヒーローを求めるものなのか。それまで散々いじめといて、彼が海外旅行の経験もあるバイオリンの有望株だと分かった途端に態度を変えたのである。

俺も小学校の頃はM君と同じく、女の子っぽい子ではあったけど、それゆえに女の子の友達が多かった。小学校6年の時に、器楽クラブで演奏したこともあった。当時器楽クラブは女の子が大勢で男は3人しか

いなかった。いじめられ、馬鹿にされてはいても、決して女の子と話ができないタイプではなかった。

ところが、転機がやってきたのは中学 1 年の時だった。俺の通っていた中学は、市内でも最もガラが悪いとされていた公立の中学だった。しかも、1 年生の時の組み替えで、最も悪ガキの多いクラスに振り分けられることになったのだ。俺が友達になれるようなやつなんていなかった。そして、女の子たちから、「気持ち悪い」と陰口を言われる日々が始まったのだ。

その後、M 君と一緒にのクラスになったのは 2 年生の時だった。俺はもうその当時心が壊れかかっていて、誰も友達すらいなかったし、誰とも付き合いたくとも思わなかった。担任の女性の先生は、「M 君なんかだったら、國友君と合いそうな気がしますけどね。」と面談の時に母に言ったのだそうである。

彼は天使のような心を持った男の子だった。芸術的なことが好きで、感受性が強いタイプだと言うことでは確かに俺に似ているのかもしれない。映画も好きみたいだった。だけど、俺みたいに反抗するタイプではなかった。彼は受容するタイプだったのである。話し方なんかは女の子そのもので、自分のことを、「俺」とか「僕」ではなくて、「自分」と言っていた。俺もあの当時は、自分のことを「僕」とは言っても、「俺」とは言えなかったものだ。

確かに彼だったら友達になってくれていただろうし、親友にもなれるような気がしていた。しかし、俺と彼の決定的な違いは、彼はスポーツができたことだった。

一般に「オカマ」とか言われて揶揄われる

タイプの男子は、スポーツ音痴のやつが多い。ところが、彼は女性的で優しい子で、運動も自分から積極的にする子ではなかったのだが、天性の運動神経をもっているらしくて、足はクラスで 1、2 を争うくらいに早く、他のスポーツも人並みより遥かにできる子だった。

一方で人並外れたスポーツ音痴だった俺は、中学の荒っぽい体育教師たちについていけず、将来にも希望はもてず、女子たちから心無い意地悪をされつづけ、もはや、学校に行くのがやっとという雰囲気になっていた。

今だったら、まだ不登校の道がある。しかし、あの頃は不登校という言葉すらない。どれだけ辛くても、どれだけ酷い目に遭わされても、どれだけ被害者であっても、学校から逃げることはできなかったのだった。俺はひたすら空想の世界で遊ぶしかなかった。思えば、小学校までは俺の家に遊びに来る子はたくさんいたのだった。しかし、中学になってからは遊びに来る友達もいなくなった。俺はもう誰ともつきあいたくない。自閉的な状態に陥っていたのだった。

M くんは、高校卒業後、東京の有名音楽大学に進み、NHK 交響楽団に入った。NHK 交響楽団と言ったら大変なものなのだろうである。家もきっとお金持ちだったのだろう。財産家だったのかもしれない。バイオリンを習おうと思ったら、まずバイオリン自体が高い。レッスン代も高い。そして音大に行くとなったら、相当のお金がいるはずなのである。

俺だって家はお金がないわけではなかったから、もし、スポーツができて、人並みに高校に行ってという型通りの人生を歩んで

いたら、東京の名門大学に入って、スムーズな人生を歩んでいたのかもしれないのだ。

だけど、俺にとってはスポーツが癌だったのである。

②S君の人生

S君は俺の教え子である。

彼は俺の授業を4つもとっていて、おそらく最高記録保持者だ。今まで3つとった子はたくさんいたけど、4つはいなかったと記憶している。

彼は今、ある東京のキー放送局のアナウンサーである。彼はお父さんがアメリカ人ということもあり、超イケメンで、授業中もよく喋ってくれる子だった。俺は彼には本当に感謝しているのだ。真面目に勉強する子ではなかったが、彼がいると授業がしやすかった。

長年教師生活をしていると色々な子がいる。一般には日本人の学生はあまり話したがらない子が多いのだが、黙ったような子ばかりだとそれはそれで授業がやりづらくなる。だけど、俺は俺自身があまり話できない性格だったため、話ができない性格の子の気持ちはわかるから無理に話させるのは可哀想になる。一方で、話をすることに躊躇しない子もいるのだが、中には生意気で、俺を舐めていて、俺を馬鹿にしたような絡み方をする子もいるのだ。

しかし、S君の場合は、俺が話をふらなくとも次々に面白いことをいってくれる。しかも、周りのムードを高めるような話をしてくれるし、嫌なことは絶対に言わない、ただ単に口数が多いというだけではなく、当をいたことをいってくるため、彼のおかげで救われたことが何度もあった。俺の30年

以上にわたる教師生活の中でもベスト教え子の1人である。彼とは本当に仲が良くて、一緒にご飯を食べたことも何度かあった。

そんな彼だからテレビのアナウンサーなんてまさに天職である。ただ、彼はテレビに勤めるようになってからは個人のインスタやラインを切ってしまった。おそらくテレビに出るようになったから、個人情報が流れるのは困ると判断したのだろう。公式のインスタにコメントすると必ずいいね！してくれるので、俺のことを忘れてはいないと思うが、個人的に連絡を取り合うことは難しくなってしまったのだった。

いつかきっと京都に訪ねてきてくれることを願っているのだけど、おそらく忙しくて、それどころじゃないだろう。一旦、住む世界が変わってしまうとどれだけ親しかった人であっても、忘れていくものなのだ。

『モリー先生との火曜日』という先生と教え子の師弟愛を描く有名なノンフィクションがあるが、あの話でも、モリー先生と教え子のミッチが再会するのは、卒業後15年くらい経ってからである。

彼と俺は、顔は雲泥の差だが共通点があって、誕生日が3日ぐらいしか違わなくて、魚座でA型。しかもちょうど3回り違っているので干支も同じ辰年である。しかも、六星占術でいうと木星人のプラス。何から何まで同じである。

ただ、決定的に違っていたのは、彼は小学校の頃から野球少年のスポーツマンであったことだ。しかもお父さんがアメリカ人だからなのだろうが、体がガッチリしていかっこいい。

彼とは、先生と生徒という立場だから仲良しになれたけれど、同級生だったら仲良

しにはなれなかっただろう。俺は子供の頃スポーツができないことが引け目になって、誰とも付き合うことはできなかったのである。俺がスポーツができていたら、俺だって東京の大会社に勤めることはできたのかもしれないのだ。顔はイケメンじゃないからアナウンサーは無理にしても、テレビ局の仕事につけていたのかもしれないのである。

つくづく、俺にとってはスポーツ問題は癌だったのである。

4. 『チャンプ』(フランコ・ゼッフィレッリ監督・1979)

トイアンナさんの『弱者男性 1500 万人時代』という本が出た。奥田祥子さんの『シン・男がつらいよ 右肩下がりの時代の男性受難』という本も出た。そのほかにも着々と男性被害を訴える本は出ている。

トイさんの本だったと思うが、「弱者男性とフェミニストは食い合わせが悪い」「弱者男性は初期のフェミニストだ」という指摘があった。確かにその通りである。

俺はこれまでフェミニズム系の女性たちと付き合ってきたが、彼女たちと話していて、どうしても反発していたのは、「男の人は見えない権力を握っている」「結局は男が決めるのよ。女はいつだって蚊帳の外」などと言われることだった。

俺は男だけど、1 回だって権力を握ったことはない。むしろ女性から馬鹿にされ、陰口を言われ、心を壊され、60 歳になってもそのトラウマをどうすることもできない身だ。その俺に向かって、こういう理論をぶつけてこられたのでは腹が立つのである。

とは言っても、そういうフェミニストはもう 70 代以上の人である。あの人たちが若い頃はまだ次元の低い時代だったのだ。

最近になって、真田広之が若い頃に主演した『吼えろ鉄拳』(鈴木則文監督・1981)という映画を見た。当時人気絶頂だった松田聖子主演の『野菊の墓』の併映作だったのだそうである。これはスポーツ映画というよりも、アクション映画なのだが、日本の 80 年代がわかって面白い映画だった。

この映画が出たのは 1981 年。すなわち、俺が 17 歳の頃である。俺はあの頃大検を目指して勉強していた。と言っても、1 人で勉強するのは大変だった。ただ、今思えばあの当時は、一筋の光が見え始めた頃だったのである。精神的には前向きになっていた。バイクの免許も取りに行き、一時期ほどのどん底状態の俺ではなくなっていた。

しかし、道は長かったのである。そのあと、18 の時、1 年間塾に通い、どうにか大学には入ったものの、それからがまた底辺を這いつくばる日々が待ち受けていた。混乱と迷走の大学生活。嫌いな子からストーキングされたり、ゼミの先生からパワハラまがいのことをされたり、ろくな思い出はないのである。

この映画を見ていると本当に 80 年代はアホな時代だったのだと思い知らされるのである。

あまりにもストーリーが単純。男の方は上半身裸で対決する。彼が殴りに殴られる場面が出てくる。女の子からプールに突き落とされる場面も出てくる。男は自分で自分を笑わなくては！という意識がムンムン。しかも、一方で、女の方は目が見えなくて、体の弱い、無力な女として描かれる。しかも

これを演じているのが志穂美悦子である。アクションができる先駆的な女優なのに、よくこんな役を引き受けたものだったものだった。

不登校になって、1年目の頃だ。あの当時は外に出るのもままならなかった。土日に映画を見に行き、知り合いの子にあたらどうしようという気持ちでいた。しかし、平日に映画を見ようと思うと補導される可能性がある。本当に八方塞がりだったのである。

家は商家だったので、仕事が忙しく、母も時間をつくれなかった。そんななかで母は時々映画に連れて行ってくれていた。あの当時見た映画も、やはり今思えば御涙頂戴的な陳腐な映画が多かったのである。

この当時の映画として記憶に残っているのは、『チャンプ』だ。『チャンプ』はジョン・ヴォイトとフェイ・ダナウェイというアカデミー賞主演賞受賞の2人が離婚した夫婦を演じていて、何よりも話題になったのはリッキー・シュローダーという天才子役が息子役を演じていたことだった。

この映画は、ダメ男の父親が、息子のためにボクシングで戦い抜いて死んでいく話である。涙話である。アメリカ映画らしい父親ものだった。客席は泣いているお客さんがたくさんいた。しかし、俺は泣けなかったのだ。先にも書いた通り、俺は、父親が愛情表現が下手な人だったため、父と息子の愛を描く映画は大好きである。こういうのに憧れるからだ。

とは言っても、この映画に関しては感動できなかった。あまりにも話があざといのである。あそこまで悲しくすることはないだろうにと思うような映画。実際、日本でも

批評家の人は大して誉めていなかった。アメリカでの評価もそこそこだったのに、日本では宣伝が功を奏して一般の観客にはメガヒットだった。

この時代の日本人は、こういう御涙頂戴もの、人が死ぬような話に心を動かされる。まさに幼稚な感性の時代だったのである。人生なんて、そんな単純なものじゃない。人が死ぬのを見て喜ぶなんて悪趣味もはなはだしい。あの当時の日本は平和、だから人が死ぬくらいしか、悲しいことがなかったのかもしれないのだ。あの頃は景気のいい時代で、その10年後には、バブルがはじけて、全てが間違いだということがわかっていくことを誰も予想してはいなかったのだった。

この日本で、弱者男性をわかってくれる時代がいつやってくるのか。「弱者男性は初期のフェミニスト」なのだとしたら、弱者男性の問題が根付くのにはあと20年はかかるだろう。俺が生きている間にそういう時代がきますように。それだけを祈りたいけれど、それも神様のみぞ知ることである。

臨床のきれはし

SHEET27

浅田 英輔

DISKILL YOUR VERBOSITY

今の世の中は忙しい。

情報はたくさん入ってくる。

要らないものも多いけど、中にはちゃんと取り入れておかなきゃダメなものもある。

仕事の中ではなおさらで、「捨てていいもの」「さらっと目を通すもの」「要点を把握しておくべきもの」「とっておくもの」「ちゃんと読んで理解する必要があるもの」など、頼んでいないのにいろいろなモノが舞い込んでくる。

さらにそれを「みておけばいいもの」「すぐやるもの」「時間をかけてやるもの」「後回しだけどちゃんとやるもの」「催促されたらやればいいもの」「人に回すもの」などなどに分類する必要がある。

これは自分だけでなく、みんなのところで起きている。県庁にいと、担当業務によっては毎日すごい数のメールが来る。市町村に照会すると、メールが 40 通くる。当たり前だけど。調べてみたら、北海道 179 市町村はまあ特殊だよ。長野県が 77！埼玉県が 63！なんで埼玉小さいのにそんなにあるの。大阪府が 43！あんなにちっちゃいのに！青森県 40 市町村は 15 位でした。富山県 15 市町村が一番少ない。いいなあ。

紙のお知らせもくる。厚労省からは難解な長文が送られてくる。それを次々とどうすべきかによって振り分けて、「処理」していかなければならない。事務処理と

は、情報の理解と振り分け、その処理のことを指すといえるだろう。

中には、長文で仰々しい文章だけど、よく読むと 3 行で済むじゃん！というものもある。また、「これに該当する人は A、こちに該当する人は B、そうでない人は C をお読みください」ということを理解するのに数ページ読まないといけないものもある。そういう余計なものにける時間がとても無駄だなあと思う。何かしろという種類の文書は全部箇条書きにしてほしい。

ということは。自分から発信する情報の重要度や急ぎ具合などを明確にし、必要事項を端的に表したほうが絶対にいいということだ(世の中に「絶対にいい」なんてことは、絶対にない)。なのに、言葉を減らすことが大事にされていない気がしている。前に敬語のことを書いたが、冗長な敬語はノイズにしかない。伝えたいことを伝わりづらくする作用にしかない。相手を敬うのは大事なことだが、冗長にするということは、相手に「文章を読んで要点をつかめ。こっちでまとめる気はない」と言っているようなものである。結構無礼。慇懃無礼。

次の研修会の内容について、生成系 AI に「次の項目を冗長で慇懃無礼にして」とお願いしてみた。

○ 必要事項

・研修会名：令和6年度研修会

・日時：令和6年12月15日（日） 13時から16時

・会場：県民福祉プラザ3階

・内容：加害者支援、被害者支援について

・対象：当会会員

・参加費：3,000円

・申込締切：令和6年11月30日（土）

○ 冗長にした文章

拝啓、皆様におかれましては、日々のご多忙の中、ますますご清栄のことと心より喜び申し上げます。このたび、私どもが主催させていただきます「令和6年度研修会」と称する極めて貴重かつ意義深い研修の機会を設けさせていただく運びとなりましたこと、心より感謝申し上げます。

さて、研修会の開催日時に関しましては、令和6年12月15日、日曜日の午後1時から午後4時までの間に、何卒ご参加賜りますようお願い申し上げます。この貴重な時間におかれましては、皆様にとっても多くの学びと気づきを得られる絶好の機会となることを、確信いたしておりますので、ぜひともご予定の調整を賜りますよう、重ねてお願い申し上げます。

会場につきましては、県民福祉プラザの3階にて開催させていただく予定でございます。この会場は、皆様にとって非常にアクセスしやすく、また快適にご参加いただける環境が整っておりますので、何卒ご安心賜りますようお願い申し上げます。

研修の内容に関しましては、加害者支援及び被害者支援に関する極めて重要かつ深遠なテーマについて、専門家をお招きし、詳細にわたりお話をさせていただく予定でございます。これらのテーマは、現代社会において極めて重要な意義を持つものであり、皆

様にとっても多くの学びが得られるものと信じて疑いません。

なお、対象といたしましては、当会の会員の皆様を想定させていただいておりますので、何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます。また、参加費用につきましては、誠に恐縮ではございますが、3,000円をお願い申し上げます。この費用は、研修会の運営に充てさせていただく所存でございます。

最後に、申込締切に関しましては、令和6年11月30日（土）までとさせていただきますので、何卒お早めにお申し込みいただけますようお願い申し上げます。皆様のご参加を心よりお待ち申し上げます。

敬具

大量に流れてくる情報の海の中で必要なのは上の必要事項である。

研修会のお知らせで下の冗長にした文章がくるといやである。必要な情報がどこにあるか検索しながら読まないでダメだし、再度確認するときもまた読まないといけない。こういう文章でなければ「無礼である」なんていう人がいるのだろうか？この文章のほうが無礼である。「念の為丁寧にする」というのは、誰のなんのためにやっているのだろうか。発信者も受信者も、誰も幸せになっていないのである。

上の例は極端といえば極端だが、例えばこの文章を簡潔にするとしたらどうするだろう？

このたび、私どもが主催させていただきます「令和6年度研修会」と称する極めて貴重かつ意義深い研修の機会を設けさせていただく運びとなりましたこと、心より感謝申し上げます。

- ・主催させていただきます
⇒主催者が主催することを、誰に「させていただく」んだよ！
- ・極めて貴重かつ意義深い研修
⇒そうじゃない研修は開催しないでくださいね。
- ・設けさせていただく
⇒だから誰に「させていただいて」るんだよ！
- ・心より感謝申し上げます
⇒世の中全てに感謝して生きてる系の人？

1 1 月に当会主催の「令和 6 年度研修会」を開催いたします。

こうしてしまったら、果たして失礼なのだろうか？「させていただく」でなければダメなのだろうか？

これらはたぶん、一人ひとりが気にして減らしていかなければ、「周りがそうしているから」と、思考を停止して使い続けるのだからと思う。「小さな間違いもないように」「文句をつけられる可能性をとにかく減らす」ということを目指すのは、とても息苦しい社会に向かう道のりである。すでにそういう方向に進んできてしまっているが、ちょこっと修正することはそんなに難しいことではないと思っている。

なお、上の冗長な文章を「箇条書きで要点を書いて」とお願いするとこうなる。

研修会概要

名称: 令和 6 年度研修会

日時: 令和 6 年 12 月 15 日（日）13:00～16:00

場所: 県民福祉プラザ 3 階

内容: 加害者支援及び被害者支援に関する専門家による講演

対象: 当会の会員

参加費: 3,000 円

申込締切: 令和 6 年 11 月 30 日（土）

当然だけど、元に戻る。

表現を簡潔にするには訓練が必要。どの言葉を削るかについて時間がかかると、「めんどくさいから前と同じでいいや」となるのは非常に理解できる。

コームインの前例主義は折に触れて批判されるが、前例というものは、「これまでの人たちが検討したうえで OK を出したもの」なのである。前に OK がでたものは、そのまま通しても大体は間違いではない。それを変えるのは、結構大変なのだ。当然、変えるものべきは再検討して変えなければならないが、そうでもないものもたくさんある。変えなくてもそれほど問題にはならないものを改めて自分で考えるのはめんどくだし、上司も改めて脳のリソースを費やさなければならない。とにかく多くのタスクを処理していかなければならない状況だと、「いいから前と同じにしとけ」と言われるのも理解できるのである。

そういうときは、ちょこっとだけ変えておこう。前例が「開催させていただきます」となっているなら、「開催いたします」に直そう。たぶん、ばれない。そういうひとつの変化から始めると、だんだん修正項目が目につきやすくなる。そして、それに慣れてくると、自分が発する言葉の冗長性が減っていく。これは、いろいろな文章から必要事項を取り出す必要があるので、要約することの訓練になるのではないかと考えている。事務連絡の冗長性が少しでも減ることを、心から願う。

なんでもかんでも簡潔であれとは思わないし、すべて言語化しない表現の美しさもある。冗長さを楽しませる文章だってあるし、「無駄話」なんてものは非効率極まりないのだけれど、日々のくらしに大事なことも思う。でも、もうちょっと他者への伝え方は考えてみていいんじゃないかなと、常々思っている。

※ デリカシーの有無とかはまた別の話ですよ！

発達検査と対人援助学

⑱ 第16回年次大会事務局日記

大谷多加志

去る2024年11月2日(土)・3日(日)に、所属校である京都光華女子大学で対人援助学会第16回年次大会が開催されました。所属校での開催ですから、必然的に大会の運営にも関わることになったのですが、共同大会長を社会福祉専攻の千葉さんが引き受けてくださったので、私自身は事務局スタッフとして裏方を担当させて頂きました。とはいえ、学会の大会事務局を担当することなんて今後もそうはないだろうと思ったので、今回は事務局として経験した大会について書かせて頂こうと思います。

開催前…無風の中の不安

今回の京都大会の開催については、昨年の広島大会の段階で既に決定していました。京都大会の事務局メンバーもその時に決まっており、京都光華女子大学の千葉さんと同志社大学の梁さんが共同で大会長を務めることになり、マガジン執筆者でもある坂口伊都さん(家族関係支援 憩都)と私が事務局スタッフという4人体制になりました。

学会の大会事務局を経験したことがないメンバーばかりの中、千葉さんは2023年の第15回年次大会にもスタッフとして参加しておられました。そのため、千葉さんのノウハウが頼りで、第15回大会の流れをたど

るように大会の準備を進めていくことになりました。今大会は京都光華女子大学が開催校であったこともあり、千葉さんにかかる負担が何かと大きくなる状況でしたが、私自身は自分の仕事にかまけて、大会準備が後手後手になりがちでした。

そんな中で、大会の1号通信の発行、2号通信の発行と大会参加申し込みおよび研究発表や公募ワークショップの受付が始まりました。また、8月には『京都大会プレ企画：社会的困難地域における対人援助の働きと可能性を考える～東九条の取り組みから学ぶ～』をカトリック希望の家こども園園長の叶信治さんを講師にお招きし開催しました。また、9月には同じく大会のプレ企画として『精神医療現場における対話文化の取り組みから対人援助の可能性を考える』を精神保健福祉士である館澤謙蔵さんをお招きして開催しました。このように、着々と大会開催に向けての準備が進んでいきました。

そこからは、大会参加や研究発表、公募ワークショップへの申込状況にやきもきしながら過ごすことになりました。9月下旬段階では研究発表の申込が数件しかなくテコ入れをどうしたものか…と悩み、開催1か月を切った時点での参加申し込みが40名くらいで焦り…ということを繰り返してい

ました。また参加者数が読めない中で、初日の夕方に開催する情報交換会の参加者も見通しが立たず、料理をどのくらい用意したらいいか…というお金が絡む中での葛藤事項もありました。

いろいろな心配ごともありましたが、研究発表とワークショップは申込締め切りの時点で想定より多くの申込があり、むしろ会場をどう確保するかに頭を悩ませる事態となりました。また、大会参加者も10月下旬には当初想定を超え、最終的には80名超の方にご参加頂くことができました。大会当日の学生スタッフも必要だと考えていましたが、本学の大学院生さんにお声かけしたところ、5名の学生さんが手を挙げて下さり、諸々の準備が整いました。私自身は大会事務局のうち、会計部門を一括で管理することにしたため、謝金や交通費等の準備を行いました。初日の夜の情報交換会の費用が2500円という設定になったので、お釣りが必要になるかも…と考え、念のため30人分の500円のお釣りを小銭で用意するため、日々の買い物をなるべく現金では、100円玉や500円玉をストックするようにしておきました。大会前日に、団先生の掛け軸展示を廊下に設置し、ポスター会場の机と椅子を別室に移動させてスペースを確保し、これで後は当日を迎えるのみとなりました。

大会当日…事務局ってバタバタなんですね

当日は時間よりかなり早めに現場に入っておきました。最初は受付の机など、前日には準備できなかった箇所を設置するくらいでのんびりとしたものでしたが、事務局メンバーが到着し、学生スタッフさんも来て

くれて…と人が増えるにしたがって、それぞれの人に渡すものや頼むことがあり、何となくバタバタとした動きになってきました。そんなことをしているうちに早めに到着された参加者の姿も見え始め、予定時間より早く受付を始める運びになりました。

受付を開くと、当日入金の方の対応や領収証の発行、申込や入金の確認が必要な方…など細々と確認や対応が必要な状況があり、おおむね受付に張り付く状況になりました。その後、開会時刻となり、開会あいさつや記念講演もスタートしたのですが、初日は大雨の影響で電車が遅延し、遅れて到着する方も少なくなかったため、なかなか受付から離れることができないまま、自分も関わる理事会企画の時間となりました。気持ちも含めて何も準備ができないまま会場に向かうことになりましたが、登壇者の皆さんのおかげで理事会企画はつつがなく進行できました。しかし、事務局ってやっぱりバタバタとするものなんですね…と改めて思い知りました。

情報交換会…生団先生だ！

そんなことをしているうちにあっという間に終わった初日。プログラムの合間の時間がやや短すぎて、教室の移動や機材のセッ



ト、お手洗いなどを済ませるには少し時間が足りなかった印象です。追い立てられるように次々に進行していく運びとなったので、もう少し時間に余裕を作った方がよかったかも…というのは反省点です。

情報交換会も、初日プログラムが終わってから 15 分後にスタートというタイトなスケジュールで、坂口さんに早めに情報交換会会場に控えて頂き、料理の受け取りから会場設営までやっていただいたおかげで、何とか定刻で進行することができました。情報交換会の参加申し込みは、プログラムの合間で受け付けるつもりがその時間が十分でなかったため、全然参加者がいないのでは…と恐れる事態となりました。結果的には、20 名の方にご参加頂くことができ、当初の予測の範囲内に収まりました。情報交換会会場には遅れて到着したため、既に会は始まっていましたが、何となく席の並びを見てみるとマガジン編集長の団先生の前に学生スタッフさんが座る配置になっていました。学生さんが「生団先生だ！」と声をあげたのを聞いて、そういえば授業の中で団先生の講演 DVD を使わせてもらっていたことを思い出し、私にとっての先生と、私にとっての教え子の顔合わせの機会を作れたことを知りました。なんというか、世代をつなげたような、時代をつなげたような、そんな気持ちになって、教員っていい仕事だなあと教員冥利に思いました。参加してくださった先生にも、学生さんにも、全てのめぐりあわせにも感謝します。

開催 2 日目、閉会と片付け、そして次回へ

開催 2 日目で今度こそ受付はヒマだろうと高を括っていたのですが、前日の豪雨の

影響で 2 日目からの参加に切り替えた方もあり、意外と細々と対応することがありました。お昼休みには理事会もあり、理事として参加しなくてはいけなかったため、「まあ大丈夫かな」と思って受付を空けたのですが、この間に来られた方がいたことも後から知り、おっかけで対応することとなりました。

そんなわけで 2 日目もあれよあれよという間に時間が過ぎ、無事閉会となりました。片付け作業は、無事に開催できた安堵感と祭りの後の寂しさが入り混じるような時間でしたが、学生スタッフさんのお力もあり、準備とは比較にならないほど短時間で終わることができました。改めて、研究発表やワークショップ、理事会企画に登壇くださった皆さんが来てくださったおかげだなあと想想し、学会に参加してくださった方あつての年次大会でした。参加してくださったすべての皆さんに心から感謝いたします。

既に次回大会に向けての構想も動き始めています。また、参加してくださった学生スタッフさんがマガジン執筆を始めるかも…？という動きもあり、いろいろと今後につながる展開が見え始めました。今大会で、私自身が果たせたこと、できたことは限られるのかもしれませんが、このような形で次に向けての動きを作り出すことにほんの少しでも関われたのであれば、大会事務局スタッフとしては本望だなあと想想します。また次回の大会で、皆さんにお目にかかれまして幸いです。次にお会いする時に、皆さんの前に立つのに恥じることがないように、自分の持ち場で、自分なりの実践を続けていこうと思います。

講演会 & ライブ な日々 ④①

古川 秀明

『子どもと学校を考える』

日常生活における子ども達の居場所（環境）は、家庭か学校です。

高校生になるとアルバイト先が居場所に加わりますが、やはり家庭と学校が子どもたちの居場所の中心になります。

今回は子どもと学校について考えてみたいと思います。

1. 学校の現状

年 30 日以上登校せず、「不登校」とされた小中学生は、2023 年度は過去最多の 34 万 6482 人に上ったことが文部科学省の調査でわかりました。

前年度より 4 万人余り増え、30 万人超は初めてです。

私がスクールカウンセラー（以下 SC と表記）を始めた平成 9 年頃、不登校が急増し、その数は約 13 万人でした。

それがだんだんと増加し、約 13 万人→約 16 万→約 19 万、そしてついに 30 万人を超えました。

その要因はコロナ、教員不足など専門家の皆さんがいろいろ分析し、複数挙げられています。

その中で私が注目しているのは、嫌がる子どもを無理に学校へ行かせる必要はないと思っている親や大人が増えているということです。

確かに今の学校現場は、子どもをうつ病や自殺に追い込んでしまうほどの危険性があります。

それはいじめの認知件数にも表れています。

全国の小中学校や高校などで 2023 年度に認知されたいじめは、過去最多の 73 万 2568 件（前年度から 7.4%増）でした。

心身や財産に重大な被害があったなどとして認定される「重大事態」も 1306 件（同 42.1%増）に上り、初めて 1 千件を超えています。

学校の持つ危険性は子どもだけでなく、現場で働く教師にも悪影響を及ぼしています。

精神疾患で 2022 年度に休職した全国の公立学校教員は 6539 人（前年度比 9.8%増）に上り、2 年連続で過去最多を更新しました（文科省発表）。

精神疾患で病気休暇（1 カ月以上）を取った教員との合計も過去最多の約 1 万 2 千人に上ります。

その要因は様々で、過労死ラインを超える長時間勤務や、モンスターペアレントの対応、職員室での人間関係、指導が難しい子どもたちへの対応など、これも複数が挙げられています。

子どもの不登校 34 万人、いじめ事案 73 万件、教師のメンタル不調による休職者が年間 6500 人超。

語弊があるかもしれませんが、今の学校という環境は、精神を病む教師と生徒を毎日生み出す生産工場みたいになっています。

2. 学校という環境

確かにいじめやコミュニケーションの問題を抱え、しんどい思いをしながら最悪自殺にまで追い込まれてしまうような学校であれば、身を守るために不登校になるのは生きる選択としては間違っていないと思います。

しかし、だからと言って学校を全否定するのも何か違います。

学校という環境には、子どもが社会で生きて行くための知識や技術が詰まっています。

知識の習得だけであれば何も思い通りにならない先生や同級生のいる学校で学ばなくても、一人でパソコンやオンラインで勉強すればいいのです。

ただ、人間は機械ではありません。

単に情報や知識を詰め込むだけでは、賢くなれても幸せにはなれない生き物です。

知識とは集団の中で話し合い、擦り合わせ、反発し、折り合いながら発展させていくものです。

学校は人間が生み出した最高の学ぶ場であり、やさしさや思いやり、夢と希望と友情を確かめ合う環境であると思います。

私の妄想ですが、もし人間以外の霊長類が学校を作って子どもを教育し始めたら、人間を超える存在になるかもしれません。

学校はそこに通う子ども達を成長させ、人類を支える英知を獲得し、人として幸せに生きる技術を身に付けさせることができる、まさに子ども達の明日や未来を作り上げていく、素晴らしい環境を提供できる可能性を秘めています。

3.学校の抱える課題

人類が生み出した素晴らしい環境であるはずの学校ですが、前述した通り、現状は悲惨です。

しかしそれは学校や子どもたちが悪いのではなく、学校を運営する大人側の問題もあります。

大人たちがもっと時代の流れに能動的に対応する必要があると思います。

今の教育基本法の基礎は明治 23（1890）年の第二次小学校令からだと言われています（諸説あります）。

そこから変遷を重ね、平成 18 年に新教育基本法が制定されました。

もっともなことが書かれていますが、どれだけの人がこれを読んで実践するでしょう？

法律にケチを付ける気はありませんが、今の学校が抱える問題は、法律や理念、道徳観だけでの解決は難しいです。

生まれた時からパソコンが身近にあり、小学生の時からスマホを持ち、教科書はデジタル化で紙媒体からタブレットに進化。

昔は子どもが親に頭を下げて「どうか学校へ行かせてください」と頼んでいたのが、今では親が子どもに頭をさげて「どうか学校へ行ってくれないか」とお願いしなければならない時代になりました。

4. 解決の方法

SCとして30年、学校現場で児童生徒と教師を客観的に見つめてきました。

学校に行けない、行きたくない子どもたちと、学校へ行かせたい親や教師の果てしない攻防戦は、手のかえ品をかえ、今も続いています。

そんな不登校の子どもたちに共通していることは、どの子も本当は学校に行って、同年代の友達とワイワイガヤガヤ楽しく過ごしたいと思っているということです。

みんな、普通の小学生や中学生や高校生になりたいと思っているのです。

この「普通」のモデルとなるのは、youtube、tiktok、InstagramなどSNSの中の動画や画像に出てくる、幸せそうな自分と同世代の学生たちです。

それを見るたびにため息をついて、「ああ、みんなはこんなに幸せそうにキラキラ輝いているというのに、私は学校に行っても友達もいないし、顔も可愛くないし、勉強も好きじゃないし、部活も続かないし…」

いくら親や教師が慰めたり、励ましたり、説得しても、日々垂れ流される動画や画像が子どもたちをどんどん蝕んでいきます。

とても親や教師が巻き返せるものではありません。

昨今では人工知能AIが浸透し、高校進学に通信制や単位制が普通に選択され

るようになりました。

子ども達は学校という、ストレスフルな集団生活からの撤退を始め、個人主義を唱えます。

その個人主義は卒業後も「引きこもり」という形を取り、それは同時に子ども達をどんどん孤独にしていきます。

孤独は人間のメンタルを直撃するものですが、これも時代の流れで変わってきています。

パソコンやスマホの中にいる二次元の仲間や恋人がいれば、孤独を楽しめる時代です。

つまり、集団の力を育てる「学校」という環境がなくても、子ども達は困らない時代になってきているのです。

学校がなくても誰も困らないのなら、学校を無くせばいいじゃないかと、つい短絡的に考えてしまいそうになりますが、ここに大きな問題が立ちはだかります。

それは子どもたちの自殺問題です。

2023 年の 1 年間に自殺した小中学生や高校生は、暫定値で 507 人。

過去 2 番目に多くなる見通しで、現状では、日本の小中高生は 1 週間で約 10 人が自殺している勘定になります。

事態を重く見た文部科学省は、一人 1 台配っている端末を相談や健康観察に活用するなど、悩みを抱えた子どもの早期把握に取り組むよう全国に通達しました。

自殺の要因ベスト 3 は、①進路に関する悩み（入試に関する悩みを除く）②学業不振③親子関係の不和。この 3 つで自殺動機の半数を占めますが、残り半数の自殺理由は「不明」です。

子どもの自殺理由を学校や家庭が原因だと考えると分かりやすいですが、自殺をした本人に本当の理由を聞けないので、実際のところは分かりません。

それならば手の打ちようがないではないかと思う方もいらっしゃるでしょうが、そこに学校教育が果たすこれからの大きな役割があると思います。

私の考えですが、学校で命に関する教育システムを導入すれば、不登校やいじめ、孤独、自殺の問題も解決に向けて前進していくのではないのでしょうか。

それには現状の道德教育や理念だけでは難しいと思います。

遙か昔、聖徳太子は仏教でこの国を治めようとしてしました。

仏教のみならず、キリスト教や神道など、宗旨、宗派を問わず、スピリチュアルな力を見直す時が来ているように思います。

もちろんカルト宗教や、宗派同士の争いなどの危険性がありますが、それに怯えて、人間教育に宗教、哲学、心理学のスピリチュアル性を排除することを、私はとても残念に思う人間です。

デジタルやA Iの力が大きくなり、その弊害も大きくなればなるほど、対角線上にあるスピリチュアルは、強力な解毒作用をもたらすのではないのでしょうか。

実際、世界保健機関 WHO の執行理事会では、同機関設立憲章前文にある健康の定義を修正しようという発議が過去4回もありました。

「健康とは単に疾病または病弱であるということにとどまらず、身体的 **physical**、精神的 **mental**、社会的 **social** に完全にウェルビーイング **well-being** な状態をいう」という健康の定義に、「スピリチュアル **spiritual**」を追加すべきかどうかの議論を進めています。

がん患者の緩和ケアにスピリチュアルを導入している医療機関が増えています。

同じように子どもの心の痛みに対する緩和ケアにも効果が期待できると思います。

学校に特定の宗教を持ち込もうというのではなく、デジタル社会の解毒剤に宗教、哲学、心理学の扱う、目に見えない不思議な力を活用するのが良いのではないかと考えています。

「目に見えない力」は自然科学の世界では不合理なことかもしれませんが、合理

的なことばかり実践した結果が、今の学校の崩壊と子どもの自殺に結び付いている可能性があるのですから。

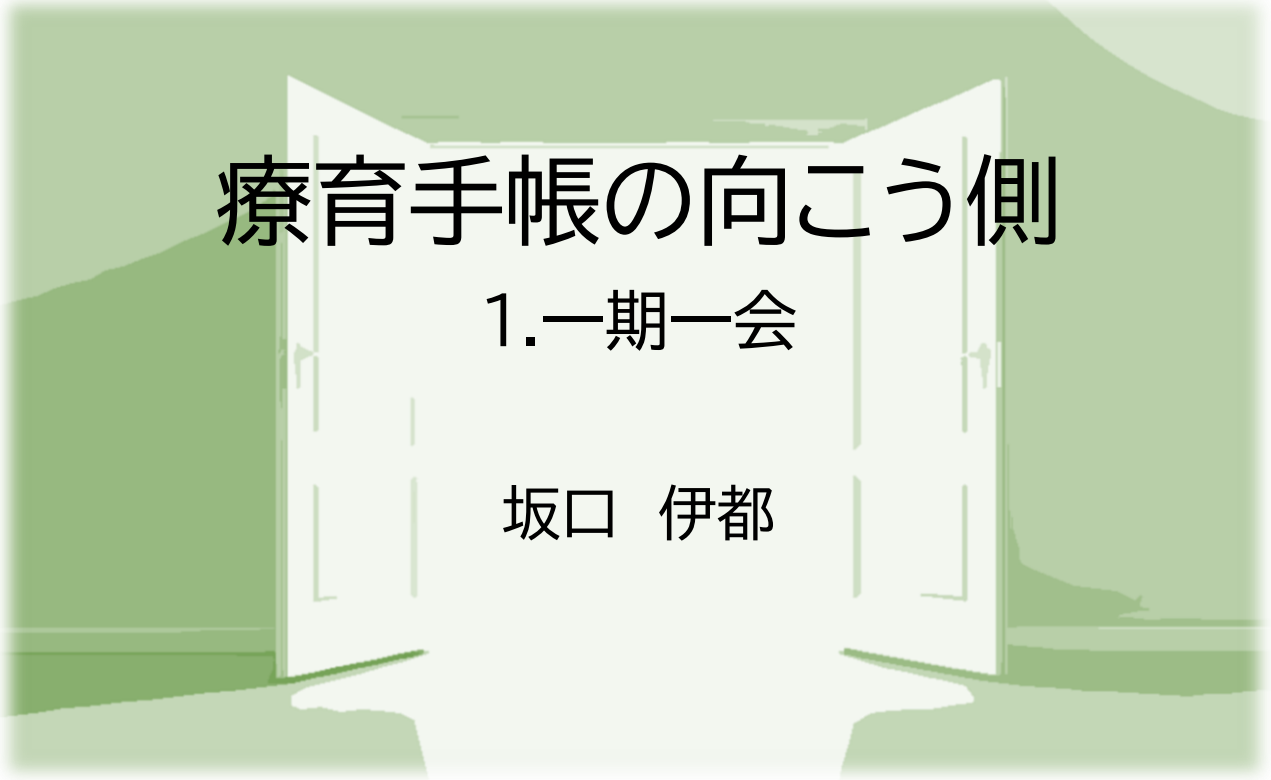
実はスピリチュアルな考え方は、証明不能で非合理的な考えとばかりは一概に言えなくなっています。

科学の進歩による量子物理学と、釈迦が唱えた原始仏教の考え方が合致しようとしてきています。興味を持たれた方はA I にそのことを聞いてみましょう(笑)。

最後に星の王子さまのお話に出てくる、この言葉で締めくくります。

「とても簡単なことだ。ものごとはね、心で見なくてはよく見えない。いちばんたいせつなことは、目に見えない」

シンガーソングライター
ふるかわひであき



療育手帳の向こう側

1. 一期一会

坂口 伊都

はじめに

家族の話をしよう。あなたにとって、家族はどのような存在ですか。自分と切っても切れ離せないものの一つが家族ではないでしょうか。家族について思うことは誰にでもあります。それを真剣に誰かと語り合う機会は意外とありません。

また、学校、病院、施設等のケース検討では、トラブルの内容やクライアントの行動問題の話は出てきますが、家族がどのような営みで生活をしているかについては、そこに意識を持って聞かないと話題にあがらないまま終わってしまうことがあります。私は、ファミリーセラピストを生業にしているので、家族の営みに関心があります。まずは家族の話を聞かせていただいてから、一緒に考えるので、トラブルの話ばかりだとクライアントの断片しか見えず困惑します。その人の全体像を知りたいければ、家族の話は欠かせません。

この連載では、療育手帳に焦点をあて、家族のことを考えていきたいと思います。療育手帳判定の場合では、当事者に目がいきますが、他の家族にも笑顔や悲しみがあり、その子が家族の営みの中で成長してきたとわかります。

では、まず療育手帳について説明します。療育手帳は知的しょうがいがあると判定された方に交付されるものです。発達しょうがいがあると知的しょうがいがある場合は療育手帳に該当しますが、発達しょうがいがあり、知的しょうがい認められない場合、療育手帳は非該当となります。その場合の手帳は、精神保健福祉手帳になります。

療育手帳の運営は全国統一ではなく、自治体事に判断基準が定められているため、療育手帳が交付

される範囲が自治体によって若干の違いがあり、名称も愛の手帳やみどりの手帳と呼ばれている所もあります。療育手帳は、知的しょうがいにより、その人が必要な援助を受けやすくしていくことを目的としており、保育所の加配の先生を依頼する、療育を受ける、支援学級や支援学校に通う、放課後等デイサービスの利用、しょうがい者枠の就職等の支援があります。ハンディキャップ部分の支援を意識し、伝え方を工夫する等で、意思疎通がしやすくなり、社会の中での生きやすさに繋がっていきます。

家族の中に知的しょうがいの者がいると、その人のことだけに対人援助職の関心が向かいやすくなりますが、家族は誰か一人を中心に回っているわけではありません。それぞれの家族の物語がそこにあります。だから、いつでも、家族の話を大切にしたいのです。

Door to Door

療育手帳の判定に出かける日は、いつもとは違う日です。親子共に馴染みのない場所や人に出逢う場です。私がドアを開けると、馴染みのない場所に知らない大人が入ってきて、大抵の子どもに緊張が走ります。顔を背けて親の後ろに隠れたり、親の顔をじっと見たりと、不安気な様子を見せます。この不安が助長される時に、親子関係がよく見えてきます。

私はまず、子どもの様子を見てから、子どもに声をかけます。

「知らない人が入ってきて、びっくりしたね。ごめんね」

「緊張するね」

「こんにちは」

親の反応は、私の言葉を受けクスッと笑いながら子どもの頭を撫でる人や

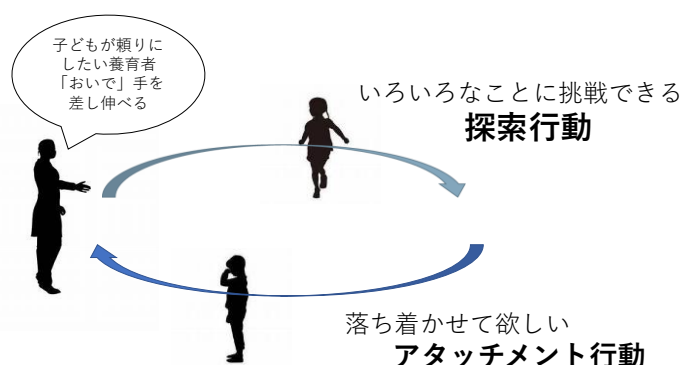
「挨拶は？」と子どもに礼儀を教えようとする人もいます。

子どもの不安を落ち着けてることを先にすると、挨拶もスムーズになりますが、順番が逆になると、子どもが上手く挨拶することができません。

アタッチメントシステムを知っていれば、容易に見えてきます。

アタッチメントは、日本では「愛着」という言葉で使われていることが多いですが、愛という言葉があることで、愛情の有無と勘違いされやすいですが、それは違います。アタッチとは、くっつくという意味で、人は誰でも不安になると誰かにくっついて安心

したくなる欲求を持っています。大人でも、真っ暗なお化け屋敷に入ったら恐怖心を和らげるために



一緒にいる人にしがみつきたくなります。子どもは、小さくて一人で生きのびる力がなく、大人に守ってもらう必要があります。衣食住を提供しても、子どもの情緒が育まれるわけではありません。不安や恐怖心等のネガティブな感情を養育者にくっついてなだめてもらい落ち着く(アタッチメント行動)、安心出来たら外の世界に関心を持ってチャレンジできる(探索行動)ことを繰り返していきます。このアタッチメントシステムが機能することで、情緒の安定につながります。落ち着かせてもらう体験を重ねると何か起きて、守られるイメージができ、自身の存在を肯定できるようになると言われています。

アタッチメントシステムは、発達しょうがいを持つ子どもには当てはまらないのではないかと、子どもの行動を見てもわかりにくいという声をよく聞きます。「親を求めているのかどうかわからない」と悲しげに話されている時、子どもが親を目で追っていたり、親に触れようと手を出して引っ込めている様子が私の方からは見えます。

親の服を子どもが掴んでくれたらわかりやすいですが、その手前で手を引っ込めてしまう時は、
「今、お母さんの方に手を伸ばしていましたよ」
と伝えると、
「えっ、そうなんですか」と驚かれて、嬉しそうな顔に変わります。

発達しょうがいの子どもも不安を感じた時は、頼れる親のそばに行こうとします。中には、発達検査の途中で、親がいる部屋に戻ってくる子もいます。発達検査をするのが嫌という面もありますが、それ以上に新奇場面に不安を感じて戻ってきているように見えます。

子どもが不安を感じた時に信頼できる養育者にくっつきに行くには、養育者が「おいで」と手を差し向けることが重要です。子どもは、くっつきに行ってもいいのかわかっています。手を子どもに差し向けるのは、来ていいよというサインです。大人の方は、意識せずにそれをしていることが多いのではないのでしょうか。何気ない行動ですが、とても大切なことです。

発達検査を終えて親が待つ部屋の戻る時は、場所や人にも慣れてリラックスして帰ってきます。
「よく頑張ったね」と声をかけられると、満面の笑みになったり、ドヤ顔をする子もいます。

親の方も子どもを褒められて嬉しそうにしていると、その空気が子どもに伝わって、かわいい表情を見せてくれます。

家族の話し

親が子どもの話をする時、どの言葉を使うかで印象が変わります。子どもの日常の様子を聞くと、あれも、これもできないという下りによく出会います。同じ年齢の子どもと比べて我が子は幼い、遅れていると言うその言葉の奥には期待、願い、不安等いろいろな感情が含まれていることが伝わってきます。

できる、できないという「ものさし」を隣に置いて耳を傾けていると、

支援学校に通うようになってからは、嫌がらずに行くようになったと聞くことがあります。

「支援学校での様子はいかがですか？」と尋ねると、

「そうですね、担任の先生と気が合うみたいで」

「それは、いいご縁があって、本当に嬉しいです」

「はい、良かったです」と安堵した顔をします。

学校に行けない我が子を心配し、苦悩していた頃を思い出しているようです。

「前の学校では、起きられなくて、お腹も痛くなるし吐くこともあって大変でした」

「そうだったのですね。元気な顔で学校に行くようになってホッとしますね。お父さんと相談して、支援学校に行くことを決めたのですか？」

「はい、一緒に見学に行って、話も聞いてもらいました」

両親と一緒に子どものことを考えてきたのだと伝わります。対面だと、口調や目線、身体の動きなどで、その方の心情が伝わってきます。話に力がこもってきたり、饒舌になったりすると、この人は誰かに自分のことや家族の話聞いてもらいたいのだと感じます。

療育手帳の判定に来るまでに幾つもの壁にぶつかって突破した家族の歴史があるのでしょうか。取り乱す人にであったことはありません。

時には、「療育手帳を取るように言われたから来た。療育手帳ってどういうものですか？」と質問されることもあり、発達指数の数値の意味合いを説明させてもらうことがあります。

「療育手帳は一度とったらずっと持ち続けるものなのですか？」

「更新時期があり、その時に発達検査と聞き取りをさせていただいて、療育手帳が出るかどうか決まります。先のことはわかりませんが、お子さんの特徴を周りの人に理解してもらって、わかりやすく伝えもらえるようになることは大切なことだと思います。」

「療育手帳って、そういうものなのですね。誰もそんな風に教えてくれなくてわかりませんでした。」

と言われると、療育手帳の役割や意味は、対人援助職にもよく知られていないものかも知れないと感じます。療育手帳を通して、子ども自身を支える方向性が見えてきたり、ほんの少しの時間でも、家族のことを話して気持ちが整理されていったら、それは家族の力が増すことになるのではないかと感じます。



周辺からの記憶 45

2022 年度 東日本・家族応援プロジェクト+

村本邦子(立命館大学)

早稲田大学災害復興医療人類学 WIMA の研究員になっているが、毎年開催されているシンポジウム「復興の人間科学 2024 福島原発事故 13 年の経験から学ぶー当時小中高生だった若者たちとの対話から<第 3 回>」に参加した。

第 1 部が若者たちの対話で、早稲田大学の学生が原発事故を経験した 4 人の若者と対話し、それぞれがその体験を紹介した後、本人からの報告があり、研究員がコメントした。私がコメントを担当した光雪さんは、小学 3 年生の時、伊達市で被災し、小学 5~6 年生頃から高校卒業まで福島市で育った。小学生の頃の記憶ははっきりしないが、運動会や鼓笛パレードは中止になり、長ズボンをはき、ガラスバッチをつけていた。「ほうしゃせいぶっしつ」という危険なモノが空気にあるという認識はあったが、時間がたつにつれ、「除染」「基準値以下」「再開」との言葉が増え、安全だと認識するようになり、中学生時代は原発や震災について考えた記憶はないそうだ。

高校 1 年生の夏に NPO 法人「アースウォーカーズ」のプログラムで 18 日間のドイツ・スタディーツアーに参加し、ドイツの高校生と交流するなかで自分が何も知らなかったことに衝撃を受け、震災・原発事故について考えるようになった。沿岸部のフィールドワークに行き、福島の話伝えたいと記者を志すようになった。大学時代は、強制避難区域に住む 4 人のドキュメンタリーも制作した。そして、この春、念願の新聞記者となり、さっそく原発事故の記事も書いた。

彼女の話聴きながら、2011 年から毎年一緒にクリスマスカレンダーを作った福島の子どものことを重ねていた。1 年目の様子、2 年目以降の変化。十年で何百人かの子どもたちと出会ってきたが、小学 3 年生、4 年生の女の子たちの顔が目浮かぶ。あの子たちはどうしているだろう、大きくなっただろうなどと思い出すことがあったが、こんなふうに成長して社会に貢献してくれているのだろう。とても暖かい気持ちになった。彼女は今後もつながっていきたい素敵な女性だ。プロジェクトを通じて、いろんな縁が繋がっていくことを幸せに思う。



コロナ禍での第2ラウンド「東日本・家族 応援プロジェクト+（プラス）」

東日本・家族応援プロジェクトは11年で第1ラウンドを終え、12年目からは第2ラウンド「東日本・家族応援プロジェクト+（プラス）」として、復興とはまだまだ遠い福島を中心に継続することに決めた。これまでは、年4回、それぞれ2泊3日で、青森、宮城、岩手、福島へチームを組んで行っていたが、これからは、年1回の4泊5日で福島へ行く。多賀城（宮城県）では、現地の有志が実行委員会を立ち上げ、自主的にプロジェクトを続けてくれることになったので、時期を合わせ、福島に入る前に多賀城に立ち寄り、合流することにした。

東日本大震災から12年が経ち、プロジェクトの形も変わって、いったいどのくらいの院生が参加してくれるだろうかと心配していたが、驚いたことに18人もの院生が申し込んでくれた。これまでも年によって6名から33名までの院生が参加してくれていたもので、18人という人数は平均的とも言えるのだが、今年からは全員が一度にプロジェクトをやるので、1ヶ所に行く人数としては最大数になる（これまで1ヶ所の最大は13人だった）。総勢22人という大人数で、しかもコロナ禍の状況はまだまだ厳しく、懸案事項が多く、嬉しい悲鳴を上げるようになった。メンバーで相談して、現地の方々にご迷惑をかけないよう、メンバーも安全に活動できるよう、あれこれ知恵を絞りながらプロジェクトの実施方法を練った。

大所帯での移動には懸念もあり、院生メンバーを4班に分け、基本的に班単位で行動すること、受け入れ先や会場の状況によ

っては、参加者数を制限し、公式に設定するプログラムと並行して、万全に感染対策をし、ルールを決めて自由なフィールドワークを多く取り入れることにした。

2022年9月2日（金）から6日（火）の4泊5日で開催したが、主な行程は下記のとおりである。

9月2日（金）
各グループフィールドワーク ・みやぎ民話の会交流会参加グループ@黒松市民センター ・せんだい3.11メモリアル交流館、荒浜小学校 ・石巻
9月3日（土）
おおぞら保育園懇談会@おおぞら保育園旧舎 パンダのトレーラーハウス 多賀城プロジェクト@多賀城市文化センター 昼食、団士郎家族漫画展&トーク参加 フィールドワーク ・都市型津波を学ぶ 3.11 語り部ツアー（タガの柵） ・東北歴史博物館 ・多賀城駅周辺散策
9月4日（日）
東日本・家族応援プロジェクト+プラス2022 in 白河@白河市立図書館（りぶらん） 遊びの広場、おもちゃで遊ぼう 団士郎の漫画トーク スタッフ交流会と次年度に向けた反省会 ママカフェ@しらかわ震災11年を聞く （一社）未来の準備室、白河の高校生たちと交流@コミュニティカフェ EMANON
9月5日（月）
福島県沿岸部フィールドワーク

・伝言館 展示物見学、館長・宝鏡寺住職
早川篤雄氏、副館長安斎育郎氏の講話
・震災遺構請戸小学校、東日本大震災・原子力
災害伝承館
・東京電力廃炉資料館、富岡町散策、原子力災害
伝承館
報告会@古滝屋

9月6日(火)

古滝屋震災考証館 F スタディ・ツアー

結果的には、人数が多かった分、多様なフィールドワークが行われ、多様な視点で報告が成され、メンバーの小さな物語が豊かに重ねられた。

9月2日(金) みやぎ民話の会との交流会

この日のメインプログラムは、黒松市民センター(仙台市)にて、みやぎ民話の会との交流会だった。みやぎ民話の会顧問の小野和子さん、元双葉町住民の目黒トミ子さん、加藤恵子さん、島津信子さんからお話を聞かせて頂いた。

初めに代表の島津さんが、「東日本大震災やコロナの影響で、なかなか足を運んでお話を聞くこともできなくなったが、このような新しい出会いもあり、悪いことばかりではないんだな、このプロジェクトと関わらせてもらっていることも自分たちにとって意味がある」と言ってくれた。

小野和子さん

小野さんは今年88歳になった。民話の採訪を始めたのは35~6歳のことだった。岐

阜県の飛騨高山の者で、縁あってこちらに来て、3人目の子どもがよちよち歩き始めた頃から一人で宮城県のあちこちを知らないまま歩き始めたという。何のつてもないところから、一軒一軒、「こんにちわ。子どもの頃に聞いていたお話があれば聞かせてもらえませんか」と訪ねて回った。5年ぐらいたったあたりから、人が入ってきてくださって、山田ゆうこさんが最初に入ってきて一緒に歩いてくださった。島津さんや加藤さんもみやぎ民話の会を通して手をつないで一緒にやってきた。

みやぎ民話の会草書という形で15冊ほど民話を活字にしてきたのと、民話の学校を開き、文字でなく直接、膝をつきあわせて昔のことを語りあうことで、立体的に民話を捉えるよすがになればと考えていた。

語り手は海辺の方が多く、例外なく家を流され、なかにはご家族を亡くされた方もいた。庄司アイさんが「形あるものはすべて流されたけれど、胸に民話がありました」と葉書をくれて、この尊い言葉を握りしめて、みなさんの経験を語ってもらうことにした。海の近くに被災された方をお連れするのはどうかという声もあったが、やはり海の近くで声を聞いてもらいたいと思った。

全国から200人ほど申し込みがあり、断るのが大変だった。6人の体験の語りを聞いたことはよかった。みなさんと出会いがあり、こうして未知のみなさんとお眼にかかることができ嬉しく思っている。

民話と言えば、昔々あるところにと桃太郎など連想されるかもしれないが、昭和30年、日本が戦争に負けた頃、木下順二さんが夕鶴の芝居を書いて、それに民話劇と名づけられた。それが民話の言葉が生まれた始

めたとされている。文字通り民の話、人々が語り継いできたさまざまな話をひっくるめて民話と言っている。私たちの会では、採訪と言って、民話を聞いて歩くというのが一番大きな仕事と考えて行ってきた。歩いて聞いた話があまりにもおもしろいものだから、活字にしてうすっぺらな冊子を出して百円くらいで買ってもらったりした時期もあった。訪ねていかなければそのまま消えてしまう話であることが多いから、何とか残せるものなら残したい。

私たちが考える民話という言葉の範囲は非常に広くて、昔々という話もそうだが、たとえば、戦争の時代に大事な息子が遠い戦地で亡くなる時に故郷に知らせを送ってきたというような不思議な話などもひっくるめて民話として受け取ってきた。そういう意味では、みなさんの周りにもいっぱいあるはず。それを民話として聴き取って記録する人がいないものだから、世間話のように消えていく。それは残念。その後を生きて行く人の使命ではないか。

短い話を語らせてもらおう。聞きに行くと一番よく出てくる話。昔々、貧乏なおじいさんとおばあさんがいて、豆っこひとつぶ拾う。艶話で恥ずかしいが、この話は非常に多い。話を聞きに行って、「昔話って何だ？」と聞かれたら、昔々と・・・と言うと、「なんだ、むかしっこって言え」と言われて。でも、この話は心を許さないとなかなか話されない。品のいい話ではないから、語り手の方々が心を許すと話してくださる。私もみなさんに心を許したから話した。

反射的にひとつぶの豆ごをネズミ穴に落としてしまう話を思い出す人もいるかもしれない。こっちの話が表の日の当たる話。最

初の話は蔭にひっそりと隠れていて、なかなか表に出してもらえない。一口に民話と言っても、出てくる話と隠れている話がある。どの話にも二重構造があっておもしろい。昔々の話はいつも現在につながっている。

「ひとつしか覚えてない」とひとつだけ話す人もいるかと思えば、一番多く語った方は 273 話。南方町という仙台の中心部の米どころにお住いのナガウラセイイチさんというおじいさんは 273 話を語ってくれた。最初に語ってもらった時は、こちらも未熟で聞き漏らしたことがいっぱいあったと思う。最初 70 歳だったナガウラさんが 90 歳になった時、もう一度聞かせてくださいと、あんなにたくさん話を覚えているはずはないと悪い心で頼んだら、「いいよいいよ」と、それから毎月一回、公民館で仲間と一緒に朝から晩まで 1 年かかって聞いた。こっちがくたびれても彼はいきいきと語ってらっしゃる。本当に驚いたことに、過去にテープ起こしたものを手元に置いて比べると、まったく同じ。これは本当に驚いたことだった。20 年経っても、「雪がのんのんのん降ってきてや・・・」と、同じ型が入っている。

とにかく時間を惜しんで歩き回って話を聞かせてもらった。みんなの周りにも、きつ



と叩かなければ聞けない話がたくさんあるでしょう。ナガウラさんの話は3冊にまとめさせてもらった。とりあえずは形にできたことが嬉しい。民話を語る人は特別ではなく、ごく普通の人で、その胸をたたく人がいたら、ひとつふたつと芋ずるのように出て来る。それまでは、胸に物語がしまわれて眠っている。その胸を叩く人がいるかどうか、叩きようによっては出てこないかもしれない。そんなふうに思っている。

加藤恵子さん

きのうナガウラさんの「ハナシ」の話を35年ぶりの小学校で語ってきた。おそろしい化け物退治の話。最後に男は化け物に噛みつかれたが、さっぱり痛くない、あれと思って鬼の口をあけてみると、「ハナシ」だったんだって。「ハナシ」の話、これでおしまい。

「これからそういう話をするからね」と言って始めて、最後に「オシマイ」の話をした。これは山形のヤマジアイコさんの本にある話。昔、おじいさんとおばあさんがいて、川からタンスが流れてきた。身分の高い人のタンスだから、一段ずつ着物を数え、「一番目を開けてお一枚、二番目を開けてお二枚・・・四番目を開けてお四枚」と。子どもたちは、「もっと聞きたい」と喜ぶ。言葉遊びみたいなものを子どもたちは喜んで聞く。子どもたちは、「たくさん覚えていてすごいね」と言うが、覚えているのではなく、絵を頭においてそれを語っているんだなと最近わかってきた。

2泊3日で南三陸でやった民話の学校が終わって、小野先生とイリヤというトンネルを抜けて高速で帰る予定だった。トンネ

ルを越えたら、こっちは下り、向こうは上りで、4台の車が見えた。4台目の車がこちらに向かってきた。3台の車が通り過ぎたところで、すぐに対向車線によけて、そのままどこも止まらず帰った。心臓バクバクだった。あの時、そのまま正面衝突していたら、二人とも確実に死んでいたし、あれは何だったのかと後で考えると、多分いなくなった人を探して行ったり来たりして寝ていなかったのかもしれないなどと考えた。

『災厄を生きる』の本で、河野先生が土着のこと書いていて、「そうだよ」と思っていたけれど、この話はしたことはなかった。その後、小野先生が若い人たちに出会って、あの時、死なないでよかったな、きっとそういう使命があったんだなと思った。不思議な大きな力がふっと車を離してくれた。わからないことをわかるというのは大事なことだと思う。



島津信子さん

震災の後、丸森も放射線量が高くて、山菜やきのこなど採れなくて、山に人が入れなくなった。手つかずのままになっているうちに、みなさん年をとって、山もお荷物になり、そういうところに眼をつけた関西電力が土地を買い、風力発電の話が持ち上がった。なぜそこに関西電力がくるのか。国有林

だから密に行われていて、県民も直接関わっていないと知らない。町の面積の 7 割が山、山奥で、人が住んでいるかどうかかわらないようなところ。蔵王にも計画があって、知事も反対して撤退した。いろんなところに計画があった。

3 年前に丸森も台風 19 号で被災して、ボランティアの方が入ってたくさん助けてもらった。自分は何もできていないと思っているので、情報をキャッチして、話を聞いたり、自分の眼で見たりしながら感じていたらいいかなと思う。関西の方にも風力発電の計画もあると思うが、再生エネルギーが必要なこともわかるが、みんなで話していかなければいけないことだなあと考えている。

丸森のサトウヒデオさんは、足が悪くて避難できず、家に残った。周りは全部崩れたなかで、家は残り、ヘリコプターに引き上げてもらった。ヒデオさんは、「ただで空中散歩できたべ」「水の中に木がポツポツ見えるの。まるで松島みてえでなあ」と語る。いったいどういう精神なのか、逆境に強い。アイさんのノアの箱舟の話みたい。90 歳になられた。

目黒トミ子さん

こうして皆さんとお会いして、震災ってほんとに悪いことだけだったんだろうかと考えている。8 月 30 日、双葉町も避難解除されたが、駅周辺だけ解除になり、我が家の方はもう帰れないだろうというところに辿りついている。帰還と言っても、そんなに簡単なものではない。道路に立っても、もううちが見えないくらい木が覆いかぶさっている。一軒二軒の話ではない。本当に皆さんに

お会いできて嬉しく思っている。

16 歳の娘さんの話を聞いて欲しい。「太平洋沿岸ではめったに見られない雪景色。小学 5 年生の兄は、家族 4 人と浪江町から避難した。車で 200 キロ走った先は、新潟県柏崎市だった。兄は転校先で、福島なんだねと言われ、軽い言葉だったと思うが、故郷の大切な言葉を笑われたように思ったのか、それから話さなくなった。人が変わった。転校して、マスクをつけると安心できると、帰宅してもマスクをはずさなかった。

避難先のアパート 1LDK は 5 人では狭い。うるさいと苦情が入った。息を潜めて暮らした。故郷の家が恋しかった。双葉町にできる未来学園の話を聞いたのは中学 3 年の時。母や姉が卒業した学校を統合した学校ができると、説明会に行くと知っている人がいた。2015 年春、兄はマスクをして入学式に行った。ほとんど初対面だったが、校長先生が、君たちはここにある現実を少しずつ変えていける未来ですと言った。1 年 2 組のクラスメイトと一緒にあれた。一期生はみな双葉郡出身で、転校先は居心地悪かった。避難先は狭くて声も出せなかった。みんな同じように悩んで、ここにたどり着いていた。4 年近くの避難生活で失われた大切な時間を少しずつ取り戻している。兄はマスクを離した。同郷で笑顔が戻る。

では、昔話をひとつ。怖い話。腕のいい漁師がいた。お嫁さんと 2 人で暮らしていたが、毎晩、夜遊びして帰る。お嫁さんは、毎晩、夜なべして亭主の帰りを待っていた。ある晩、戸を開けれと怖ろしい声がして、ランプ消して隠れていた。声はだんだん激しくなる。怖いから、今夜から早く帰ってくれと亭主に頼んでも、相手にしない。また怖ろし

い声に来て、いつもより激しく叫ぶ。戸を開ける。ミリミリと戸を壊して、声の主が入って来た。そして、お嫁さんをバラバラにして殺してしまった。

亭主が帰ってきた。足に何かがひっかかった。ランプ探したれば、あたりは血の海だった。逃げた。嫁さんの首が後をつけてくる。一本橋、足で蹴ると首は川に落ちた。年月が過ぎて、遠くで稼いだ亭主は、ほとぼりがさめた頃だと思って、帰った。夏の暑い日だったから、川で身を洗っていると、川底から真っ白なしゃれこうべが出て来て、噛みついた。そのままボコボコボコボコと沈み、それっきりだった。

小野和子先生の最後のまとめでは、声の主は誰だかわからない。女の嫉妬ではなかったか。あるだんなさんは、ずいぶんしつこい奥さんだと言ったそうだ。別の奥さんは、こんでも足りないといったそうだ。

これだけいい会ができたので、福島県のいわき市に小中校があり、協力したいと校長先生と交渉したら、授業の一環ということで視察においでになってもかまわないと言ってくれた。小中の校長先生がちゃんとしたお話もしてくださる。子どもたちの様子、校長先生のお話をこれからの教育に活かして頂けたらありがたい。良い交流会だと思うので、一歩前進して双葉の方にもお



いで頂きたい。

小野さん

目黒さんは、ある日、ふっと、みやぎ民話の会に入って来られた。自己紹介の時、これまで7度目の引っ越しで宮城に来たという。ハンドバックひとつで校舎に集まって、放浪の旅が始まった。みんなあちこちさまよって、宮城県に落ち着いて、月1で集まっているという。話を聞きたいと言ったら、目黒さんは、外の人に話さないだろうと言って、自分自身で話を聞いて記録を書いて送ってくれた。

お一人お一人にひざを突き合わせて聞いた。テープレコーダーだとみんな話さないもので、話してもらったことをその日の夜に思い出してノートに書いた。貴重な記録なのでこれを何かの形で残しましょうと言って、こういう冊子を作られた。我も我もと語ってくださる方がいて、結局44人になった。テープ起こしではなく、記録されたもの。非常に大きな収穫だった。

目黒さん

一番最後に小野和子先生に眼を通して頂けますかと言うと、いいですよと言ってくださった。17機が再稼働を待っているそうなので、生々しい本、役に立つと思う。弊社責任はないと、責任ありませんとあの裁判の結果。国はみんなに任せて、13兆円も使って、経営者はしっかり目を光らさないといけない。

小野さん

目黒さんは福島に避難して、ボランティアの方々へのお返しにと民話を初めて語っ

た。それから民話に縁が深くなっていく。民話ってそんな力を持っている。追い詰められて避難して行って、善光寺の集まりのなかで民話を語ったという目黒さんの美しさを思う。民話の力を思わずにはいられない。

震災の後、記録を2冊出したが、もう一冊、『閑上 津波に消えた街の昔の暮らし』という記録を作った。ハヤサカヤスコさん。彼女は消えてしまった閑上をもう一度呼び戻したい、そういう一冊ができたらどんなに嬉しいことかと、バラバラになった閑上に住んでいた方々を訪ねて聞き書きをして、昔の閑上を語ってもらおうということをしてもらった。みなさんが生き生きと語ってくれたことが忘れられない。

小1の時に戦争が始まり、5年生で戦争が終わった。飛騨高山の街の中央に家があった。家屋疎開といって、空襲が来たときに逃げやすくするために、うちを全部倒して壊せという命令が来て、8月15日が締め切りだった。それで、家を壊している時に、天皇の放送が流れて来た。そんなことがあったので、絶えず心にわだかまるものがあった。生きているうちに確かなものにちょっとでも触れてみたいという思いがあって、その確かなものというのが民話だった。なぜかと言われても返事のしようがないが、名もない人たちが語り継いできて、放っておけば消えてしまう民話というものを何とか留めておきたい。それを留めておくことが平和な世の中を作っていくのではないかと幼いころから思っていたんだと思う。

鵜野さん

『災厄を生きる』の本にも書いたが、聞く

って何か。単に耳から情報を入れるということではなく、入った情報を自分の体をくぐらせてリアクションしていく対話、そういう形で初めて聞くということが成立する。真剣勝負、命懸け。アレクシェービッチさんもさまざまなドキュメンタリーで、「自分は白紙の状態で相手と向き合う。私が聞きたいのは小さき人々の物語だ」と言う。戦争というと大きな物語が語られがちだが、小さき人々の物語。同じことをみやぎ民話の会のみなさんもしてきた。目黒さんも一人一人の物語を聴き取った。血肉化させながら記録していく。

小野さんは、本当のことを探し求めているとおっしゃっている。8月15日までこれが本当だと思っていたことが180度ひっくりかえされて、本当のものは何だったかと思いつけたものが民話だった。小さな物語のひとつひとつのなかに本当のことが詰まっている。

会が50年近く活動してきて、これからどんなふうに進んで欲しいか聞きたい。みやぎ民話の会のこれから。

加藤さん

聞く力について、震災後、ゆうわ座開いたりして眼から鱗が落ちるように見えてきたものがある。この十年何もできなくて、聴いてきた話を必死になって文字で起こすなかで、語るって、眼とか手とか表情、放つ何かを含めてだと思う。聞くことで、自分が変わっていく。残り少ない人生で何ができるのかなと模索しながらやっているのが現状。

島津さん

これまでずっと小野先生に頼りすぎたな

と。希望としては、小野先生に安心してもらえるような動きをしたいと思っている。そのためには自分が何をしたいのかを考えて、自分なりのものを自分で作っていかなければと思う。丸森の仮設で聞いているが、そのなかに同級生がいて、夫を亡くし、私も知らない小さな位牌があった。満州で亡くなられた兄だったという話を聞いた。

シベリア抑留のこととか、昔は語りたくなかったが、90 や 100 歳になって、「今、語らなくてどうする」と伝えたいと思っている人がたくさんいる。今、知ってるのは自分しかいないという人もいて、そういう話も聞いてみたい。瀬尾夏美さんは、東京に戻り、東京の大空襲の話とか、聞き書きをして、全国飛び回っている。自分で見つければやれることはあるんだなと。丸森のスズキエツロウさんの語りが素晴らしいのでまとめたいと思っている。

きのうスズキさんと話した。「太陽光の電話がよくかかってきた。昔からしてるさ。屋根でねえ、もっと上だ、ソーラーだー」っておっしゃる。



目黒さん

2011 年に宮城の民話の会に入会させて頂いて、それがなければとっても寂しい人生だったんじゃないかと思っている。みな

さんよい方だから。

小野さん

困りましたね。まだ私は歩けば歩けると思うのに、会の歩きが止まっている。何の希望も持っていないと言ってもいいかもしれない。会にも民話にも。つまり、気がついた人から何かを始めてくれるので、ほとんど希望は持っていない。とても大変なことだったし、頑張ってくださいとは言えない。加藤さんも島津さんも仕事を持っていた。私は仕事を持ったことがない。肩書は主婦。みなさん何もなかったところからのスタートだから、それぞれができることをやっていけばいい。小野ができることは全部やってきたので、さばさばした気持ちなんです。みんな自由にやっていけばいい。

村本

災厄が起きていても、それがなければなかった出会いがあり、人生が深まり新しいことが開けていく。そうやって先輩たちも生きてきて、それを民話に語ってきた。薄っぺらい昨今の社会に厚みを与えてくれている。感謝。福島については一区切りできないので続けていこうと思っている。多賀城の方々が自分たちで続けてくれているので、お客さんの形で伺う。蜜にならないように院生半分しか連れて来れなかったけれど、また院生たちに伝えてもらいたい。



9月3日(土) 多賀城プロジェクト

この日のメインプログラムは、おおぞら保育園のトレーラーハウスで、プロジェクト実行委員の丸山隆さん（多賀城市教育委員会）と黒川恵子さん（おおぞら保育園）との交流会だった。会場となったトレーラーハウスは、私たちのプロジェクトが2012年に初めて訪問し、黒川さんと出会った場所である。当時、このトレーラーハウスで保育が行われていた。

いつもプログラムを実施するので慌ただしいが、今回はゆっくりお話を伺うことができたのは貴重だった。



黒川さん

あの日、子どもたちとトトロの「さんぽ」を歌いながら、砂押川沿いに避難した。子ども

たちは誰も泣かなかった。避難直前に持ち出したおやつやお茶が役立ち、避難所では暗く寒いなか、窓の外の赤い火の影を子ども達に見せないようにして過ごした。夜は乳児を抱いて体温で温めて眠った。

その後、しばらくはトレーラーハウスで保育を行っていたが、新たな保育園の場所を見つけないければならぬどうしようもない時に、偶然一軒の空き家を見つけた。空き家の隣家に尋ねると、持ち主はその隣家の方で、ちょうど借主を探していたところだった。もしあの一軒家が借りられなかったら…。見えない力が働いた。

この10年間、頑張ってきたのは、もっと生きたかったのにそれが叶わず亡くなられた方々の無念を晴らしたいという思いがあったからだと思う。



丸山さん

自宅も被災し、被災者だったが、行政職員として長期に渡って避難所運営に携わった。避難所生活は、狭い空間で、先の見えない不安の中で集団生活を長期間強いられることになる。ストレスが蓄積し、それによって多くの様々なトラブルが起こった。電気やトイレなど生活に関わる問題にひとつひとつ

対応した。

東日本震災は建物の倒壊は少なかった。津波は逃げれば助けられた、助かった。逃げることは勇気のいることだが、同時に命を守ることであり、災害時にはそれが一番大切であることを忘れてはいけない。

他都市からの応援、ボランティアの支援、義援金等全国からの支援に支えられた。震災翌月の4月7日、長野県から1週間応援に来てくれた県職員が帰途に就くにあたり送信したメールがある（配布資料）。「おかしなことを書きますが、私は全く疲れておりません！確かに肉体的な疲労の蓄積は多少ありますが、心はとても充実し、元気です！なぜなら、《悲惨》という言葉を上回る《感謝の出会い》があったからです！・・・（中略）・・・必ず元気な東北、強い多賀城を築き上げ、支援して頂いた皆さんに感謝の恩返しをして参ります」。

これが十年経った今も、変わらない私の思いである。どうしても震災の記憶は薄れる。それは仕方が無いことだが、立命館が毎年、訪れて話を聞いてくれる機会が継続していることで、そのたびに私たちも震災経験を思い出すことができている。



その後、多賀城市文化センターで、団士郎漫画展と漫画トーク、防災コンサートに参加した。なお、漫画展は8月27日（土）から9月11日（日）まで開催されていた。多賀城市文化センターは、多賀城での最初のプロジェクトを開催した場所である。翌年より会場は多賀城市立図書館へと移り、以後、現在まで、当時館長だった丸山さんが本プロジェクトを引き継いでくださっている。

今回は、漫画展開催時より、NHKが張りつき取材し、院生たちも取材を受け、何度か放映された。そのうちWeb記事にもなっているものを紹介する（いつまで視聴可能かは不明）。プロジェクトを広く知ってもらうとともに、院生たちにとっては、マスコミがどのように取材し、それがどのように切り取られて社会に発信されるのかということを学ぶ良い機会にもなったと思う。

宮城 NEWS WEB 仙台放送局「被災地で続く家族漫画展 多賀城」2022年8月27日

<https://www3.nhk.or.jp/lnews/sendai/20220827/6000020714.html>

宮城 NEWS WEB 仙台放送局「京都の大学院生 津波で前回の保育園長から震災学ぶ」2022年9月4日

<https://www3.nhk.or.jp/lnews/sendai/20220904/6000020815.html>

宮城 NEWS WEB 仙台放送局「震災を描かない漫画展 被災地で支持されるのはなぜ？」2022年9月12日

<https://www3.nhk.or.jp/lnews/sendai/20220912/6000020929.html>

NHK 知っトク東北「被災地を描かない漫画展 支持される理由は」2022年9月16日

<https://www.nhk.or.jp/sendai-blog/telemasa/473468.html>



多賀城市消防局による避難訓練コンサートに参加した後は、自由なフィールドワークの時間とし、院生たちは、NPO 法人タガの柵による「都市型津波を学ぶ 3.11 語り部ツアー」への参加や、東北歴史博物館、松島などへ訪問した。夜のうちに白河へ移動。

9月4日(日) 白河プロジェクト

この日は、白河市立図書館(りぶらん)にて、「東日本・家族応援プロジェクト+プラス 2022 in 白河」を開催した。昨年に引き続き、NPO 法人しらかわ市民活動支援会との共催、一般社団法人未来の準備室、特定非営利活動法人ビーンズふくしまの協力を得た。ボランティアの高校生たちも合流し、業務分担して、全員で協力運営した。

プログラムは、「あそびのひろば」(しらかわ語りの会によるふるさとの民話、ライアーアンサンブル・ドルチェによるライアー演奏、鶴野祐介による手遊び唄とお手玉あそび)、「おもちゃであそぼう」、団士郎漫画展と漫画トークである。なお、こちらでは、8月29日(月)から9月4日(日)、漫画展が開催された。

今回、「しらかわ語りの会」会長の鳴島あや子さんがふるさとの民話を語ってくれたが、長年保育士をしておられたとのことで、年齢の低い子どもも多かったが、指人形や手遊びをアドリブで挟みながら子どもたちの関心を惹きつけ、うまく進められたのには感心した。

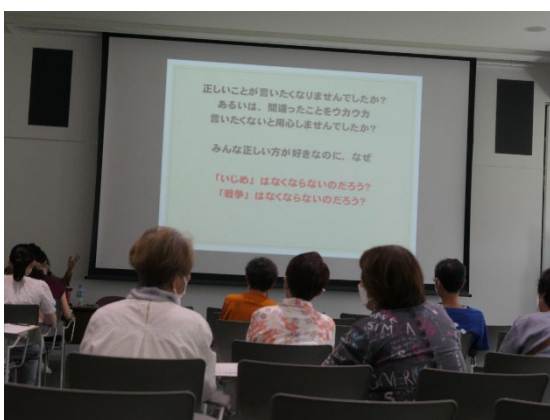
その後、共催、協力団体であるビーンズふくしまのふくしま子ども支援センター、おひさまひろば、一般社団法人未来の準備室のみなさま、しらかわの高校生ボランティアたちとの交流会を持った。「ママカフェ@しらかわ 震災 11 年を聞く」や未来の準備室コミュニティ・カフェ EMANON による高校生振り返りのためのワークショップの企画もあった。

小磯さんは東京出身で、震災後に東京に避難する選択肢もあったが、福島にとどまる

選択をした。この土地が好きだからという理由だった。当時子どもは 10 代で成長期にあり、放射線量を気にしながら県外の食材を使用し、一つ一つ安心できることを模索していきながら過ごしてきたとのことであった。ママカフェをやっている三浦さんによれば、福島の子どもたちは 2 年ごとに甲状腺検査を受けており、この検査結果を後日郵送で受け取るたびに、もしも悪い結果だったらどうしようという強い不安がよぎるとおっしゃっていた。これまで白河で子育てしてきた女性たちの声を聞く機会はありませんだったので、貴重な機会だった。



終了後、マイクロバスでいわきへ移動。夜は古滝屋の温泉で疲れを流す。



9月5日(月) 沿岸部フィールドワーク

伝言館

沿岸部フィールドワークのメインプログラムは、600年以上の歴史のある宝鏡寺にある伝言館の訪問だった。伝言館は、2021年3月に設立された木造の建物である。伝言館館長で宝鏡寺第30代住職の早川篤雄さん、副館長で立命館大学名誉教授の安斎育郎先生のお話をお聞きし、伝言館を見学した。館内には、原子力発電所の事故関係の資料や、過去の核兵器による戦争や被害の資料があふれていた。



早川和尚

来月誕生日で83歳になる。安斎先生も同じ年。原発に不安を持って声に出し、裁判を起こして物を申す行動を起こした。安斎先生は専門の立場から原子力を研究し、疑問を持って警告を出した。全国初の公聴会を開かせ、安斎先生は専門家として、私は住民として出会い、以来、一緒にやってきた。

事故後、安斎先生はずっと被災地に関わってくれ、毎月おいでになる。2018年に「悔恨・伝言の詩」を持ってきてくれたので、これを石に刻んで残そうと考えたのがあの碑。安斎先生がいなかったら、住民の立場はあっても、専門的見地にはならなかった。

コロナ前、全国からたくさん来館者がおいでになった。若い方が来てくれると非常に嬉しい。伝言の部分を受け取って頂けたら。

安斎先生

東大の工学を出て、医学部に就職し、アカハラにあいながら原子力発電に疑義を呈し、立命館に来て平和学を教えていた。この寺は1893年創建、大円山智相院宝鏡寺というが、太平洋戦争では、お寺も金属などを供出させられ、百軒あまりあった檀家の若者が20人以上死んでいるそうだ。12月8日からの特別展は、宝鏡寺の太平洋戦争。

1973年に反対運動で和尚と出会い、半世紀おつきあいしてきた。住民も結構頑張ったと思う。国家や大資本に抗うのは大変なこと。70年代には慣れないなか手探りでやっていた。戦後十年は、米軍の管理下であり、ほとんど何もなかった。1954年にビキニ事件があり、1961年にはソ連がサハラで世界最大の水爆実験をやった。その衝撃は

地球を3回回ったという。そんなに大きな水爆を作っても、放射能だらけで入って行けなくなるから使い勝手が悪い。それでも競争があった。

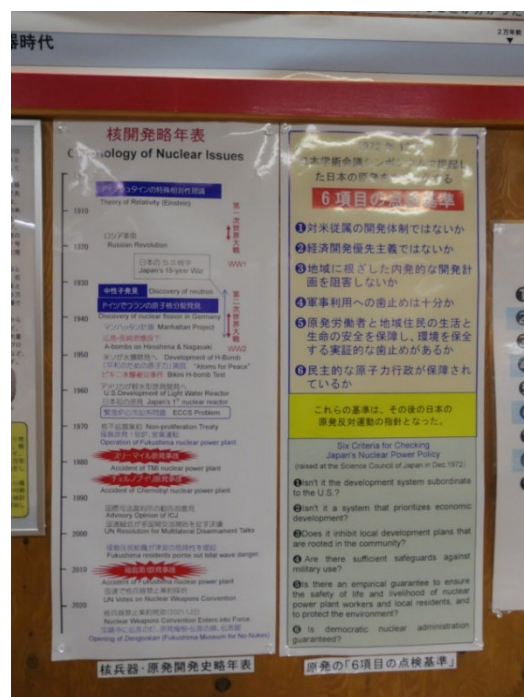
ビキニ事件をきっかけに日本の原水爆禁止運動という最初の市民運動が起こったが、内部の政党レベルの対立が持ち込まれ、外国からの干渉もあり、60年代には市民が参加できないような政党運動に分裂してしまった。1957年に岸信介が自衛のための核兵器は憲法違反ではないと言った。1960年代には安保闘争、ベトナム反戦運動などあったが、池田隼人が所得倍増計画を打ち出し、高度経済成長期に環境問題を無視したために四日市ぜんそくなど公害、環境問題も起こり、市民運動がないまぜになってみんな参加するようになった。

70年代に入ると、いよいよ原発の出番で、アメリカが「大気を汚染させない原発をどうぞ」と日本に持ち込んだ。1968年にここから一番近い福島第二原発の計画が発表され、71年に第一原発が運転を始めた。この国が原発列島化する初期に福島が狙われたのは、もともと福島は、常磐炭鉱、水力、火力と、エネルギー源を引き受ける県だったこともある。電力会社の人に言わせると、原発を持ち込むには、①保守の地盤が強いこと（反対運動が起こらない）②経済的地盤が弱いこと（お金で丸め込める）③自然科学的地盤は三の次でいいということらしいが、まさにここが狙われた。70年代を迎え、1972年の田中角栄の列島改造論から1974年の電源三法から地方交付金がたくさん出るようになった。

1973年に和尚からお声がかかった時には、東大医学部の助手だった。その前の年に

日本学術会議で初めて原発問題のシンポジウムを開催することになって、若干32歳だった自分が基調報告者に選ばれた。当時の学術会議は、もっと民主的だった。30万人の科学者の有権者から立候補して、科学の7つの分野につき30人ずつ代表者を選び、国会議員と同じやり方で決めていた。今は学会で有力な人が任命されるが、市民運動に関わる科学者たちが任命されていた。貼ってある6項目の点検基準は、当時の原発反対運動の指針だった。

福島第二原発一号炉をめぐって公聴会を開けと言って、1973年9月18日に最初の公聴会を福島市で開いた。これはとんでもない茶番劇だった。住民の声を聞いたと言うが、総動員して賛成派に申し込ませて、申し込んだつもりがない人にも通知があって発覚した。圧倒的多数の賛成派がしゃべることを圧倒的多数の傍聴人が聞くというものだった。





その後、福島大学の科学者や弁護士、東京や東海村の科学者が協力して、「60 人の主張」というものを作った。自分たちが公聴会で答弁するならこういうものだという声を本にしたもの。住民と専門家で、1975 年に裁判を起こした。取り消し訴訟、17 年かけて出た福島地方裁判所の判決は、「冷却水が途絶えたらとんでもないことになるというような住民側の主張は想定できなくはないが、そういうことを言い出すと、事実上すべての原発は運転できなくなる。だから想定しない」というものだった。原発を動かさないことは起こらないことにするということだ。ただ、裁判をすれば、資料を出さざるを得なくなるので、それを眼にすることができる。詳細な安全審査はやらないことがわかり、そういう意味ではやった甲斐はあった。まだ若かった早川さんが地域住民束ねて頑張った。

1960 年にチリ地震、マグニチュード 9.5。あれ級の津波が襲ってきたら、福島原発は大変なことになると、その時期から訴えていた。非常用電源が水没して、そのとおりになった。「これは最悪ではなく、3 月 11 日は不幸中の幸い。海に風が吹いた時期だ

ったが、夏だと陸に風が向くので、もっと大変なことになっていた。これが最悪だと思うなよ」和尚が警告している。

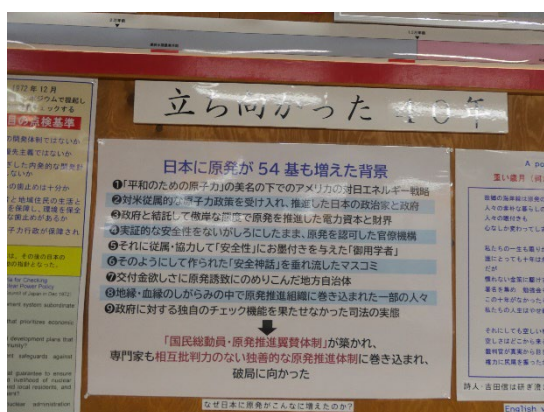
今もまだ、中にマグマが沈み、格納容器まで溜まっている。今年、ロボットを使って数グラム取り出したが、全部取り出すことはできない。そして、取り出したものはどこにいくのか。強烈な放射能で、引き受けてくれる県があるとは思えないし、福島の山手のどこかに埋めるのか。放射能がなくなるまで何万年もかかる。地下水脈にぶつかったら爆発するから、たえず冷やし続けられないといけない。あれがある限り、福島の住民は故郷に帰りたくない。このあたりは数百年に 1 回は地震がくる。40 年で取り除くと誰かが言っちゃったからそういうことになっているが、とてもじゃないけれどできない。百年規模で時間がかかる。

原子力を最初に本格的に学んだ東大 1 期生 15 人のなかで 13 人生き残っているのが年に一回集まって飲む。みんな意気消沈している。どえらい仕事をやってきた人たちがこんなことになるはずではなかったと。廃炉作業には 3 年の出向で来ているが、それでは本気にならない。廃炉措置をやっている技術者や科学者を公務員にして取り組むべきである。全部国家公務員にして若い人どんどん入れて、新エネルギープロジェクトと両方に関わってもらうなどするとかなければ復興も絵空事。

2018 年に詩を書いた。国家権力に抗ったけれど、牙を抜くのを防げなかった悔しい思い。和尚に見せたら、石に刻んで残そうと、アフリカ産の何百万もする黒い石に刻んだ。科学の認識をきっちりすること、人間への限りない愛を土台にして、権力に対峙

することを怖れてはいけなと伝言を伝える施設を作ろうということになった。和尚が東電の賠償金と私財を投げうって作った。

この部屋は特別展示のためのもので、今日から始まった。歴史を押さえないといけない。お釈迦様の世界認識。和尚が「これによりてこれあり、これなければこれなし」と書いた。太平洋戦争のように無謀なことをしたために、従属国家になり、アメリカのアイゼンハワーが国連で安全エネルギーだと言って、こんなことになってしまった。



早川和尚

行動に移したのは1972年。71年3月26日に第一原発が動き出した。その前に、双葉原子力地区開発ビジョンというのが1968年3月にできている。後になってこの存在

を知った。国や東京電力、東北電力が作ったもので、3章からなり、冒頭に、一般的に言って、送電コストを含めた発電コストのこと、人口密度、産業水準の低い所を見つけると書かれている。「何だこれ」と気づいた人があって、全部解消された。現在は国会図書館にしかない。1953年12月8日にアイゼンハワーが原子力の平和利用を言った時、危険性は知らされなかった。福島の復興というのも同様に安全神話。あるのは10万年先。燃料デブリが無害になるには10万年になる。そして、その予算はみなさんから取られている。だから復興はそこから後の話になる。

楢葉町には高速の降り口に遺跡があった。旧石器時代の遺跡で3~4万年のもの、原発が無害になるまでその3倍も4倍もかかる。



双葉駅周辺

その後、グループに分かれてのフィールドワークとなった。私たちは、双葉駅周辺へと向かった。途中、道路上の線量計が間引かれ減っていることに気づく。黒いフレコンバックも見えない。しかし、大熊の帰還困難区域には、黒いフレコンバックの山に緑のシートをかぶせたものがあり、周囲には木が茂り始めていた。このまま見えなくなっていくのを待っているのだろうかと思ってしまう。

この日は、ちょうど駅前に双葉町役場新庁舎がオープンした日で、駅前には芸能人が来ており、テレビカメラが入っていた。メディアが見せるのは、切り取られたこの風景だけなのだろう。駅のインフォメーションセンターには2人の女性スタッフがいて、お一人は6月に対応してくれた人だった。今回は20代くらいの若い女性に対応してくれた。神奈川の人らしい。聞いてみると、双葉に戻ったのは知っている限り2世帯で、交番と役場の若い人。駅裏の公営住宅が10月に完成すると27世帯は入れ、20世帯はすでに決まっている。移住者もいるという。

役場の中にも立ち寄ってみたが、昼休み中だからか電気を消し、暗い中で、たくさんの職員が弁当を食べたり、パソコンに向かったりしていた。後で聞いたところによると、百人の職員がいるという。

双葉駅の裏も解除されたので、線路をわたってみるが、線路には「窓をあけて安全確認を」の看板があった。あまり見ない看板の文句だと思うが、アピールなのかと思ってしまう。公営住宅の工事が進んでいた。





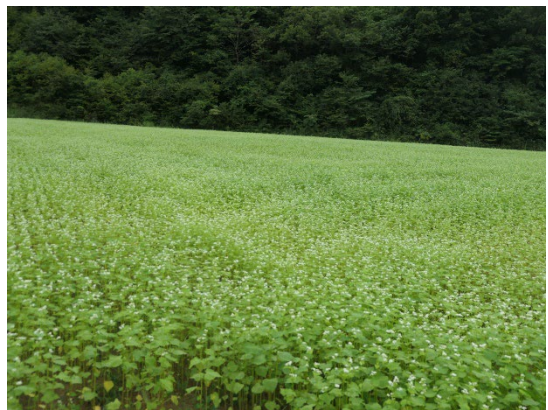
今回、とくに印象的だったのは、双葉町の光と陰だった。6 月にも福島県沿岸部を訪れ、特定廃棄物埋立処分施設の見学をしたが、昨年末まであちこちで眼にしていた黒いフレコンバックの山が見られなくなっていた。これは、たしかに復興計画に沿っており、住民にとっては少なくとも悪いことではないと思う。

それでも、見えなければ問題はなくなったのかと言えば、そんなはずもない。帰還困難区域を車で走っていると、緑のシートをかぶせたフレコンバックをたくさん見かけ、周囲には木が生え始めていて、人が帰ってこないところでは、時間経過とともにフレコンバックを包み込んだ森になっていくのだろう。

双葉駅周辺のごく一部だけを切り取ってみれば、ピカピカの新しい町の誕生の物語になるが、その場所からほんの少しだけ離れると、まったく異なる風景が見えてくる。福島に関心を持って遠方から短い時間で訪問する人々は、見えるものから復興の物語を受け入れるかもしれない。そうなれば、復興したのに帰還しない人々は、それぞれが好きな選択をしているだけだと考えるだろう。双葉町のある人が、「自分たちは避難しているのではない。避難させられているのだ」と言った。そのことのリアルを知って欲しい。

飯舘村

それから道の駅なみえでなみえ焼きそばを食べ、飯舘村に向かう。飯舘村にはたくさんのフレコンバック。やはり緑のシートをかぶせ、植物が生えてきている。長谷川さんの蕎麦畑には、蕎麦の花がきれいに咲いていたが、周囲はフレコンバックが山と積まれ悲しかった。





宿に帰って、食事をしながら、それぞれのフィールドワークで経験してきたことを報告し合う。院生たちのグループは、それぞれ、震災遺構請戸小学校、東日本大震災・原子力災害伝承館、東京電力廃炉資料館を訪れたり、富岡町散策をしたりしていた。

双葉町では、マイクロバス、レンタサイクル、徒歩などグループによっていろいろな手段で回ったようだが、8月30日に特定復興再生拠点区域の避難指示区域を解除され、住民の居住が可能な区域となったものの、その現実に吃驚し、「この街が本当の意味で生きた街になるのにあとどれだけの年月を要するのか想像もできない」と漏らしていた。



9月6日(月) Fスタディツアー

最終日は、全員で、古滝屋 F スタディツアーに参加した。いわき湯本温泉古滝屋第16代当主里見喜生さんのガイドのもと、まずは古滝屋内にある考証館を案内頂いた。

院生たちの眼を惹きつけるのは、やはり、木村紀夫さんのインスタグラムだろう。当時小学1年生だった娘さんが津波で行方不明となったが、原発事故のために捜索ができず、父親自身が5年9か月を経てようやく遺骨の一部が見つかったという捜索現場を再現したものである。

その場所は、人間が立ち入らない間に、古代の植物が生え、絶滅危惧種の鳥も集まってきて、フカイの森のようになりつつあった。サンクチュアリだと思っていたが、そこにもまた防潮堤ができることになった。木村さんのFBでは、きのう「ついに・・・」という言葉とともに、虎ロープとショベルカーの写真が貼られており、落ち込んだという。誰も棲まない場所のはずだが、利権なのだろうか。

それから、マイクロバスで双葉郡を中心にガイドして頂いた。



富岡町では太陽光発電のパネルが広い敷地に一面張り巡らされている。当時は美しい田んぼだったが、放射能被害で農地が価値のないものとなってしまった。むごい光景だ。



それから、いつものように夜ノ森駅の前でバスを降りた。オリンピックに合わせるかのように2020年に新設された駅構内から外を見ると、線路の左側には新しい住宅が並び、車が置いてあって人が住んでいる一方、右側はまだ立ち入り禁止区域となっている。線路一本が放射線を遮るのか。奇妙な光景である。

立ち入り禁止区域には、11年前の震災当時のまま放置された自販機や家々が残っている。元は新興住宅地であったということ

で、おそらく新築だったと思われる家も、雑草に覆われていた。すでに解体された家の跡地にも草が生い茂る一方、いまだに持ち主と連絡がつかず放置されたままという家もあり、窓ガラスが割られ、玄関がこじあけられて中のものが盗まれていた。



それから富岡アーカイブ・ミュージアムへ。これは、富岡町の博物館で、地域資料や、東日本大震災と原発災害で生じた震災遺産を収蔵・展示している。「複合災害を地域の歴史に位置づける」を目指し、地域で長い時間をかけて積み重ねられてきた日常が覚悟なく奪われた事実を町・町民の目線で伝え、「あの日」を境に起きた地域の変化を紹介

しているという。

HPによれば、富岡町を中心に近隣地域の「歩み＝歴史」を残す拠点（残す）、富岡地域を中心に近隣を含めた「地域の特徴」を継承・発信する拠点（まもり、つなげる）、地域の運命を変えた震災と原子力災害を歴史の大きな「1 ページ」に位置づける拠点（記録する）、「人類初」とされる我々の経験を後世に伝え、将来と世界に教訓を発信する拠点（学び伝える）、「こころの復興」につなげる町民や地域住民の交流の場、交流人口・関係人口拡大の場（交流）をその思想としている。



ミュージアムにはひしゃげたパトカーが展示されてある。東日本大震災の発生当日、2人の警察官が使っていた車両で、町民を避難誘導していたが、大津波に襲われた。このパトカーは、立ち入り禁止区域に放置されていたが、2015年に町民の希望で公園に移設されていたものだ。この公園には、現在、この警察官らを含む町民の慰霊碑があり、絶やさず花が手向けられているようだった。

つづく

精神科医の思うこと③⑤

『児童自立支援施設』

松村 奈奈子

児童自立支援施設の嘱託医をしています。毎年、秋には文化祭があって来賓として呼んでいたのですが、都合が合えば参加させていただいています。ここ何年か参加できていなかったのですが、今年は久しぶりに参加しました。毎回の定番は、児童たちの作文の朗読発表と太鼓。太鼓の発表は京都の施設独特の企画なのですが、一生懸命に和太鼓を叩く子供たちを見ると、毎回じーんときて、じわっと涙が出てきます。今年もウルウルしながら見ていて、いろいろ思う事があったので、今回のテーマは「児童自立支援施設」

だいたい「児童自立支援施設」ってなんだ？ですよね。私も精神科医になって、しばらくは知りませんでした。その後、たまたま思春期を専門とする先輩が、『「児童自立支援施設」ってのがあって、ヤンチャな子供たちがいて、精神科嘱託医としてお話を聞く仕事があるんだよー』のなんて話しているのを聞いて、「おー、私もいつかヤンチャな子の話を聞いてみたいなー」なんて思ったのですが、その後は病院勤務が中心で忘れていました。

たまたま異動で京都郊外の総合病院に勤務していた時、「児童自立支援施設」の子どもが診察に来ました。施設に精神科の嘱託医はいるのですが、施設内ではお薬が出せないの、施設外の病院に通院するようです。聞くと、施設は病院のすぐ近所にあると話します。「おー、昔に聞いた施設は近所だったのか」と思い出し、しばらくして「患者さんの生活を知りたいので見学したい」と希望して施設におじゃまさせていただきました。

見学させてもらった京都の施設は夫婦小舎制で、いくつかの寮があって、ひとつの寮には夫婦とその家族が生活するスペースと、ドア一枚を隔てて10人前後の入所の子ども達が生活するスペースがあります。「おー、こんな感じで関わっていくのか！」「健康的な家族と共に暮らす事で、子ども達はいろんな事を学ぶシステムなのか」「スタッフはエネルギーのいる大変な仕事やなー」などなど、とにかく驚きの連続でした。「児童自立支援施設」なかなかスゴイです。私もうまく説明できないので、「全国児童自立支援施設協議会」HP(<https://zenjikyo.org/>)で詳

しく説明されているので、興味がある方は覗いてみてください。明治には「感化院」として始まり、昭和初期には「教護院」となり、平成に「児童自立支援施設」と名前を変えた歴史も書いてあります。

その後、総合病院を退職したあとに人事担当の先生に「空きがあったら児童自立支援施設の嘱託医をしたい」と希望を伝えていたら、願いかなって十数年前から嘱託医の仕事をさせてもらっています。月に2回しか診察に行かないので治療と言うよりは、ほんと「お話を聞く」感じなんです。逆に私が子ども達や寮のスタッフさんからたくさん学ばせてもらっています。児童相談所の嘱託医でもあるので、児童相談所で診察した子どもを施設をで診る事もあるのですが、みるみる変化する姿に驚かされます。

月に2回の診察ですが、子ども達は全員、入所直後に1度必ず診察をすることになっていて、その後は本人の希望やスタッフの判断で診察に来る感じにしています。そして私の希望で、卒業前にも全員診察させてもらっています。それは、みんなの成長を確認させてもらうためです。初回の診察では入所の経緯を心理スタッフなどから聞かせて頂くのですが、それはそれはキビシイ人生を体験した子ども達が多いです。「うーん、私でもその環境で生活したら、人を傷つけたり、自分を傷つける行動をしちゃうよな」と思ってしまいます。もちろん、子ども達にも直接入所の経緯を聞いてみるのですが、淡々と被虐待の経験やネグレクトの経験を語る姿に、「大変やったなあ」としか言えない私です。人や自分の心や体を傷つけるのは、心や体を傷つけられたからです。大事にされたと感じている子ども達は、人を傷つける事はしないと私は思っています。

施設内は規則正しい生活で、スマホもゲームありません。現代の10代の子ども達にはなかなかハードな生活です。子ども達は最初は「ブーブー」文句を言うのですが、次第に「野球が楽しい」と自主的に素振りをして出来た手の掌のマメを見せてくれたり、レクリエーションで行った釣りでアジがとれたと、楽しそうに話します。ここは鍵のない寮生活なので、子ども達の心をとらえて、関わっていくスタッフはすごいなあいつも思っています。そして、私は卒業前の子どもの診察では必ず「ここに来てよかった？」と聞きます。ほぼ全員が「うーん、いろいろあったけど、ここに来てよかった」と答えます。もちろん私も「ほんま、成長したなー」と全員に返します。初回の診察で「夢なんかない。早く家に帰りたいわ」と言ってた子どもが「とりあえず、高校に行く」「ここで野球やって楽しかったし、高校は野球部に入る」なーんて前向きな言葉を言えるようになっていく変化に、いつも感動します。

嘱託医になって初めの頃は、寮での子ども達の生活が気になって、時々「お昼ごはん」の時間に寮まで出かけて行って、子ども達と一緒にご飯を食べたりしていました。寮を担当する夫婦が学校の事などを聞いたり、食べ方の作法を教えたり、本当の家族の食卓にお邪魔した感じです。診察の後、夕食後のリラックス時間におじゃまする事もあるんですが、リビングで子ども達がテレビを見たり、寮を担当する夫婦の幼い子ども達と一緒に過ごしている姿を見ると、あっ

たかい大家族のような雰囲気、これがこの施設のスゴイところだなあとします。

ただ、京都はまだ夫婦でひとつの寮をもつ夫婦制ですが、他県のいくつかの施設はスタッフが夫婦ではなく交代制の施設もあります。

ずいぶん前ですが学会で「自立支援施設」を研究している大学が全国の入所中の子ども達にアンケートを取ったら「夫婦制」の方が「交代制」より子ども達の満足度が高いという結果を発表されていました。そりゃそうだな、と思います。ただ、3組に1組が離婚する昨今、夫婦でお互いを信じて話し合って同じ方針で、関りの難しい子ども達に向かっていくのは、スタッフ自身の健康的な精神とこの仕事に対する「思い」がないと続かないと思います。いやー、恥ずかしながら私は旦那と方針が合わずきつと大ゲンカになってしまいそうで、できません。心理スタッフともよく話すのですが、マジで尊敬しています。

たった十数年の嘱託医の経過ですが、ここ十年で入所してくる子ども達の理由が大きく変化している事に驚いています。よく知られたことですが、いわゆる非行少年はバブル期(1983年頃)から減少し、現在はバブル期のたった 10%程に急激に減少しています。

十数年前は、「バイクを盗んで乗り回して警察官ともめちゃった」「入れ墨いれちゃった」みたいなヤンチャ系が主流でしたが、いろんな意味で入所する子ども達の理由が多様化したな・・・と感じます。性にまつわるケースが増えた様にも思います。

子ども達が熱意ある夫婦やスタッフの中で大切に思われる事で、大きく変化をするのを目の当たりにすると、子どもの成育には関わる大人の影響がほんと大きいんだと感じます。夢も持てず、自暴自棄だった子ども達が、難しい太鼓の曲を暗記して、みんなで一丸となって和太鼓を一生懸命にたたっている姿をみると、入所してから成長がひしひしと伝わり、いつもウルウルしてしまいます。自立支援施設でお仕事できてよかったな、と思っています。



原作 芥川龍之介
漫画 柳たかを



クモの糸

原作：芥川龍之介
漫画：柳たかを

古代インドでは人は生まれながらにして決められた血統集団に属し死ぬまでその血統からぬけたすことは許されない
この身分制度はカーストと呼ばれその数が二千もあるというから驚く

人々の願いは現世で善行をつみ来世で少しでもよいカーストに生まれることだったのではないだろうか

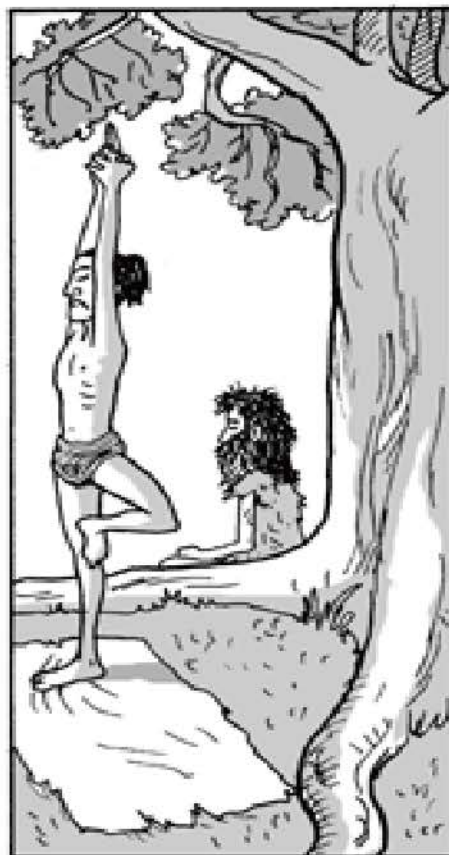
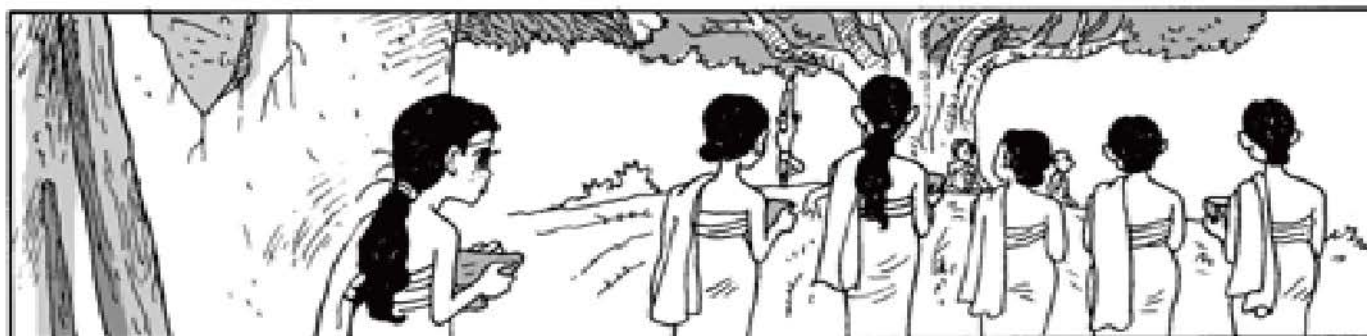
作者の想像だが悟りをひらくため苦行にうちこむ宗教修行者の姿は女達の目には現代のロック歌手を見るように魅力的に映っていたかもしれない



クモの糸

原作：芥川龍之介

漫画：柳たかを





クモの糸

原作：芥川龍之介
漫画：柳たかを





クモの糸

原作：芥川龍之介

漫画：柳たかを





クモの糸

原作：芥川龍之介

漫画：柳たかを





クモの糸

原作：芥川龍之介
漫画：柳たかを



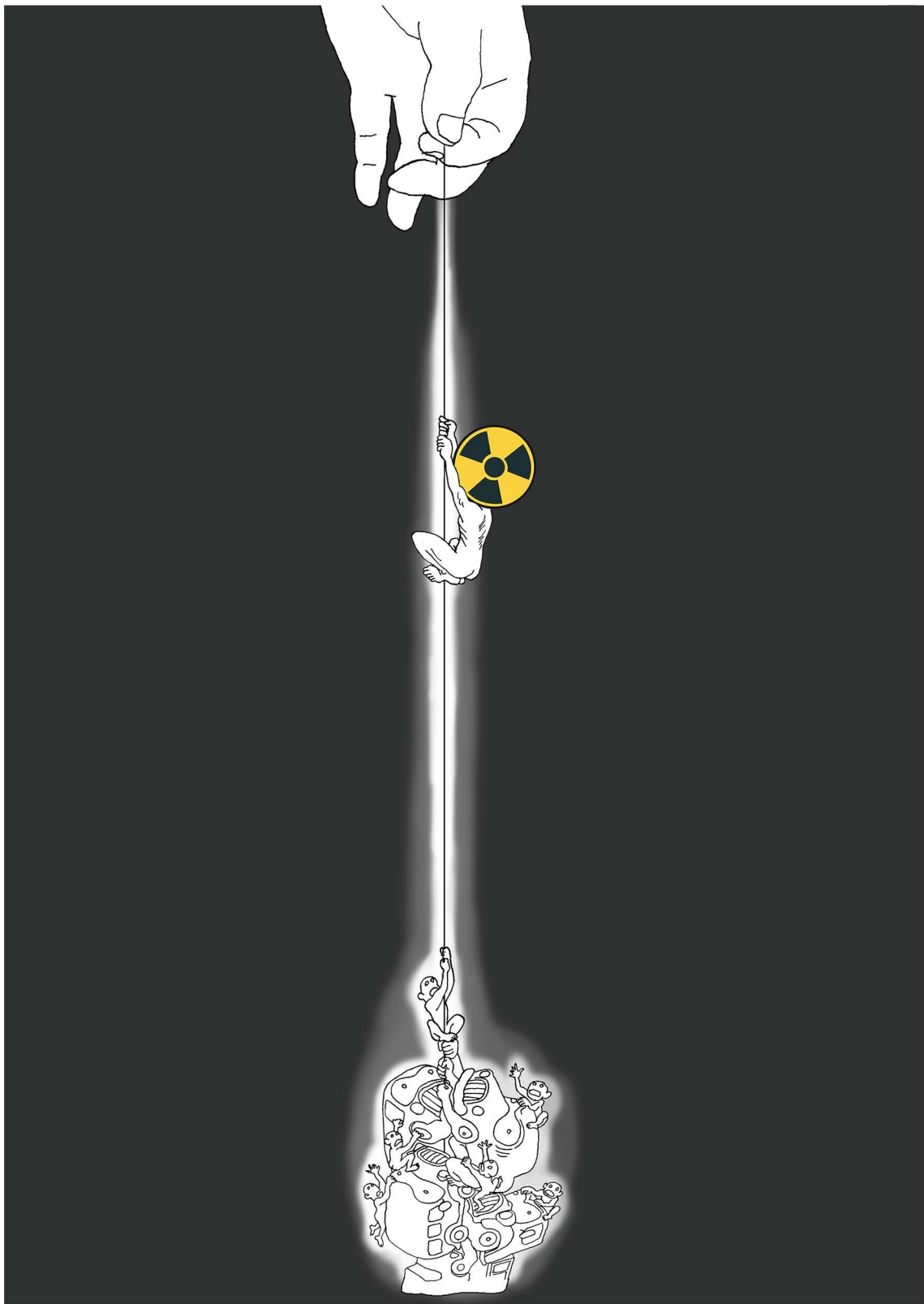


クモの糸

原作：芥川龍之介

漫画：柳たかを





ヒトコママンガ「クモの糸」 柳たかを

文学賞の芥川賞はこの作家の名前を冠したもの、芥川龍之介作「蜘蛛の糸」は 同氏の短編作品の一つ。仏様は人の悪行も善行もすべてお見通し。ただどんな極悪人でも最初から悪人として生まれてくるわけではない。慈悲の目ですべての人をごらんになっておられるのが仏さま。この名作を短編マンガに描き下ろしたのが今回のコミック、全4回連載です。上のヒトコマはこの小説の狙いをヒトコママンガにしたものです。

居場所の大人にできること

- 子ども食堂篇Ⅶ -

馬渡 徳子

した。

10月20日(日) 無料塾寺子屋えがお・子ども食堂の母体の公益社団法人と社会福祉法人主催「やすらぎの里まつり」が、コロナ禍を経て約800名の参加者で賑わった。

私たちは、①ボランティアによるポップコーンの実演販売、②能登半島地震子どもの放課後支援チーム N-ASCATと金沢大学と富山大学学生チーム N-ASCAT-U、能登半島地震・豪雨支援:出張あそび場「プレイカー」の共催でプレイカーとかえっこバザールを出店

当日は、雨上がりの曇り空で、早朝からの強風でテントの設営が叶わず、おもちゃや絵本が飛んでしまいそうになり、乳幼児の参加もあることから安全面では終日配慮が必要であった。

全国的な取り組みであるかえっこバザールのかえるポイントカードを持参した子どもたちも18名おり、子どもたちは90名、保護者を加えると150名を超える賑わいだった。口コミとInstagramの広報力で、これまでご



縁のなかった方々にも地域の居場所を知っていただくことができたと思う。この企画を通じて、早速翌日より子ども食堂の利用につながった方もいる。



準備は8月から進め、毎週月曜日の子ども食堂の時間帯に、子どもたちと少しずつ企画を詰めて、広報チラシや掲示物、進め方や当日の役割分担、定型ルール+αマイルールなどを決めて作成した。

おもちゃや絵本、新品の文房具は、子ども食堂の仲間たちと私の勤め先のほのみこども園の保育士たちが企画趣旨に賛同くださり寄贈くださった。

子どもたちや保護者、保育士からは「おもちゃの整理の機会になった。」

「おもちゃや絵本を見ながら、思い出話ができた。」「自分で自分の大切にしてきたおもちゃに価値をつけるっていいと思う。」「プレイカーでの遊びや、お手伝い立候補でかえるポイントがつくと、手ぶらで来てもいいというのが良かった」「大人スタッフよりも遊びの上手な子どもが、ゲストの子ども

に伝授したらかえるポイントがつくというマイルールが良かった。いっぱい褒められる子どもの誇らしげな顔を見ると嬉しかった。」「次は、いつやるの？ 年末大掃除の時に子どもと整理をしておきたい。」といった感想もいただいた。

大学生ボランティアによる提起の効果で、ここ2年間のイベントは、子ども主体の運営が貫かれている。

思いもつかないような発想と創造力を観察していると、どう運営するかによって、子どもたちのもつ力を見逃してしまうかもしれないなどと毎度反省している。

被災地巡るプレイカー

その名は「じんべい」

ここにあり



心理コーディネーターになるために Vol.16

山下桂永子

☆教育相談記録の保管

ある年度の初め、書類の廃棄について行政職事務の A さんからのお知らせがあった。教育センターの書類について、1 か月ほど先の日程で、焼却処分することができるのでそれまでにまとめておいて欲しいとのこと。焼却処分と言っても、業者に引き渡すのではなく、それぞれの課の管理職が焼却炉に同行し、直接焼却炉に書類が入った段ボールを箱ごと放り込むのを見守るので、個人情報をもれる心配はないとのことだった。



それはありがたい。教育相談の記録は個人情報の塊である。20 年ほど前に私がこの仕事についたときは一部手書きだった記録も今や紙に印刷されて増え続け、倉庫に保管されている。毎年紙の書類が増え続けるのでこの数年ほどは相談記録が入れられた小さな倉庫の容量が限界を迎えていた。棚に収まりきらない書類が段ボールに入れられ、倉庫にうずたかく積まれ、下の方の段ボールは重みに耐えかねてひしゃげている。

数年前に一度その下の方の段ボールを引っ張り出して埃だらけの古い記録をシュレッダーにかけて少し減らしたことはあるが、一日中シュレッダーをかけても処分できるのは 1 箱程度で、労力がかかってしまうのと、そのうちシュレッダーが悲鳴をあげて変な音が出たので、数年分を処分して諦めてしまっていた。



段ボールごと焼却できるの？それはいい。これで少しは記録が大量に押し込まれている小さな倉庫の容量も増えるというもの。そもそもそんな制度があったならばよ言わんかいという思いもあったので、A さんに聞いてみると、市役所の方では普通に毎年通達があり、規定年数の超えた個人情報処分されているが、教育センターではどうやらあまり認知されていなかったらしい。去年までは市役所で勤めておられた A さんが、今年はきちんと教育相談にも情報を伝えてくれたということだった。さすが A さん、市役所で大変な行政のやりとり

や膨大な書類に揉まれておられただけある。非常勤の相談員にまで情報が丁寧に伝わるようにいつも工夫してくださっているなあと感激しつつ、なるほど、そりゃ役所こそ市民の個人情報の集まる場所なわけで、このご時世、そのあたりちゃんとしてるよねと思った。

しかし、市役所とは別の場所にはあるけれど、ここも教育委員会の一部署で、れっきとした公的機関なわけで、これまでそのあたり誰も触れてこなかったけれど、教育相談記録をいつまで残し、どういう方法で処分していくのかちゃんと決めておかないといけないよなあ。というわけで相談記録の処分について検討してみることにした。



☆記録の保管期間

まず記録の保存期間と言うものは法で定められている。調べてみると、基本的には行政にしろ、医療にしろ、記録の保存期間は5年であるらしい。「えー、5年はさすがに短くないですかね？」という意見が相談員の先生方からも出る。それはそうだ。教育センターが教育相談で関わっている児童生徒の対象年齢は3歳半から義務教育終了までである。期間はざっと12年ほど。教育

相談に関わる子どもやその保護者の中には5年以上通っている子なんてざらにいる。就学前に通って、一度相談を終了してまた数年後に相談に来る子もそこそこいる。福祉サービスの申請のために10年以上前に取った検査結果が欲しいという方の問い合わせがあったり、中には教育センターに通っていた子が、10数年後に保護者としてやってくるなんて感慨深いこともたまにあるわけで。となると10年？20年？永年？いやそりゃ無理だ。うーん、難しい。相談員の先生方とも話し合いながらいろいろなシチュエーションを想定するが、なかなか結論は出なかった。

☆教育相談記録の機能と必要な時

そもそも教育センターの教育相談の記録は特に形式があるわけではない。20年以上前の半分手書きの時代は記録用紙というのがあって、それに記入するスタイルもあったと思うが、その時代のことを知っている相談員は私も含めてもう3名ほどしかいない。今は、1つのケースについて、親担当、子担当がそれぞれ大きな茶封筒の中に記録とそれに関わる書類を納め、相談が続いている間は、過去の書類の倉庫とは別のすぐに取り出せる倉庫の自分のキャビネットに入れて保管している。しかし、教育相談の担当は年

度ごとに交代する場合もあるので、自分だけの記録や書類というよりは、次の担当が困らないようにある程度は引継ぎ書類としての機能は必要である。

形式は決められていないということは公文書ではないし、最低5年で処分しても法的には問題ないにせよ、引継ぎ書類としての機能や10年経ってもその記録が必要になるときはくることを考えると、永久保存とはいかないにせよ、ある程度は保存しておくのが保険でもあり、無難でもあるだろう。

☆あいまいな結論

結局、結論としては、小さな小部屋の倉庫の容量と今後の書類が増えていく見通しなど、相談員の方々と話し合い、「と、とりあえず、30年ぐらいにしましょか。そこまでの記録は処分てことで。。。それで段ボールが4つ減るから積みあがってるのが崩れてくることもなくなるし。。。」という、なんともはっきりとしないような形にはなった。しかもそのまま段ボールを捨てられるわけではなく、処分するにも手続きが必要であったので結局は埃のかぶった段ボールを虫におびえながら開けて、古い書類からクリップを外したりする作業に、相談員数人で数日かかることになってしまった。

正直この結論が合っているのか間違っているのかもわからない。もし間違っていたら、そしてそれが問題になることがあれば、たぶんどこから上司、上司から私に意見があるのだろうけれど、そうなったらこの結論の責任について受け取め、この結論に至るまでの教育相談ならではの事情や経緯を説明していくしかないし、それが私の役割だと思っている。





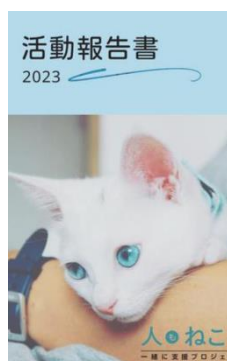
仲間が増えて、攻めの姿勢へ

人もねこも一緒に支援プロジェクトでは、生活困窮世帯の飼い猫に対する支援活動（ほぼ多頭飼育崩壊への介入）に取り組んではや7年になりました。細々とした受け身的な活動（来た相談には全力対応するけれど、積極的に集めに行かないスタイル。笑）から、心強いメンバーが増え、もっと積極的に仕掛ける1年にできるんじゃないか、というモードに入ってきました（大きな変化）。

まず、着手したのが寄付集めです。人を巻き込んで攻めた活動をするためには、資金が必要です。そこで、最若手メンバーに「2023年活動報告書」の作成と「寄付サイト」の立ち上げをお願いしました。

とっても素敵な活動報告書と寄付サイトを作ってくれたので、ぜひご覧ください！

そしてあわよくばマンスリーサポーターに！笑



猫の多頭崩壊予防的支援体制のモデル構築を目指す

今年は、人もねこも一緒に支援プロジェクトでも、自分たちがイメージする理想的な支援の形を実践してみることにしました。具体的には、「今の時点では問題のない生活困窮世帯への猫の不妊手術支援」の実施です。支援内容には、医療費支援＋捕獲送迎支援が含まれます。JAC 動物環境保護財団の助成を受けることができ、不妊手術 100 匹分の予算を確保することができました！（強力な仲間が申請書を作成してくれたおかげで。泣）



公益財団法人
JAC環境動物保護財団
JAC Environmental & Animal
Protection Foundation

【目的】

多頭崩壊を**予防的**に防ぐための支援方法を作り上げる為の、検証実験をする。

【具体的には】

今の時点では問題の無い生活困窮世帯への不妊手術支援（医療費＋**捕獲送迎**）

医療費支援であれば、よくある助成だと思うのですが、**捕獲送迎**も込みにしました。なぜかというと、多頭飼育崩壊に陥るリスクの高い飼い主さんは、自身で動物病院へ連れて行く力が、様々な要因によりなくなっている状態にあると推測されるからです。さらに、人もねこも一緒に支援プロジェクトの特徴として、単発で縁を切るのではなく、細く長く支援家庭と繋がり続ける事を大切にしている活動スタイルなので、お金を出すだけじゃなく、家庭訪問をして、飼い主とコミュニケーションを取れるような内容にしました。

猫の不妊手術無料 キャンペーン実施中!

人もねこも一緒に支援プロジェクトでは、猫と安心して生活をおくりたいという気持ちを応援しています!

無償で支援しています!

不妊手術支援 (送迎含む)

フード支援

ノミの駆除

手術支援の流れ

人もねこも一緒に支援プロジェクトに問い合わせ

状況のヒアリング・支援日決定

手術日の当日午前中に猫さんをお迎え

動物病院にて手術

退院夕方～夜にご自宅にお届け

猫の不妊手術のメリットは多いです!

1 おしっこの臭いやマーキングも激減!

2 発情期の鳴き声も無くなる!

3 病気の予防にもなる!

4 計画外の繁殖も防げる! ⚠️1年後に20匹、2年後に80匹に増えることも!

利用条件

生活状況: 適正に飼うための費用捻出が困難なご家庭が対象です。ご利用にあたってはヒアリングさせていただきます。

頭数: 1匹からOK (先着100匹まで) ※飼い猫に限ります。

エリア: 関西圏内 (主に京都市・大阪市・その他エリアはお問い合わせください)

注意事項: 引取りは行いません。

人もねこも
一緒に支援プロジェクト

LINEで気軽に相談が可能です

電話相談 ▶ 050-1808-6766

当キャンペーンは、猫の多頭崩壊予防的支援体制のモデル構築を目指す取り組みとして、[JAC環境動物保護財団2024年]の助成を受けています。

人もねこも 一緒に支援プロジェクト

とは?

ペットを飼育している、支援が必要な個人、または家族に対し、ペットと人の切り離しを行わずに支援を行うプロジェクトです!

人への配慮

動物への配慮

自立支援

適正飼育支援

私たちがめざすこと

人が愛情を持っているペットを支援することは、人の生活を支えるヒューマンサービスであるという理念のもと、人と動物が安心して暮らせる社会をめざします。動物も命あるものであるということを理解し、安易な殺処分を反対します。

個人の方、行政の方、どなたでも

LINE、電話、メール、使いやすい方法にてお問い合わせください。

LINE

050-1808-6766

hitonekokea@gmail.com

人もねこも
一緒に支援プロジェクト

大阪府大阪市北区南2丁目11番1号
ハイネスビル202Fエリアン内

ホームページ

2025年送迎組合費お断り

チラシもいい感じにできました!

【狙い】

この実証実験をする狙いとしては、これまでみえていなかったコストとニーズの可視化して、行政に今後の政策を考えるうえでの参考にしてもらうことです。本来、生活困窮世帯への支援制度は行政サービスとして制度化されるべきだと思っています。ただ、いくら理屈上は理にかなっているように見えても、落とし穴や想定できていない要因があるかも

143

しれません。そこで、助成金を活用し、人もねこも一緒に支援プロジェクトが主体となり1年間、支援制度を運用してみて、生じた問題とその対応にかかる経費をより具体的に可視化させたいと思います。特に、ボランティアの善意と自腹頼みになってしまっている捕獲送迎費を可視化したいと思っています。安定して提供できる支援体制を作るのであれば、肝心の捕獲送迎という猫に係わる部分がボランティアさんの善意頼みでは、不安定すぎますし、ボランティアの負担が大きすぎます。この問題意識からJACの助成金申請に「捕獲送迎の外注費」も入れたのですが、ここでも「捕獲送迎はボランティアが担っているのが一般的なので、助成金額からは除外します」と却下されてしまいました。多頭飼育崩壊のお家の猫の捕獲と病院送迎はめちゃくちゃ大変で、技術の要る、時には危険も伴う業務です。これをボランティアが無償でやるのが当たり前だという一般常識には一石を投じたいと思います。

というわけで長くなりましたが、1年を通して、個別の手術支援にかかった時間を元に、人件費を計算し、猫の送迎などを市民ボランティアや民間業者へ業務委託を検討する場合の委託費の参考値を提示していきたいと思います！

【展望】

今のイメージとしては、まず動物愛護担当の部署が生活困窮世帯への手術支援事業の予算化（医療費＋捕獲送迎の業務委託費）をする。そして、①福祉部署へ多頭飼育崩壊についての研修（情報提供）の実施をおこなう。②知識を持ったケースワーカーさんなど多頭飼育崩壊に陥るリスクの高い方と直接つながる福祉部署の職員さんが、飼い主さんに早い段階で手術を促す。③飼い主さんが手術支援を受けたい意志表示をすれば、動物担当部署に連絡。④行政から業務委託を“適正価格で”受けている地元団体や、ねこから目線。のような民間業者へ支援の実働指示を行う。⑤業務委託を受けている団体が飼い主宅へ訪問し手術の為に捕獲送迎を支援し、完了報告を行政の動物担当へ行う。

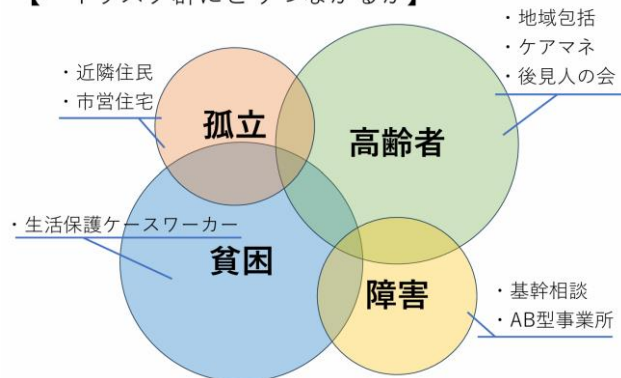


こんなイメージのものを行政の中に作ってほしいな。という図。

予防にこそ“多機関連携”

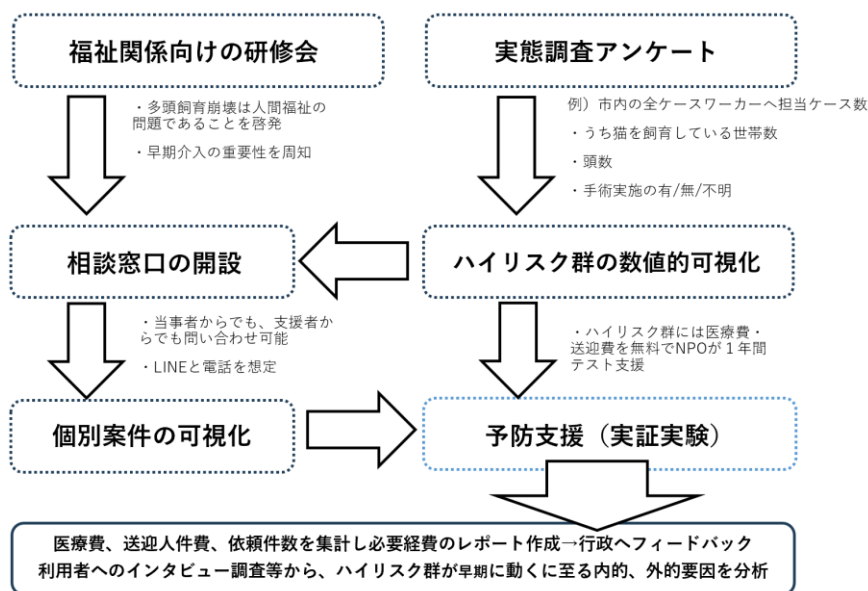
いくらお金があっても利用してもらえなければ意味がありません。どうやって、多頭飼育崩壊に陥るリスクの高い飼い主さんに、この支援事業を届けるかが重要です。

【ハイリスク群にどうつながるか】



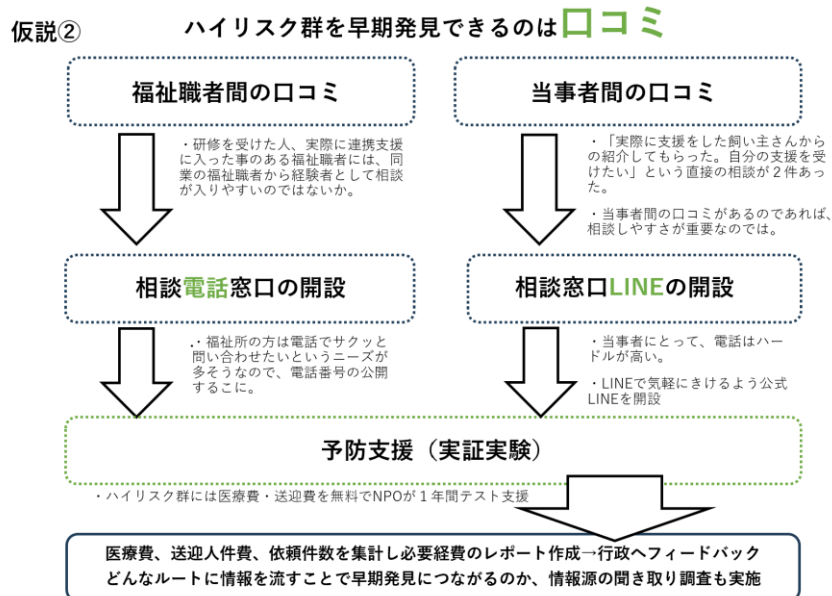
まず、考えやすい部分でいうと、福祉関係者の方に支援制度の情報を届けまくって、飼い主さんに伝えてもらうという流れです。ただ、いくら手術が無料になるという情報だけを届けても、なぜ手術が必要なのか、放置するとどんなリスクがあるのかを合わせて伝えていかなければいけません。そこで、今年も勉強会を積極的に実施していきたいと思っています。

仮説① ハイリスク群を早期発見できるのは福祉関係職員



一方で、口コミの力は侮れないなと思っています。実際、一度一緒に連携支援をしてくださった福祉職員さんや、飼い主さんからの紹介という形で、早い段階の相談が入るケースも多いからです。なので、相談のしやすさを大切に、「相談電話窓口の開設」、「相談窓口

LINE の開設」をしてみました。



多頭飼育崩壊対策は、動物愛護と社会福祉の多機関連携が必要だと言われ続けています。そしてそれば、問題が発生してからではなく、予防にこそ多機関連携を大切にしておくことが必要だと思います。また、いつかのマガジンで、結果報告させていただきます。早めに結果が知りたい方は、ぜひマンスリーサポーターに（しつこい）笑。

研修依頼・イベント共催依頼ガンガン受けます

自分の職場や地域でも多頭飼育崩壊について学んでみたい。という方はお気軽にお問い合わせください。講演内容のラインナップとしては

① 猫の多頭飼育崩壊～背景の支援～ 講師：小池（本業：猫の便利屋）

猫の多頭飼育崩壊にはどういった背景分類があり、どのように介入しているのか、実際の現場活動をベースに理論と方法をお話させていただきます。時間がある場合は、事例検討のワークショップも盛り上がります。



② 多頭飼育対策ガイドラインを読み解く 講師：間嶋（社会福祉士・精神保健福祉士）

③ 崩壊その“前”にできることを考えてみましょう 講師：中村（社会福祉士）

環境省発行の多頭飼育対策ガイドラインは、とても必読書ではあるものの、めちゃくちゃ長いので挫折する人が続出しています。そこで、動物愛護業界と社会福祉業界の

双方に立脚し、猫を切り口に必要資源とつなげていく NSW（ネコソーシャルワーカー）として活躍する、社会福祉士の間嶋と中村が講師を務め、難しいガイドラインを噛み砕いて解説していきます。前半後半の2本立て研修にすることがお勧めです。こちらも、後半はグループワークがセットになっており、盛り上がります。



④ 猫と福祉の交流会&勉強会 共催

福祉系の方も動物愛護系の方も一同に会して相互理解を深める会です。

前半：10分程度の事例発表を4～10名様々な立場の人が実施 40～120分

後半：座談会 30～60分

とっても盛り上がる勉強会になります。地元のボランティアさんと福祉との架け橋を作りたい！と考える方のサポートをします！



⑤ 猫に優しい室内捕獲講座～多頭飼育に対応するために～ 講師：小池（ねこから目線。）

これは実際に、多頭飼育の支援を実施していこうとしている行政からの依頼を受けて、動物担当の職員さん向けに実施したセミナーです。室内で逃げまどう猫さんになるべく、怖がらせず、短時間で全頭捕獲する為の方法や道具を実際の動画や現物を交えながらレクチャーしていきます。とっても良い反響でした。

講師料はできれば拘束時間に合わせて1～3万円ほどいただきたいのが本音ですが、「交通費しかでないんです。でも熱い気持ちがあるんです！」と言われれば、たいがい行きますので、気軽にお声がけください。

人もねこも一緒に支援プロジェクトのサポートはこちら▶



おわり



小池英梨子

ねこから目線。～保護猫とノラ猫専門のお手伝い屋さん～ 代表

NPO 法人 FLC 安心とつながりのコミュニティづくりネットワーク

「人もねこも一緒に支援プロジェクト」 プロジェクト代表

ご意見・感想・お問い合わせ：e.kosame12@gmail.com

先人の知恵から

46

かうんせりんぐるうむ かかし

河 岸 由 里 子

今回は「ト行、ナ行」から以下の12個。
引き続き飛ばし気味で書いていきます。最
後まであと少し、どうぞお付き合いくださ
い。

- 団栗どんぐりの背競せいくらべ
- 泣いて暮らすも一生、
笑って暮らすも一生。
- 長いものには巻かれろ
- 鳴かぬ蛭むしが身を焦やがす
- 泣き面に蜂
- 泣く子こと地頭じとうには勝たれぬ
- 無なくて七癖ななくせ
- 鳴くまで待とう時鳥ほととぎす
- 成なす者は常に成り、行いう者は常に至る
- 七転ななころもび八起き
- 七ななつ七里ななさとに憎にくまれる
- 生兵法なまびようほうは大怪我のもと

＜団栗の背競べ＞

どれもこれも平凡で、抜きん出たものがないことのたとえ。どんぐりは形も大きさもほとんど同じで差がなく、背競べしても優劣は決め難いことから。「背競べ」は「背比べ」とも書く。

この諺は子どもにも、保護者にも使うことがある。反対の意味に使うことが多い。つまり、同じところで戦っていても、大した差はでないから、違うところで勝負してみたらと言う話をするときに使うのである。

小学校のかけっこでは、タイム別にすることが多く、大差がつかないようにしている。それは、足が遅い子が恥ずかしい思いをしないようにと言う配慮である。こんな風に、大体同じくらいの子で比べ合っているのが本当に配慮なのかどうかはわからない。しかし、同程度のところばかりで競い合っ

ていると、もっと上、もっと凄い人との比較ができづらく、自分が世の中でどの位置にいるのかわからないだろう。そういう意味で、団栗の背比べをしているよりも、自分がもっと伸びしろを持っているもので頑張ってみたほうが良いのではと伝えるのである。

運動が苦手でも絵がとても上手な子、歌がとてもうまい子、算数が凄くできる子等々、それぞれの得意分野と言うものがある。それを伸ばしていく方がずっと良いという意味でこの諺を引き合いに出して伝えている。

＜泣いて暮らすも一生、

笑って暮らすも一生＞

泣いて暮らそうと笑って暮らそうと、人の一生に変わりはない。同じ一生なら苦勞の多い人生であってもくよくよせず前向きに生きて、楽しく暮らす方が良いということ。「笑って暮らすも一生、泣いて暮らすも一生」ともいう。

坂本龍馬の名言「泣いても一生、笑っても一生、ならば今生泣くまいぞ」も同意。

ドイツで古くから伝わることわざ

不安が強い子や、ネガティブ思考の子は、常にマイナスなことばかりを考えて、苦しんでいる。笑いヨガというのがあるが、「ワッハッハー」とそれこそ大げさに笑ってみるのだが、特に何かが面白いとか楽しいとかではなくても笑っているうちに本当に笑えてくるのだ。そんな話をしながら、この諺をだして「笑っていれば何となく楽しくなってきた、マイナスなことがどうでもよく

なったりすることはよくあるし、ずっと泣いたり苦しんだりして暮らしているのどっちがいい？」ときいてみる。辛いほうを選ぶ子はほとんどいない。

「笑う門には福来る」と一緒に伝えることも多い。笑っているとなぜか不思議と良いことが連鎖してくるものだ。昔、何から流行ったのかは忘れたが「笑ってごまかせ自分の失敗、あくまでけなせ他人の失敗」などと言っていた。他人の失敗をけなさなくても良いし、自分の失敗をごまかさなくてもよいけど、笑い飛ばすことは健康的だと思う。大笑いはストレス発散にもなる。世の中全体が鬱々としてくると、お笑いが流行る。生活がそんなに簡単に変わるわけではないのだから、せめて笑っていたい。笑いは幸せを呼ぶと思う。笑顔の素敵な人は、好感を持たれるということも付け加えている。

英語では・・・

Better live a merry life than a sad one.(楽しい暮らしの方が悲しいものより良い)

ドイツ語では・・・

Die Lebensspanne ist dieselbe, ob man sie lachend oder weinend verbringt.

＜長い物には巻かれろ＞

権力のある者や目上の人には逆らわないで、大人しく相手の言うなりに従っている方が無難であり、得策だということ。

権力に阿^{おちね}るという話ではなく、もし自分が改革や改善などの意見を持っていて、そ

れをはっきりと提示できるなら、どんどんいうべきではあるが、何も意見もなく、考えもないのに、ただただ反発だけしているような子どもには、こんな諺を伝えることがある。先生の言うことにいちいち反発していないで、言われた通りに動いてみたらかえって楽だったりする。もちろん、何でもかんでも従いなさいということではないとも伝える。「時には『長い物には巻かれろ』と言う諺を思い出して巻かれてみよう」と。

英語では・・・

It is no meddling with our betters. (目上の人たちと争うことはできない。)

＜鳴かぬ蛍が身を焦がす＞

口に出して言わない者のほうが、かえって心の中での思いは切実であるというたとえ。鳴くことのできない蛍が、激しい思いのために身を焦がさんばかりに光っているという意から。「鳴く蝉よりも鳴かぬ蛍が身を焦がす」ともいう。

子どもたちの中には、自分を出せないで苦しんでいる子、一生懸命自分の怒りを抑え込んでいる子などがいる。特に怒りを抑えるのはエネルギーを使い、それだけで日々疲れてしまう。自分の気持ちや言い分を出さないと、自分だけで抱え込んでしまうのは本当に苦しい。大人になれば必然的に何でも言えなくなるのだから、せめて子どもの内は、もっと自分を出してほしい。そういう思いでこの諺を子どもたちに、そして、余り物を言わない子を持つ親に伝えている。

＜泣き面に蜂＞

不幸や不運の上にさらに不幸なことが重なって起こることのたとえ。泣いてむくんでいる顔をさらに蜂が刺すということから。「泣きっ面に蜂」「泣きっ面を蜂が刺す」ともいう。

出典 「江戸いろはがるた」

余談：ちなみに、京都いろはがるたの「な」は「^な済すときの閻魔顔」。大阪・名古屋では「^な習わぬ経は読めぬ」

この諺はかるたになっていることもあり、多くの方に知られていると思うが、様々な会話の中で使っている。「弱り目に祟り目」とか「二度あることは三度ある」なども同義だが、悪いことが重なることは間々あるので、そんな時に使っている。

それでも、悪いことばかりがずっと続く話ではないというのも一緒に伝えている。そうしないと悪い話だけで終わってしまうから。

英語では・・・

An unhappy man's cart is easy to tumble. (不幸者の馬車は転倒しやすい)

＜泣く子と地頭には勝たれぬ＞

権力のある者にはどうやっても勝てないから、無理を言われても従うほかないというたとえ。泣いて駄々をこねる子どもと、権力を持っている横暴な地頭には、こちらが道理を言っても聴き分けてもらえないとい

うことから。「泣く子と地頭には勝てぬ」ともいう。地頭＝中世に荘園を管理していた役人で、農民に対して強大な権力を持っていた。

今時地頭の話をしてわからない人がいるだろう。この諺は当然母親に使っている。泣いて駄々を捏ねている子どもというのは、母親にとってとても困る。スーパーなどでもよく見かけるが、そういう時の母親の対応は様々。「これほしー」と駄々を捏ね、泣き始めたら、「わかったわかった、買って帰ろうね」とする母親もいれば、「勝手に泣いてれば」と冷たく去っていく母親もいて、そんな場合は子どもの方が慌てて泣きながら追いかけていく。母親支援の講話などの時に母親たちにこういう時どうするかと聞くと、「値段をみて、安かったら買うけど、高かったら安いものに変えて買ってあげる。」と言う人もいれば、「とりあえず車まで連れて行って説得する」「その場で説得する」「いい加減にしろと叱る」などさまざまである。何が正解かではない。その時その時で対応が変われば子どもは混乱するかもしれないし、いつも何か買ってもらえれば、買ってもらえるものと思い込むだろう。言葉の理解が十分でなかったら、説得も難しい。最初に何か安いお菓子を持たせてそれで買い物を買って帰るといった手もある。

大抵の母親が通る道でもあり、困りごとの一番に挙げられる。どの時代でも、泣く子には中々勝てずに苦労するのだとわかれば、一時のことなのだと少し緩やかに思え、母親たちの気持ちがちょっぴり楽になると思いが伝えている。

英語では・・・

We must fall down before a fox in season. (猟期には人は狐の前にひれ伏さなければならない)

＜無くて七癖＞

人は誰でも癖をもっているもので、癖がなさそうに見える人でも七つくらいは癖があるということ。「無くて七癖、有って四十八癖」「難なくて七癖」ともいう。「七」は「無く」の「な」に音を合わせたもの。

完璧な人間などいないのに、完璧を目指している子や親がいる。完璧を目指したら、それは凄く苦しい話になるだろう。しかし学校では100点満点だけが認められる傾向にある。その様な中にいれば、子どもたちが完璧を目指すのもわからないでもない。

そういう子どもたちや親に聞く。「あなたの親は完璧ですか？」と。大抵の返事は「完璧とは言えない」となる。たまに「完璧」という答えがあったら、「本当にそうかな？どんな人が見ても完璧でなくちゃ完璧とは言えないけど」と言うとしばらく考えて、「やっぱり完璧ではないかも」となる。

世の中に完璧な人はいない。人は間違えるし、失敗もする。忘れ物や失くしものをする事だってある。それが人らしさでもある。完璧を求めるならロボットにすればよい。勿論ロボットでさえ精度の問題はある。

人間は色々欠点があって人間なのだとわかってもらうためにも、この諺を使う。癖というのは、性格の一部でもあり、悪い癖というのも誰でもいくつ持っている。寝起きが悪いとか、ついスマホをみてしまう

とか、あれもこれも目くじら立てて叱っていては息が詰まるし、気にしすぎの人間を作ってしまうかねない。

もっと緩やかに、子育てをし、母親である自分も、もっと緩やかに認められたら良いと思う。

英語では・・・

Every man has his faults. (人にはだれでも欠点がある)

＜鳴くまで待とう時鳥＞

無理をせずに、好機が到来するまで忍耐強く待つことの大切さを言ったことば。時鳥が鳴かないなら、鳴くまで気長に待っていようという意から。

この諺と言うか歌は歴史でも学ぶ有名なものである。織田信長と豊臣秀吉、そして徳川家康それぞれの性格を表すと言われている「鳴かぬなら」で始まる歌があり、その一つである。それぞれの気の長さ、短さを表している。三人の中で一番気が長いのが家康で、この句も家康を表す歌の下句である。

歴史、特に武将が好きな子もいて、そういう子には、こうした話がずっと入る。「短気は損気」と言うように、気長に待つことができることの利点をつたえる。また母親たちには、子育てにおける「待つ」姿勢を伝える時にこの言葉を使っている。

ちなみに、「鳴かぬなら、殺してしまえ時鳥」が織田信長、「鳴かぬなら、鳴かせてみせよう時鳥」が豊臣秀吉の性格を表した句で詠み人は、松浦静山（注）。

＜成す者は常に成り、行う者は常に至る＞

なまけないでやり続ければ必ず成し遂げられるし、目的をもって進み続ければ必ずそこに到達できる。春秋時代の齊の政治家晏嬰^{あんえい}が努力の大切なことを述べたことば。

出典 晏子春秋

「為せば成る」は類語。江戸時代後期の米沢藩主上杉鷹山が家臣に示した歌「為せば成る、為さねば成らぬ何事も、成らぬは人の成さぬなりけり」から。

おそらく、「為せば成る」の方が有名かもしれないが、類語なのでこちらを紹介した。

最近、子どもたちは面倒くさがり屋が多く、地道にコツコツと言うことが苦手な子が増えた。何事も素早く進んでしまう現代では、地道にコツコツなどやっていただけないと思うのも仕方のないことかもしれない。それでも、途中であきらめずに、地道にコツコツ続けることは大切であると伝えていきたい。そんな意味でこの故事をつたえる。

目的を持つことも大事で、目的なしにコツコツ続けることは難しいだろう。目的が自分が求めている物かどうか、実現可能かどうかはとても大事である。動機づけができなければ、コツコツは続かない。

しっかり目的を確認し、そこに向かって道を決め、くじけそうになったときには、目的の再確認をしながら再度進む。道は何本かあっても、目的がしっかり決まっていれば、最終的にはたどり着くだろう。

＜七転び八起き＞

何回失敗してもあきらめずに頑張ること

のたとえ。また、人の世の浮き沈みが多く厳しいことのたとえ。七回転んでも八回おきることから、「七転八起^{しちてんはつき}」「七度転びて八度起きよ^{やたび}」ともいう。「失敗は成功の基」は類義。

この諺は「失敗は成功の基」と一緒に使うことも多い。一回失敗しただけであきらめてしまう子が増えている中で、転んでも転んでも、何度失敗しても頑張る子を見つくととてもうれしくなるし、応援したくなる。

赤ちゃんが独歩に進むときを想像してもらうこともある。赤ちゃんは何度失敗しても、立ち、一步を踏み出そうとする。その度に座ったり立ったりを繰り返し、漸く一步目を出すことができる。そして、一步が二歩に、二歩が三歩にと増えていく。その間も何度も失敗し、あっという間に何歩も歩けるようになる。転んで泣いてしまうことだってあるが、それでも歩こうとする。諦めたら歩けるようにはならない。

そんな赤ちゃんの様子を伝えたり、エジソンがフィラメントを作った時の話や、たくさんの失敗ののちに成功した人の話なども入れながら、くじけそうになった子どもたちを励ましている。

<七つ七里に憎まれる>

七歳ぐらいの男の子はいたずら盛りで、近隣の村の人々から憎まれるようになるということ。七里=多くの村里。

小1から小2ぐらいの子どもたちはやんちゃで、元気も良く、いたずらも多い。特に

小2は学校に慣れてきたこともあって、ちょっとした「悪」の時代だと思う。今の小学校の様子からみると、3、4年になっても変わらない感じもする。この諺の七つは、おそらく数え年で、今の6歳くらいかと思うが、今の7歳は昔に比べたら幼く、8、9歳でもこれに当たるかなと思う子も見受けられる。

一方小学校に上がる前は、母親たちの心配は、学校になじめるか、友達ができるか、勉強についていけるかの三つ。いたずらや悪さについてはさほど心配していない。と言うのもやんちゃな子が少ないからでもある。元気いっぱいの子どもたちを見ると、こちら元気を貰えるのだが、とぼとぼと元気なく通学路を歩いている子を見ると寂しい気持ちになる。

大人の世界と子どもの世界の境界があいまいになって久しい。子どもたちが、わんぱくでたくましい姿を見せてくれるようにとの思いも込めてこの諺を挙げた。

<生兵法は大怪我のもと>

少しばかり兵法を知っていると、それに頼ってしまって大怪我をすることになる。中途半端な知識や技術は、かえって大きな間違いを起こす原因になるといういましめ。

「生兵法は^{きず}大疵のもと」ともいう。生兵法=ちょっと聞きかじった兵学や武術。

SNS やインターネットから情報を得るようになってかなりの年月が経った。子どもたちも大人も、インターネット情報を得ている。そうした情報にはいろいろ混じっているが、正しい情報かどうかの精査をす

るシステムはまだ不十分である。それでも子どもも大人も、ネットで得た情報をそのまま、他者に伝え、流布したりする。間違った知識は、百害あって一利なし。見分を広めることは大事だが、その情報の精査は怠ってはならない。そういう意味でこの諺を伝えている。

英語では・・・

A little learning is a dangerous thing. (少しばかりの学問はきけんである)

出典説明

晏子春秋・・・八編（内編六編、外編二編）

春秋時代の齊^{せい}の宰相晏嬰^{さいしやうあんえい}についての説話をまとめたもの。著者・成立年代共に不明であるが、戦国時代から漢代にかけて成立したとされる。晏嬰が使えた^{れいこう} 靈公・^{そうこう} 莊公・^{けいこう} 景公の三君をいさめ、治世に努力した言行が記されている。

（注：）

松浦静山・・・平戸藩第九代藩主。松浦政信の長男として江戸で生まれた。側室の子だった静山は、父が早世し、12歳で祖父の養子となり、16歳で家督を継いだ。幼いころから記憶力に優れ学問が出来たが、病弱だったため、文武両道を目指し、心形刀流（しんぎょうとうりゅう）免許皆伝の腕前を持つほどになった。君主として維新館という藩校を設立、身分にとられない人材登用も行い、藩政改革を成功させた。「^{かつしやわ}甲子夜話」全278巻の作者。

参考文献：以前にも掲載したが、此処に載せている故事・諺及び出典説明は「新明解故事・ことわざ辞典」三省堂編修所編 より転載させていただいている。

うたとかたりの対人援助学

第31回「奈良県天川村の伝承子守唄を訪ねて」

鵜野 祐介

はじめに ～「おいよ才平は」との出会い～

今年（2024年）11月9日（土）、奈良県天川^{てんかわ}村を訪れました。目的は、天川村洞川^{どうがわ}の伝承子守唄「おいよ才平は」の歴史的背景と今日の伝承状況について調べることです。この唄は、牧野英三『日本わらべ歌全集 17 下 奈良のわらべ歌』（柳原書店 1983）に収載されています。

1. おいよ^{さいへい} 才平は まだ戻らぬか

まだも戻らぬ ながの旅 ヨイヨ

2. ながの旅すりゃ 身は大切に

人のお世話に ならぬように ヨイヨ

3. 鐘がごと鳴りゃ もう去の去のと

ここは寺町 日が暮れる ヨイヨ

著者の牧野さんはこの唄の歴史的背景を次のように解説しています。「幕末吉野大峯山の領分争いで、吉野山と洞川との間で公訴に進み村の庄屋であった才平が単身江戸に上がりその公事に当った。しかし才平はついに帰らず、その恋女房おいよが才平を恋い慕ったさまを、村人が歌い伝えたという」(p.202)。

私が初めてこの唄に出会ったのは1992年、博士論文のテーマを「スコットランドと日本の伝承子守唄の比較研究」に決めて、全都道府県の子守唄を通

観しようと、『日本わらべ歌全集』全28巻を巻数の順に確認していた時のことです。『奈良のわらべ歌』にこの唄を見つけた時、天川村という神秘的な地名、浄瑠璃の心中物のような不穏な気配を持つタイトル、悲劇的な史実が刻まれていると予感させる歌詞、そして「ミーミミ | ミーファー | ミードー | ミーファー | ラーファー | ミーフアミ | ドー」という都節音階のみやびな旋律、これらがいくつも重なり合って、強く印象に残りました。

それ以来ずっと気になっており、2009年刊行の『子守唄の原像』（久山社）には、弔い唄と見なせる子守唄の一つとして次のように紹介しました。「…夫の帰りを待ち続ける妻に対する不憫さと、村のために上京し、おそらくは命を落とした庄屋に対する哀悼の念が、村人たちにこの唄を歌い継がせてきたものと推測される」（鵜野 2009：78）。

いつの日か現地を訪ねてみたいと考えていたところ、今年10月、知人から連絡があり、天川村で〈声〉に関する講座が開かれるので参加する予定だとのことでした。そこで、この子守唄について時間があれば調べてみてほしいと頼んでおいたら、天川村総合案内所のガイドの方から情報が聞けたということで、連絡先を知らせてくれました。そして翌月、週末を利用して天川村へ出かけることにしました。



天川村の概要

天川村は紀伊半島の中央部に位置し、村の面積の4分の1が吉野熊野国立公園に指定されています。近畿最高峰の八経ヶ岳をはじめとした名峰連なる大峯山脈^{おおみね}を擁し、源流域のその一滴は溪谷を渡る清冽な清流となって、名瀑をはじめとした美しい自然景観を作り出しています。2004年にはユネスコ世界文化遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」として登録され、天川村はその主要な構成要素としての「大峯奥駈道」・霊場「吉野・大峯」の一部を擁し、およそ1300年前に役行者^{えんのぎょうしゃ}によって開かれた修験道発祥の地である霊峰大峯山（山上ヶ岳）には、今も多くの修験者が修行に訪れています（天川村役場公式ガイドより要約）。

子守唄の歴史的背景

前述したように、この子守唄が生まれた背景には、大峯山^{おおみねさん}の登山口である吉野山と洞川^{どうがわ}の住民の間の、大峯山の利権をめぐる紛争があるとされています。

洞川出身の農学博士・銭谷宥司さんが雑誌『宇下の洞話^{どうわ}』最終号（2011）に掲載した論文「大峯山の利権をめぐる洞川村民の気骨 子守歌^{うげ}『おりよ才兵衛』の背景を探る」は、以下のような考察で締め括られています。

「…江戸中期から幕末まで洞川の状況を概観してきた。長引く吉野山との争いで村の財政が圧迫、大峯山に頼る洞川にとって、利権確保は死活をかけた戦いであり、先人達の苦悩がよみがえってくる。

さて、庄屋であった才兵衛は、何時の頃、どんな訴訟で江戸に出向いたのか、特定する文献を見出すことはできなかったが、…天明二年（1782）に端を発して約20年間続いたと言われる道刈小屋訴訟をはじめ吉野山との一連の紛争が続いた江戸後期の頃と考えてもよいのではないと思われる。

才兵衛は、余裕のない村の財政を考え、洞川の死活を背負って単身で江戸へ出向く決意をしたと思われる。

東海道五十三次の長旅は、一汁一菜の食事、寺社の縁側で野宿など想像し難くない。そして才兵衛は、寺社奉行所へ出向いて洞川の主張を強く訴えたに違いない。……

しかしながら、朗報をもって帰る事ができなかったのか、病魔に倒れたのか、事件に遭遇したのか、才兵衛は再び故郷洞川の土を踏むことはなかった。

一日千秋の思いで才兵衛の帰りを待つ女房の ойいよは、我が子を背負って、何時までも何時までも待つのであった。「おいよ 才兵衛はまだもどらぬか まだもどらぬ ながの旅よ」 この歌には、幼児を眠りにつかせる子守歌や恋しい夫の帰りを待つ恋歌としてではなく、洞川のために命を捧げた才兵衛への鎮魂の歌として、また洞川の利権を死守する先人達の闘争の歴史を秘めたふるさとの歌のようにも思われる」（pp.12-13）。

13 番まであった「おりよ才兵衛は」

1947年に行われた洞川音楽研究会で紹介された地元古老3名の話でも、「才平」は「才兵衛」となっており、前田家の先祖で、庄屋ではなく村の総代だったそうです。また妻の名は「りよ」と伝えているといい、13 番までの歌詞が以下のように記録されています。

1. おりよ 才兵衛は未だもどらぬか
未だもどらぬ 永の旅 ヨイヨ
2. 永の旅すりゃ身を大切に
人のお世話にならぬよに ヨイヨ
3. 鐘がゴーンと鳴りゃあ もういのいのと
此处は寺町いつも鳴る ヨイヨ
4. 人の噂でかえると聞いて
今日も待ちぼうけユデの滝 ヨイヨ
5. 山の鳥さえ 埒^{ねぐら}をさがす
又も涙の日が暮れる ヨイヨ
6. 雲が流れる小南峠^{こみなみ}
坊やの父さんまだみえぬ ヨイヨ
7. クツ掛け栗橋二ツ岩^{くりはし}
聞こえるものは風ばかり ヨイヨ
8. すすりなくよな暮れ六ツの
鐘の音さえも唯涙 ヨイヨ
9. 背なを枕に寝る幼子の
頬に涙が光ってたまる ヨイヨ
10. 待てど暮らせど帰らぬ人は
死出の旅路にならぬよに ヨイヨ

11. 生きているなら夢でもよいから

おりよ無事かと問うてほしい ヨイヨ

12. 村のためだと人はいうけれど

りよの涙を誰が知ろ ヨイヨ

13. 村のためなら^{なた}称えて唄およ

おりよ才兵衛の子守唄 ヨイヨ

(京谷友明氏の資料提供による)。

取材ノートから

11月9日(土) 午前8時半、大阪府箕面市の自宅を車で出発しました。前半は高速道路や自動車専用道路を疾走し、後半は曲がりくねった山道をひたすら走って、約2時間かけて午前11時頃に到着しました。この日はちょうど「もみじまつり」を開催しており大勢の観光客で賑わっていました。



最初に、天川村総合案内所を訪ね、ガイドの山崎^{ちさと}さんに話を伺いました。事前に連絡していたこともあって、CDを聞かせていただきました。タイトルは「大峯山麓洞川の子守唄 おりよ才兵衛」、作詞・作曲／不詳、編曲／甲斐いつろうで、3番まででした。山崎さんご自身は、この地で生まれ育ったが、子どもの頃にこの唄を歌ったり聞いたりしたことはあまり記憶していないとのことでした。

次に、山崎さんご紹介で、このCDの作成を手がけた元天川村村長・大西友太郎さん(故人)の娘・文子^{あやこ}さんが女将を務めている「あたらしや旅館」を訪ねました。創業は江戸時代中期の新子屋勘右衛門という老舗旅館です。あいにくこの日は、「もみじまつり」も相俟ってひときわ忙しかった文子さんに、お会いすることはできませんでした。



それから、「天川村立資料館 ギャラリーほのぼの」に行ってみました。受付の年配女性にお声掛けすると地元で生まれ育ったとおっしゃったので、この子守唄のことを尋ねてみたところ、三番の「鐘がごと鳴りゃ」はこの資料館の隣にある^{りゅうせんじ}龍泉寺の鐘だろう、おいよ(おりよ)の墓所や才平(才兵衛)の顕彰碑などはない、1946年3月にこの街道一帯が大火に見舞われて、龍泉寺も焼けてしまったこともあって文献資料は残っていない、この子守唄を知っているのは地元の人にもわずかだろう、何とか歌い継がれてほしいのだが、そう話されました。

次に、龍泉寺を訪れました。立派な伽藍を配するお寺の庭園は、紅葉が始まったところで青空に眩しく映えていました。朱塗りの鐘楼に吊るされた鐘は、現在は除夜の鐘にしか撞かないそうですが、鐘銘の「宝永六年」(1709年)から、おいよ(おりよ)がこの鐘の音を聞いたものと思いを馳せました。



それから、山崎さんお勧めの「きらく九兵衛味処」で、ニジマスが群をなして泳ぐ清流を窓越しに眺めながら「アユの塩焼き定食」に舌鼓を打った後、洞川温泉センターの大浴場でリフレッシュして帰路に向かいました。



後日取材

山崎さんから、地元の歴史に詳しい京谷友明さんをご紹介いただきました。「天川を学ぶ会」に長年参加しておられた方で、電話で要件をお話すると、後日たくさんの関連資料を送って下さいました。前述した銭谷さんの論文、1947年の洞川音楽研究会の記録、『天川村史』抜粋、後述する西舘好子さんの『正論』2007年12月号掲載エッセイなど。これらを重ね合わせると、この子守唄の原像が立体的にイメージすることができました。

また、「あたらしや旅館」の女将・大西文子さんにも後日お電話で話を聞くことができました。友太郎さんは村長として天川村や洞川の歴史を継承したいと願って、2003年頃に前述のCDを作成したといっています。そして日本子守唄協会の活動をラジオで耳にした彼は、CDを持参して西舘理事長の許を訪ねて、次のように訴えたそうです。

「この子守唄は私のふるさとに伝わるもので、村の歴史の中では消すことの出来ない唄なのです。でも、私がいなくなってしまうと、きっと忘れられてしまう。子守唄協会が預かって、消えて無くならないようにして下さいませんか」(西舘「にっぽん子守唄紀行～こころの原風景をたずねて 第11回 土地の利権争い・洞川の子守唄」、『正論』2007年12月号)。

おわりに ～「大きな歌」と「小さな歌」～

歌には「大きな歌」と「小さな歌」があります。皆で声高らかに歌い上げ、心をつにすることが「大きな歌」、国歌や軍歌、讃美歌・声明などの宗教歌、それからスポーツ観戦の応援歌もそうでしょう。一方、

そばにいる誰か、目に見えない何かに向けて、あるいは自分自身のためにそっと口ずさむのが「小さな歌」、子守唄はその典型です。

「大きな歌」には国や民族やその英雄たちの「大きな歴史や物語」が刻まれています。これに対して、「小さな歌」には歌い手の生まれ育ったイエやムラやマチの「小さな歴史や物語」が刻まれています。そのため、忘れ去られる可能性も圧倒的に高いのです。数多くの子守唄が生まれ、そして消え去っていく中で、今なお残っているのは奇跡というべきかもしれません。奇跡が起きた理由には、歌自体の歌詞やメロディの持つ魅力ももちろんあるでしょう。けれども、その歌に刻まれた「小さな歴史や物語」を次の世代へと歌い継ごうとした人びとの熱意によることも大きいのではないのでしょうか。「おいよ才平は」はその代表例でしょう。

この子守唄が今もかろうじて伝承されているのは、敗戦直後に活動していた洞川音楽研究会、1960年代から奈良県内全域で民謡調査をして『奈良のわらべ歌』をはじめいくつもの著書でこの子守唄を紹介した牧野英三さん、元村長の大西友太郎さん、大西文子さん、洞川出身の銭谷宥司さん、山崎千里さん、京谷友明さんなどの、地元の方がたの熱意の賜物に他ならないでしょう。改めて、「いのちのバトン」がこの手に渡されたと感じているところです。



(*本稿は、日本子守唄協会『らばい通信』2025年新春号(1月上旬刊行)に掲載予定の拙稿「日本子守唄紀行 第11回『おいよ才平は』(奈良県天川村)」に大幅な加筆修正を施したものです。)

ああ、 結婚！

—婚活日記—

第 32 回

黒田長宏

<2024年8月1日>

私の性格丸出しで、今回も58号の締め切り通知が来たので早速提出してしまった。最初に57号と書こうとしたのが58号になっていた部分から送ってから気づいたのだが、煩雑にして迷惑をかけてしまうのは確実に私もカウントされる。そういう癖がずっとあるのだ。なんというせっかちなのか。それなのに結婚だけが遅くなりすぎてしまっている。もはや手遅れなのだろうか。現在パリオリンピックの真っ最中である。選手や審判の失態や判断ミスが続出している。人間らし

いと言えば人間らしいのだろうか。いや、やって良い事と悪い事はあるだろう。最初から開き直ったり、いいよいいよと慰めていてはダメだと思う。私も甘い人生を続けているわけではあるが。この文章からも、結婚難の当事者となるような痕跡が現れているのだろうか。さあ、59回で起きることのスタートだ。子供はともかくと書くしかない先入観としての年齢が悲しいが、せめてこの連載中に結婚の奇跡がやってくれば、総合した文章内容はともかく、載せていただいていた甲斐があったというものだろうが、これを書いているこの現在、まるで微かな動きもなにもない。

<8月11日>

パリオリンピックも閉会式か。日本も人口が急激に減少しているのに、努力は超人的だと思うが、スポーツエリートが他国開催で最高の成績だとは言うものの、これでは退廃の前の栄華のような複雑な気持ちである。これも私自身が結婚難孤独死状態で子供も出来ないような先入観の年齢になってしまったことからの悪い心持なのかも知れない。ある程度わが身が無事でないと、日本という国の他人に対しても素直に喜べなくなる。私だけか。

<9月8日>

ふとパソコンの画面から、この文章を入れてあるファイルが目に入ってきた。現実はまだ変化を起こすことが出来ず、ひたすら勤務の休日に YouTube を中心

として、私自身の存在のアピールをし続けているのみで、その変化がまるでないのだ。だからこの文章も変化がないわけだから、本来は公表するようなことは書けないのかも知れない。だが、一般人の現実とは、どうにも変化できない繰り返しの日々のまま、年月が過ぎていくのではないだろうか。だからこそ、事実として、一般的に変化がない。変化がない。変化がないと書き続けて、成就が難しいという現実にはすっぽり入り込んでしまっている場合があるということを、上手く表現して行きたいと思うのだ。だがそれさえ下手くそなのでわかってもらえにくいかもしれない。本当は、誰か一人、若い頃などは幻想を誰か一人に重ねる情熱のような力があつたはずなのだが、それが年齢的(57)にも弱くなっているために、こうしてずるずるしているのかも知れない。

<9月20日>

職場の若手が寿退社で簡単に送別会があった。かなり久しぶりに職場のベテランの好みのタイプにアプローチもどきな事をしてみたが逃げられる。これもかなり久しぶりにマッチングアプリを再会してみようかと初めての種類のものを登録してみたが、冬のボーナスが出たら、有料のほうにして、力を入れてみようかと検討。こうしてまた同じことを繰り返し、振り出しに戻るばかりだと予測がつく。

だが、サクラではないのだろうが、何人かにいいね！のようなものをもらい、思わず有料化したくなるが、今までの上手いか

なかったのが観念化していて、疲れるのでやはり冬のボーナスが出たならと、それまでは無料のまま、見学していようかと思っているところ。

<9月22日>

コロナは消えたわけではないが、マスメディアがあまり取り扱わなくなっているようだ。しかし数年前はコロナ恐怖だった。それもあって、自らの婚活が、ここでもお世話になっているが、ネットなどで、婚活について語るように、観念的マクロ的な数年を費やしたが、数日前から急に、結局以前の繰り返しなのだが、従来有名な婚活の実際多く行われている方法を再開し始めてしまった。ここでのネタ切れ回避というわけではないのだが、孤独死懸念が強くなる57歳。48歳の時に初婚が超短期離婚で裁判のほうで長引き、その後結婚詐欺被害に遭うという疲れもあってか、再開まで10年近くかかってしまった。コロナの影響もあるだろうが。そこで今日は、独身証明は平日に役所に行かねばならないので、どちらか提出の戸籍抄本のほうを、マイナンバーカードでコンビニで入手した。29日に入会面接に行く予定を立ててある。57歳という、停年が見えてきた頃に婚活再開という、どこまで諦めが悪い自分なのかと思うのも、社会の固定観念のせいだと思う。その社会の固定観念が根強くて、罪悪感のようにさえ感じてしまう57歳での婚活復帰。職場でも目をつけた相手も上手く交流できない気もするし、相手も相手を探している人のほうが気持ちが楽である。だが、それはライバルだらけだったり、私の身分によ

って激しく選別されるのも経験済みなのに。だから繰り返した。だが、どうしていいかわからない。自分自身で止まっていたら、誰も何もしてくれないのもある。みんな他人だ。当然か。自分ではない。自分しか気持ちはわからない。本当のところは。だが、10年近く、忘れていただけかも知れないが、婚活しない時期の記述も、何もしていないという記述も意味があると思っている。それだけ月日ばかり過ぎるだけなのだ。生活費を稼ぐのは大変なのに。

<10月1日>

数日前、某婚活サービスに再々入会したが、窓口の担当者が話を聞いてくれる人で気分が良かった。AI マッチングがここ10年のうちに充実して、思ったより進んでいた。プロフィールや質問100問はあっただろうか。午後3時にパソコンを開くと、活動可能にサイトになっていた。検索してみたが、この中で一人いればいいのだし、今後入会する人も合わせて、一人いれば成功だ。57歳という年齢や私の生活状況や今後で一人いるのかどうか。しかし再々スタートしたわけだ。

<10月2日>

前日、お気に入りに入れた一人に応募した。57歳の私。子供を希望すれば、37歳の人で既に20歳違い。高齢出産である。40歳で17歳差。検索からは月に3人応募できるルール。まず最初に私はどう選択したか。近場で写真優先で選んでしまった。44歳。出産は難しい年齢の人

かも知れない。ルッキズムという反面もあるが、容姿、写真写りという点。もちろんプロフィールも合わせるが、まずそういう選択をしたのを記して、事例として発表させていただきたい。この成り行きがなんらかの結婚難解決へのヒントになっていきますように。

<10月3日>

勤務休日。作戦変更。跡継ぎを考慮し、シングルマザーに応募を検討。心理の詳細は今回省略。

<10月10日>

マッチングアプリの追加の課金のないほうは、月に7名までだが全滅の可能性が高い。あと今月は21日もあるのに。課金のあるほうは、やはり課金しないと進まない仕組みのようだ。10年前の暗黒のマッチングシステムをようやく思い出そうだ。世間の壁は高すぎる。年末調整の申請の書き込みも何書いてあるのかわかりづらい。一時間も費やしてしまったのに出来た感じがしない。様々な難しさや達成できない事柄の集積でもう終わりかと思う。が、死にたくない。まだ心筋梗塞から復活したばかりだ。また寒い季節がようやくやってきた。かな？

<10月18日>

3つの婚活をアプリも含めて実行中。今しがた1つ開いたら11歳年下の人からいいね！が来ていてブロックしてから驚いたが、なぜブロックしたかというところ

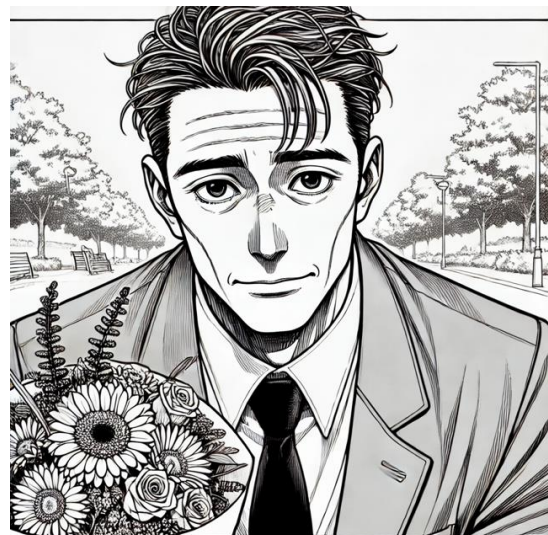
が私の好みから大きく違っていたからである。これが問題である。11 歳も年下からいいね！が来るなんていうのは贅沢な事なのに、しかしこれは仕方がない。感性というのか感情というのか、嫌だと思いながら進めるほうが失礼な事になってしまうはずだ。これは女性のほうにも言える。私など見向きもされずに何白、何千人がスルーされてきたのだろうか。私なんか1人に対して罪悪感とがっかりが強く出る。私の罪はとても軽いと思う。強い罪人はむしろ女のほうに多いのではないかと、あえてフェミニズム全盛時代に言ってやる。私みたいなことを書く人がいないと実は世界は偏見で崩壊に向かうのだから。こう時代に染まっていれば、わかる人はいまい。私が嫌われるだけだろう。悲しい気持ちながら有難い人だった。ルッキズムで苦労している人なのかも知れないな。

<11月4日>

いつもは、締め切りの通知が来てすぐ提出する傾向なのだが、今日は(不定休なので)今月最初で最後の連休の2日めで感覚が少し違うのもあるのか、これは日記のはずなのに毎日意識しているわけではなく、ふとパソコンの画面をみたら、11月25日が今回は締め切りだと認識すると、今回はこのところよりも多く書いているし、残り21日で変化が起きたらすごいことだが、なぜか起きる前に提出してしまうと思った。私は多分卒業論文をはじめ、多くの提出は一番はやいのではないと思う。その分、質は落ちたり、練られていないことの蓄積でやってきたと思うの

だが。昔クイズ番組で「早いのが取柄、岡本信人君」という番組があったが、私もそうなのだ。

というわけで、今日までのところ、婚活アプリなど3つ再開したものの、チャットに一人来たものの、無断でブロックで去ってしまった以外は全敗である。次回の3ヶ月のうちには、婚活を成功させるつもりで頑張る。今回はもう頑張らない。



〔PBLの風と土 第31回〕

あるものさがしで地域での可能性を拡張

山口 洋典 (立命館大学共通教育推進機構教授・立命館大学サービスラーニングセンター長)

【前回までのおさらい】

筆者は2017年度にデンマークのオールボー大学（AAU）で学外研究の機会を得ました。AAUでは1974年の開学当初から全学でのPBL（Problem-Based Learning）の導入で知られており、現地から本連載を始めました。

連載2年目はアイルランドで刊行されたPBLの書籍をもとにAAU以外での知見を紐解きました。連載3年目からはサービス・ラーニングとの比較を重ね、4年目はコロナ禍での立命館大学の科目への影響を、5年目からは米国での大学・地域連携の教育に関わる理論を解題し、8年目となる2024年度は再び筆者の教育実践を紹介中です。

1. 受け身としての消費者主義の回避へ

2024年11月、3回目となる京都モダン建築祭が開催された。これは2022年に文化庁京都移転記念事業として明治期以降に建築された京都市内の近現代建築が一般公開された取り組みが翌年度以降も継続・発展させて取り組まれているものであり、2023年には同じ枠組みで11月に神戸でも開催されるようになった。関西での大阪で2014年から生きた建築ミュージアムフェスティバル（通称：イケフェス大阪）が参加費無料で開催されてきているが、後発の京都や神戸では有料での開催である。また2024年には5月25日～26日に第1回となる東京モダン建築祭が開催されており、京都モダン建築祭・神戸モダン建築祭・東京建築祭、これら3建築祭の事務局を担う合同会社まいまいが各建築祭を立ち上げた3人のナビゲーターと共に建築祭オフィシャルクラブも設立するなど、近代建築には幅広い関心が寄せられている状況にある。

立命館大学は2023年より、2回目の京都モダン建築祭に参加している。これは2023年2月、京都モダン建築祭の事務局より立命館大学衣笠キャンパス地域連携課に対して参加が打診されたことが契機となった。もとよりキャンパス施設の一部は公開されているものの、授業時間には自由に見学ができない上、そもそも通常は非公開の施設もある。こうした事情を踏まえ、京都モダン建築祭の拡大に際し、立命館大学が2013年に京都府から譲り受けた旧堂本印象邸等を公開対象にできないかと投げかけられた。



写真1：京都モダン建築祭での旧堂本印象邸の公開
(筆者撮影、2023年11月4日)

京都モダン建築祭事務局からの打診の後、立命館大学では2023年3月9日の総務部会議にて参加の提案が審議され、2023年11月に以学館、末川記念会館、旧堂本印象邸を公開する方針が決定した。1965年に竣工した以学館は衣笠キャンパスにおいて現在も使用中の校舎の中でも最も古いものであり、京都を中心に数多くの建築を手がけた富家宏泰先生的设计によるものである。以学館をはじめとして、衣笠キャンパスは煉瓦色の外壁タイルを基本とした建物群で構成されているが、そうした展開を含め、「平和と民主主義」の教学理念のもとで学園の価値創造の旗手となったのが当時の末川博総長であり、その業績を讃えるために1983年に富家建築事務所の設計で竣工されたのが末川記念会館である。なお末川記念会館には、1998年に法学部卒業生の松本仁介さんの寄付により京都地方裁判所の旧庁舎から移設された陪審法廷が「松本記念ホール」として設置されている。

僭越ながら筆者は立命館大学にて2023年と2024年と連続して京都モダン建築祭のガイドツアーの案内役を担わせていただいたのだが、それは建築祭事務局から公開が期待された旧堂本印象邸を筆者が2018年より授業の教室として利用してきた縁による¹⁾。旧堂本印象邸は、その名のとおり日本画家の堂本印象先生の旧邸宅で、2013年に学校法人立命館が一般競争入札で京都府より土地・建物（居宅とアトリエ棟と作品収蔵庫および庭）を購入したものである。その後の改修を経て、2018年度より授業等で利用できる可能性が出てきたことから、2017年5月29日のサービスマーケティングセンター定例会議での「正課教養科目『教養ゼミナール』における2018年度前期期間の堂本別邸の使用について」の議決を経て、法人の総合企画課に企画を提案、そして次年度に向けた各所の調整を経て一般には非公開の施設を教室として利用する授業が開講できることになった。これらの調整は筆者が学外研究期間中にデンマーク・オーホルボー大学に客員研究員として滞在していた際に行われたものだが、前回の予告のとおり、今回はこの旧堂本印象邸の利用を契機としてキャンパスに隣接する京都府立堂本印象美術館との連携・協力に基づく複数の教育実践について取り上げ、地域社会でのボランティア活動を組み込む意義に接近することとしたい。

2. 堂本印象美術館と立命館とのご縁

旧堂本印象邸については立命館大学衣笠キャンパス地域連携課が開設している特設ウェブサイト (<https://domotoinsho-house.com>) に概要や歴史が端的にまとめられており、そこには、2006年6月より2012年3月まで、学校法人立命館が京都府立堂本印象美術館の指定管理者となっていたことが記されている。この立命館による「指定管理者制度に応募し、本学が堂本印象美術館の指定管理者となることを目指す」という方針は、2005年10月19日の常任理事会に教育文化事業推進部（当時）が起案したものであり、2006年9月の朱雀キャンパスへの本部機能の移転を前に、衣笠キャンパスを拠点に整備されてきた「アトリエサーチセンター」や「国際平和ミュージアム」「無言館京都館」

などによる「ユニバーシティミュージアム群」の形成を推進すると共に、立命館大学が衣笠地域で地域連携機能を発揮することを目指したものであった。しかし、2009年度からの第2期の指定管理期間の満了を迎えるにあたり、教学の充実が一部にとどまり、研究面でもプロジェクトの萌芽などが見られなかったこと、また財政上の理由から地域連携も広がらず、加えて耐震補強の必要箇所が明らかとなった上に、文部科学省から学校法人の会計処理に関する指導がなされたこと、これらを総合して2011年10月26日の常任理事会において第3期の指定管理者には応募しないと議決された。一方、前述のとおり一般競争入札により取得した旧堂本印象邸は、2017年11月29日の京都キャンパス将来構想検討委員会で「伝統的な日本家屋、茶室を利用した教育・研究活動、学術交流・発信、学生の活動発表、国際交流、地域交流など」を目的とした「学術・交流スペース」と定められ、活用が図られることとなったという背景がある。

立命館大学が旧堂本印象邸の活用方針および利用要項を定めるにあたっては、立命館大学理工学部の青柳憲昌先生がまとめた「旧堂本印象



堂本印象 Insho Domoto
1881年～1975年（明治44年～昭和50年）

京都が誇る日本画家・堂本印象

堂本印象は、日本画家として、数多くの作品を残している。

それら作品の数は、京都府立堂本印象美術館に収蔵されているところであるが、かつて印象の邸宅であった旧堂本印象邸は、美術館の敷地に立地している。

敷地には、母屋の敷、茶室、アトリエ、倉庫が残されており、母屋は、印象が芸術の場に残した。

1943（昭和18）年頃に建てられた近代和風建築である。

衣笠は、大正年間から昭和50年ごろにかけて、日本画家の大家とその門下が集まった場所となり、「きれがき絵巻通り」と呼ばれ、文化・芸術の街として知られていた。

図1：立命館大学による旧堂本印象邸のウェブサイト（トップページの一部）

邸の建設経緯と意匠的特徴」（青柳，2015）が基礎資料として取り扱われている。そこでは京都地方法務局の「旧土地台帳」により昭和13年11月21日に堂本印象先生が一带の土地を取得したことを踏まえ、「堂本が衣笠に転居した昭和18年頃は、立命館大学の衣笠キャンパスが拡大し、キャンパス東部がおよそ現在の形状となった時期にあたる」（p.663）点に着目し、

「堂本が自邸を計画・建設したのは昭和17年以降、つまり昭和18年5月とされる堂本の転居直前であった可能性が高い」（p.664）としている。このことから、立命館大学衣笠キャンパスと堂本印象邸は、同じ時期から衣笠の地で歴史を刻んできたことがわかる。そこで京都モダン建築祭でのガイドツアーでは、旧堂本印象邸を通して「衣笠絵描き村」²と言われていた衣笠地域に立命館大学が拠点を置いてきた歴史的背景を、そして以学館・末川記念会館を通じて「平和と民主主義」を理念に発展してきた社会的・文化的な背景を紹介する機会となっている。

ただし、立命館大学衣笠キャンパスは学園の発展の経過で近隣住民の生活環境の悪化を招くこととなり、大学と地域のあいだには高い緊張関係が生じてしまうことになった。実際、立命館大学の百年史（立命館史編纂委員会，2013）にも「1981年3月の衣笠一拠点の完成に伴い、地域と大学の関係もそれまでにない問題が生じてきた」（p.406）こと、特に「迷惑駐車・駐輪や建設工事の問題」（p.770）などについて、各種の対策と対話が重ねられてきたことが記されている。大学と地域との対話にあたっては、「1985年3月、谷岡武雄総長は、学園近隣の町内会長に大学の施策を説明し理解と協力を得るため、就任挨拶を兼ねて地域懇談会を開催」（p.407）、そして「89年度からは地域懇談会に加えて隣接地域の住民と直接懇談する隣接地懇談会を開催し、大学の運営や諸施策について説明するとともに通学問題をはじめとした諸問題について懇談し、その解決を図る取組みを進めた」（p.408）という。これら2つの懇談会は現在まで継続して開催されているものの、懇談会を通じて地域から大学に要請される事柄に大学が応じるだけでなく、むしろ大学と地域のあいだで日常的な連携・協力が不可欠で

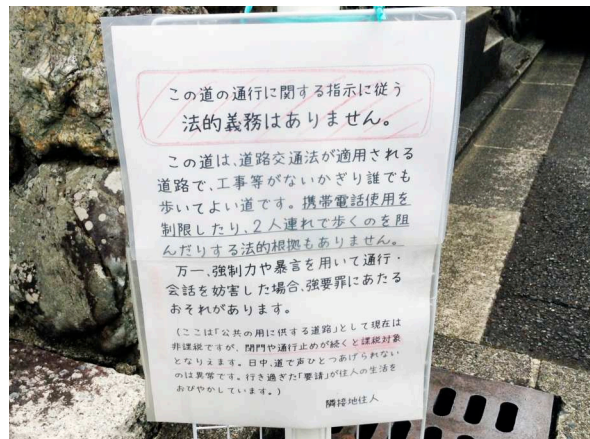


図2：行きすぎた「要請」に対する問題提起を行う衣笠キャンパス隣接地住人が作成・掲出した文書（2014年8月1日、筆者撮影）

あることを、例えば図2に挙げた写真のようなキャンパス隣接地住人が作成・掲出した文書などが気づかせてくれる。

近隣住民との丁寧な関係構築の進展とあわせて、2004年には立命館大学が事務局を務める京都歴史回廊協議会が設立され、衣笠地域で多様な協働の機会が創出されるようになった。立命館の百年史（立命館史編纂委員会，2013）によれば、京都歴史回廊協議会は「『地域文化遺産』『国宝』『重要文化財』の数々を、市民・学・産の英知と力を結集して『回廊』として結び、『面』でとらえる」（p.1721）ことで「地域の魅力を飛躍的に増大」（p.1722）させることを企図したものであるという。こうした組織的なネットワーキングが衣笠地域で展開される中、立命館大学の正門前にある京都府立堂本印象美術館も協議会のメンバーとして各種の事業に積極的に参画している。例えば、京都府立堂本印象美術館との共同主催で総本山仁和寺の協力のもと「仁和寺の建物探訪と堂本印象の襖絵観賞会」（2023年1月21日）が、さらに大本山妙心寺の協力により「中心伽藍としての法堂と仏殿」（2024年2月17日）が開催されており、学生と一般の方々が共に学びを深めつつ地域の魅力を体感できる場が生まれている。

3. 学生が旧堂本印象邸と美術館を結ぶ

立命館大学が近隣住民や地域の組織との連携を深めてきた中、前述のとおり、筆者は2018年から旧堂本印象邸を教室に用いた授業を企画・開発してきた。立命館大学には2008年度

から担当教員とテーマを全学に公募し、所属学部・学年を横断した演習科目「教養ゼミナール」が開講されている³。そこで、旧堂本印象邸の活用をテーマとした教養ゼミナールとして「地域経営実践ゼミナール」と題して開講した。核に据えたのは鳥取県智頭町の地域活性化のための計画手法として開発された「四面会議システム」を導入することであった。折しも開発者の一人、寺谷篤（筆名：寺谷篤志）さんが転地療養の一環で智頭町から京都市内に移住されたこともあり、立命館大学の教養教育支援制度を活用し、3回のゲストスピーカー枠の全てを寺谷さんの招聘に充て、旧堂本印象邸の活用をテーマに据えつつ合意形成の方法論が習得できる授業として設計し、20名規模で開講した。

初年度となる2018年度の教養ゼミ「地域経営実践ゼミナール」の取り組みは、書籍『はじめてのファシリテーション』で「堂本印象旧邸宅の活用」としてまとめた（山口，2019）⁴。



図3：四面会議システムを通じた議論の様子
(2018年6月26日、筆者撮影)



図4-1：2018年度「印象どうもっと」
(宝探しや昔遊びで交流)



図4-2：2019年度「Image of Kyoto」
(美術研究部・陶芸部の展覧会)

図4：教養ゼミナール受講生による企画チラシ



図5：旧堂本印象邸の活用企画「印象どうもっと」
(2018年7月10日、筆者撮影、園児の服の一部を加工)

2018年度は初年度ということもあり、「地域資源の活用と四面会議システムの習得」というサブタイトルのもと、衣笠キャンパス地域連携課と緊密な連携の中で活用策を検討した結果、近隣の幼稚園児を招待し、庭の随所に隠したカプセルを見つける「宝探し」と、折り紙をはじめとした「昔遊び」を通じた交流企画を実施するに至った。2019年度は改めて「旧・堂本印象邸の活用により『あるもの』を活かす」をサブタイトルに、新たに立命館大学の地域資源となった旧堂本印象邸が画伯の邸宅であったことを踏まえた活用策を検討し、立命館大学で芸術文化活動にあたる団体（美術研究部・陶芸部）の協力でアート展覧会を開催し、教養ゼミナールでの展示経験を得た各団体に今後の制作・発表が充実するよう期待をかけることにした。



図6-1：受付の様子
(アンケートの回答者には特製のバッジを贈呈)



図6-2：美術研究部の展示
(青柳(2015)によれば「真行草」の様式での3室にて)



図6-3：陶芸部の展示
(内玄関の横の間に)



図6-4：陶芸部の展示
(応接室にて)

図6：旧堂本印象邸の活用企画「Image of Kyoto」
(2019年7月9日、筆者撮影)

こうして教養ゼミでは、2018年度は地域の方々に存在を知らしめる、2019年度には立命館大学内での活用可能性を高める、それらに力点が置かれた企画が実施されたが、2019年度に思わぬ展開がもたらされた。企画当日に京都府立堂本印象美術館の下河邊英寿副館長（当時）が来訪され、一連の取り組みへの高評のもと、立命館大学とのさらなる連携・協力の可能性を模索したい、との提案をいただいたのである。加えて、美術館は2018年に「入りやすく親しみやすい美術館」をコンセプトに大規模リニューアルが行われ、立命館大学の美術研究部と陶芸部は美術館の野外庭園で作品展を開催していた、という縁があったことも確認できた。そして2019年7月30日に筆者が美術館を訪れ、秋 semester で筆者が担当している「ソーシャル・コラボレーション演習」において、京都府立堂本印象美術館と立命館大学との連携の可能性をテーマに取り上げることとした。

ソーシャル・コラボレーション演習は2012年度にサービスラーニング科目の1つとして開講されたものであり、当時からPBLの略称で呼ばれていた問題解決型のプロジェクト学習と授業内にボランティア活動を組み込むサービスラーニング手法と効果的に組み合わせ、自己と社会の未来を構想・設計する演習型科目である⁵。そのため、プロジェクトで取り組む課題は地域社会から提示いただくこととしていた。衣笠キャンパスでの筆者の担当クラスでは2012年度から2018年度までは学生の通学マナー向上を主要な課題としていたため、衣笠キャンパスでは地域連携課から課題の提示を得てきた

が、それを2019年度からは京都府立堂本印象美術館にお願いすることにした。そのため、図7のレジュメに盛り込まれたとおり、学生たちは美術館の存在価値の向上、来館者の増加、財政状況の安定化の3つの課題に取り組み、代表的な活動として「館内解説動画への中国語と英語の字幕付与」（2019年度）、「堂本印象作品をモチーフにしたTシャツとプロモーション動画の制作」（2020年度）、「落語研究会による堂本印象の人生と美術館の紹介動画の制作」（2021年度）などが展開された。



図8：バス停への巨大QRコード付ポスターの掲出（2021年3月15日、筆者撮影）

4. コロナ禍とカリキュラム改革を経て

こうして立命館大学が取得した旧堂本印象邸の活用をテーマとした2018年度からの教学実践は、2019年度に京都府立堂本印象美術館との連携へと発展し、衣笠地域の歴史的・文化的な資源を最大限に活かす方向へと展開していった。しかしながらソーシャル・コラボレーション演習は2020年度の教養教育改革によって閉講となり、経過措置のもとで開講された2021年度で一つの区切りを迎えざるを得なかった。そこで2022年度からは、前回も紹介した「シチズンシップ・スタディーズ」の受入団体として京都府立堂本印象美術館とのパートナーシップの継続・発展を図ることにした。ただし受講生からの提案を重視する「ソーシャル・コラボレーション演習」と異なり、「シチズンシップ・スタディーズ」では受入団体が予め提示する活動計画書に基づく活動と学習のため、美術館における「若者向けの広報」がテーマに据えられ、2024年度も継続して開講されている。

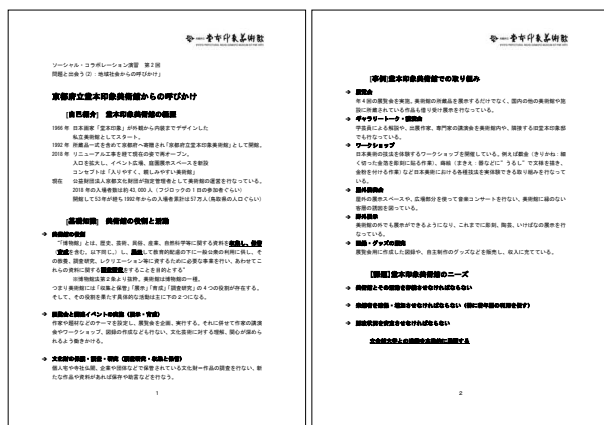


図7：ソーシャル・コラボレーション演習で提示の課題（2019年10月8日、京都府立堂本印象美術館が作成・配布）

このように大学のカリキュラム改革にも積極的に応じていただけたのは、特に京都府立堂本印象美術館で窓口担当の総務課・主事の谷本栄作さんをはじめとしたスタッフの皆さんの熱意に加えて、長い時間をかけて美術館側が大学に対する期待と信頼を寄せられるだけの関係を築くことができたことの証左かもしれない。無論、1980年代以降に近隣住民からの大学への要請に応え続けてきたことや、京都歴史回廊協議会の設立で特に2000年代以降には衣笠地域の組織間ネットワークが維持・発展してきた経過も影響しているだろう。こうした期待や信頼、さらには経過が、立命館大学の地域連携をもとにした教学に確実に奏功したのがコロナ禍である。事実、2020年に新たに開講した「現代社会とボランティア」において、筆者の担当するクラスでは授業内実習として2回のボランティア活動を組み込んでいたが、京都府立堂本印象美術館には率先してその活動先として受入の対応をいただけたのである。

コロナ禍を経て、筆者が担当する「現代社会とボランティア」では、京都府立堂本印象美術館の他、学校法人立命館が設立した特例子会社

「株式会社立命館ぶらす」、さらには衣笠キャンパス地域連携課を通じた「嵐電沿線フジバカマプロジェクト」、その他、御室小学校での下校の見守り活動、総本山仁和寺での境内等の清掃活動など、衣笠キャンパス内や隣接地域での活動を通じた学びと成長の機会を継続的に提供することができている。ここに挙げた活動先は、コロナ禍において「教室で学ぶことができない」という特殊状況の中、水俣での「地元学」の実践における地域の風土と暮らしに着目して「あるもの探し」（吉本 2008, p.38）が重要とされた地元学の知恵に学んだものである。自らのポテンシャルと地域のニーズを相互にすりあわせる中で、「〇〇がない」あるいは「△△ができない」といった具合に不足や欠落を憂うのではなく、むしろ地域のポテンシャルが自らのニーズを高めることさえあることを、筆者はコロナ禍での創意工夫を通じて実感してきた。そこで今回はキャンパス内および近隣の活動を通して学ぶことの意義について、衣笠キャンパス地域連携課との連携・協力に基づく事例から取り上げることにしたい。

(gucci@fc.ritsumei.ac.jp)

【引用文献】

- 青柳憲昌. 2015. 旧堂本印象邸の建設経緯と意匠的特徴. 日本建築学会大会学術講演梗概集2015. 663-664.
立命館史編纂委員会. 2013. 立命館百年史：通史3. 学校法人立命館.
山口洋典. 2019. 堂本印象旧邸宅の活用：四面会議システムを用いた地域経営への事起こし. 鈴木康久・嘉村賢州・谷口知弘 (編). はじめてのファシリテーション：実践者が語る手法と事例. 昭和堂. 122-125.
吉本哲郎. 2008. 地元学をはじめよう. 岩波書店

【注】

- 1 2018年5月18日には、立命館大学のホームページの「TOPICS」において「旧堂本印象邸で、学び、活動し、成長する」と題した記事 (<https://www.ritsumei.ac.jp/news/detail/?id=1052>) が掲載され、「5月1日（火）からは、正課授業である共通教育推進機構の山口洋典准教授の教養ゼミナール「地域経営実践ゼミナール：地域資源の活用と四面会議システムの習得」の教室として使用しています」と紹介されている。
- 2 「衣笠絵描き村」については2022年の時点で行われた住民の方からの聞き取りにおいて「私の家の本当に近くにも、絵描きさんが何軒もありまして」という語りでも確認されている。この聞き取りは立命館史資料センターのホームページに掲載されている「＜懐かしの立命館＞等持院学舎（衣笠キャンパス）とその境界の話ーお隣に住んでいた方のパーソナル・ナラティブからー」 (<https://www.ritsumei.ac.jp/archives/column/article.html/?id=275>) で紹介されているものである。
- 3 教養ゼミナールについては、2013年4月12日に最終更新となっているサイト (<https://www.ritsumei.ac.jp/liberal/semi.htm>) に詳しい説明がある。その後「教養ゼミナール」は2012年および2020年のカリキュラム改革を経て、現在は「異文化間テーマ演習」と「超領域リベラルアーツ」と並んで、教養E群「学際総合科目」の1つとして位置づけられている。
- 4 この書籍では全般を通して各種ファシリテーションの手法とその実践事例の紹介がなされている。ただし、旧堂本印象邸の活用企画の検討に用いた四面会議システムは厳格に定められた手順がある。そこで「茶室と母屋のリニューアル工事が完了することを契機に、今後の活用の道筋をさぐるべく、全学の教養科目として、活用プランを考える授業」（山口, 2019, p.122）において、15回の授業をどう展開していったか、という観点から、授業進行の説明とあわせて手法の紹介を行った。
- 5 本原稿執筆時点で、科目の紹介が https://www.ritsumei.ac.jp/slc/curriculum/social_2019/ で確認できる。



楽器も人の体も共鳴する

J R 茨木駅近くの接骨院が、私の仕事場です。

患者さんの中には、音楽をされる方が少なからずいらっしゃいます。演奏する人や指揮をする人、歌う人などさまざまです。

楽器の演奏などは、特定の部位に負担をかけることもあり、体がねじれる原因になることもあります。

一方、体のねじれが施術で改善されると、演奏がしやすくなったとか、声が出やすくなったという感想をうかがうこともあります。

楽器の演奏をするより、指導をするほうが、負担が大きい場合もあります。

例えば、ピアノを教えるとき、生徒の横に座って、手を伸ばして弾いてみせるようなことを繰り返せば、背骨がねじれてしまうこともあります。

ある患者さんはピアニストですが、ピアノの指導もされていて、背骨が右にねじれていらっしゃいました。その患者さんに、施術をしながら、ピアノ歴史館に行ってきたという話をしました。

「ピアノ歴史館で行かれたことありますか？」

「いいえ、行ったことないですけど、どこにあるんですか？」

「三重県の湯村温泉のそばです。たまたま見かけて入ったんですけど、まったく音楽のことがわからない私にも、調律師の方がやさしく説明してくれはって、めっちゃ面白かったですよ。たしか菰野町（こものちょう）だったと思います。御在所岳（ございしょだけ）の麓」

「だいたいあの辺かなあというのはわかります」

「チェンバロからだんだん発展してきて、今のグランドピアノに至るまでいろんなピアノが置いてあって、中にはブラームスが宮廷で弾いていたというピアノもありましたよ」

「へー、そんなのまであるんだ」

「初めは木製で、大きな音は出せなかったけど、今のピアノは鉄骨が入っているおかげで弦を強く引っ張ることができて、大きな音が出せるようになったそうです。ピアノ線1本を90キロの力で引っ張るんですってね」

「ええー、知らなかった」

「ええー、ピアニストの先生でもご存知なかったですか？で、1つの音に3本のピアノ線がはられているでしょう」

「はい、そうですね」

「だから1つの音だけで270キロ。ピアノ全体では20トン以上の力で弦がはられているんですって」

「ええー、そんなに！」

「あと、ピアノと電子ピアノの音の違いも初めてわかりました」

「たしかに違いますね」

「同じドの音を出しても、電子ピアノはそのドの音しか出ないけど、ピアノは1オクターブ高いドとか1オクターブ低いドとか、他の弦も共鳴するし、もちろん楽器全体も共鳴して音が出るから、より豊かな音になるんですって」

「なるほどねえ」

「ところで、さっき右腰が痛かったですよね」

「はい」

「じゃあ、左腕のこのへん痛くないですか」

「あ、痛い痛い。痛いですよ」

「じゃあ、骨盤を右にねじると腰の痛みが軽くなりますよね」

「はいはい。痛くなくなります」

「じゃあ、そのまま左腕の痛みはどうですか？」

「あれ？ 痛くないです。どうして？」

「右腰と左腕が共鳴してるんです」

「こんな離れた場所が関係してるんですか？」

「そうですよ。どことどこが共鳴するかは、その人によって、また、その時によって違いますけど、共鳴しやすい場所ってあるんですよ。楽器と人の体は似ていますね」

「ふしぎー」

菰野ピアノ歴史館 <https://piano-museum.com/>

パラドキシカルストレッチと パラドキシカルコントラクティング (2)

ピアニストの患者さんのエピソードでも紹介したように、体の離れた場所にある筋肉同士が共鳴して、縮みすぎたり伸びすぎたりすることがあります。

もちろん隣り合った場所や近い場所にある筋肉同士が共鳴して縮みすぎたり伸びすぎたりすることは、もっと頻繁に発生します。

A という筋肉が縮みすぎると、A と同じような働きをする
B という筋肉も縮みすぎになることがよくあります。

A という筋肉が伸びすぎると、A と同じような働きをする
B という筋肉も伸びすぎになることがよくあります。

ですから、私は施術中に、ある筋肉が縮みすぎたり伸びすぎたりしているのを見つけた場合、同じような働きをする筋肉もそうになっていないか、できるだけ確認するようにしています。

ただ、筋肉は、一つ一つ違う働きをもっています。共鳴しあう筋肉の働きは、似てはいるものの、必ず違ってはいる働きがあります。

A という筋肉と B という筋肉が共鳴しながら縮みすぎているとします。

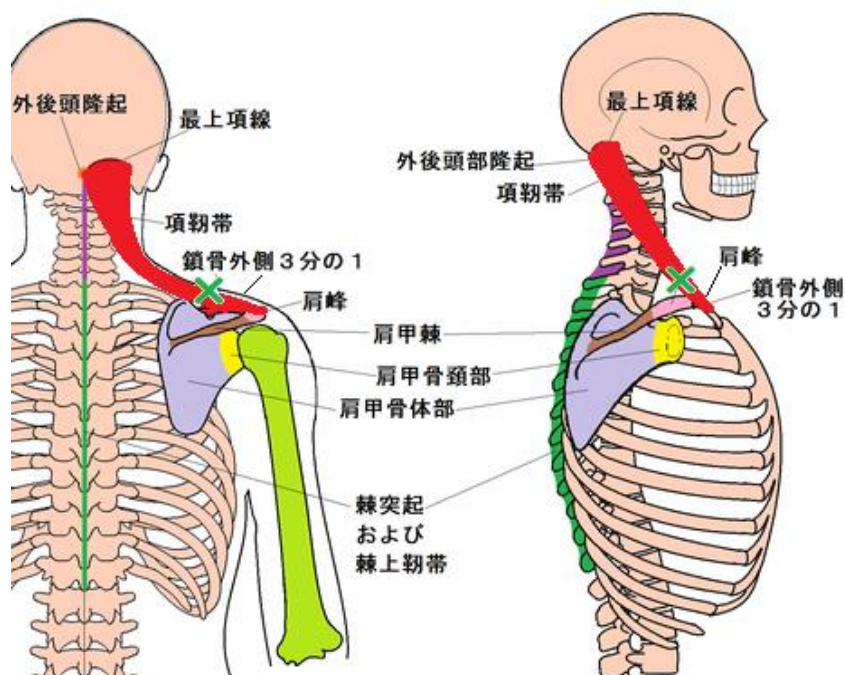
このとき、A のほうが B よりも縮みすぎているのなら、A も B も、A を伸ばすようなストレッチをすると、もっとも痛みが少なくなるか消えるかします。

このとき B は、A と違う働きに関しては、一見縮めているのかと思える方に伸ばすことになります。

つまり、B を伸ばす際には、パラドキシカルストレッチ（逆説的伸長）が有効になるわけです。

僧帽筋上部繊維のパラドキシカルストレッチ

重量挙げのような動作をしたり、腕を挙げる姿勢を続けたりすると、僧帽筋が縮みすぎて傷んでしまうことがあります。話をシンプルにするため、後頭部から肩甲骨の外側（肩峰）に伸びる右の僧帽筋上部繊維が、図の✕印で傷んでいるとします。右僧帽筋上部繊維が収縮すると、肩峰が後方に引き上げられ、頭は右前に倒れ、顔は左に向きます。縮みすぎた部分を伸ばすストレッチは、肩峰を引き下げ、頭を左後方に倒し、顔を右に向けるものになります。

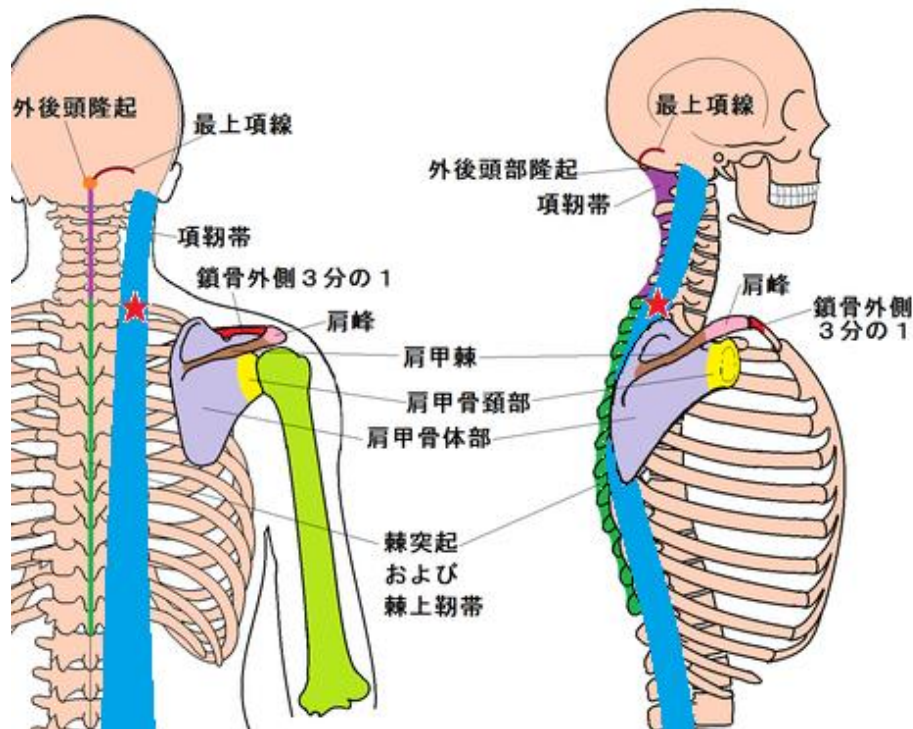


図の赤の部分で右僧帽筋上部繊維 ✕が損傷部

一方、腕を挙げるためには、頭を固定する必要があるため
脊柱起立筋が収縮しなければなりません。脊柱起立筋はい
くつかの筋肉の集合体であるため、ここでは話をシンプル
にするため、骨盤や背骨の後ろから側頭部に伸びる頭最長
筋が縮みすぎて★印で傷んでしまったとします。

右頭最長筋が収縮すると、骨盤や背骨の右側が頭の方へ引
き上げられ、頭は右後ろに倒れ、顔は右に向きます。

縮みすぎた部分を伸ばすストレッチは、骨盤や背骨の
右側を引き下げ、頭を左前方に倒し、顔を左に向けるもの
となります。



図の水色の部分が右頭最長筋（部分）★が損傷部

右僧帽筋上部繊維と右頭最長筋が共鳴する頻度は非常に
高く、その結果、頭が右に倒れます。

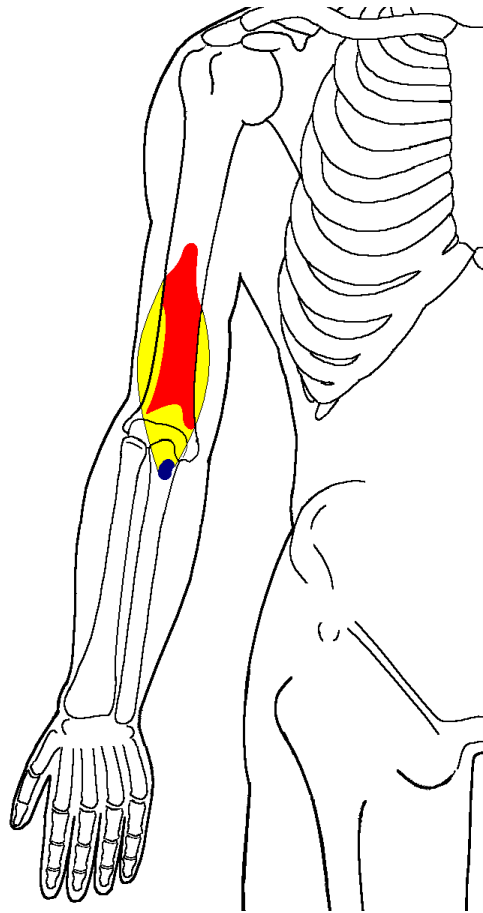
頭は、より縮みすぎているほうへ引き寄せられますが、実
際には、右頭最長筋のほうがより強固に縮みすぎになる頻
度の方が高いと私は感じています。

つまり、✕の痛みが少なくなるストレッチは、肩峰
を引き下げながら、頭は左前に倒し、顔を左に向けるとい
う、頭の位置に関しては一見縮めるような方向に伸ばすパ
ラドキシカルストレッチになることが多いのです。

もちろん顔を右に向け、左後方に頭を倒す通常のストレッチングで、右僧帽筋上部繊維の痛みが軽減される場合もあります。

上腕筋と他の筋肉が共鳴している場合

例えば、上腕筋という筋肉は、肘を曲げる働きをします。ですから、上腕筋が縮みすぎて痛みを発しているときは、肘を伸ばして上腕筋をストレッチングすれば、痛みが少なくなります。



図の赤い部分から紺色の部分につながる右上腕筋

しかし、肘を伸ばしただけでは痛みをとりきれないことがあります。

こういう場合、上腕を上げたり下げたり、閉じたり開いたりすれば、より痛みが改善するということが多々あります。

時には、ピアニストの患者さんのケースのように、骨盤を動かすと上腕筋の痛みが改善することもあります。また、手首や指を動かすと痛みが改善することもあります。ただ、

ここでは話を複雑にしないため、肩の動きとの関連に説明を絞りたいと思います。

上腕筋は肘関節を動かす筋肉であり、肩関節を動かす働きはもっていません。

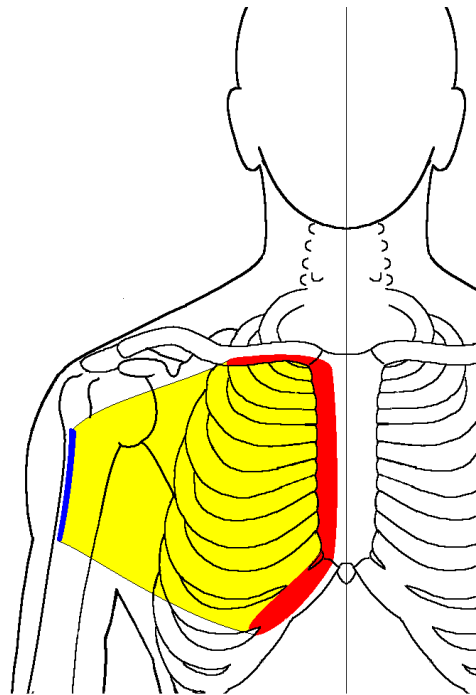
それなのに、肩関節も動かして伸ばしたほうが、上腕筋の縮みすぎた痛みが少なくなるのです。

上腕筋をさらに伸ばしたければ、腕を後方に引くのが一般的なストレッチではないでしょうか。

この場合、烏口腕筋、上腕二頭筋、腕橈骨筋、円回内筋などと一緒に上腕筋を伸ばす形になります。

しかし、実際には、腕を前方に上げ、開くか閉じるかした時のほうが、上腕筋がよく伸び、痛みが軽減されることが多いのです。

種明かしをすれば、上腕筋は大胸筋としばしば共鳴します。大胸筋が縮みすぎたまま、上腕筋を伸ばそうとしても、伸びきらなかったり、すぐにまた縮みすぎの状態に戻ってしまったりします。



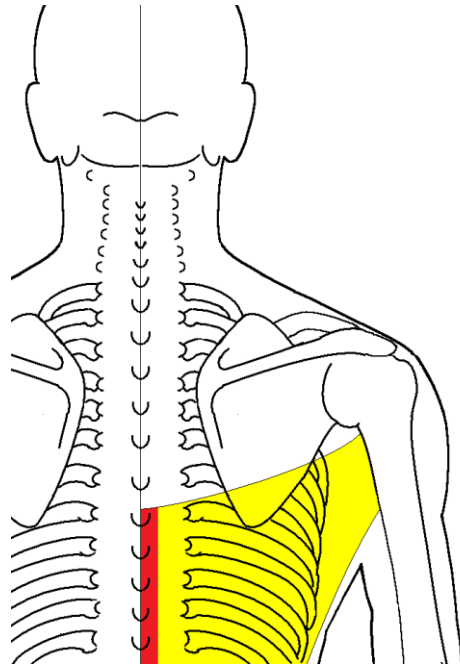
図の赤い部分から紺色の部分につながる右大胸筋

ところが、腕を広げながら後ろに上げて、縮みすぎた大胸筋を伸ばしてあげると、上腕筋もスムーズに伸ばすことができたりします。

大胸筋が伸びる姿勢をすると、上腕筋もよく伸びるという現象がしばしば見られるのです。

骨盤をねじると、腹筋を介して胸郭もねじれ、大胸筋がよく伸びるということもあります。間接的に上腕筋も伸ばされて、腕の痛みが消えるという現象が見られます。

けれども、毎回、上腕筋が大胸筋と共鳴するわけではありません。上腕筋は広背筋と共鳴することも少なくなく、広背筋を伸ばすような姿勢にしたほうが、上腕筋の痛みが少なくなるというケースもあります。



図の黄色い部分が広背筋（上半分のみ表示）

赤い部分と腕の前面をつないでいる

広背筋を伸ばすには、腕を前に挙げます。腕を広げながら前に挙げても、閉じながら前に挙げても伸びますが、閉じながらのほうがよく伸びることが多いように感じます。

上腕筋が広背筋に共鳴しているときは、広背筋が伸びるほうにもっていくと、上腕筋もよく伸びます。

共鳴している筋肉が変われば、上腕筋がよく伸びる方向もガラッと変わってくるのです。

他にも上腕筋と共鳴する筋肉はいくつもあります。
それらの筋肉に共鳴する筋肉にも、上腕筋は共鳴すること
があります。「友達の友達は友達」のようなものです。そ
のようにして、離れた筋肉同士が共鳴するようなケースも
出てきます。

共鳴して縮みすぎている筋肉を伸ばす際に、ターゲットに
なる筋肉を一見縮めるかのような肢位・姿勢になることが
あっても、そのほうがよく伸びるのなら、それがパラドキ
シカルストレッチングなのです。

今回は共鳴という現象からパラドキシカルストレッチ
ングを説明してみました。

次回はまた、違う角度から、パラドキシカルストレッチ
ングやパラドキシカルコントラクティングを説明してみた
いと思います。

ではまた

現代社会を『関係性』という観点から考える

③「非行とは行うものなのか巻き込まれるものなのか」

更生保護官署職員 三浦恵子（社会福祉士・精神保健福祉士）

1 はじめに

連載 14 では『「開く」ことと「閉じる」こと』と題して私見を述べさせていただき、それに続くかたちで、連載 15 では『つながりが支えるところ』と題して、社会的には容認されないような要求を次々と親族や支援者に行うことで結果的に物理的にも心理的にも「閉じた」生活となり社会的孤立に至り心身状態の悪化を招いてしまった高齢者（単身生活者）の事例について考察を行いました。連載 16 では、連載 14、15 の流れを引き継ぐかたちで、『「見える」ことと「見えない」こと』という切り口で、現代社会を関係性という観点から見直してみました。それを受けるかたちで連載 17 では、これまでの連載を踏まえ、「地域社会」との「関わり方」を考えると題して、まさに「地域社会」との「関わり方」を私なりに考察してみました。

つまり、本連載では「地域社会」で生きるということについてはほぼ一貫して考えてきたともいえます。そして今まさに現代社会においては、（望まない）「孤立」「孤独」が問題となっています。支援機関とつながらないまま命を落としてしまうような事態になったり、拡大自殺的な事件が発生する例もあまたあります。家族介護が行き詰ってしまった上での介護殺人、子育てに悩んだ末の子殺しなどがその例であると言えます。

こうした点について連載 18 では「自分は誰かとつながっている」という感覚があるかということと題して問題提起をさせていただき、続く連載 19 回では「自分は誰かとつながっている」という感覚を持つために私が必要だと痛感している『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽について、連載 20 では、『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽について、それぞれコロナ禍の中を生きていくうえでの関係性について私見を述べさせていただき、連載 21 では、Society から Home へ矮小化していく社会について私見を述べさせていただきました。

本連載も 5 年を超え、コロナ禍はじめ連載開始時と社会情勢は大きく変化しています。私自身も専門性の殻に閉じこもることなく、業務上・業務外での連携において学んだことや様々な関わりの中で学びまた考えさせられたことを連載原稿に落とし込み、主題そのものはぶれることなく視野をより広くして原稿を記載していきたいと考えています。

連載 23 では「自助、共助、公助」の他に、制度が既存のものとして含んでいる「家族助」について、地域包括ケアシステムの在り方について私見を述べさせていただきました。連載 24 ではすこし角度を変え、自分が「知っている」だけの世界で生きることの危うさと題し、私自身が実際に直面したり間接的に関わったことをベースに、「知っている」ことだけの生活で生きるということに含まれる一種の「危うさ」、「知らない」ことが「意識しない排他性」につながるなどについて、引き続き連載 25 では「知らないことが不安や排除につながる」ということというテーマでそれぞれ私見を述べさせていただきました。連載 26 では、大学生に刑事政策と司法あるいは更生保護について話をする機会に感じたことをベースに「今の社会」に対する若者の不安に、大人としてどう向き合うのか」というテーマで私見を述べさせていただき、続く連載 27 では、私が昨今感じてい

る「理想とされる家族は今や『描かれるもの』の中にあるものか」ということにつき、課題提起の意味合いをこめ私見を述べさせていただきました。

その後の連載 28（連載 29 と記載していますが 28 に修正します）では「自分には支えてくれる人がいる」「まだできることがある」と誰もが感じることが出来る社会へと題して、「愛と仕事」（フロイト）及び「居場所と出番」（犯罪対策閣僚会議）に言及しました。それを受けて連載 29 は、家族介護当事者の立場から、「選べない日々」を過ごす人々への「まなざし」と題して、様々な境遇のただなかにある人を「社会がどう見るか」という点について、私見を述べさせていただきました。これに関連し、直近の連載第 30 回では「改めて「介護は誰が担うべきか 家族・親族・地域社会の関係性を踏まえた一考察」として、連載 6「刑事政策から見た「介護」～高齢犯罪者による殺人事件を一例として」を更に深めるかたちで、厚生労働省のデータ等にも言及しつつ、家族アセスメントという観点から更に掘下げて私見を述べました。

今回は、久々に「少年非行」をメインのテーマにとりあげていきます。ここでもテーマになるのは「関係性」です。

1 はじめに 「少年非行」は増えているのか

まずここで述べる「少年」とは、少年法上の「特定少年」（18 歳、19 歳）を含んでいることを御了承ください。

いわゆる「トー横キッズ」などの報道により、居場所のない少年のリスクの高い行動などについて耳にした方は少なからずあるかと思われます。

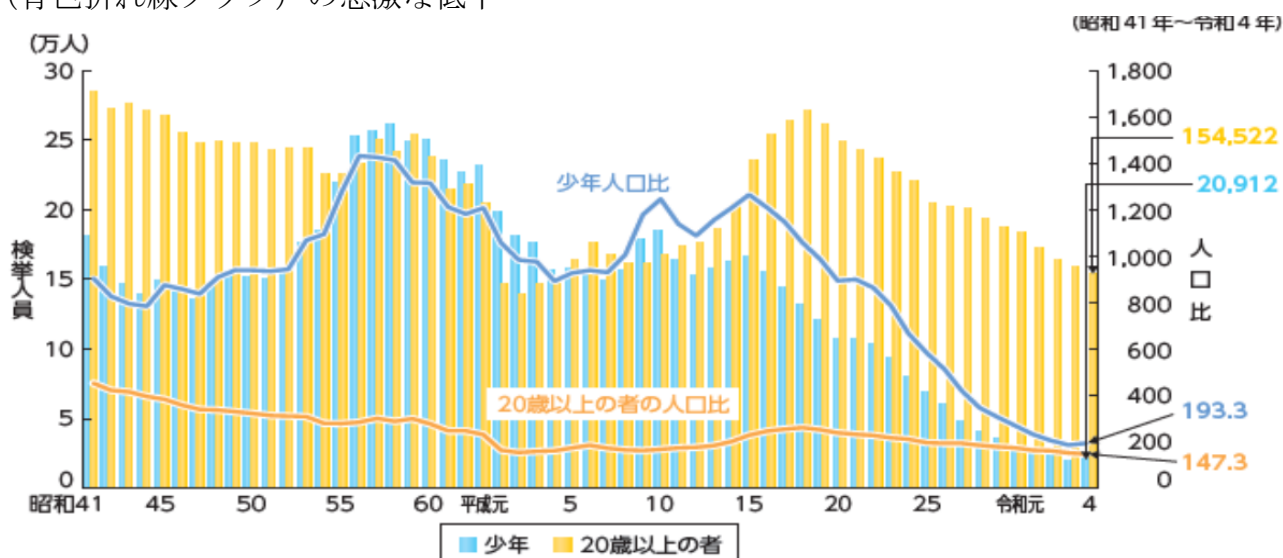
また、特殊詐欺案件の末端の役割を担っている少年（少年法上の特定少年である 18 歳、19 歳を含む）が逮捕されるとい報道に触れることもあります。

それだけを切り取って見ると、「少年非行（触法行為など含む）が増えている」ように感じられる向きもあるのではないのでしょうか。

しかし、実際には、少年が抱える様々な課題や問題が「非行」という形で表出されることは年々減少していることは、下記のグラフを見ていただくとよくわかります。

非行少年処遇の概要（令和 5 年版犯罪白書の概要）

報告者注「特に留意すべき点）少年による刑法犯 検挙人員・人口比の推移少年人口比（青色折れ線グラフ）の急激な低下



少年による刑法犯検挙人員の減少については、大学等で講義で説明する際学生の方から「少子化で子どもが減っているのが原因ですか」といった類の質問をされることが少な

からずあります。そうした質問に対しては、検挙人員（いわゆる人数）ではなく、人口比（折れ線グラフ）に注目するように示唆しています。10 万人あたりで検挙された人数の割合は、20 歳以上の人口比（データが令和 4 年のため）の減少傾向に比較しても、青色の少年人口比は急激に減少しています。いわゆる戦後第三期少年非行のピーク時である昭和 50 年代後半減少し、平成 10 年～15 年頃に増加したものの、それ以降は急激に増加しピーク時の 7 分の 1 程度の比率となっています。

「いくら少子化といっても、子どもの人数が 7 分の 1 まで減っているわけではないですよ」と説明すると、先の質問をした学生も納得されます。

2 では「少年非行」が減少しているから現代の少年はみんな「問題がない」のか

上記 1 のような説明をした後、私が学生等に問いかけるのは、標記のような内容です。つまり、「見えやすい」逸脱行動である「非行」というかたち以外で、少年が抱える問題、課題、いまだきの言葉でいえば「生きづらさ」が表出していると考えられるからです。

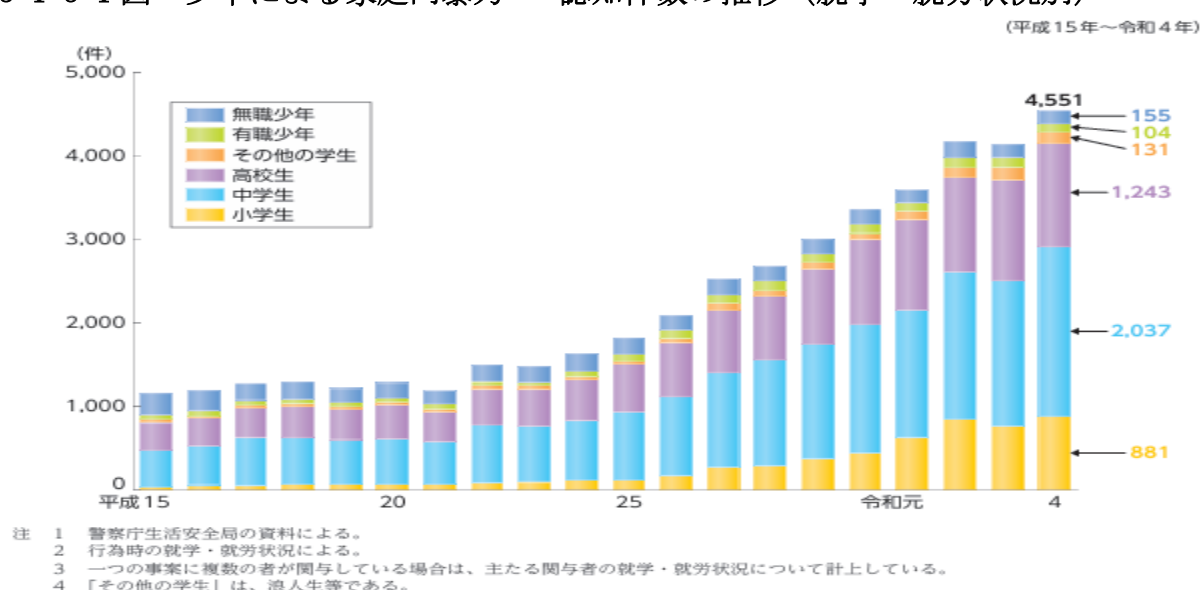
たとえば「家庭内暴力」「いじめ」「不登校」「児童虐待」等はどうでしょうか。

まず、令和 5 年版犯罪白書から該当部分を引用してみます。

少年による家庭内暴力認知件数の推移（就学・就労状況別） 令和 5 年版犯罪白書 125 頁

少年による家庭内暴力事案の認知件数の推移（最近 20 年間）を就学・就労状況別に見ると、3-15-1 図のとおりである。認知件数の総数は、平成 24 年から増加し続け、令和 3 年は減少したものの、4 年は再び増加し、4,551 件（前年比 9.9%増）であった。特に、近年、小学生が大きく増加しており、令和 3 年は減少したものの、令和 4 年は 881 件（同 15.6%増）であった。

3-1-5-1 図 少年による家庭内暴力 認知件数の推移（就学・就労状況別）



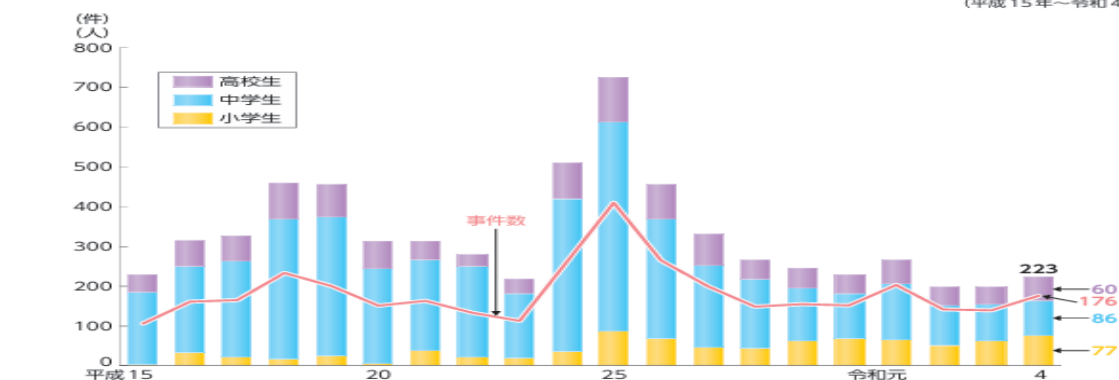
いじめ 令和 5 年版犯罪白書 126 頁

警察において取り扱ったいじめに起因する事件の事件数及び検挙・補導人員の推移（最近 20 年間）を見ると、3-1-5-2 図のとおりである。事件数及び検挙・補導人員は、昭和 60 年に 638 件、1,950 人を記録して以降、63 年の 97 件、279 人まで大きく減少し、その後の増減を経て、令和 4 年は 176 件（前年比 26.6%増）、223 人（同 12.6%増）と、いずれも増加した。

3-1-5-2 図いじめに起因する事件

事件数・検挙・補導人員の推移

(平成 15 年～令和 4 年)



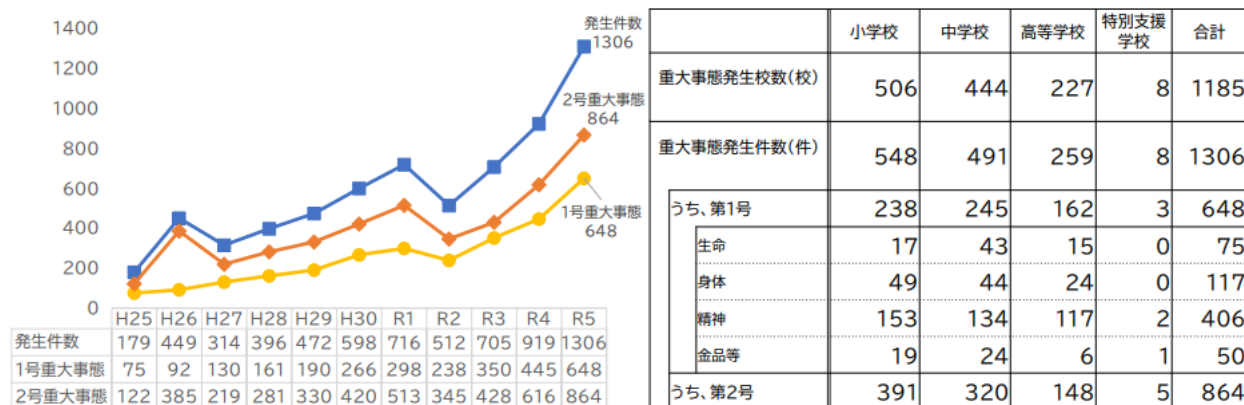
注 1 警察庁生活安全局の資料による。
2 「いじめに起因する事件」とは、いじめによる事件及びいじめの仕返しによる事件をいう。

また、いじめについては文部科学省からもデータが発表されています。

本原稿執筆中に文部科学省から「令和 5 年度いじめの重大事態児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」(文部科学省 R6. 10. 31 報道発表資料) が公表されました。これが最新のオープンデータであり、こちらでもこのデータから要点と思われる部分を下記に引用します。

いじめの重大事態

いじめの重大事態の発生件数は 1, 306 件 (前年度 919 件) であり、前年度から 387 件 (42. 1%) 増加し、過去最多となった。増加の背景として、いじめ防止対策推進法の理解が進んだことによる重大事態の積極的な認定や保護者の意向を尊重した対応がなされるようになった一方、学校としていじめの兆候を見逃してしまうなどの早期発見・早期対応への課題や個々の教員が一人で抱え込んでしまうなどの組織的な対応への課題があったことなどが考えられる。なお、重大事態のうち、490 件 (37. 5%) (前年度 356 件 (38. 7 %)) は、重大事態として把握する以前にはいじめとして認知されていなかった



いじめ防止対策推進法第 28 条第 1 項に規定する「重大事態」の発生件数

※ いじめ防止対策推進法第 28 条第 1 項において、学校の設置者又は学校は、重大事態に対処するために調査を行うものとする規定されており、当該調査を行った件数を把握したもの。

※ 1 件の重大事態が第 1 号及び第 2 号の両方に該当する場合は、それぞれの項目に計上

されている。

※ 同法第 28 条第 1 項に規定する「重大事態」とは、第 1 号「いじめにより当該学校に在籍する児童等の生命、心身又は財産に重大な被害が生じた疑いがあると認めるとき」第 2 号「いじめにより当該学校に在籍する児童等が相当の期間学校を欠席することを余儀なくされている疑いがあると認めるとき」である。

そしてまた「不登校」についても増加傾向にあります。これは冒頭「非行少年」の増減で述べた「人口率」ではなく、人員数であり、少子化でありながら数が増えているということになります。ここでも先に言及した令和 5 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要（文科省 R5. 10. 31）からデータを引用します。

長期欠席のうち小中学校における不登校

長期欠席のうち小・中学校における不登校：小・中学校における不登校児童生徒数は 346,482 人（前年度 299,048 人）であり、前年度から 47,434 人（15.9%）増加した。11 年連続増加し、過去最多となったものの、増加率は前年度と比較して若干低くなった（R4 22.1% → R5 15.9%）。在籍児童生徒に占める不登校児童生徒の割合は 3.7%（前年度 3.2%）。なお、出席日数が 0 日の者は 3.1%（前年度 3.2%）、出席日数が 1～10 日の者は 7.4%（前年度 7.5%）だった。また、欠席日数が 30～49 日の者は 22.3%、欠席日数 50～89 日の者は 22.7%、90 日以上欠席している者は 55.0%（前年度 55.4%）だった。増加の背景として、児童生徒の休養の必要性を明示した「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律」の趣旨の浸透等による保護者の学校に対する意識の変化、コロナ禍の影響による登校意欲の低下、特別な配慮を必要とする児童生徒に対する早期からの適切な指導や必要な支援に課題があったことなどが考えられる。

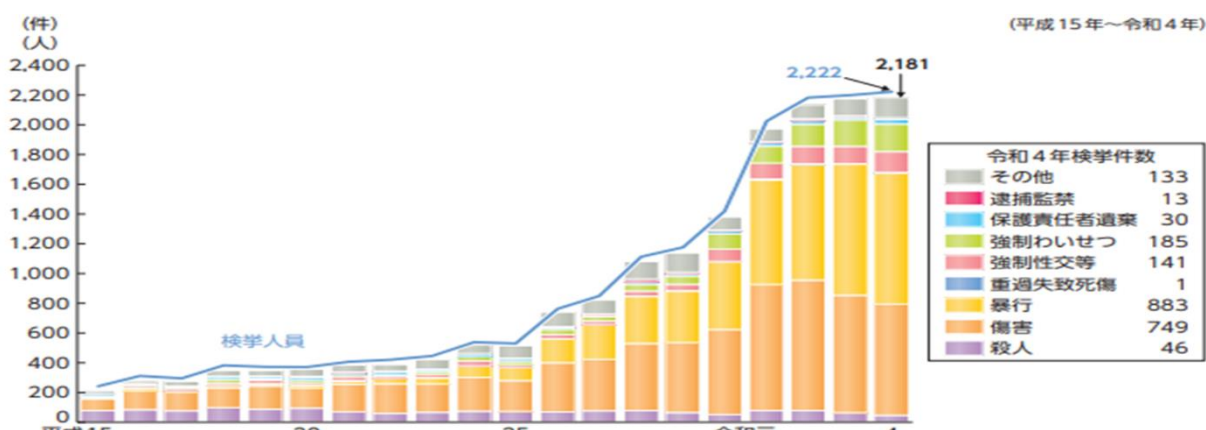
長期欠席のうち高等学校における不登校

高等学校における不登校生徒数は 68,770 人（前年度 60,575 人）であり、前年度から 8,195 人（13.5%）増加し過去最多となったものの、増加率は前年度と比較して若干低くなった（R4 18.8% → R5 13.5%）。在籍生徒に占める不登校生徒の割合は 2.4%（前年度 2.0%）。増加の背景として、高等学校進学やクラス替え等に伴う不適應の増加やコロナ禍の影響による登校意欲の低下などが考えられる。不登校生徒について把握した事実としては、高等学校においては、「学校生活に対してやる気が出ない等の相談があった。」（32.8%）が最も多く、続いて「生活リズムの不調に関する相談があった。」（26.7%）、「不安・抑うつ等の相談があった。」（16.7%）、「学業の不振や頻繁な宿題の未提出が見られた。」（15.4%）、「いじめ被害を除く友人関係をめぐる問題の情報や相談があった。」（11.0%）の順で多かった。

次に、児童虐待については再び令和 5 年版犯罪白書からデータを引用します。

児童虐待に係る事件 検挙件数・検挙人員の推移（罪名別）（令和 5 年版犯罪白書 210 頁）

検挙件数及び検挙人員は、平成 26 年以降大きく増加し、令和 4 年は 2,181 件（前年比 0.3%増）、2,222 人（同 1.0%増）であり、それぞれ平成 15 年（212 件、242 人）と比べると、約 10.3 倍、約 9.2 倍であった。罪名別では、特に、暴行や強制わいせつが顕著に増加している。なお、強制わいせつについては、平成 29 年法律第 72 号による刑法の改正により、監護者わいせつ等が新設され、処罰対象が拡大した点に留意する必要がある（白書 210 頁）。



3 「非行」が減少する状況下でも注目されている特殊詐欺案件

非行の少年人口比の減少については冒頭でも言及しましたが、非行の中でも「特殊詐欺案件」については、少年がその末端（受け子等）を担うことなどにより注目を集めているものです。以下令和5年版犯罪白書からデータ等を引用します。

特殊詐欺（令和5年犯罪白書の記載）

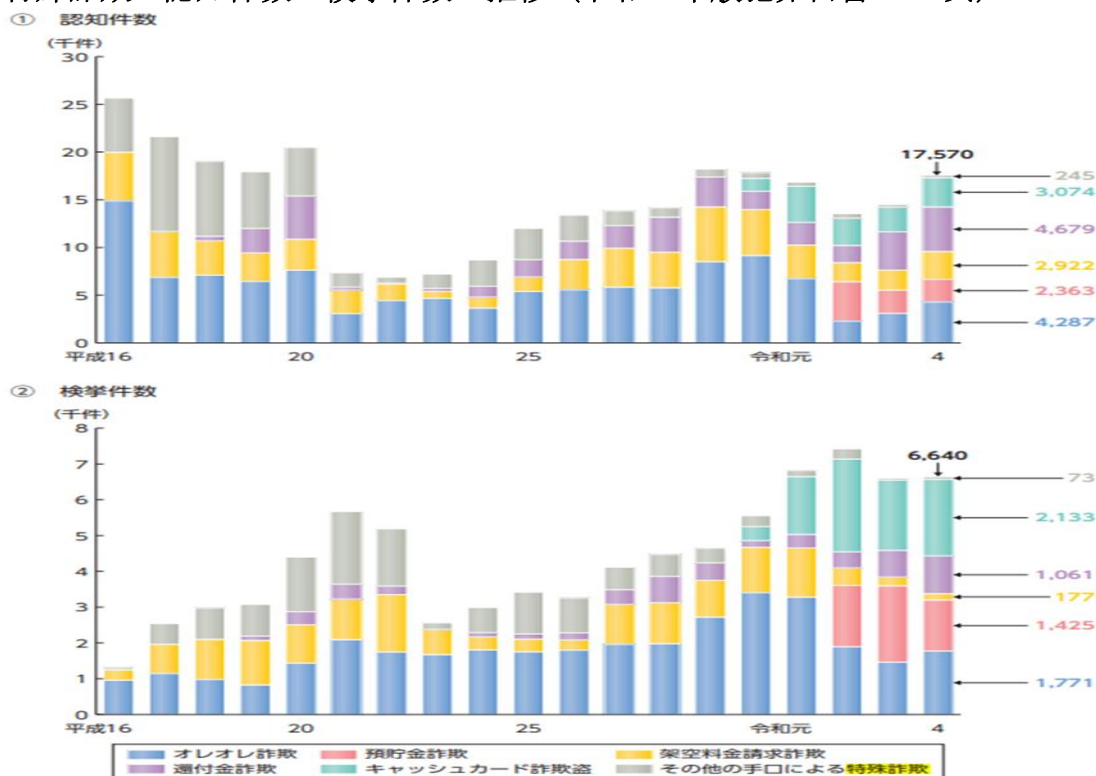
（特殊詐欺とは）被害者に電話をかけるなどして対面することなく信頼させ、指定した預貯金口座への振込みその他の方法により、不特定多数の者から現金等をだまし取る犯罪の総称。

現金等を脅し取る恐喝及びの認知件数、検挙件数及び被害総額（現金被害額及び詐取又は窃取されたキャッシュカード等を使用してATMから引き出された額（以下「ATM引出し額」という。）の総額をいう。ただし、ATM引出し額については、平成21年以前は被害総額に含まれず、22年から24年までは、オレオレ詐欺に係るもののみを計上している。）の推移（統計の存在する平成16年以降）は、左図のとおりである。

令和4年における特殊詐欺の認知件数及び被害総額は、いずれも前年と比べて増加、それぞれ17,570件（前年比21.2%増）、約371億円（前年比31.5%増）であり、被害総額は8年ぶりに増加した。主要な手口別に見ると、預貯金詐欺（親族、警察官、銀行協会職員等を装い、「あなたの口座が犯罪に利用されており、キャッシュカードの交換手続が必要である」等の名目で、キャッシュカード、クレジットカード、預貯金通帳等をだまし取る（脅し取る）もの）以外の手口では、認知件数及び被害総額が前年と比べて増加しており、特にオレオレ詐欺は、それぞれ4,287件（前年比1,202件（39.0%）増）、約129億円（前年比42.7%増）と大きく増加した（警察庁刑事局の資料による。）

このように「特殊詐欺」は非行・犯罪ですが（これも後述するように積極的に参加するというよりは「巻き込まれる」という形態があります）、いじめや不登校といった形で生きづらさなどを表出している少年（あるいは児童・生徒）が増加していることには注目すべきだと考えます。

特殊詐欺 認知件数 検挙件数の推移（令和 5 年版犯罪白書 18 頁）



4 「非行」は「自ら行う」ものから「巻き込まれるもの」になったのか？

検挙される非行少年の減少とともに、かつて（私の体感では成 20 年代頃まで）大都市の繁華街ではなく、ごく普通の駅前や住宅街の一角、コンビニなどの前でたむろする少年たちの姿が消え、暴走族などのグループ非行も減少していきました。漫画やアニメ等でわかりやすくデフォルメされた「ヤンキー」「番長」といった格好をした少年をリアルに見ることも少なくなっていくと感じています。「暴走族」などのリアルなグループにおいては加入することによってその集団内の「掟」「ルール」を守れることを課され、「役割」があり、上下関係もあります。揃いの特攻服（暴走族の名称や、「天上天下唯我独尊」「夜露死苦（よろしく）」といった文言を刺繍したツナギのこと。これも処遇場面でリアルに見た対人援助職の人は少なくなっているのではないのでしょうか）といったツールは集団内での絆を強めることもある一方、「掟」「ルール」を破れば相応の制裁もあるなどするため、現代の少年にとっては、絆の魅力よりも煩わしさを強く感じるのだろうと考えられます。

一方、インターネットの発達とそれを利用するツールを所持することの低年齢化により、保護者が設定したフィルタリング機能などを難なく解除して、オンラインゲームなどで多額の課金をしたり、危険なサイトにアクセスすることにより結果的に金銭トラブルに「巻き込まれたり」することもよく聞かれます。私自身、地下アイドルにハマリ（「沼る」というそうです）、課金をすれば「推し」のアイドルと会話ができるということを知り、どんどん課金をしていったという軽度知的障害の少年の事例を既に平成終期に経験しています。つまり、こうした危険なサイトでの金銭トラブルに「巻き込まれる」のと同様に、抗うことができない魅力的なこと（典型的なものが非常に高額な報酬）に惹きつけられ「巻き込まれる」のが現代の特殊詐欺といった見方もあります。

私も教員関係者等に対する研修の講師などを務める際に、教員などの方々からそ

うした不安をお聞きすることもありますし、実際に東京都内の高校では闇バイトの危険性を伝える特別授業も実施され、その内容がテレビで報道されていました。以下にその報道の一例(概要)をお示しします。なお、特定を避けるため、固有名詞は●●というかたちで伏せています。

闇バイトの危険性伝える” 東京 ●●区の高校で特別授業 (NHK 首都圏 webR6. 10. 2)

闇バイトに関わったとみられる強盗傷害事件が発生した現場に近い東京・●●区の高校でR6. 10. 2、安易に犯罪に加担することへの危険性などを伝える特別授業が行われた。都立●●高校で行われた特別授業には、全校生徒が参加した。高校から●キロほど離れた場所ではR6. 9. 28、闇バイトに応募したとみられる若者らが住宅に押し入り、金品を奪った上、親子にけがをさせる強盗傷害事件が発生している。警視庁●●警察署の●●署長は、「管内で起きた強盗事件では、逮捕した容疑者の1人が『闇バイトで雇われた』と話している。闇バイトは非常に甘いことばで皆さんを誘惑してくるので注意して欲しい」などと述べた。特別授業にはアイドルグループ●●のメンバーの●●さんも参加し、クイズに答えながら、「闇バイトの指示役は、身分証などの写真を送らせて、逃げられないよう脅すこともあるので、募集には応じないことが大切だ」と呼びかけていた。●●警察署の●●課長は、「『短時間』『高収入』などの甘いことばにだまされないで欲しい。怪しい話は疑い、警察に相談して欲しい」と話していた。

私も高校等で生徒を対象にした出張講座を行ったことがあります。通常事前にどの授業のコマで行うのかといったことなどを年度当初から担当教諭の方と細かく詰めていきます。しかしこの「特別授業」は事件発生から間を置かずに実施され、全校生徒、つまり全学年が参加しています。報道で知る限りで準備段階のことは知り得ませんので、企画そのものは年度当初から予定されていて、そこにたまたま事件が重なったのかもしれませんが。しかし事件発生と特別授業実施のタイミング、全学年が参加といったことを考えると、「特別授業」というより「緊急授業」のような印象を受け、それだけ学校や保護者の方が強い危機感を持たれているのだとも感じられました。

つまり、非行というものが、「思春期特有の社会への反発などにより積極的に行うもの」というものから、「社会を知らない」「未熟な」少年が「悪い大人によってたくみに騙されていくもの」という認識の転換があるようにも感じるのは私だけでしょうか。

また、こうした非行に向かう端緒として、次に述べるような独特のことばが使用されることも考慮の内にいれるべきだと考えています。

5 ブラックバイトという言葉

「ブラックバイト」という言葉を最初に耳にした時、かつて社会の耳目を集めた「合法ドラッグ」(後に呼称は危険ドラッグと変更)という言葉に通じるような感覚を私は持ちました。

「合法ドラッグ」という言葉は、「ドラッグ」という「危険なもの、怪しいもの」という印象を持ちがちな(実際そうですが)言葉の前に、敢えて「合法」という言葉を付け加えることによって、そこにアクセスする心理的なハードルを下げる、違法ではないと強調しているもの、と私は感じていました。

そして今回の「ブラックバイト」について述べさせていただくと、そもそも「アルバイト」というのは、昭和～平成初期においては、例えば大学生であれば大学生協や求人誌を通じて見つける、あるいは顔の見える関係(近所の方や親戚など)で依頼されたり店舗の張り紙を見てそこで働くといったもの、あるいは季節的なもので多量の人手確保しなければならないものは、部活やサークルなどで代々引き受けてきたものもあったというのが、平成初期に大学生活を送った私の経験です。つまり、大学生という(一般的には)「社会のことをあまり知らない」者であっても、大学生

協などの「大人のチェック」が入ったものであれば、まずは安心して応募でき、万一トラブルがあってもそこに相談できるシステムがあったと思われます。もちろんそうした時代でも、求人誌等で法外な額を提示されているアルバイトがないわけではありませんでしたが、そこは友人等と相談するなどして、「こんなおいしい話はやっぱり現実的ではない」「あぶないからやめよう」といった結論に至り、応募を見送るという選択もできました。

ちなみに、部活・サークルに対して依頼される季節的なアルバイトというのは、私が神社仏閣の多い地域で大学生活を送ったこともあり、お正月や受験シーズン前の準備作業、あるいは伝統的な御祭の運営を支えるスタッフというものが多く、地域性の強いものだと感じていました。しかし、大学卒業後異動(転勤)の多い国家公務員になると、転居を伴う異同となった時には引越し業者さんを依頼する機会も多くあります。平成も終わりの頃に依頼したある引越し業者さんには、地元で強豪として知られる女子スポーツの部活メンバーが作業チームに入っていました。引越し業者さんは「転勤に伴う転居が集中するこの時期でも、この大学の部活に対してお願いすると確実にスタッフを出してもらえる。そのうえ、遅刻などもなく仕事もテキパキしていて安心して任せられる」と話しておられ、アルバイトスタッフである女子学生も笑顔で「このバイトは新学年が始まる前の休み期間に部活の遠征費などを稼ぐことができるし、筋トレにもなって一石二鳥なんです」と笑顔で話していたことが印象的で、自身が経験していた「顔の見える関係でのアルバイト」がまだ続いていたことにも驚きました。

一方で、ブラックバイトは、人を集める側は(犯罪なので当然ですが)自分たちの身元がわからないように様々に工夫をする一方、応募してきた側の個人情報を一いち早く握り、そこから脱出できない、相談できないようにするのが常道です。

ですから、「ブラックバイト」に応募した結果、特殊詐欺の役割の末端を担うことになって逮捕されても、「自ら選択して非行・犯罪を行った」というよりは「巻き込まれた」という感覚が強いと感じられますし、「ブラックバイトに巻き込まれないように」という啓発なども電車内広告その他で多く行われていますが、これも「巻き込まれない」というトーンが強いものと私は感じています。

そして「闇バイト」「ブラックバイト」などの報道に接する際、私自身がいつも考えるのが、「相談することが重要であると啓発すること、相談先を教示することはもちろん重要である」「しかしそれだけではなく、援助希求性という観点をこの問題ではもっと考えなければならないのではないか」ということです。「困った時に適切な相手に相談をする」ということは想像以上に難しいことです。なぜなら、「相談」とは自分の弱さを相手に開示することが前提であり、相手、それは大人や社会全般に対する信頼感がないとできないことだからです。

6 安心して「相談できる」社会をつくる重要性

「相談する」ことの重要性を強調したり、あるいは困った時の SOS の出し方などを練習する場面はよく見受けられます。自殺防止やいじめ対策が主たる場面でしょう。

ただ「相談」というものは「困っていることを打ち明ける」という「弱さの自己開示」であるので、相談する相手への信頼がないとできないものです。ですから「相談できる能力」さらに踏み込んでいえば「援助希求性」を高める取組をする、つまり、被害者的立場になりうる者に一定の能力を求めるような取組だけでは私は足りないと感じています。

実際に、様々な自治体などでポータルサイトが作成され、そこから支援につながる場合もあれば、重層的支援体制整備事業として、「地域まるごと」といった形で相談を受けやすくする窓口も整備されつつあります。ただ、そこに配置されているスタッフの数や体制などは自治体によって様々です。たとえば東京都内の某区(人口約 100 万人)では、区内の 20 数か所に 2 人ずつスタッフを置く体制を整備していますが、隣県で同じく人口 100 万人を要する自治体では、相談窓口は1か所、スタッフは2人ということもあります。

こうした体制整備には予算や人員も必要であり、スムーズな運営には時間を要します。ですか

ら、こうした公的な窓口の整備を待つだけではなく、我々大人、特に対人援助職においては「この人になら気軽に相談しやすい」状態であるかどうかを顧みることが必要だと感じています。

たとえ専門性や技術を持っても、業務が立て込んでいて忙しい雰囲気をもっていると、相手はちょっと引いてしまうかもしれませんし、業務に追われるなかで見落としてしまうニーズもあるかもしれません。また、専門職だけではなく、地域社会で活動する様々なボランティアの方々とのネットワークを密にしていくことで隠れているニーズを発見できることも多々あると考えます。

私は長く依存症回復施設の運営に関わるボランティアをしてきましたが、そこで耳にした「相談」に関する言葉は、至言とし耳に刻み込まれています。

「相談は、何を相談するかではなく、誰に相談するかで、その内容の質が変わる」というものです。その言葉を耳にしたのはまだ私が20代の頃でしたが、今でもこの言葉を胸に刻んでいます。そして折々に、援助場面における自分自身は相手にとって信頼に足る人間かということを自戒しています。

システムや法律などはすぐにできるものではありません。法律のなかでは成立し公布されると同時に施行されるものもありますが、施行まで相応の準備期間を要するのが通例です。

ただ、それを待っていては事態の解決はますます遅れ、「巻き込まれる」かたちで非行に及ぶ少年、そして当然ながら被害者等も増え続けることになります。

対人援助職は無論のこと、我々「大人」がこの社会を構成する一員であるという自覚を持ち、システムや法律があるからそれを守るという能動的な姿勢ではなく、社会を少しでも良くするために大切な何かを「守る」といった姿勢を持って取り組むことが強く求められていると感じています。

私の世代でも(昭和の終わりと共に高校を卒業したぐらいの世代だとお考え下さい)、社会は決して安全なものとはいえませんでした。私は1学年が10クラス近い小学校、中学校に至っては10クラスを優に超える大規模な中学校で義務教育時代を過ごしました。当時も環境が「安全安心」であったわけではありませんでした。今ほど自動車運転に関する法律の整備も進んでいなかったのも交通事故もよく耳にしました。「あのエリアに行く際はカツアゲ(恐喝)にあわんようにせんとあかん」ということが同年代同士でささやかれたりしていました(他の中学校で学生時代を過ごした同僚は、「御札は靴下のなかにいれとった」といっていました)。「光化学スモック注意報」が発令されると運動場から校舎内に入ることもしばしばでした。

それでも、さりげない近所の人の見守り(決して監視というものではなく)があって、危険なことをされると厳しく注意されることもあり、それに対して叱られた子どもの親が感謝こそすれ文句をいうといった場面を少なくとも私は見たことはありませんでした。おつかいにいたり集団登校で年少者をきちんと誘導するといったちょっとした頑張りをさりげなくほめてもらえるといったこともありました。「地域の子どもの地域で育てる」といった雰囲気があり、こうしたリアルな体験の中で「やっていいこと、悪いこと」を覚え、自身の手にあまることは「解決できる誰かに相談する」ことも覚えていったように思います。もちろんこうしたことを記載して「昔はよかった」という懷古譚で結ぶわけではありません。近年、当初は介護保険をメインに考案された(と報告者は認識は認識しています)「地域包括ケアシステム」に様々な「ケアされるべき人」が含まれるようになっていきます。司法福祉の関連では刑務所出所者等もそうですし、医療の場面では難病、精神疾患・精神障害等も含まれています。「にも包括」といった略語が普通に(業界界限では)用いられるように「精神障害者の方のニーズにも対応できる地域包括ケアシステム」の在り方についての議論に触れることもしばしばです。ソーシャルインクルージョンということを考えれば、地域包括ケアシステムの中に様々な方を含めていくのは当然の流れだと思いますが、肝心の「地域」の在り方、特に共助や互助といったことについては、現在の地域社会にそれが当然「あるもの」として議論や施策を進めていくことはどうなのかという思いがあります。たとえば、昨今各地で展開されている「地域食堂」「子ども食堂」ひとつをとっても、志ある人の善意やその方が持つ地域ネットワークで成り立

っていることを、実際の支援の端につながっている私は強く感じるがあります。つまり、既存の地域社会をあるものだと思い込むことなく、地域における「関係性」をアセスメントし、どのようなきっかけや仕掛けがあれば、地域社会一人一人の善意や熱意を引き出しそれらを好循環させるシステムができていくのか考えていく必要があると私は強く思います。

参考文献

令和5年版犯罪白書

令和5年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要（文科省 R5. 10.31）

保育と社会福祉を

漫画で学ぶ 26

『私だけ年を取っているみたいだ』

迫 ともゆ
(比治山大学)

水谷緑さんの『私だけ年を取っているみたいだ』は、副題にヤングケアラーの再生日記とあるように、子ども時代に家族の介護などを引き受けた人たちのエピソードが集められた作品です。個人が特定できないように複数の子どもの体験を編集してストーリーを作ったと書かれており、リアルな描写から支援の必要性が学べるとともに、取材対象になった人たちへの配慮も感じさせられるものです。

主人公のゆいは8歳。学校帰りにスーパーマーケットで、ひとりで買い物をして帰宅する。ゴミだらけの部屋の片隅で布団にくるまっている母がいる。「お母さんただいま。今ごはん作るね」と声をかけると母は突然形相を変えて「来るな!!」と叫んで物を投げつけてくる。

ゆいは速やかに母の視界から隣の部屋に移動し、障子を少しだけ開けていつでも逃げられる体勢で漫画を読む。その間も母は「バカにしゃがって」と怒鳴っている。しばらくして静かになったので障子を開けると倒れこんだ母の手元に包丁が落ちていたので、ゆいはそれを拾い上げる。(第1話「ゆいちゃんはヤングケアラー」より)

ゆいは、母親が統合失調症を発病したことをきっかけに、買い物や料理、掃除、洗濯さらには認知症の祖父の見守り、母親の精神的ケアまでを担うことになります。本来なら大人が担うべき家事や介護をするゆいのような子どもを「ヤングケアラー（子どもの介護者）」といいます。ゆいの家族には父親、祖父と弟がいますが、家庭の切り盛りはゆいの役割になっています。母親は病院には通っていますが「私は病気じゃない」といってほとんど薬を飲みません。

「お父さんが浮気している」と母親が言うため、ゆいは父親の会社に行かされ、学校を休みます。先生から「最近休みがちだけど、困ってることはない？」と聞かれますが、ゆいには何が問題なのかが分からず「困ってないです」と答えてしまいます。

ある日、帰宅するとゆいが大切にしていたエンデの『モモ』が捨てられている。「お母さん…なんで私のもの…」と尋ねるが、母親は「全部捨てないと不幸になる!」と真剣に訴える。ゆいは「私はロボット、だから傷つかない」と自分に言い聞かせ、押しつけられた役割をこなし続けていく。

微熱と不眠が続き、保健室の先生にも「困っていることはない？」と聞かれたゆいは、家庭のことを言っているのかと心配する。「言ってしまったらすべてが壊れてしまうかもしれない」。保健室の先生は親身に聞いてくれたが、教頭が「家庭のことに首を突っ込むもんじゃない!」と突っぱねてしまい、初めての相談は失敗に終わった。(第3話「ぜんぜん動かない」より)

ゆいのように「何が問題なのか分からない」ヤングケアラーは、大人に気づかれずにたくさん存在するのだと思われます。小さな子どもにとって、自分の育つ家庭は唯一の判断基準です。他の子どもの家庭と違うところがあっても、そのことを客観的に考えて「おかしい」「問題だ」「困っている」と気づくには、相当の時間がかかります。たとえば、ゆいの父親は「女の子だから」という理由で、家事やケアの役割をゆいに押し付け、ゆいの弟には手伝いをさせていません。でも「女の子だから家族の面倒を見るのが当たり前」という考え方の家族のなかでは、ゆいは疑問を感じることはできません。

思春期をすぎ、大人になってから「自分はヤングケアラーだったんだ」「なんで私だけが…」と気づく人は少なくありません。

ゆいは通院を拒否する母親と接して、感情を揺さぶられるたびに自分の感情を殺し、中学2年頃から日常的に軽く解離するようになった。目の前のことがテレビの中のもののよう感じられ、自分の気持ちにも他者の気持ちにも気づきにくくなる。母親の見舞いに訪れた祖母（母親の実母）と母親が言い争う様子をおかしく感じて大笑いしてしまったゆいは、精神科病院に入院することになる。

入院が幸いして、ゆいは久しぶりに静かにぐっすりと眠ることができた。うつと診断され、カウンセラーと家族面談を重ねる中で、ゆいは父親が自分にケア役割を押しつけてきたことに気づき、はじめて怒りの感情を持つ。そして退院を勧めてきた医師に「私は今退院したら自殺するか、親を殺すと思います」と伝える。「お願いします。家から出る方法を教えてください」。（第5話「限界」第6話「精神科病院の穏やかな日々」第7話「母のことを知りたい」より）

解離とは、主に心理学や精神医学の分野の用語です。自分の意識、記憶、感情、行動などを含む自分自身の感覚が、一時的に分離してしまう状態を指します。

具体的には、特定の出来事についての記憶が失われたり、自分が自分でないように感じたり、現実が遠のいて見えたり、突発的に普段いた場所から離れてしまったり、強いストレスのもとにある場合には、普段とは違う人格が現われる現象などが起こります。

解離は、心が極度のストレスやトラウマに対処するために現れる状態であり、強い心理的な衝撃に対する防衛だと説明されています。場合によっては日常生活に深刻な影響を与えます。解離を経験している場合には、早めに心理的な支援を求めることが大切です。

このあと、ゆいは家族から離れて生活し、大学に通います。作品を読んだ限りでは、ゆいは自立援助ホームを利用したという設定なのだと考えられます。自立援助ホームは義務教育終了後に、他の社会的養護（児童養護施設、里親、児童自立支援施設など）の措置を解除された青少年、または都道府県知事が認めた青少年に、自立のための援助と生活指導を行う施設です。

入所を希望する理由と本人の意思がある場合、住んでいる都道府県や政令市の窓口、あるいは児童相談所を通じて入居相談を行います。利用料はホームによって異なりますが、2024年現在で月額約3万円～4万円程度です。生活費が無い場合は、基金による貸付制度もあります。ゆいの様に自立援助ホームから大学などに通う場合、就学者自立生活援助事業を利用できます。ただ、制度の利用だけでは心身の回復はあり得ません。

ゆいは、ようやく本格的にひとり暮らしを開始します。自由な生活を満喫しようとしませんが、自分が好きなものややりたいことが分からず、友人や恋人との付き合い方にも「正解」が分からず、悩むようになります。人とつながりたいけれど、つながるのが怖いのです。つい相手の求める正解を先読みしようとしてしまい、嫌われる前に自分から関係を断とうとしてしまいます。親からの仕送りでキラキラと

楽しく大学生を送る友人たちと食事をしながら、「私だけ年を取っているみたい」と感じてしまうのです。

大学を卒業したゆいは看護師として仕事を始め、ヤングケアラーの自助グループに参加して、はじめて自分の体験を言葉にでき、受け入れてもらえた。それでも変わることのない実家の状況を看護師長に話すと、「お母さんではなく、患者さんとして接したら？」と勧められた。成長したゆいの目には、お母さんになろうと努力していた母親の持ちも分かるようになっていく。

ゆいは看護師長のアドバイスを思い出すが「やっぱりお母さんを100%患者さんのようには思えない。病気とお母さんを切り離すことはできない」と考える。「『お母さんの病気がなければよかった』って思いたくない。今までの自分のがんばりを否定することだから」。ゆいは、小さかった自分が家事をこなしていた姿を見つめる。（第11話「お母さんを、どうする？」より）

精神を病んだお母さんも、やはりお母さんなのです。ときには健全な様子を見せることもあります。家族を客観的に見ることは簡単ではありません。やがて結婚と出産、子育てがゆいの回復にとっての転機になります。自分が娘の年齢のときに経験したことがフラッシュバックし、ゆいは度々ヘルパーを利用することになります。自助グループでは「感情は生まれるのではなく学ぶものではないか」と話す参加者に会い、娘の成長とともに「感情の学び直し」をしていきます。

「感情は生まれるのではなく学ぶもの」、これはまさに、子どもの成長プロセスにおいて経験されることです。例えば赤ちゃんが笑顔を見せるときに、「あ、笑ってる！」と大人が言葉にして肯定的に返すことによって、赤ちゃんの中では喜びや快の感情が他の感情から分かれて認識されることに繋がります。泣いているときには「どうしたの？」と気遣われたり、「嫌だったね」と言葉にしてもらうことで、赤ちゃんは自分が不快な感情を持っていたことを学んでいきます。

つまり親や親代わりの養育者が、子どもの感情によく向き合って言葉にすることを十分にしていなければ、子どもは感情を学ぶ機会を得にくくなり、自分が何を感じていたのかに気づきにくくなってしまうのです。

本来は周囲に甘えるべき時期に甘えることができず、大人の役割をするしかなかったゆいは、自分に強く甘える娘と接して、その度に感情を揺さぶられながら、等身大の自分を取り戻していきます。

ヤングケアラーの問題の本質はどこにあるのでしょうか。小さな子どもが親の介護など、大きな負担のもとに不自由な生活を強いられてしまうこと自体も大変なのですが、子どもが自分の感情に蓋をして生活する期間が長く続くと、ゆいのように解離が起こったり、対人関係を円滑に進められなくなったりします。その深刻さがよく分かる作品になっています。

本作を書くために2年間取材をしたという作者の「あとがき」には、次のように書かれています。「取材して実感したのは、『子どもはプライドが高い』ということです。同情されたくないですし、誰が何に怒るのか、喜ぶのか、冷静に見極めて行動しています。子どものしたたかさを大前提にしながら描きたいと思いました」。

自分が家族を支えるしかない状態にある子どもは、「うっかり助けを求めたら家族が壊れる」と考えます。家族を守るためには、周囲の大人に嘘もつきます。「困っていることはない？」と聞かれても「ないです」と答え、自分が何とかしないと…と考えます。また、助けを求めても相手にされなかった

経験が続くと「大人なんて信用できない」と考えるようになってしまいます。そのあたりが「プライド」「したたかさ」なのではないかと考えながら読みました。この作品は10代の当事者にも読めるように、漢字にはふりがながつけられています。当事者が、自分がヤングケアラーであることを自覚したときには、周りに SOS の声をあげてほしいという願いが込められているのでしょう。

紹介作品：水谷緑（2022）『私だけ年を取っているみたいだ』文芸春秋

参考サイト：全国自立援助ホーム協議会 <https://zenjienkyou.jp/>

※本エッセイで紹介した作品中のセリフなどは、読みやすくするために、意図を損なわない程度に改変している場合があります。

※ご感想・ご意見などは筆者のメールアドレスまでお寄せください。⇒ sakotomoya@gmail.com

『余地』

～相談業務を楽しむ方法 28～

<頭の中のジェノグラム>

杉江 太郎

～頭の中のジェノグラム～

この仕事をしてからというもの、ニュースやワイドショーなどで全国の事件や芸能人の話題を聞くたびに、頭の中でその登場人物のジェノグラムを描くようになった。それは、子どもが亡くなったというような仕事に直結するような内容だけではなく、芸能人の婚姻から不倫まで、さらにはブラックバイトの加害者に至るまで多様である。この癖は、仕事を始めてすぐに身についたものではなく、おそらく様々なところで家族について学び、目の前の子どものことを家族という集団を通して考えるようになって身につけてきたものだと思う。

ニュースやアニメで見た、芸能人や登場人物の気になったジェノグラムを書き溜めて、勉強会などで使ったりしている。16歳で結婚した芸能人や、子沢山の芸能人、女性との浮気後に離婚し、他の複数の女性と生活を共にしていると報道され、その後その片方の女性（妊娠中）と婚約した男性、さらには日本を代表する国民的アニメに至るまでそのジェノグラムは

様々である。最近では、5歳の幼稚園児が登場する国民的アニメの父方の伯父さんが婚姻するというエピソードがあり、その婚姻相手には以前の夫との間に子どもが2人いるという設定で、子連れの方と結婚するという、いわゆるステップファミリーまで登場した。

またアニメで有名なジェノグラムと言えば、日曜日に放送されている一家だろう。両親の年齢や、きょうだいの年齢差、三世代が同居し、アニメから「マスオさん」という言葉が家族形態を説明する言葉として広がったような家族の構成など、いざジェノグラムを通して見てみると、様々な想像が駆り立てられる。その家族について、最近では、夫婦別姓の制度が取り入れられると、様々な名字が混在することになるというSNSの投稿も見たことがある。

～想像力を働かせる訓練～

決して芸能人の浮いた話が好きなわけではない。むしろ報道されている話題（ゴシップ）には興味はなく、そのことより

も、この人は一体、どのような育ちをしてきた人なのだろうか、どのような家族体験をしてきた人なのだろうか等とその人の育ちや家族歴に興味が移っていく。また、こっそりとこの人のジェノグラムは勉強会で使えるかもしれないなんてことも考えている。今では、ネットを利用すれば、その家族の生年月日や家族の成り立ちなどを簡単に調べることが出来る。その情報を元にジェノグラムを作成し、報道されているエピソードとは切り離れたところで、どのような体験をしてきたのだろうかと思像をする。その想像を補完するためのツールがジェノグラムなのである。

この癖が身についてからというもの、仕事中に耳にする家族について情報を聞いたときに、まずは頭の中でジェノグラムを作成し、それを書き起こす作業が断然早くなったように思う。実際に書き起こすことはないが、職場内の同僚と話している際にも、その方の家族の話など聞きながら、実は頭の中にジェノグラムが出来ているなんてこともある。

家族のエピソードを聞いたときに文字で認識して、文字でメモを残すよりかは、ジェノグラムのように図式化してメモをする方が、後から見返したときに家族の状況が一目で把握できるし、情報が濃縮されることになる。ケースの対応を検討するにしても文字だけを眺めるよりかは、ジェノグラムがある方が、色々な視点で

物事を考えることが出来る。

前職は営業であったが、そのときはジェノグラムという存在をほとんど知らず、目の前の方とのやりとりでも、契約をしてもらうかどうかを優先してしまったあまりに、家族の情報を丁寧に聞くことをしておらず、聞いた情報もメモで残す程度しかしていなかった。今思えば、目の前の方の家族のエピソードに向き合い、語られた内容や、その中で把握できたジェノグラムなど目に見える形で記録に残しておけば、後から営業をするときにも役に立っただろうし、何なら成績をもう少しあげられたのではないかと考えている。

～ジェノグラムとのお付き合い～

この仕事は、目の前の事象だけにとらわれていると中々前に進むことが出来ない。因果論に陥らず、「何が出来るのか考える」「間違った問題解決の方法をしないか」という視点は、家族を学ぶようになったきっかけを与えてくれた講師（団先生）の教えである。ジェノグラムを作成し、少し離れた視点で、家族について思いを馳せることで、因果論に陥るという罠から脱出することが出来る。

援助方針やカンファレンスなどで事例を扱う場合、まずはジェノグラムを作成するところから開始する。ジェノグラムを描きながら、何歳で子どもが生まれたのか、何歳で婚姻したのか、子どもが何

歳のときに離婚したのかなど、数字を書き込みながら、そのときにどのような体験があったのだろうかと思いを巡らせる。

家族との距離感や、性差による境界もジェノグラムを通して見ると一目瞭然である。家族自体が移り変わるものであることを考えると、ジェノグラムも移り変わるものである。時代や出来事ごとにジェノグラムを作成し、スライドショーで見られるようにするとその変化もわかりやすい。

一度作ったジェノグラムをデータで残しておく、(ちなみに私はエクセルで作成して、シートごとにデータを残している) 良いのか、悪いのか数年後に、その家族に出会うことがあり、一から作らなくて良く、知らない人にその家族のことを説明するときにも効率的である。

ジェノグラムを描くには、最初は時間がかかってしまうかもしれないが、たくさんのジェノグラムを描く中で、慣れと共に書くスピードやコツが上がっていく。一度、騙されたと思って、国民的アニメのジェノグラムを作成するところから初めてみて欲しい。ジェノグラムだけを見て、どんな家族なのか、この年齢差はといったい・・・などと想像するだけでも、想像力を働かせる訓練に繋がり、物事を柔軟に捉えることに役に立つだろう。

どこかに面白いジェノグラムがないかなどと思いながらニュースを見ていると、普段と違ったニュースの楽しみ方ができ

るかもしれない。

手始めに、「日曜日、18 時半からのアニメの一家」「少し下品な 5 歳児が登場するアニメ」のジェノグラムから描いてみてはいかがでしょうか。



統合失調症を患う母とともに生きる子ども

～番外編⑪～

ちからのカタチ 3



松岡園子

私が病気を抱えた母と 2 人暮らしになった中学生時代の自分の体験をお話しさせていただく時に、周りの同級生と何が違っていたのか、振り返って考えてみたことをご紹介しますことがあります。

その中の一つに、自分で選択・決断する場面が多かったとお話しすることがあります。それは、同級生のものとは少し違った形の選択・決断でした。

中学校に入ると、部活動に所属することが当たり前だった 1990 年代。周りの同級生は、自分が興味を持った好きな部活を選択します。でも私は、調子の悪い母が家にひとりであることを考えると、部活なんてしている場合ではないと考え、部活に入らないことを選択・決断しました。当時、楽器の演奏に興味があり、友達が誘ってくれた吹奏楽部に入りたいという思いもありましたが、放課後や土日の練習で家を空けることが多くなることを考えると、どうしても入る気にはなれませんでした。部活に入ることが当然という考え方の時代でしたので、学校の先生や友達から「なぜ部活に入らないのか」と訊かれたり、高校進学の内申にひびく、どの部活でもよいから入りなさいなどと言われることもありました。

同級生の選択は「どの部活に入るか」で、私の選択は「部活に入るか入らないか」です。でも、周りの声に合わせて部活に入り、家を空けている間に母に何かあれば、対応するのは私です。問題があれば、大変な思いをするのは私なのだから、周りの声に合わせてばかりもいられません。周りから見れば、変わった子ども、頑固な子どもだったかもしれませんが、私は部活に入らずに中学時代を過ごしました。大人になって余裕ができ、やりたければ趣味としてできるし「今は」やめておこうという思いでした。

中学校で周りの同級生と同じ経験をすることよりも、周りとは違う選択・決断をしてでも、病気の母と一緒に暮らしたい気持ちの方が強かったのでしょう。だから今、部活が「できなかったこと」よりも、母と暮らすことが「できたこと」の方が、私の心に強く残っているのだと思います。同じように、修学旅行にも行きませんでした。

これは当時の私の考える優先順位がそうだっただけであり、他の人ならまた別の優先順位があり、どちらが良くて、どちらが悪いというものでもないと思います。その人の考える優先順位に合うように環境を調整していくことができれば、幸せを感じやすいのだということではないでしょうか。私のことと言えば、どうしても部活に入りたいという強い思いがあったのなら、そうできるように周りとの協力し、環境を調整していくことが必要だったのだと思います。そのために母と離れて暮らすことが必要なのであれば、それも選択肢の 1 つになるということだと思います。

私の 10 代、同級生と何が違ったか。その 1 つは自分で選択・決断する場面の多さですが、それは私の場合たいてい、周囲の「当たり前」に「NO」を言う選択・決断をすること、他の人とは違う選択をすることでした。その環境下ではそうするのが当然と思われていることを断り、自分ひとりでも周りとは違う選択をすることで、それを周りからとがめられても気にせず、貫く練習、自分が納得できる環境をつくり、幸せを感じる練習をしていたような気がします。部活や修学旅行の例で言うと、私が選択する事柄は、世間一般の考えからすると基準ラインから脱落する方向への選択で、それは不幸なことであるという周りの認識があったのではないのでしょうか。でも、脱落しているのかどうかは後になってみないとわからないことですし、不幸かどうかは私自身が決めることです。

そうは言っても、10 代の子どもの考えていることです。やはり周りの大人の人の言うことの方が正しいのではないかと、自分の決めたことに自信が持てなかったり、不安になります。いつも前を向いて突き進んでいくことができるわけではなく、ふと弱気になることだってあります。そんな時、何に支えられていたかという、「先生に言われても気にしんとき」と言いながら一緒に帰ってくれた友達や、友達のお母さんです。私の選択を「それでいいやん」と受け入れ、そばにいてくれたから、不安だったけれど前に進むことができたのだと思います。

(新連載)

私の頭の中のまだエンピツ①

そだちと臨床研究会 川畑 隆

自分らしさ

自分の価値とか自分らしさとか

いきなりで恐縮ですが、他の人と比べて有利な属性をもち、それを自認しながら恵まれた状況におかれている（ように見える）人を除けば、自分のオリジナリティ（自分独自とか自分起源といった意味合い）なんてあまり意識せずに、目の前のことにただ繰り返し関わりながら過ごしているのが、私たちの日常でしょう。しかし、自分には特別なオリジナリティなんなくて「ふつう」の人だと、自分について少しがっかりしている人がいるかもしれません。

「生きる意味や価値」についていろいろ言われますが、人は自分の意志で生まれてきたではありませんから、元々は「こう生きたい」も何もないわけです。でも今「自分にがっかりしてる」人もそうでない人も、日々生きているうちに、どうやら「よりよく生きたい」とか「私らしく生きたい」、「自己実現したい」という方向に仕向けられてきているようです。

オリジナリティについて、「自分がそうしたいと考えていれば、それは

その人のオリジナルだ」というフレーズを聴いたことがあります。理屈で考えれば、「これは私のオリジナルだ」と言っても同じようなことを考えた人は他にもいるかもしれませんし、誰かや時代から受け継いできているものかもしれません。それが本当にオリジナルかどうかは確かめようありませんから、オリジナルであることが怪しくなつて、オリジナリティなんてないと言いたくなつてしまいます。しかし人は唯一無二で、まったく同一のコピー人間は存在しません：よね。ですから考えたことの内容を言葉で表せば誰かが言つてたこととそう変わりはないにしても、その言葉が表す実質はその人の唯一無二性を通してアレンジされているわけですから、その人らしさ、つまりオリジナリティが支えていると言つてもいいのではないかと思うのです。

「私なんて平凡でこれという取り柄がない。あなたのこういうところがいいところだなんて言われたつて、そんなところはみんなもつてるし：」
という悩みは、これで論破できたでしょうか。

私は「ふつう」

でも、理屈はそうでもなんかストンと落ちなくて、自分らしさが実感できて「これが私だ」つて元氣が出ないものかと、「自己実現派」は思うのではないのでしょうか。

私は、年をとるにしたがつて、自分の「ふつう」であることの価値を言葉で表すことができるようになってきました。それまでは能力が高かったり魅力ある人と自分との違いを意識するし、人見知りするし、自分の考えや発言に自信がないし：というところをまだウロウロしていたような気が

します。いや、比較的若い時にある人から「川畑くんの切れ味はカミソリではなくナタだ」と評されたことがあります。でもそれにそうショックを受けたわけではなく、開き直りでもなく「ナタの川畑です」と自己紹介していたぐらいですから、その評価を拒絶していたのではないと思うのです。しかしこんなふうに覚えているのですからこだわりは残ったわけで、そのこだわりはその頃はまだ漠然としていて、言葉で表せるまでには醸成されていなかったと言えるかもしれません。

「ふつう」だからそのことを理解するには能力が及ばないし、そんなことなんて思いつかないし、「ふつう」だから失敗するし、「ふつう」だからふんざりがつかない……。それらを否定しなくてもいいし、そうであることを「ふつう」の能力だとして自信をもつていいような気がしてきたのです。これはもしかして、注意力や記憶力が減退してきている老人力の高まりともリンクしていることかもしれません……。以前、「いくら面接の準備をしても面接では何が起こるかわからないから、面接の前にはドキドキして自信がない、でもそれが当たり前だしその当たり前のことができているのだから、『自信がないことに自信をもてばよい』というフレーズを口にしたことがあるのですが、それと同じようなことです。「優秀な人にはわかりにくいだろうけど、私はふつうだからこそわかることがある」なんて言うとか対抗心が顕わかもしれません。また、そういう「ふつう」の力を肯定的に抽出できる「ふつうじゃな」さを私に対して指摘する人もいるかもしれませんが、それは性格傾向や得手不得手の範囲のこととして「ふつう」の中に入れてもらえるんじゃないでしょうか。

何故そんなことに自信が持てるようになってきたか……それは私にとっては、自分が対人援助職であったり、今も子ども家庭支援のことに首を突っ

込んでいることが大きく影響していると思います。

対人援助職のしんどさとうまみ

「私らしく生きる」：対人援助職でなくともみんな思うことだと思えます。お腹がすけば食べたいし、痛ければ痛くないように薬を求めるとか、私たちは快適さを求めて生きているとしたら、「よりよく生きたい」というのはあたりまえの思いです。そしてそこに「私の本当のところはこうで、その本当を大切にして無理をせず、つまり私らしく：」という気持ちも含まれるでしょう。

対人援助職の場合は、そういった「よりよく生きたい」生身の相手と同じく、同じく生身の自分をも視野に入れることを業務として求められることとなります。どういうことでしょうか。

援助する相手がどんな人でどんなことで困っているかを、援助職である私を通して理解しようとして関わっていくわけですが、そこでは相手に起きていることが私の身に起きたとしたら私は正直のところどんなふう思うか、それと相手の心の中に起きていることは一緒か、異なるとしたらどんなところかなどと、相手の虚像ではなく実像（本当）を思い浮かべる作業です。そしてそれはとりもおさず、援助職である私の実像にも直面させられる作業でもあるのです。たとえば、相手に「こういうところを頑張ろうよ」と言いたくても「私は頑張れているのか」と自問するとそんなことは言えなくなったり、そうなる自分自身の弱さばかりが目に入って「人を援助する資格なんて私にはない」と落ち込むことになりかねません。また「相手は私には想像もできない心情みたいだから私の手には負えない」

「私は対人援助職には向かない」と逃げ出したくなったりもします。

そんなふうに対人援助職なりの「しんどさ」を体験することも多いのですが、それは「自分自身に目を向ける」ことができる機会でもあります。自分の能力や感受性などの限界などを感じながら業務を続けていく中で、いろんな気づきがあったり、それまでの思い込みがよい方向で裏切られることもあったりという経験に支えられて、自分の中で何かが深まったり更新されていきます。そういう「うまみ」が対人援助職にはあります。私の場合、「ふつうに生活している相手」と「ふつうに生活している自分」の共通項を頼りにして仕事を続けてこられているし、そのことを「自分らしさ」として肯定的に受け入れているように思います。

(了)

—宣伝—

『ターチャンのオリジナルソング』を十月一日からYouTubeにアップしています。昔の私が歌っている自作の歌です。しばらくの間、毎月一日に追加します。よかったら覗いてみてください。

応援、母ちゃん！19

～セルフラベルづくり「多様性を受け入れて、想像以上の未来へとつなぐガイドライト」～

たまむら ふみ

玉村 文



1. はじめに

2024年4月に第3子を出産し、現在、産休・育休中です。これまでも育休期間を単に「休む」時間ではなく、育児以外の時間を意識的に活用してきました。第1子のときは国

家資格キャリアコンサルタントの取得、第2子のときは半年間おもちゃメーカーのプロジェクトに参加し、自己成長やメンタルバランスを保つ時間を大切にしてきました。

さて、第3子の育休はどう過ごすのか。実は第2子の育休中に、次の育休でやりたいことを決めていました。それは「育休コミュニティ」への参加です。同じ育休中のママから「育休コミュニティに参加すると元気になるよ」と聞いたことがきっかけでした。妊娠がわかったときには、「これであのコミュニティに参加できる！」と思ったほどです。

私が参加したのは、日本最大規模の育休コミュニティ「MIRAIS」。2018年の立ち上げ以来、延べ2000人以上が参加しており、半年ごとの募集では毎回100名以上が集まります。

このコミュニティでの活動の中で、特に印象的だったのが「セルフラベルワークショップ」。自分の価値観や強みを整理し、一言で表すキャッチフレーズ「セルフラベル」を作るワークショップです。この経験は、自分を深く理解し、成長するきっかけとなりました。今回は、そのセルフラベルづくりにまつわる記録を共有します。

2. セルフラベルワークショップ

ワークショップの概要

セルフラベル作成は、以下の3段階で進められました：

1. 事前課題

過去の経験を棚卸ししたり、自己診断ツールで価値観や強みを整理。

2. ワークショップ (2.5時間×2回)

1日目はペアワークでエピソードを共有しフィードバックを受け、2日目にグループで仮のセルフラベルを作成。

3. ブラッシュアップ会 (1時間×2回)

仮のセルフラベルを具体的な表現に磨き上げる。

セルフラベル作成プロセス

事前課題では、価値観の棚卸しに加え、ストレングスファインダーを使い、自分の強みトップ5を明確化しました。たとえば「包含」という資質が私にはあり、それが安心感を与える要素であると認識できました。

ワークショップでは、ペアワークで価値観やエピソードを共有し合い、お互いに気づきを得ました。印象的だったのは、私が自然に口にした「大丈夫、お互いさまだよ」という言葉に対して、ペア相手が「器が大きい」と評価してくれたこと。自分では当たり前だと思っていたことが他者からは強みとして見える。この体験は、自分を再発見する大きな気づきとなりました。

グループワークでは、他の参加者のフィードバックをもとに、仮のセルフラベルをさらに磨き上げました。たとえば、「サラダボウル」「寄せ鍋」「暖かい光」などのイメージが出てきて、それを言葉としてどう表現するかを議論しました。その結果、「多様性を受け入れて、想像以上の未来へとつなぐガイドライト」というセルフラベルが完成。

3. 完成したセルフラベルに込めた思い

このセルフラベルには以下の意味を込めています：

- 「多様性を受け入れて」
私の強みである「包含」の資質を表現し、安心感を与えられる存在であることを意識しました。
 - 「想像以上の未来へと」
一人では叶えられない未来を、協働によって創造していきたいという願いを込めました。
 - 「つなぐガイドライト」
私の役割は、人や資源をつなぎ、前へ進む道を照らすこと。スポットライトのように目立つ光ではないけれど、夜道を照らすようなガイドする存在でありたい、そんな思いです。
-

4. おわりに

7月の毎週1～2時間をセルフラベルづくりに費やしたことで、自分の内面を深く理解できました。このセルフラベルは、私自身の指針であり、自己紹介やセルフブランディングの一助としても活用できそうです。2025年4月の職場復帰の際、このセルフラベルを自己紹介に使おうと思っています。

また、今回の経験から、キャッチコピーをゼロから作るプロセスに自分が強い興味を持っていることにも気づきました。発想力を駆使し、他者との対話を通じて精度を高める作業がとても楽しいと感じます。この気づきを活かし、次回は夫婦で取り組んだ「家訓づくり」について記録をまとめたいと思います。

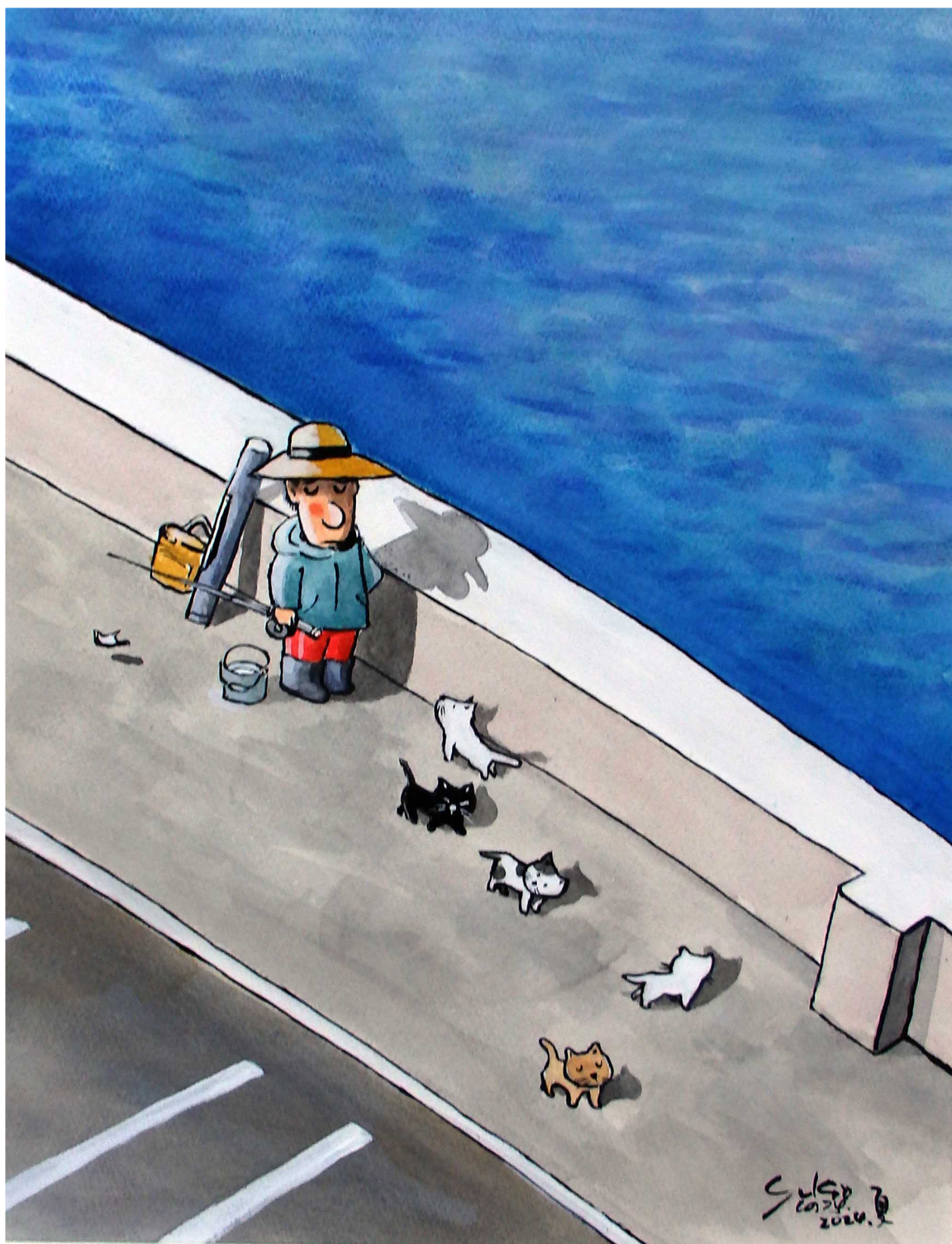
篠原ユキオ

1948年 東大阪市生まれ
京都教育大美術科卒
京都精華大学名誉教授
(公社)日本漫画家協会参与
FECO JAPAN 会長

うなだれる気分

ブラビの『リバー
ランドスループ
ト』を見てフライ
フィッシングには
まったのは40代
の頃だった。

マンガ仲間と毎年釣り旅行に出かけていたが
管理釣り場ではそれなりの釣果があっても自
然溪流では寂しいものだった。
しかし、フライフィッシングとは元来そいう
うもので魚と戯れる楽しみが第一のいわゆる
キャッチアンドリリースが基本だったから、



釣った魚を持って帰る事は無かった。
だから大きなクーラーボックスなどを持って
行く事は無い。
しかし、家でその日の夕飯のおかずを家族が
待っているような釣り人にとっては、釣果の
無かった日の落ち込みは相当なものだろう。

おこぼれを期待して寄ってくる野良猫たちにも
馬鹿にされそうな気分になるに違いない
心なしか影がうな垂れて見える情景である。

光の元へ

夏になると毎年わが家の門灯の下にヤモリの親子が姿を見せる。それを見ながら今年もよろしくと声をかけるのは彼らがそこに集まる虫たちを獲ってくれるからである。

光に集まるのは虫だけでなく深夜のコンビニに集まる若者たちも連想させるのだが、今年のヤモリは一度姿を見せたきりで姿をみせなくなった。

今の家に越して来てから初めての出来事で、原因が分からずヤモリ一家に何か異変が起こったのかと心配になった。

そんなある日、知人から最近の縁日の照明はLEDを使うようになったから虫が寄ってこないのだという話を聞いてストンと腑に落ちた。

門灯の電球がよく切れるので今年の夏からLEDに変えていたのである。

エサとなる虫が寄ってこないからヤモリも場所を変えたのだらうと思う。

長年の同居人が突然いなくなった淋しさが残った。



プラネタリウムの初体験は小学校四年生ごろの遠足だったと思う。大阪四ツ橋にあった電気科学館は日本で初めてプラネタリウムが設置された所で、大阪府下の小学生にとっては必ず遠足で訪れる定番の施設だった。

このプラネタリウムの機械は巨大なアリのような姿で子供たちをしばし星空の世界に誘ってくれた。しかし残念なことに座席について背もたれを倒し頭上の星空画面に見入

バットマンは現れないけど

っているうちにいつも睡魔に襲われる。ナビゲーターの男性の声と静かなバックミュージックがそれを後押しする。

映し出されるドームの天井にもっとドラマチックな演出があればと思うが、そういう事は起こらない。

ナビゲーターの解説が終わると同時に目が覚めて何事もなかったような顔をして会場を出るのである。

何だか損をしたような気分も残るがあの心地よさは特別だった。

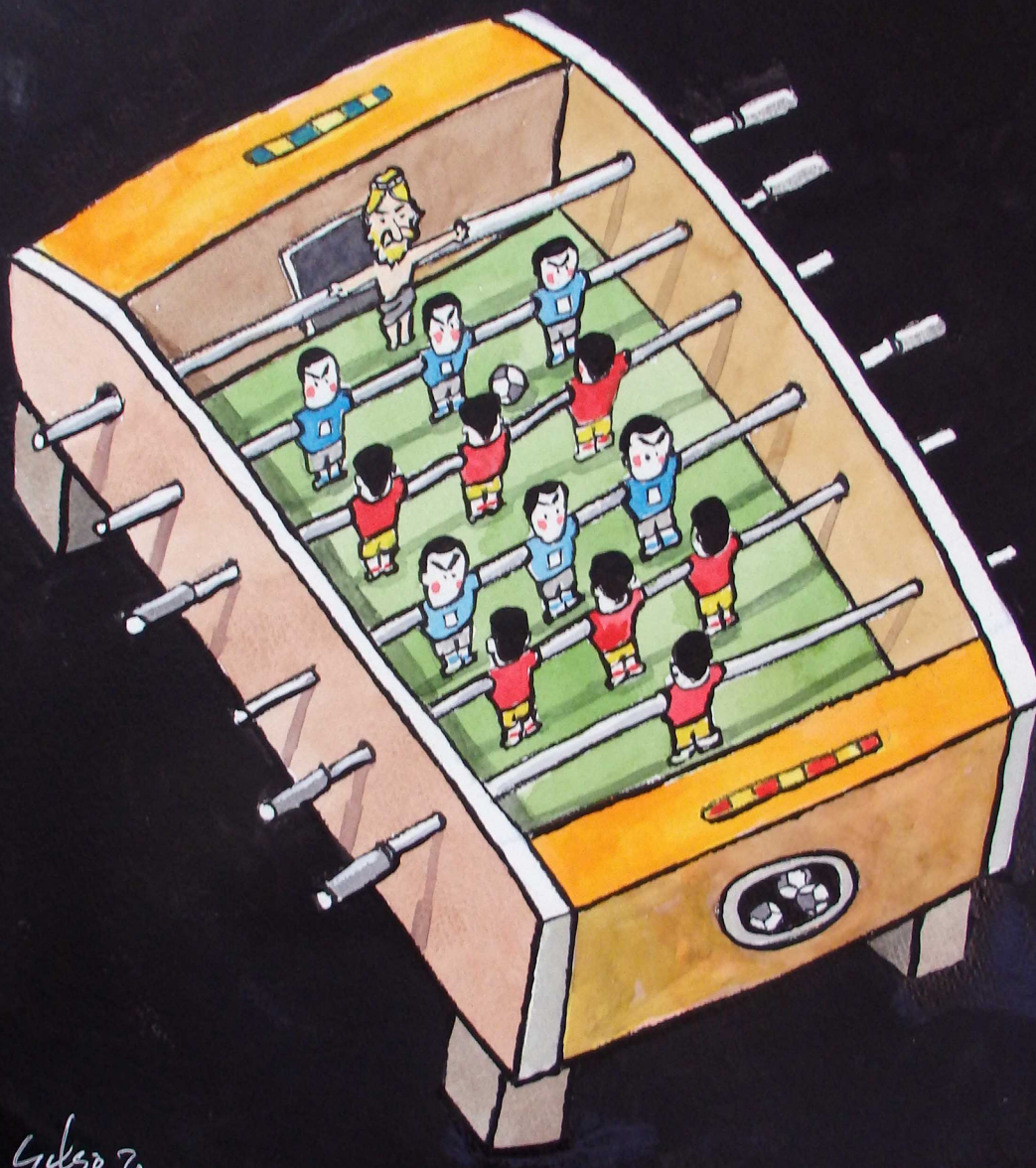




ボルダリング

「煙と何とかは高い所に登りたがる」と昔はよく言われたものだが『壁昇り』は今やオリンピックの競技にもなり、専用施設は街中のお洒落な複合ビルなどでもよく見られるようになった。同じように昔は危ない遊びだったものがスポーツとなって脚光を浴びる事も増えた。そそり立つ巨大な壁でも、ちょっとした凹凸を足がかりに登る事ができるという事に人生をダブらせる事もある。

守護神



団塊世代にとってエポック社の野球盤は昭和30年代のほとんどの家庭にあったのではないかと思うほど人気の玩具だった。しかしその頃にホッケーゲームというのがあったのをご存知の方は少ないだろう。遊び方はちょうど今のプラスチック製のサッカーゲームと同じだが少し大きめで合板

製のリンクに金属板の選手たちを立てて動かして遊ぶのである。昔からある海外のサッカーゲームは日本の物と対戦の方向も動かし方も随分違うのだ。今の私にはゲームするよりビリヤード台と同じようにインテリアとして魅力的な物に見える。



死はある日突然に

人の寿命の長さはそれぞれで、これは実に不公平なものである。身体を鍛えているスポーツ選手や大富豪でも善行を積んでいる聖人のような人でも自分の寿命をコントロールすることはできない。

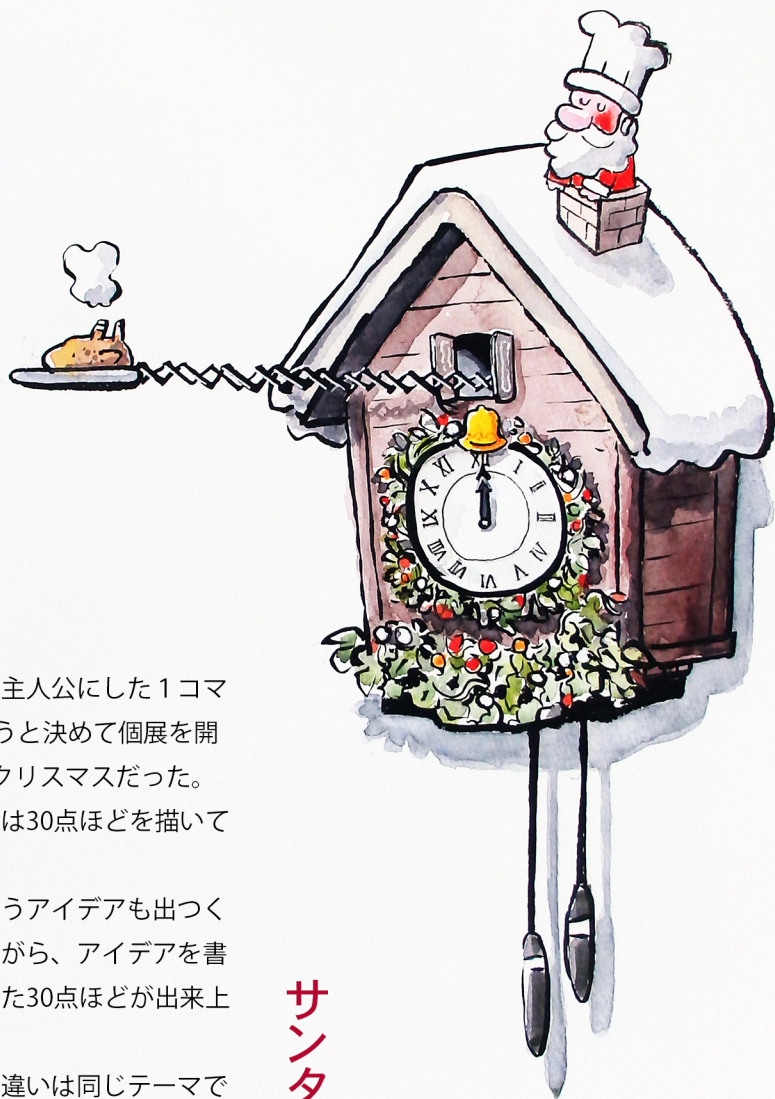
落語『死神』には人の寿命を1本のロウソクに例えて他人のロウソクをこっそり自分のものに取り替える場面が出てくるが、まさに言い得ていると感じるのはロウソクが燃え尽きる前に炎が一瞬明るく輝く時である。いつも年の暮れになると有名人の計報が増えるように感じるがこれは寒さによって血圧が上がるからと言われている。ヒートショックである。私の身内や知人にもそれで亡くなった人は何人もいて、寒い日の入浴時はいつもそれが頭に浮かぶ。

自分の歳に近い有名人の計報を見ると、今まで遠い先の話と感じていた『死』がとても身近なものになっていくのをに感じるようになった。

スマホの充電は電池容量が少なくなったらちゃんと警報で知らせてくれるがそれはあるのだろうか。

しかし人間には充電機能がないから知っても焦るだけか。

願わくばみんなが言うように苦しまず、寝込まず、ある日ポックリ眠るように逝けるようにと思うのだが、性格的にはちゃんと準備をしてその日を迎えるというのが合ってるかな。原稿の締め切りを破ったことのない僕としてはそれが一番落ち着く。



サンタクロースを主人公にした1コマ漫画を100点描こうと決めて個展を開いたのは5年前のクリスマスだった。それに続いて昨年は30点ほどを描いてこれも本にした。

さすがに今年はもうアイデアも出つくしたかなと思いながら、アイデアを書き出していくとまた30点ほどが出来上がった。

私はプロとアマの違いは同じテーマで100点描けるかどうかが基準だと思っているのだがサンタ漫画は今年で160点を越えたわけである。

もう出尽くしたかなと思っても時間を置くとオッ！というものが降りてくる。枕元に置いたアイデアノートには天から降りてきたアイデアがどっさり溜まっている。

サンタ漫画を描く



川下の風景①⑥

～人生は川の流れるように～

米津 達也

【何ともならない言い訳から】

連載開始後、初めて原稿締め切りを忘れた。うっかり、というか、すっぽり忘れていたわけで、まずはダラダラと言い訳じみた近況から語ることになる。

普段、私は旅をしない。旅行好きというわけでもないし、出不精というわけでもないが、観光地に興味も沸かないし、家族にその習慣も無いので行かなかただけなのだ。子どもが上京して以降、なんやかんやで年に2～3回東京近郊に行く機会が増えた。普段歩かない街を歩き、普段聞きなれない言葉のイントネーションを聴く。原稿締め切りを忘れていた要因のひとつが、この子どもの引っ越し作業だった。仕事の都合で都内から千葉県内に引っ越すという。都内の下町の雰囲気から一転、東京湾に近いその街は巨大な団地が立ち並ぶ。都内へのベッドタウンであるから、建物は古くなっても変わらず子育て世代が多いようで、自転車の前後に幼子を載せた親世代が頻繁に行き来する。大きく、整備された公園が多く、秋の青空の下、たくさんの子どもたちが駆け回っている風景は、都内の雰囲気とは異なる匂いが漂う。これも職業柄なのか、街で暮らす高齢者の姿にも目を向けるし、介護事業所の送迎車等も気になる。不動産屋の前を通れば、分譲団地の値段を確認し、戸建て住宅の土地の大きさや車のラインナップなども横目で眺める。都内では難しい暮らしが、ここでは実現できるのだろうか、時代は違えど、割に富裕層が多い街なのだろう。駅前のショッピングモールは有名な飲食店で埋まっている。20代の若者が多いと思ったら、徒歩圏内に大学があるらしい。東京湾は磯の香りがしないのだな、と思いながら引っ越し作業の傍ら、子どもが新たに暮らす街並みを眺める。

ふたつ目の言い訳を。下の子が大学受験となり、こちらは三河湾の近くまで車で送り届けることになった。東京湾から一転、海水浴シーズンを終えた港町は閑散としていて、天気の良い日もあって寂寥感が漂う。試験時間の間、どこか登れる山はないかと検索してみたものの、こんな日に滑落したら縁起でもない、と言われて止めておいた。私はどんな観光地よりも、山なのだ。折角なので港町を歩いた。温泉街というけど、温泉の匂いがしない。店じまいを終えた海の家骨組みだけが残された海岸沿いを歩く。多くの釣り人や、写真映えるスポットではライダーたちが愛車の写真に熱心だ。三河湾を多くのタンカーが行き交う。歩道が整備された海岸沿いの岩稜を越えて更に歩くと、観光地からは見えない場所で廃業したホテルの廃墟あり、引き潮で岩の窪みに残された小魚が泳いでいる。この辺りの岩稜を名古屋城の石垣に転用したというのも興味深い。

こんな短期間で、ふたつの街から海を眺める旅の機会があったのも、早々に巣立ちを決めた子どもたちのおかげだ。

【日々の日記から①】

先日の事例検討会の話題であった「ケアマネに上
がってくるのは要支援ばかり」という話。

10 数年に渡る介護予防思想が今の高齢者に浸透し、健康寿命が延びているのであればその効果が出ている。一方、先進医学の発展に予防医学、こ

れらも功を奏しているのであれば、一概に高齢者の病院好きを非難するわけにもいかない。社会環境的にはどうだろう。団塊の世代、これまでの戦後世代とは異なり、高度経済成長期の恩恵を受け、生活に関する余裕が生まれる。インフォーマルな社会資源との接点も持ちやすく、スポーツジム系のサービスにもアクセスしやすい。スマホで簡単に情報は手に入るし、それを共有するデジタルコミュニティの発展にも着目する。従来のコミュニティではない。お寺では墓終いが進み、檀家離れが加速。滋賀南部の街では自治会加入率は50%を切るところも多いようだ。

そういった変化の中で、従来の相談機能の基軸とされていた社会福祉協議会や地域包括支援センターの役割が宙に浮き始める。思った以上に浸透しなかったのは、コンビニエンスストアに付随するケアマネジャーというビジネス展開。逆に気軽に通える「隙間筋トレ」が隆盛となる。筋トレではなく、ポイント稼ぎで施設掃除を行い、付属サービスを活用する高齢者たち。アミューズメント施設も高齢者で賑う。一方、都市部の相談援助機関が嘆くのは、ゴミ屋敷問題の増加。つまり、従来のコミュニティが機能せず、蓋を開ければ的なケースが増加。お金も、社会資源も格差の中にある。

これからの介護ビジネスは、

- ・変化するマーケットをどう読むか
- ・ターゲットを絞り、事業コンセプトを明確化できるか
- ・それを職員に落とし込むリーダーを養成できるか

変化のスピードが速い中で、これをやるのが今後5年の宿題になる

【日々の日記から②】

団体や他者の行動を批判的に評価はするけど、そ

れは自分の指針に沿わないからそう思うだけ。その分、自分の指針に沿った「行動」をしているつもり。逆に私の行動や指針に対する批判もあれば、共感もあるだろう。批判も共感も行動もしない、じゃああなたは何を考えているのか？14歳以下のSNSを禁止する、なんて諸外国の動きも耳にするけど、それは納得できる側面もある。

近年の選挙では、SNS戦略が功を奏したと言われるが、問題の本質はそこではない。SNSを通じて拡散されるのは、「誰が正しい」「誰が悪い」という二者対立構造。アメリカ大統領選挙もそうだが、我々は善悪の対立構造が好きだ。正解をそこに求める。最近の授業でも思うが、様々な事例を提示する中で、結局何が正解だったのか、という「答えの正しさ」を問う質問がちらほら。むしろ問わなければならないのは、なぜそれを選んだのか、という背景の理解。しかし、そんな面倒くさいことは考えたくない、正しいものを知りたい、社会は複雑化するが故に単純化される構図だなあ。

【日々の日記から③】

ネゴシエーション

クライアントであれ、他機関であれ、ケアマネに備わっていなければならない技術。交渉は準備段階から始まる。双方の利益と価値を確認し、起こり得る感情面のコンフリクトを予測。

互いの留保価値を知り、ZOPAを設定。ここが分かっているから、相手に与える選択肢は多い方がよいと勘違いしているケアマネも多い。難しいケースであるほど、そこは戦略的でなければならない。そして、懐刀となるBATNAをどのタイミングで抜くか。クライアントファーストも良いが、良い顔していても問題解決は遠のくばかり。常に選択をしていかないと、物事は前に進まない。「だったら家で介護されますか？」老健相談員時代の最後の殺し文句。冷たいと言われようが、誰かが

譲歩されて優遇されることで、別の誰かが不利益を被っている。福祉の優しさってそこじゃないでしょ。

2024 年の出生者数は 70 万人を割る見込み。80 万人ショックから僅か 2 年。100 万人を割ってから 8 年。止まらない少子化社会。異次元の少子化対策と言っても、もし効果が出たとしても 2 世代後から。働き方改革を進めても、慢性的な人手不足により困難な側面は強い。

歳を重ねると、依存先（アウトプット）は多様である方が良い。趣味でも、人でも、仕事でも。加齢と共に失うものは多いのだから。高齢者の生活の充実度は、それによって随分違う。

暑かったり、寒かったり、季節変わりはイヌも風邪を引くらしい。日曜だからか、動物病院も大盛況。中高年の飼い主が目立つのは、新しい家族の在り方を反映してる。3 人の幼子とペットを連れた母。当然、待ち時間に耐えきれず子供はグズリ出す。度々叱責しなければならない母も大変だ。しかし、他人の叱責を聞いている多数派の中高年は居心地も悪くなる。子育て親子が多数派なら空気も変わっただろう。社会はこんなふうに変わっていく。

2024.11.25 米津達也

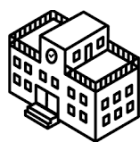
こころ日記「ぼちぼち」その③

障がいがあるということ

毎月一回、まちの保健室「ちむちむ」に通ってくる若者がいる。教え子の一人で、中学１年生のときからの付き合いだ。もう二十歳を過ぎ、身の回りのおしゃれにもこだわるたくましい青年になっている。

ハルキは小学校から特別支援学級に所属し、中学校でも特別支援知的学級に入っていた。

公立学校の特別支援学級の仕組みはとても複雑だ。支援学級の定員は、１クラスあたり８人を上限。障害の種別ごとに設置されていて、知的障害、肢体不自由、病弱・身体虚弱、弱視、難聴、言語障害、自閉症・情緒障害などの学級がある。この中に類する子ども一人でも入学すれば、学級を設置しなければならない。現在学校現場では、特別支援学級数がとても増えてきている。ある小学校では１０クラス。中学校でも３０人以上いる学校もある。クラス数も多く、配置する教員不足が深刻だ。担任は障がいのある子ども一人ひとりの週案を作成し、交流学級で受ける授業科目を計画をし、保護者にも知らせなければならない。本当に激務だと思う。



知的障がいのあるハルキは、学級活動や道徳、体育、音楽の授業は交流学級で受けることになっていた。交流学級では、文化祭や体育大会では、メンバーとして活動することになっていた。が、彼はどうしても交流学級に馴染めず、いつも渋る姿があった。

正直交流学級の生徒たちは、週に数回しか来ない同級生には、名前も覚えずほとんど無関心な態度だ。あえて一緒にコミュニケーションをとる活動を仕組まなければ、なかなか友達ができない。ハルキはいつも気難しい顔をし、妙に正義感が強いので、周りの生徒の

行動が許されずいつも不機嫌だった。

ハルキの知的支援学級には、８人の個性ある生徒ばかりが在籍していた。入学当初は互いのことがよくわからず、常にトラブルが起こっていた。その騒動に駆り出されるのが、担任外戦力のフリーの教師の私だった。事件がおこるたびに、対応に忙しかったのを覚えている。

実は交流学級に行っても、ハルキは何かに怒り爆発し、興奮する状況が起こっていた。

例えば、暴言を吐く、物を投げる、机などをひっくり返すなど、交流学級の生徒たちは、障がいがあるからと敬遠し、ますます嫌うようになっていった。

折に触れハルキに関わる機会があり、話ができるようになってきたとき、彼は、「先生にはわからないいいじめをされている！」と打ち明けた。

交流学級の担任は、日々の学級に忙しく、支援学級の生徒への思いになかなか至らないのが現状だ。しかし、いじめは放置できない。ハルキの支援学級の担任にも伝えるも、のらりくらり。



「何に怒っているの？」
と尋ねると

「クラスみんなは、ぼくのことを障がいがあるからと言って、馬鹿にしている」と返ってきた。「絶対に許せない！」と、体中を震わせ訴えた。

実際はわからないが、ハルキはそう感じているのだと、私は理解した。しかし次の言葉が出てこない。

他の教員なら、「あなたにも良い所があるのだから大丈夫だよ」とでも言ったかもしれない。

しかし、ハルキの言う通り障がいがあることは事実だ。そのことをハルキは、自分の

中で自問自答し、障がいがあることで、周りから特別扱いされ、彼にとっての理不尽な扱いが、たまらなく許せなかったのだろう。言葉で冷静に言い返せない分、色々な物に当たるしかなかったのだ。私はひたすら聞くに徹した。

家族を思う…

ハルキの家族は、母と兄との３人家族。母親はハルキが小さいころに離婚したので、父親の顔は覚えていないとのこと。生まれた時から病弱で、知的にも障がいがあることが分かり、母親は苦勞をしたと聞いている。子育てには手がかかり、小学校でも周りの子とのトラブルが絶えず、相手にけがをさせないかいつもハラハラしている状況だったらしい。母親の父母がそばにいてくれたので、随分と助けられたそう。

中学校卒業のころ、連絡が途絶えていた父親が亡くなったという知らせを受けた。顔も知らない、母親からも父親のことは何も教えてもらえなかった。そんな父親が死んでしまったことに、ハルキは戸惑い、どのように受けとめればいいのか悩んだと言う。

父方の祖父が健在であることも分かり、意を決し家族で父親のお墓参りに行ったそう。父親が育った郷里を初めて訪ね、父親の面影を感じることができたのではないだろうか。

「僕にもう一人おじいちゃんがいたことがわかって嬉しい」と言った。

従妹もいることが分かり、自分には今の家族以外にも家族がいたことを、とても嬉しそうに語ってくれた。祖父から、生きていた時の父親の話も聞くことができたそう。

夫婦としての母親の心境は別として、子どもにとって自分を産んでくれた父親のルーツに触れることは、大事なことだと思う。

その後、彼は父親の郷里に度々訪れたと聞いている。

障がいがあることを負に思い、自己肯定感も低いハルキだが、家族への思いは人一倍。家族のことが大好きだ。自分は人並みに稼げないし、親を安心させられないが、日々の暮らしでできることはしたいと言う。家では、

進んで家事も担う。

数年前に母親が大病を患ったときは、自分は母親なしでどうやって生きていくのか、不安で眠れなかったと。障がいのある子を残して世を去る親の気持ちもさることながら、子も親の存在を感じているのだと思った。

新しい家族？



中学校卒業後は、近隣の養護学校に入り、無事に卒業した。いつの間にか、私とは世の中のことや障がいのこと、将来のことなどを、対等に語り合う仲になった。

ただ今でも、自分がなぜ障がいがある人間に生まれてきたのか、車の免許も取れない、普通の若者のように自由に動くこともできない、社会に出るには色々な制限があり、自分の障がいを受け入れられずいる、といったことを口にすることがある。それはそれで仕方がないと思う。

ハルキには、今恋人がいる。つき合ってもう２年になる。異性愛だが、彼女も知的障がい者である。月一回二人で語らいにやってくる。深刻な相談もあるが、デートはどこ行っただけの、こんなことで喧嘩したなどの雑談だ。時折、中学校ではよく暴れていたなと笑って彼女に話す。

最近彼は、よく「結婚」という言葉を口にしている。将来の好きな人との生活を思い描いているのだろう。お節介だが、人との出会いは色々。別れもある。失敗も大切だと伝えている。

二人は今、人とのふれあいで色々な知識を持ちたがっている。知識と実践は違う。どう行動するか、対等な二人の関係の中で、スキルを身に付けていってほしいと思っている。

つづく

『父が自分の身を呈して教えてくれたことⅥ -最終回-』

高名祐美

11月23日、父の月命日。実家へお参りにいくと、それまで床の間にあった父の祭壇がきれいに片付けられ、遺影は母と並んでかけられていた。お盆には納骨もすませた。妹と父のことをあれこれ話すのも回数が減ってきた。妹家族の暮らしぶりに、父がいなくなったことを実感する。時が経つというのはこういうことなんだろうなと思う。

これまで5回にわたって、父のことを書いてきた。突然寝たきりとなり、治療できるすべもないと知ったときから亡くなるその時までのこと。どこか距離を感じていた妹家族と自分とのこと。そして、父が私に自分の生き様を通して伝えてくれたたくさんしたこと・・・今回は父の生涯を振り返り、このシリーズの最終回としたい。

父は25歳で結婚。一人娘のかおるさんの家に婿にきた。そして二人の娘に恵まれた。母とはお見合い。22歳の美人のかおるさんに一目惚れだったそう。中学校で体育の教師を務める父は、真面目で努力家。何事にも手をぬかず、人から頼まれると嫌とは言えない性格だった。部活動の顧問も熱心に取り組み、バレーボールや水泳、野球などの指導をしてきた。子どもの頃、夏休みには父の勤める学校に行って、グラウンドや教室で妹と遊んだことを思い出す。

家族4人の時間をとても大切にしていた父。しかし家族旅行は計画性がなく、常にいきあたりばったり。宿泊先も決めずに、ポンコツの車で地図を片手に出発する。途中で車が故障したり、道を間違えることはしょっちゅう。でも「すべての道はローマに通じる」と私達に豪語し、堂々としていた父。そんな父に母は文句を言いながら、結局従っていた。山菜採り、きのこ狩り、魚釣り、バーベキューと、たくさんのおもしろいことを家族で楽しんできた。

愛する妻のかおるさんは、難病を患って61歳で亡くなった。母が亡くなる前の6ヶ月間は、病室で寝泊まり。母が好きだからという理由で、病室（個室）で金魚まで飼って、妻の側で一日過ごしていた。それでも優しい父は、母の葬儀の後、「十分なことがしてやれなかった。かおるには自分しか頼るものがいなかったのに」とトイレで泣いていた。

父は4人の孫に恵まれた。もともと子煩悩な「じいちゃん」は孫を風呂に入

れ、風呂上がりには自分のあぐらの中に孫を抱き、熱燗の酒を飲む。そんな時間が最高の幸せだと眉毛を下げて語っていた。姪や甥の子どもたちからも「おっちゃん」と慕われていた父。人をいっぱい愛してくれた。

寝たきりとなってしまう、自宅で過ごした最後の1ヶ月間は、たくさんの人に「よしおさん」と声掛けられ、ケアをしてもらった。その都度父は手を合わせ、「ありがとう」とお礼を伝えていた。たくさんの人に愛情をいっぱい注いだ分、あたたかいケアを受けることができたんだと思う。

家族を愛し、大切に思うこと、人を人として尊敬すること、人を思いやる行動をすること、感謝の言葉を伝えること、頼まれたことを自分にできる限り引き受けること、真面目に努力すること。お父さんから教わった多くのこと、忘れずに生きていこうと思います。みんなで仲良くしていくから。心配しないで。お母さんと仲良く過ごしていてね。



miho Hatanaka,

助産師であり公認心理師でもある私の職業アイデンティティを問われたら「助産師です」と答える。特に性教育は四半世紀ほど行ってきたおり、そのようにいうと何とも大きなことに感じるが、細々と、招いてもらうままに行ってきたことには感慨深いものがある。その原点に返り、授業の毎に創ってきた「いのち」の詩を、ひとつ。



【第16話 いのちのうた Ⅰ：こどものコトバ】

大学院で臨床心理学を専攻したのは、それまで10年足らず性教育を行ってきた中で心と体のつながりが重要であることを痛感し、「心って何だろう?」「これまで自分がやってきたことは何だろう?」という問いが湧いてきたからである。つまり性教育は私の歩みの原点とも言え、職業アイデンティティをより掘り下げていくと“保健指導を通じてWell-beingについて考えること”を自分のテーマとしていると言えるかもしれない。学ぶうちにそのような方向がみえてきたとも言える。そもそも“お母さんががんばって産んでくれたのだから”命を粗末にしてはいけないという考え方には違和感があり、また安易に「命は大切」と言うことはできない。お産の時にお母さんががんばったのは確か。しかしそのことと「だから」のイコールとしての“あなたのいのち”は測れない。

“あなたのいのち”は無条件にただそれとして大切なのであって。そうでなければ、現実に親と良い関係を築けずに生きてきた子どもや死にたい気持ちをもつ子どもを前にどのような言葉が届くというのか。各々の子どもが抱えるどのような問いにも、私なりの誠実さをもって一緒に考えていきたいという想いで行ってきた性教育である。

このことを支える一つとして、子どもから発せられる言葉をモチーフとして授業を行うことを大切にしてきた。具体的には、ワークシートを多用し、授業中には発言を促し

言葉を引き出してやりとりをするなかで、いのちの話は「どこかの」「誰かの」「手の届かない」「特別な」（例えば“赤ちゃんの”であるとか“妊婦さんの”といった）命の話ではなく“あなた”の話であることが理解され、“自分ごと”として捉えられるらしいことがわかってきた。そして常に子どもたちに問うてきたのは「いのちとは何か？」ということ。その問いに返してくれる言葉を編んで毎回、詩を創ってきた。ひとつひとつの詩が他のどこにもない“今”の“この自分（たち）”の「いのち」の定義。繰り返される「いのちとは何か？」への答えが織り重なっていくことで、大人から教わるものではない、自分たちにとっての“コタエ”が浮かび上がってくる。授業の終わりに私が詩を朗読する時の、子どもたちの少し緊張したような表情に気持ちが引き締まる。預かった言葉を、丁寧に、手渡すように。心の改まる時間である。

prologue

ヒトはコトバを持つ生き物だ。

心を器として、

そのなかにコトバを容れている。

「いのちって何だと思いますか？ 何を思いうかべますか？」

の問いかけに、

子どもたちは自分の器の中からコトバを探し、

ひとつ、あるいはいくつかを選びだして

そっと私の前に置いてくれる。

「いのち」という詩が

子どもたちに驚きと心動かすものとして受け容れられるのは、

自分の中にはない、友だちの中に在ったコトバに出逢ったことと、

自分の中に在ったコトバが詩の形で戻ってくることと、

自分“たちの”コタエとしての「いのち」をみつけられたからではないか。

人から“与えられる”コタエではなく。

自分たちでつかみ得たものとして。

—— みんなで創った詩。 「いのちのうた」を。

「いのち」

作：S 小学校 3 年生のみなさん

おかあさんのおなかにはいつているとき、
わたしは“いのち”をもらった。
おかあさんが生んでくれたから、
わたしは今、ここにいて、
とても大切なんだと思う。

小さな赤ちゃんのいのち。
みのまわりにいる大切な人のことを想う。

いのちは、人のころをきくためにある。
人がいきぬいていくためにある。
みんなは、いのちをまもっているから、いきている。

命は、ゲームとちがって一つしかない。
一度なくなったら、または生きられない。
だから命を大切にしたいです。

どうぶつは生きていたけれどころされ、
人げんの食料にされる。
…かわいそうです。
でも、食料がなくなったら人はどんどん死んでしまうから――、
どうぶつや、やさいにかんしゃします。

「いのち」は大切なもの

「いのち」生きるためにひつようなもの
「いのち」はうまれるもの
「いのち」はいつかなくなるもの。

いのちはうまれた人へとつがれていくもの。
大切な、先ぞからうけつがれてきたバトン。



Gift

タイトル名「対人援助実践をリポートするこの一冊」

第27回：第3章-その12-

Only the Clients know what they are looking for

著：渡辺修宏

企画：渡辺修宏

小幡知史

二階堂哲

Here is my secret.

It is very simple.

we do not see clearly, except when we look with our heart.

The things that are most important cannot be seen with our eyes.

(意識：ぼくの秘密を教えてあげるよ。とても簡単なことなんだ。

ぼくたちは、こころの目で見ない限り、なにもはっきり見えないんだ。

一番大切なものは目に見えないんだよ)

(最後の文のフランス語：Le plus important est invisible)

繰り返しになるが、前回ご紹介させていただいた、サン・テグジュペリ作「星の王子様」に登場する一節を、上に記した。

幼い頃から何度か目にしてきたこのセリフが、数十年を経て、今あらためて私自身の内側にある琴線に触れる。

思えば今日まで、身体や知的、あるいは精神になんらかの障害をわずらう方や難病患者を主な対象として、私は、いわゆる援助実践にいくばくか関わってきた。それなりの年月を費やしてきた。

その中で、時々、被援助者のことをろくに知りもしないのに、わかったような気になる自分に気づくこともあった。「こうやればいいんだ」とか、「このようなかかわりでいいのだ」と、あたかも、援助に精通している専門家のように振る舞ったこともあった気がする。

そして同時に、「本当にそれでいいのか」と、自分自身を疑うこともあった。なんなら、「俺はこの仕事に向いていない」と、なにやら落ち込むこともあった。そして、「対人援助ってなんなんだ」とわからなくなり、真剣に悩むことが、指の数では足りないくらいあった。

悩みすぎて…、やる気をなくして、…考えたり感じることを忘れて、惰性的に業務にあ

たったこともある。まったくもって、お恥ずかしい告白である。

そんなどん底に陥った時に、そこからの脱出のヒントになったのは、まさに「星の王子様」がいう、「心の目でみてごらん」というフレーズだった。

目で見て、耳で聞いてとらえる世界だけが全てじゃない。目や耳を通して得られたなにかだけで、すべて理解した気になっては、どん底から這いあがることはできない。一度、目を閉じて、耳をふさぐ必要がある。そして、まさに「心」を働かせることによってとらえられる、気付ける世界があるのである。それは、自分の限界を打破するような感覚に近いのかもしれない。

目や耳を超えて

そういえば、「星の王子様」が言わんとするこの指摘というのは、実はなにも目新しいことではないことに気づく。例えば、以下のような表現も、同様の内容といっても特段問題ないのではないかと思う。

「肉眼ほど当てにならないものはない。見ようとすればするほど余計なものを
見てしまう。ものは胸で見ろ、目で見ろな。」（能の教え）

「目で見ないで叡智を見ろ」（ロダン）

「私は肉眼を信じない。私が持っているのは、もっと立派な、もっと確実な眼光で
あつて、それによって私は真と偽を区別することができる。」（セネカ）

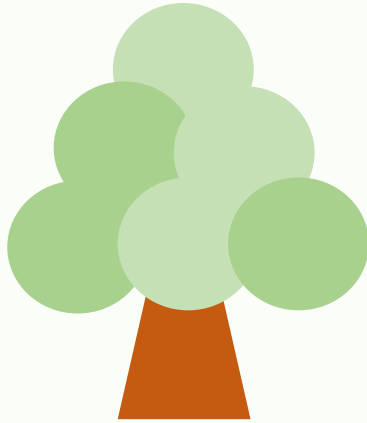
これらの内容は、志村史夫（2014）の「一流の研究者に求められる資質」（牧野出版）の 42-43 ページに登場している。なるほど、やっぱりこのような感覚というはとても大事だと気付かされる。

さて、「星の王子様」にはそのほか、**Only the Children know what they are looking for** というセリフが登場する。「なにを探しているかは子どもたちだけがわかっている」という意味である。この **Children** を **Client** に変えて、本稿のタイトルとした。そう、**Only the Clients know what they are looking for**。

どんなに勉強しても、経験を積んでも、その援助対象者を「わかったつもり」になって、過信、慢心、傲慢になってはいけな。わからないことはわからない。目に見えないものは目に見えない。

ただ、みつけようと、感じようと、触れようとするだけ。それだけが今の私にできることのすべて。

—つづく—



こかげのにちじょう⑩

～中一男子の悩み～

鳴海 明敏

11月某日

中1男子のルイ君、今日は女性職員と二人で買い物外出。お父さんから、誕生日に時計を買ったと嬉しそうに自分から報告してくれる。パズルと靴も買ってもらったと、表情良く報告してくれる。

“セカンドストリート“で服を楽しそうに選ぶ。“ドンドンタウン”にも行くが、「今日のドンドンは（品揃えが）ゴミだった」とさらっと言い放つ。長靴が欲しいと話し、来年は使わないかもしれないよと伝えるが、どうしても欲しいようで、通学にも履くとのことで、長靴も購入。

女性職員が、腰が痛いため荷物を運ぶお手伝いをお願いすると、「俺がやる、貸して。そんなん、運転してたの？」と、気遣いを見せ全部持ってくれる。

“セカンドストリート“で衣類を袋に入れる際、「俺やるよ、俺こういうの得意。実家にいる時は、いつも俺がやってた。卵とか割らないように。お父さんとお母さんは、詰めるの苦手だった。なんでかっていうと、酒飲んでて、上手く詰められなかったから」と話す。女性職員が、「そっか、ルイ君がやってたんだね。お父さんお母さんは苦手なのかもしれないし、お酒飲んでたら、誰でも詰められなくなっちゃうかもね・・・」というと笑っている。

11月某日

同じく中1男子のルイ君。今日は、トレーナーのフードを目深に被って、カウンターにいる女性職員の所に来て、「あいつ、ムカツク！」と訴える。女性職員が、「誰の、何がそうさせているの？」と聞くと、「M（女性職員）さん、髪切るの、下手くそ！」と涙を流しながら訴える。

女性職員が、「思った通りの髪型にならなかったの？」と確かめると、
ルイ：「Y（男性職員）さんにやって貰ったときと、同じにして欲しかったのに・・・」

女性職員：「だからショックなの？」

ルイ：「うん。他の子にも色々言われたし・・・」

女性職員：「色々言われて嫌だったのかぁ？」

ルイ：「うん。」

女性職員：「そっかぁ。髪を上手く切って貰えなくて、悲しいし、腹立つ気持ちもあるし、
ぐちゃぐちゃしてるって感じかぁ・・・」

ルイ：「うん！」

女性職員：「それで、私の所にきたのはどうして？」

ルイ：「どうにか出来ない、この髪？」

女性職員：「上手く切るのは出来ないけど、誤魔化すのはできるかも・・・」

というやり取りをして、女性職員はカウンター内でルイの前髪を整えてあげる。

前髪を整えてあげながらのやり取り。

女性職員：「ところでルイは、Mさんには、直接言えないのか？」

ルイ：「だってMさんに言ったら、悲しむでしょ。」

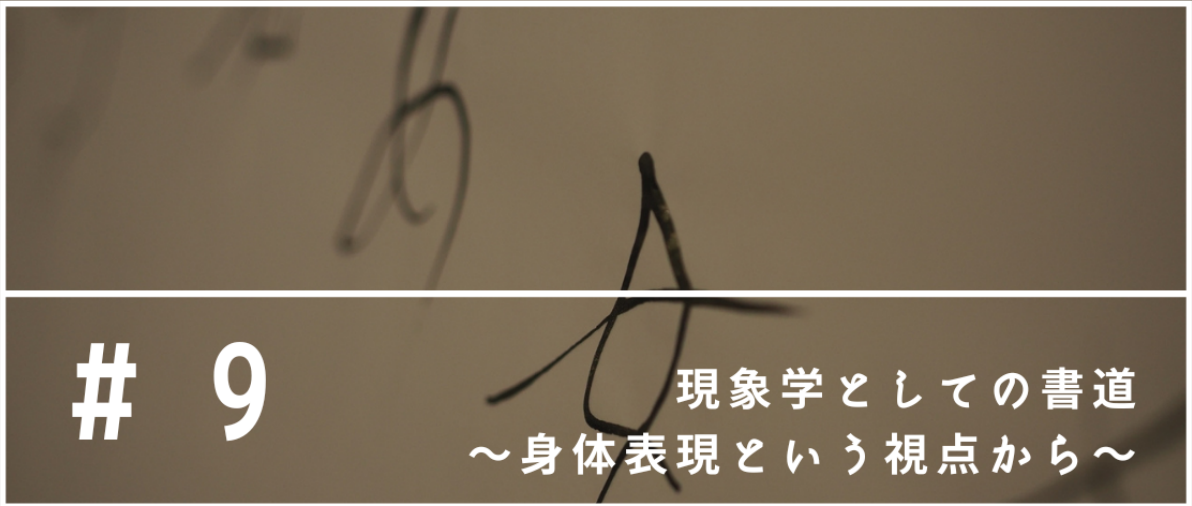
と思いやりのルイ君。

そういうやり取りをして居る最中に、カウンターにそのMさんが入ってきて、ルイに、「髪
のことで落ち込んでいるのか？」と話しかけるが、ルイ君は無言。Mさんから、「もし、そ
うだったらごめんね！」と直接謝られるも、無言。

Mさんが、カウンターからいなくなり、女性職員から「Mさんが、ごめんって言ってるっ
てことは、髪のことルイが、正直に話してもMさんは、悲しまないんじゃない？」と伝える
と、

ルイ：「そうかもね。言っておいて」と、いつのまにか、いつものルイ君に戻っている。

(了)



9

現象学としての書道 ～身体表現という視点から～

生涯発達支援塾TANE 櫻井育子

はじめに

体育という教科が苦手だった。それは集団行動だったからだと思う。もしこれが、自分で好きなように動いていい、走っていい、転がっていい、という時間だったらなんとかなったのかもしれない。などと考えることがある。他者と比べて劣っている状態、あるいは目に見えて「できない」という評価は、大人が思っている以上に子どもには辛い世界である。教育改革が叫ばれて久しいが、現場から「できる」「できない」という評価軸を取り外しつつ、自己成長欲求を純粋に育てるか（あるはその欲求を潰さないように扱うか）というのが、新しい教育のスタイルになるのではないか、そしてそのことのヒントに「書と身体表現」から考えてみたい。

言語と文字と書道教育

人間という生き物である以上、身体を動かすこと自体は好き、嫌いではなく本能であり、音楽を聴いて身体が動く、などはもはや自然現象であり、古くから「うた」「踊り」はどの民族にも存在する。そもそも文字がなかった時代、生きていく範囲が狭い時代には口から口へ、あるいは身体から身体へ、と伝わってきた音声言語。そこにはおそらく微細な身体の違い、発音の違い、誤差、さまざまなものを含んでいたに違いない。一方で文字言語は広大な土地を支配する過程で生まれた「脳外記憶システム」であり、支配者が生み出したものである。それゆえ、文字を習得するためには「習う」ことが必要であった。その後あらゆる学問は「文字言語」によって拡大していく。

日本においても文字の使用によって多くのことが発展してきた。とくに日本はそもそも話していた「和語」に「漢字」を当てはめるといった複雑な文字の発展であり、さらには漢字から「ひらがな」を生み出し、和様と呼ばれるさまざまな書流を生み出し、それはやはり独自性、創造性、競争性を帯びながら発展してきた。とはいえ、そのうち「手習」としての「読み書き算盤」が庶民に広がる中で、現在の学校教育に残っている「書道」は、もはや文化というよりは「手習」としてのものである。したがって、「書写教育」は学校で体験する範囲においては本当に狭く、書道の中でも「手習い」の部分である。「習字」＝「書道」のままでは、まだ知らない世界への入り口を閉ざしてしまっているのではないかと感じている。

身体表現としての「書道」

最近「書道パフォーマンス」という分野がクローズアップされたこともあり、まるでダンスのような筆捌き、足並みの揃え方、大きな身体の動き、などを見ると確かに身体表現であると思われるかもしれない。しかしながら、そこまで大袈裟なことではなく、そもそも筆で文字を書くということ自体が、微細な身体表現である。身体の特徴、筋肉のつき方、姿勢、呼吸の仕方、時間感覚、それらは実は誰一人として同じではない。このことだけを捉えても、そもそも「自分のくせ」のようなものが書には必ず表れる。

奈良時代にさまざまな書流が生まれているが、当時はもはやあそび感覚でさまざまな文字の「崩し方」を研究し、まるで筆と戯れていたのではないかと思う。

指先や足先の緊張感、体重移動、空間把握、実は「書く」とときにはかなりの感覚と筋肉が連動し、それだけではなく呼吸も変化する。先日、東北舞踏集団「三角標(ミガクシ)」という団体の舞踏公演を観る機会があったのだが、まさにその動きは「筆遣い」と一致するかのような錯覚を覚えた。身体ひとつで表現しきる「舞踏」、空間的な広がり指先の動きひとつで作っていく。そもそも書道は、「紙の上のダンス」であると、書家の斉藤文春さんはいつも言っている。筆と紙とが出会う瞬間の緊張感や、そこで立ち現れる相互の絶妙な力加減、抜き具合、どこまでこの線を引いていくか瞬時に感じて筆を持つ手だけではなく、下半身をどう使えばその力を有効に使い切って良い線が引けるのか、、など。このあたりの身体感覚も、「書道」の中には含まれているが、このことについてはほとんどの方が「味わう」ことなく、単なる「書写教育」を終えてしまうことになる。自分の身体をどう使えばいいのか、そしてそれは精神的な安定にも、もちろん影響する。

手習としての書写教育から、表現としての書道教育へ

要は、「もっと書道はおもしろい」という話なのである。手習的要素のある誰でも書けるようになる美文字的な展開、観光客向けの書道体験も、インパクトのある書道パフォーマンスも、もちろん「書道」に親しんでもらうための新しい文化だ。一方で、まだ既得権益のある書道業界は公募展や入賞してこそその世界があり、狭い世界での妙な伝統を守りすぎている。文字が伝来し、純粋に書体が増え、思いつきで書き綴っていた時代に、「伝統を守る」などの動きよりももっと「最先端を行こう」としている文化人がいたのではないかとすら思う。

ほとんどの文書作成がパソコンとスマホになり、印刷技術も革新され、紙や素材もこんなにも開発されている現代において、そろそろ書写教育ではなく、身体的文化資本としての「書道」をすべての子どもたちに提供していかなければならない。それはつまり、「芸術教育」あるいは、「自己表現」として書道というものを位置づけることにより、これまでの評価軸が変化していくと思っている。

できる限り、学校という公共の場から、評価をなくしていくこと。本来持っている成長欲求は、評価されず、比べられず、やってみたいことを実現できる環境があってはじめて育つのだと思う。無駄に評価しすぎることの弊害、そういう過去の感覚からどんどん新しいものが生まれてくる時代に突入している。新しい書道教育の在り方についても提案し続けていきたいと思う。

櫻井育子（生涯発達支援塾TANE 代表）

宮城県在住、1979年生まれ。水瓶座。書家、書道ファシリテーター、生涯発達コーディネーター。

「違いは魅力」をテーマに発達・心理・文化芸術・教育・福祉のつながりをコーディネート。

「全国すみあそびproject」、「書と生き方研究所」、実施中。<http://ikuko-sakurai.com>

教室の窓から

令和 6年
(2024年) 11 月
来須 真紀

もうすぐ冬休み

12月になると世間は「クリスマス」「お正月」と楽しい行事が街に彩をもたらします。学校では、「あと少して長期休み」という期待のほか、「入試だ!調査書だ!」「そろそろ指導要録の文章書かないと」「冬休みの生徒指導どうしよう?」などなど結構慌ただしくなります。特に文章を考えているのに時間のかかる私、「要録どうしよう!」とアワアワしだすのは、いつも冬休みでした。

指導要録ってなあに?

文科省によると

○在学する児童生徒の学習の記録として作成するもの。「学籍に関する記録」と「指導に関する記録」からなる。「指導に関する記録」としては、・行動の記録(小中のみ)・教科・科目の学習の記録→観点別評価(小中のみ)、取得単位数(高校のみ)、評定(小3以上及び中高)・総合的な学習の時間、特別活動の記録・総合所見及び指導上参考となる諸事項などを記載。

○進学の際には、写しを進学先に送付する。指導要録の保存年限は、指導に関する事項は5年。学籍に関する事項は20年。

とあります。この中の総合的な学習の時間、総合所見及び指導上参考となる諸事項、外国語活動の記録の3つは、文章表記で、さらに総合所見及び指導上参考となる諸事項には

- 1 各教科や外国語活動、総合的な学習の時間の学習に関する所見
- 2 特別活動に関する事実及び所見
- 3 行動に関する所見
- 4 児童の特徴・特技、学校内外におけるボランティア活動など社会奉仕、体験活動、表彰を受けた行為や活動、学力について標準化された検査の結果等指導上参考となる諸事項
- 5 児童の成長の状況にかかわる総合的な所見

という項目があります。これを35人分。冬休みには、書けるところから少しずつ…。と焦りだす訳、分かっていただけでしたか?

今回は予想あれこれ

つい先日、こんなことがありました。ある世帯のケースワークで療育手帳をお持ちだったお子様。更新の時期が来たため、更新手続きに…。しかし何と非該当。手帳があるだろうと勝手に予測して、今後のケースワークをしていたけど、もう一度考え直すことに。「まさかまさかの。」と周りは言うてくださいましたが、いろいろなパターンを考えておかなかった自分に猛省。そういえば、学校では、授業を組み立てる際、何パターンも子どもの反応を予想していたなと思い出しました。

学校の予想あれこれ

学校では、いろいろな行事があります。授業以外でも事を計画する際、教員は、予想(心配事)をします。例えば、遠足。

- ・歩ける距離、ルートで、子どもたちは歩けるか？
- ・到着までの時間は適切か？
- ・行った先で子どもたちが楽しめるか。危険はないか。
- ・こどもたちの荷物で必要なものは何か？

と、物理的なこと。

- ・急に雨が降ったらどうするか。屋根のある場所ある？
- ・事故にあったらどうするか。避難する場所ある？
- ・行った先で物を壊したらどうするか。どこに連絡したらいい？
- ・子どもが帰校しなければならなくなったら教員は誰が付きそうか？

と、突発的なこと。

- ・自由にお弁当を食べることにしたら一人で食べる子いないかな？
- ・クラスでレクをやったら、楽しんでもくれるかな？
- ・写真撮ってあげたいけど、保護者は個人情報気にするかな？
- ・先生の配置は足りるかな？
- ・歩く速さはどれくらいだとみんなついてこれるかな？
- ・並んであるく順番はどうするかな？

と、こどもたちや保護者、先生のこと。

などなど、山ほどの予想(心配事)をたてます。

大半の行事での心配事を大まかに分けると

- ・物理的なことの予想(心配事)
- ・突発的なことの予想(心配事)
- ・人(こども、保護者、教職員)の予想(心配事)

と、主に3種類の予想が出てきます。

予想(心配事)から何が生まれる？

では、なんで予想(心配事)をするのでしょうか。予想(心配事)をすることで、予想(心配事)を極力なくすためのプランを立てることができます。予想(心配事)が少なくなるということは、より多くのこどもが行事に参加しやすくなったり楽しめるようになったりする。(と、信じてやっています)全ての予想(心配事)をなくすことはできませんが…。もう少し言うと、すべての心配事をなくすことがいいとは言い切れませんが…。

予想(心配事)しすぎもしなさすぎもいかなものか…。

さて、その予想(心配事)について、話し合いをするのですが、まずは担当になる教員が前年度の計画と前年度の反省を取り入れて今年度のプランをたてます。プランをたてたらその行事のグループで協議をします。協議では、プランに沿って、予想(心配事)を出し合い、プランを修正していきます。ここで大切なのは、予想(心配事)すべてに対してプランを修正するのではないということです。学校教育は、こどもたちの成長を保証す場です。こどもたちの成長をストップしてしまうようなプラン修正はしないということです。つまりきそうな石を全て取り除くようなことは、やらないということです。こどもたちに合った適切な乗り越えることができる石は、あえて取り除かないその見極めができるのが教員としての専門性かな？と思います。

一方で、ケースワークをするときは、あらゆる予想(心配事)を出し合って一つずつ予想(心配事)を消していくという作業をしている気がします(合っているかな?)予想(心配事)は次々に出てくるのでキリがないよ～というのが本音ですが、ケースワーカーをしていると、様々な業種の方と協議するので、「そんな、予想(心配事)があるんだ」と思うことがたくさんあります。この点は、学校にも機会があつたらいいなあと思います。

授業でも予想(心配事)を出すの？

最後に、じゃあ学校の専門である「授業」を作るときでも予想(心配事)を出すの？ということですが、ズバリ「出します」次回は、授業を作っていく上でどんな予想をして、どんなプランをたてていくのかについて、お伝えできたらと思います。

社会科の授業を対人援助学の視点から⑦

2024年11月15日 内田一樹

3年目の石巻スタディツアーを終えて

3年目となる今年はテーマを食に定め、第一次産業に携わる方々との交流を重視した。7月11日（木）～14日（日）までの3泊4日の石巻市でのスタディツアーであった。

大まかな行程は次のとおりである。

7月11日（木）：宮城県石巻市へ移動、スタディツアー開始

東日本大震災津波伝承館

震災遺構門脇小学校・南浜・門脇地区・MEET門脇見学、研修

（3.11メモリアルネットワーク藤間さん案内）

7月12日（金）：震災遺構大川小学校（大川伝承の会の紫藤さん案内）

雄勝ローズファクトリーガーデン研修・作業（代表の徳水さん講演）

7月13日（土）：石巻市牡鹿町ツアー

合同会社もものわさん研修（代表の森さん夫妻案内）

鮎川捕鯨さん研修（社員の平塚さん案内）

牡鹿ホエールランド研修（学芸員の山本さん案内）

7月14日（日）：あかま里山農園研修（赤間さん案内）

石巻市から仙台市へ

せんだいメディアテーク・3がつ11にちをわすれないためにセンター

（記録者の橋本さん講演、研修）

昨年まで継続して訪れている震災遺構や3がつ11にちをわすれないためにセンターなどと、新たに今年初めて訪れたローズファクトリーガーデンや牡鹿町ツアー。その地域に根差して「生きる」ことにフォーカスした訪問先となった。

雄勝ローズファクトリーガーデンは今年の3月に一度訪れて、その際に代表の徳水さんにつながった縁で今回高校生のツアーでの研修先として依頼した。徳水さんの防災研修ではその地域に「生きる」にあたって、命を守るために考えておかなければならない視点を教えていただいた。そのあとの「復興」にあたっての事業についての説明では地域の人口減少という地域課題と雄勝ローズファクトリーガーデンの事業がどのようにつながり、解決していこうとしているのかについての説明をいただいた。

講演内容を通して「地方自治」ということを強く感じた時間になった。これは社会科教員だからこそそう感じた部分も多分にあるのかもしれない。自分たちの住んでいる地域を知ること、過去の歴史や地図から災害への備えをすること。そして地域課題解決のために地域の住民が立ち上がって事業（プロジェクト）を行っていくこと。その中で外からの企業誘致を、という話も震災後にはあり、雄勝ローズファクトリーガーデンも移転を余儀なくされる場面もあった。まだ移転について交渉をしている段階でほかの話がついた土地、場所から道路を作っていく、という行政の話には、なるほどそういうやり方をするのか、とうなずきにいら

れなかった。これでは交渉といいつつ、結論は決まっていって移転せざるをえない。結果的には誘致していた企業がつぶれ、行政はボトムアップ型復興策を進めることとなった。

高校生たちは講演を終えた後も積極的に徳水さんに質問をしながら、学びを深めていた。防災に関するものだけではなく、復興にかかわる一つの形を学ばせてもらっている様子だった。実際にラベンダーつみのボランティア活動にも従事して、体験的に学びを深めていた。

以下は今年度のスタディツアーの感想のうち、ローズファクトリーガーデンでの学びを通して感じたことをいくつか抜粋したものである。

A「私も自分が生まれ育った町が、自分や地域の納得や理解を得ずに変わっていく姿は見たくないから当事者であれば反対するだろう。でも忘れたくないのは国や政府は国民を守るために、このような決定にしたことだ。それは一方的な不条理劇ではなく、国の「国民を守る」義務を果たした結果になる。私は、この地域の声と国の判断・決定の「差」が復興での難点の大きな一つだと感じた。

この難点の解消には住民と政府による歩み寄りの精神がカギになってくる。実際に、雄勝ローズファクトリーガーデンの徳水さんは、「住民の声が届き、要らない防潮堤の削減に成功した地域がある」と言っていた。これが住民と政府による歩み寄りのできた共同性だと思った。けれどこの結果も、住民の納得いかない反発心から生まれた反対運動によるものだ。最善の復興とは、根本的に反発心を起こさせないものだと考える。だからこそ復興に必要とするのは、しっかりとしたグランドルールとローカルルールになる。国民を守る最低限度の基準を守りながら、住民の納得を得る形にする。そのようなグランドルールを作るのには政府と国民による歩み寄りの精神で、しっかり議論し吟味しなければならない。この共同ができなければ、復興は一方的な不条理劇になりかねない。グランドルールの上で独自性を持ったローカルルールができたら最善な復興に繋がる。私は、何を守るか分からなく海が見えないほど高い防潮堤を見て、セメント会社が儲かる仕組みを聞いて、地域と政府の共同性を思った。復興の大きな難点を解消するのは共同性にあるかもしれない。」

B「午後の雄勝ローズファクトリーガーデンさんの話では、科学的な視点からの防災の話と、動画内の「自分の歴史がなくなったみたいだった」という言葉が心に残っている。科学的なアプローチからの話は新鮮だったし、雄勝ローズファクトリーガーデンという形で、自分のできる範囲で、自分が可能なことを、着実にしているその姿勢と、失敗はないという姿勢が、素敵だと思ったし、自分にはまねできないと思った。さらに、小さな自治から大きな自治へなど、直接的な意味でも学びは多かったし、「自分事として考える」という趣旨の言葉から、社会の物事や抽象的な物事を自分事として捉えていくことの重要性に、改めて気づかされた。さらに、「社会を構成する一人として批判だけで無く自らも責任を負い創っていく必要がある」という趣旨の言葉に自分が社会を構成する一人であるという事実も強く再認識させられ、もうすでに社会の動静の一端を握ってしまったと気づいた。これに気づくと、かなりつらかったと同時に、自らができること、そしてやりたいことを、自らのペースで、やっていくしかないとも思った。評価表にも書いたとおり、かなり「物語性」ということばが心に残っているのだが、「自分の歴史が消えてなくなったみたいだった」という言葉は自らの今までの物語を証明するものがなくなったという意味だろう。自分が生きた物語を大切だと思っているべくにとって、「自分の歴史が消える」これをもし自分が感じたなら、それは自分にとって耐えがたいものになると思う。このスタディツアーで最も心に残っている言葉はこれだ。」

C「雄勝ローズガーデンファクトリーでの徳水さんからの話を聞いたときには、自分自身の震災から身を守ることを考えることが大切なのだと分かりました。お話を聞く前の自分の中では、避難訓練さえすれば

いいやと思っていたのであまり自分自身の身を守る行動などはあまり考えてはいませんでした。お話を聞いた後では、周りに従っているだけでは駄目なのだと実感し、自分自身の中では自分自身を守ること、自分の家族といつでも連絡を取れるようにコミュニケーションをとること、震災時の避難場所の確認などをするようになりました。」

D「体験活動では、ラベンダー摘みすごいきれいに摘むことができてうれしかった！虫が多くてそこはちょっと嫌だったけど周りの人とも話しながら摘んだりしてすごい楽しみながら活動できました。ラベンダーのアロマとか昔から家で使ってたから近くに触れることができていい経験ができました。オリーブオイルがけソフトクリーム、初めて食べた味わいだったけど結構おいしかったです。喉にくるな～とは思ってたけどソフトクリームの冷たさで結構いい感じになってすごかったです。」

E「雄勝ローズファクトリーガーデンでは、徳水さんから防災教育プログラムやローズファクトリーガーデンの成り立ち、ラベンダーの収穫体験をさせていただいた。防災教育プログラムでは津波防災能力を高めることを目的としていて、雄勝小学校や大川小学校を襲った津波の特徴や自分の地域の災害リスクについて知ることの大切さなどを教わった。私たち用に埼玉、東京の災害リスクも教えて下さり、無意識に抱えている自分の近くは大丈夫だろうという慢心を壊してくれるようなものだった。後日自分の住んでいる地域のハザードマップを見てみたところ、洪水や土砂災害の危険性もなく基本的に安全な地域であることが分かって安心した。けれど、地震や強風、火事が起きたら危ないことになりはしないし、外出先で災害にあうということも想定に入れておかなければいけないので慢心せずに学び続けようと思った。また、防潮堤は本当に必要なのかという問題についてもお話ししていただいた。もう人が住めなくなっている地域にもかかわらずあえて実際に来た津波よりも低い防潮堤を立てて何になるのか。住民の批判を押しつけてまで必要なものなのだろうか。もう少し住民との話し合いの機会を設けてからでもよかったのではないかとお話ししていて、すごく難しい問題だなと感じた。ローズファクトリーガーデンの成り立ちでは徳水さんたちが復興にすごく力を入れていることが分かって、頑張っしてほしいなと思ったと同時になにか遠くに居ても手伝えることはないか考えてしまった。きっとこの石巻に住み一緒に活動をしていくことが一番の復興なのだろうけれど、どこか他人事でこの復興を進めるメンバーには自分はいれないだろうなと思ってしまう。ラベンダーの収穫体験ではその名の通りラベンダーの収穫をした。ハチが群がっているラベンダーを収穫するのはだいぶ怖かったけれど、思っていたよりハチは人間にやさしく、刺さないで採らせてくれた。ハチに対しての苦手意識が薄れ後半は楽しく収穫できた。この日この瞬間が一番成長を感じたかもしれない。過ごしているうちに五時になり夕焼けチャイムが鳴った。その音は静かな雄勝に響きよく聞こえるのと同時に、今いる場所に人はもう住めないのだということを忘れていた私の心にひどく残った。」

高校生のみずみずしい感性に満ちた言葉の一部であるが、主として防災研修を通して自分の住む場所、地域、家族とどう話し合っておくかなどを自分事としてひきつけている人が多い。ラベンダー摘みの体験については、虫（ハチ）との格闘を通して、楽しんで参加していることがうかがえる。実際の雄勝ローズファクトリーガーデン（雄勝花物語）の活動の一部としてやっている実感もあるのかもしれない。ただ一方でEが書いているように「ローズファクトリーガーデンの成り立ちでは徳水さんたちが復興にすごく力を入れていることが分かって、頑張っしてほしいなと思ったと同時になにか遠くに居ても手伝えることはないか考えてしまった。きっとこの石巻に住み一緒に活動をしていくことが一番の復興なのだろうけれど、どこか他人事でこの復興を進めるメンバーには自分はいれないだろうなと思ってしまう。」と揺れている。自分自身の立ち位

置やできることを考え、その難しさを前に「この復興を進めるメンバーに自分はいれないだろうな」と感じている。安易に、復興のメンバーに入れる、あるいは復興の手助けができる、と言うよりも、この難しさを感じていることの方が大切な気持ちがある。この難しさ抱えながら、それでも自分にできることを、と前に進めていくような授業の展開や取り組みをどうしたらよいのだろうか。ラベンダーの収穫体験という形でその一部にでもかかわらせてもらえたことは大きかったかもしれない。「過ごしているうちに五時になり夕焼けチャイムが鳴った。その音は静かな雄勝に響きよく聞こえるのと同時に、今いる場所に人はもう住めないのだということを忘れていた私の心にひどく残った。」という言葉は、夢中になってラベンダー収穫をしていたEにとって現実に引き戻すものであったに違いない。研修や体験を1日してきた当たり前に営みができているこの場所が、実はもう人が住めない場所であること、少し行けば大きな防潮堤がそびえたち、その内側で夕方のチャイムになっていることが複層的に思い起こされる。

一方でAとBは徳水さんの話から防災だけにとどまらない部分で気づきを得ている。Aは復興と政治の関係についてふれている。「私は、何を守るか分からなく海が見えないほど高い防潮堤を見て、セメント会社が儲かる仕組みを聞いて、地域と政府の共同性を思った。復興の大きな難点を解消するのは共同性にあるかもしれない。」地域と政府の共同性、それは地域からしっかりと声をあげていき、その声を聴くことができる体制があるのかもしれない。国の政治と地方自治との間で復興はすすんでいくことに気付いている視点である。そして地方自治は民主主義の学校である。地方自治を進めて地方からの声をしっかりと国の政治に反映させること、そして国の行政もしっかりと国に耳を傾けること。これがAのいう「共同性」につながる。Bは「「自分事として考える」という趣旨の言葉から、社会の物事や抽象的な物事を自分事として捉えていくことの重要性に、改めて気づかされた。さらに、「社会を構成する一人として批判だけで無く自らも責任を負い創っていく必要がある」という趣旨の言葉に自分が社会を構成する一人であるという事実も強く再認識させられ、もうすでに社会の動静の一端を握ってしまったと気づいた。これに気づくと、かなりつらかったと同時に、自らができること、そしてやりたいことを、自らのペースで、やっていくしかないとも思った。」と書いている。「自分が社会の一部」として起きていることに対して責任の一端を引き受けること、これは自分ごととして見聞きしたことを引き受けていく第一歩だろう。それはAの言葉の中に出てきた復興の中で「地域の声と国の判断・決定の「差」」によって起こっていることの責任の社会を生きる一員として引き受けようとしているのではないだろうか。だからこそ「かなりつらかった」という感じ方にもなる。日本が民主主義国家である以上、確かに国の政治（国会や内閣によるもの）に対する責任は選挙権を持つ一人一人が負うべきだろう。まだB自身は高校1年生なので、その意味ではまだ負わなくても良いといえるかもしれないが、あと2年後には成人である。

対人援助において、傾聴は重要な要素とされる。しかしそれは1対1の場面においてのみなされるべきものであろうか。社会全体で、あるいはその地域全体の中で傾聴がなされていかなければ、対人援助は対処療法的になってしまう。起こった被害を個々に固有のもの、特有のものとして認めていきつづけることが、かえって被害をどこかの地域、誰かにだけ押しとどめてしまうことになりかねない。固有のものの特有のものはありつつ、しかしそれでも自分事としてそれを社会全体で引き受けていかなければ、孤立を生んでしまうのではないだろうか。そしてその被害の話を聞いて、お客さんとして「ひどいなあ」と感じた、考えたにとどまることになりかねない。「地方自治」の中で自分たちで声をあげていくこと、そしてその声をきちんと自分事（他人事になっているかもしれないというメタ的認知も含めて）として引き受けていくこと、そこから新

しい発見をしたり感じたりしていくことが将来の対人援助にとって重要な素養をつくっていくのではないだろうか。

そのほか次のような感想があった。

E「また現地の方から話を聞いたことで、「復興」への考え方が少し変わりました。今までは、震災前のにぎわいを取り戻すことや滞ってしまった文化や伝統を再生させる、以前のような生活が送れるようにすることが復興だと考えていました。しかし3日目に阿部さんが「復興は新しい時代に合わせてつくること」とおっしゃっていて驚きました。そこで、必ずしも元に戻すことが正解とは限らないと気づきました。防潮堤をつくることも住民全員が賛成している訳ではないということを初めて知りました。確かに海の近くは人が住めなくなったのだから作る意味がないと言われればないとも言えるし、これまで海が見えていたのが見えなくなる寂しさにも納得しました。防潮堤について考え方が一人一人違うように、復興についてもそれぞれの考え方があるのかなと思います。だから復興のゴールは一人一人が持っているもので、正解はないのかもしれないと考えるようになりました。私が石巻に着いて最初に思ったことは何もなくてなんかガランとしてるなということでした。でもローズガーデンファクトリーさん、鮎川捕鯨さんなどたくさんの方達に出会って、石巻の方の温かさを感じました。また自分が住む町に愛情を持っている人って素敵だなと思いました。

私がこのツアーで一番強く感じたことは日頃のコミュニケーションの大切さです。困った時に頼れる人がいることはとても大切です。信頼関係を築いていけばいざとなったとき助けを求めることができるし、逆に誰かを助けることができるにあかまさんはおっしゃっていました。わすれンで話してくださって橋本さんからは、全盲の人は周りの人がその人が全盲ということを知っていたから助けに来てくれたという話や、橋下さんはギリギリになるまで助けを求められなかったという話を聞きました。私はこれを聞いて、「助けて」って言える相手がいるだけでどれだけ心強いかとあかまさんの言っていたことがよく分かりました。」

「助けて」を言うことができること、その中には言うという行動を自分自身ができること、言うことができる頼ることができる相手がいること等を含んでいる。「助けて」という言葉を発しても良いのだと相手に伝えるコミュニケーションだけではなく、相手から「助けて」をお互いに言える関係性。そうした関係をつくっていくための素養を高校の授業においては養っていきたいが、そのためにこうしたスタディツアーを通して実感を通して子どもたち自身が発見できることが大切なのだろう。

ある看護科教員のアタマの中

6

～精神科の歴史をのぞいてみたら～

山岸 若菜

はじめに

教員の仕事に就いて、本を読む機会が増えました。

精神科看護の本が中心ですが、今回職場の図書館で『現代語訳 呉秀三・樫田五郎 精神病患者私宅監置の実況』訳・解説 金川英雄という本を見つけ読んでみたところ、心が震えるような体験をしたので紹介したいと思います。

本の概要

この本は100年以上前に書かれた『精神病患者私宅監置の実況』を現代語訳したものです。

昔から精神疾患はありましたが、明治時代に『精神病患者監護法』が施行されました。

これは、本人と社会の保護を目的に、精神病患者の監置義務者（家族が義務を果たせない、いない場合は市町村長）が精神病患者を精神病院あるいは私宅に監置する手続きを定めた法律です。

驚いたのは、ここに医療が関係していなかったということです。

治療することが目的ではなく、あくまでも本人と社会の安全のために監置するという考え方でした。

監置するための手続きは、警察経由で行政庁の許可を得ることになっており、入院できる病院が少ない時代であったため、それぞれの家の中に座敷牢を作り、そこに精神病の家族を閉じ込めておく私宅監置が主体でした。

監置にかかる費用は監護されるものと扶養義務者が負担することになっていますから、お金持ちの家以外ひどい状態になるのではないかというのは簡単に想像できます。

私宅監置という制度があつて、それが精神疾患をもつ人の人権を侵害する待遇だったということとは知っていたのですが、実際どんなものだったのかは知りませんでした。

本の中では、日本のいくつかの地域の私宅監置室、精神病患者民間施設、公的施設、未監置精神病患者の家庭の4つを視察調査、分析しています。

報告の内容はその家の資産や生活状況、家族の待遇、医療や警察の介入などで、私宅監置の状況が甲乙丙丁戊でレベル分けされており、民俗学、社会学的にも価値の高い一次資料となっています。

心が震えた理由

100年以上前、まだ交通も発達していない状態の中を、徒歩や人力車や馬車で入っていて、当時珍しかっただろう写真や見取り図付きで、105例の私宅監置室や患者さんの様子が事細かに記録されています。

すごい手間と労力だっただろうと想像します。

中には予想通り、酷い待遇になっていて人権侵害と問題視されるケースのものも多く、著者が悲惨な現状を報告して、患者の待遇改善に繋がったかと思いが伝わってきます。

『私宅監置の実況』という事実の報告であつて、血の通わないイメージがありましたが、本の中では視察者のコメントが記されていました。

「生活に余裕がなく、生活のため家業に忙殺されているので、看護が不十分なのは仕方のないところだ」など、その家の事情も考えた温かいものが多く、写真に写る患者さんの様子も相まってグッときました。

裕福な家が少なく、それでも一生懸命慎ましく生きていた当時の人々の生活を想像すると、こういう名もなき人たちの後に自分たちは生かされているんだなあとしみじみ感じます。

そして歴史を正しく知ることは、これからの自分たちの生き方を考えることにも繋がるというのはこういうことなんだなと思いました。

本読んで感じた精神科医療の問題点

100年以上前の本で著者は、「日本には精神疾患患者が13～14万人いると見込まれるが、入院できる病院が少なく、病床数は数千床にとどまるため、適切な治療や処遇が行われていない」として、公立の精神科病院を増やし病床数を確保することを提案していました。

現在では日本の精神疾患患者数は約500万人で、精神科病床数は約30万床とされています。患者数が激増したように見えますが、保健所など公衆衛生の施設が整い、患者数が正確に把握できるようになったためだと考えられます。

治療や薬の進歩によって以前ほど長期間の入院が必要な患者さんは少なくなっているにも関わらず世界的にも精神科病床数が多いことが逆に問題になっています。

特に日本は精神科病床の多くが私立病院のため、経営的な理由があって簡単に病床数を減らすことができません。

本当は退院できる状態の患者さんが長期化し高齢化して地域に戻れなくなっている現状は、矢印の方向は真逆なようですが、著者が指摘する問題と共通するように思います。

『よくわからないけど危ないそうなものは閉じ込めておけ』

閉じ込める先が家の中か病院かに変わっただけで、基本的な考え方に違いがないように思えるのです。

これからちょっとでも進んでいくために

それでもこの本の時代より進んだところもあります。

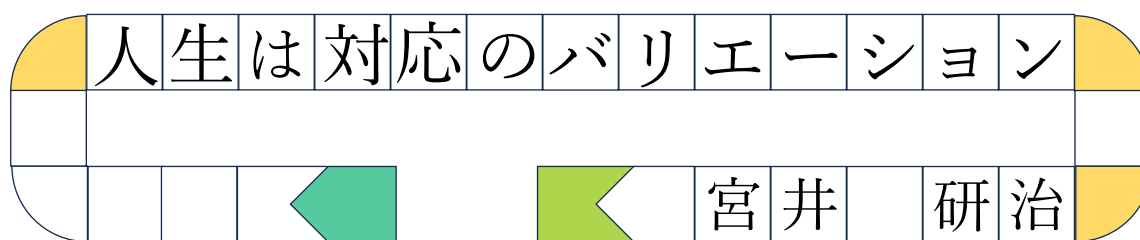
それは閉じ込める先に医療があり、ただ『臭いものに蓋』的な考え方で見えないようにするだけではなく、治療ができるようになったことです。

医療の進歩で少し前まで入院していたケースでも重症化することが少なくなり、外来で治療が続けられるようになってきました。

最近では国の方針で精神科病床数を減らし、外来や地域サービスを充実させることが進められてきています。

精神医療の提供体制が変化していく中で、より地域社会に根ざした支援が求められています。が、実際に地域で生活していく中で接するのはそこで暮らす普通の人々です。

その人たちの精神疾患や社会的支援の必要性の理解が、何よりも大事な気がしています。



ー 第7話 続々・私説「岡田隆介」論 ー

「対応のバリエーション」は、私たちが仕事で出会う様々な「対応」場面をロールプレイで再現し、いろんな対応の仕方を試してみて、感じたことを自由に話し合おうというワークショップ式体験学習です。ゲームみたいな感覚でみんな楽しみながら、実は、その中から何か日常の業務に役に立つものを持って帰っていただけたらと思っています。（「そだちと臨床」研究会主催 対応のバリエーション勉強会のお知らせより）

どうも、3ヶ月のご無沙汰でした。宮井です。私説「岡田隆介」論の三回目です。前回は、毎度ご紹介しています、明石書店出版の「そだちと臨床」誌の第4号の対談企画の記事を活用させてもらい、岡田さんの臨床におけるメタファー力の圧倒的な展開みたいなものを紹介させてもらいました。当時、私自身はこの雑誌の編集委員でしたから、この企画にも携わっていたわけですが、当日はこの懇談というか対談には参加してません。この記事の取りまとめである編集委員の菅野道英さん、懇談会の参加者であり、編集委員でもある大島剛さん、そして参加者の相坂聖子さん、井出智博さん、辻亨さん、中濱美起さん、何より事例提出者である大内雅子さんには、「岡田隆介」論を書く発想をいただいたことを、紙面を借りてお礼を伝えたいと思います。なんか乗っけから、終了モードに入っていますが、まだまだこれから、今回に繋いでいきたいと思います。

さて、反響があろうがなかろうが、好きなことを書かせてもらっているのはありがた

いことです。その数少ない反響のなかで、この連載を読まれて「岡田愛に満ちている」「愛がだだ漏れ」「岡田さんへのラブレター」といった感想をいただいています。自分でも読み返してみて確かにと頷ける感想です。しかしながら、書いている本人はほんとに今までの自分の面接に、岡田さんの指南する教えやスキルといったものが役立ってきたから書いているという意識が強いのです。単なるお世辞では書かない、書けないでしょう。これは強いて言うなら、ここ何年、何十年という単位で、いろんなアプローチや〇〇療法といったものが輸入され、臨床の現場で消費されてきていますが、ほんとに役にたつものなんてほんの一握りしかないということだと思うのです。大切なものは、鍛えられ、削ぎ落とされ、あるいは付け加えられ、その根幹には大きな改変はなく、あなたの身近にあるのだということを伝えたくて、このシリーズを書いていることに、気づきました。

1.理論編

岡田さんの教えは何処から来ているのか？岡田さんの治療理論は何処にあるのか？岡田さんの対人支援の拠り所は何なのか？そうしたことを書かれた資料や、聞いたこと、推測（妄想を含む）を交えて論考したいと思います。第一に、岡田さんの口からこの人に影響を受けたとか、自分の治療的な理論ベースは何々にあるとかはほとんど聞いた記憶がありません。例外的に、盟友（何度も勝手にお二人の関係をこのように規定してはありますが、もちろん、お二人の口から直接聞いたわけではありません。でも、たぶん、そうでしょう）の団士郎さんの話題は、私と会話していてもよく出ますが、団さんに倣ってとか、団さんを真似てという言い回しはほとんど聞かれません。お二人とも、家族療法という括りの中で、システム論を認識の中心に置きながら、児童福祉領域の一時代を牽引してきた、これは客観的な事実でしょう。でも、そうした中であっても、岡田さんの場合は、ことさらシステム論に言及して熱く語るという感じも印象としてありません。そう、なにか熱く語るということが、むしろ恥ずかしいというスタイルが岡田さんなのです。「〇〇先生から強く影響を受けた」「〇〇療法の岡田です」なんて口が裂けても言わない。業界カタカナ用語や、世間的なブームから絶妙に距離を置く。「オレ流」ですか。この言葉も恥ずかしいと言うと思います。つまり、その裏には、オリジナリティへのこだわりがあり、それは、それぞれのクライアントや家族には、オーダーメイドの治療が必要なのだという理念があるからだと思います。

① アドラー心理学

では、理論なき孤高の児童青年精神科医、岡田隆介なのか。そんなことはない。流行りを疑い、一歩距離を置く中で、実はきちんと知識として習得されているものと思います。その中から自身の実践にかなう理論を取り入れての現在の岡田理論だと思います。まず何からか。アドラーでしょう。私も一時期ハマったことがあるので、岡田さんがアドラーからいろいろともってきていることは、岡田さんの講演や、著書を少し見たり読んだりただけですぐ分かりました。アドラー自身は言わずもがなの有名人でこの業界の人なら誰しも名前は知っている人です。でも、岡田さんが、直接影響を受けたのは、もうお亡くなりになられたけれど、同業者の精神科医野田俊策さんだと思います。岡田さんが直接に会って話をしたとか、野田さんと呼んで勉強会をしたとかいったことを聞いたことがあります（あくまで私の記憶の中の話ですが）。岡田さんの「こんなときどう言う？（家庭教育編）」の中に、思春期との付き合いで、母親に相手のためを思ってではなく、自分のためを思って立ち位置のシフトダウンを勧めるスキルの一コマがあるのですが、まさにアドラー的介入だと思います。

② システム論-家族療法

システムを見ずして家族療法はないわけですが、原因が結果であり、結果が原因であると考えような決めつけすらない立ち位置が岡田さんには感じられます。家族が後生大事に一張羅（昭和表現ですね）の風呂敷に包んで持ち込んだ問題を、そっと、あるいは、さっと岡田さんに開陳するわけです。ド

やってかんじ。困っておられるわけですが。岡田さんは、ほうっと深いため息か、感嘆の吐息かは文脈によるのでしょうか、じっと見つめ「果たして、これ、問題でしょうか？」と言。問題は問題と規定するところに、問題として立ち現れる。システム論の大原則ですね(誰が言った??)。ここから、別のシナリオがスタートする訳ですが、こうした循環的巻き戻しが岡田さんをしてすごくワクワクさせるのではないかと思います。個人でも家族でも構わないけど、予定調和の結論に対して、正面切って異議を唱えるのではなく、ちょっと以前の古畑任三郎よろしく眉間に皺を寄せ疑義を呈する演者でありたいのではないのかなと、岡田さんよろしくメタファーで語ってみました。そう、家族の前で演じるのに、この上ない喜びを感じられてきたのではなかろうか、それで家族療法。そう言えば、岡田さんのワークショップ嫌いは都度に有名です。これは、人前に出るのが嫌いということではなく、ワークショップの中で参加者にグループワークをさせて相互交流させることより、自分が一方的にしゃべることが好きだからだと思います。自分のシナリオで演じる、演じてもらうのも自分のシナリオ。「家族」という単位が、一番じっくりくる劇場ではないのかななんてね。たぶん、大人数の講演より、少人数の分科会を好むのも案外そんなところに理由がある気がします。

③ 解決志向

この心理療法は、私自身が長年お世話になっている立ち位置です。問題を、あるいは問題の原因を探し求め、突き詰めていくより、問題とは別の「資源(リソース)」「強み

(ストレングス)」「例外(問題が起こりそうで起こらなかった状況など)」こと、ひっくるめて「解決」と名付けますが、そこに焦点を当てることを目指しましょうというものです。もちろん問題を蔑ろにするわけではなく、問題は問題として受け取ります。でもそれ以外にも存在する解決の方にも目を向けてもらいましょうということです。目を向けろと言われてもいきなりは無理です。そりゃそうですわね、問題があるから相談に来たのだから。従って聴く側(セラピスト、支援者)のインタビュー力、質問の仕方が問われます。解決を聴くことで、問題は在りながらも、何とかやっていけるわと聴く側(クライアント、要支援者)に自信を持ってもらえたらしめたものです。また、「解決=変化」が大きくなることで相対的に「問題」が小さくなったり、時には消えたり(忘れる)することも起こります。更に良きことは、自分の中に在ったり、自分に紐づけられるのが「解決」ですから、自信が芽生えることや、自己肯定感が上ることも予想されます。うまく運ばば、目の前のセラピストのお陰でなんとかなりましたという気持ちより、自分自身で何とかここまで来られた、これからいろいろと「問題」はあるだろうが、なんとかやっていけそうと思ってもらえるようです。うまくいってもセラピストはそう感謝されないというのは、セラピストにはどうよ!?という感じですが、私自身はクライアントがうまく生きていってくれたらそれでいいという考えですので、この立ち位置とは長いお付き合いをしています。

こういった私自身馴染みの深い解決志向ですが、岡田さんも自分の治療レパートリーの中に取り込んでおられます。それは以

前紹介したパワポのデータ（図 1）の中に
取りあげられています。解決志向＝ソリュー
ーション・フォーカスト・ブリーフセラピー
の質問の中核をなすスケーリングという尋
ね方ですね。それもけっこう応用編の尋ね
方だと思うわけですが、岡田さんはさらっ
と使いこなしているのが憎いです。一切解
決志向と言ってないのが、ズルいです。

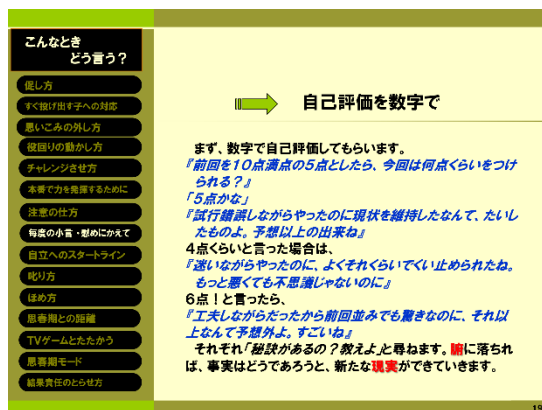
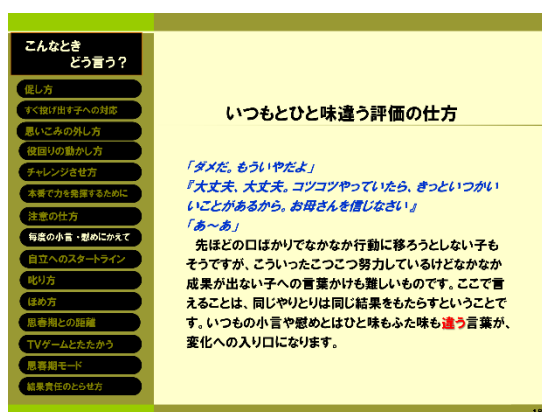


図1 「こんなときどう言う？ 家庭教育編」
より 岡田隆介作成

④その他、ナラティブ、オープンダイアロー グ

岡田さんは、新しもん好きです、たぶん。
これも推測の域はでませんが、だいたい世
の中に流行っていること、この業界で流行

っていることについてチェックしている感
じです。たまに直接会って、いつもの馬鹿話
に興じる時もこちらの振った話題について
「それは、ちょっとわからん。」「おれ、知ら
んわ。」「それには興味ない。」といった言葉
を聞いた記憶はありません。ただ、知識をひ
けらかすのが死ぬほど嫌な人だと思いま
すので、我さきに話題を放り込んでくるこ
とはない。こういうと奥ゆかしい方というイ
メージですが、こういうたとえどうでしょ
うね。定期試験当日の中学生の会話で
Aくん「昨日、寝てしもた。全然、準備で
きてへん！どうしよう、岡田はどう
なん」

岡田くん「俺なんて、今日試験いうのも知ら
へんかった。今聞いて知ったわ。」

Aくん「そら、ひどいな。大丈夫か、岡田」
と言いながら、内心ほっとするAくん。で
も岡田くんはけっこう良い点数を取って
いたりします。ディスってるのとちゃいま
すよ。これも岡田さんの一面であると思
います。「勉強してるのにしてない」＝「知識欲
は一倍つよいのにそれをひけらかすのは流
儀ではない」姿勢ということです。ナラティ
ブ・セラピーが非常に脚光をあびた時、話を
したことがあります。岡田さんは、その素晴
らしさを認めつつも「おれには合わんかな」
と漏らした一言をよく覚えています。実は、
その時、その言葉に私は違和感なかったの
も同時に覚えています。岡田さんは、演出家
なんだと思います。落とし所は自分で描き
たい。ある程度の着地点は自分で提供した
い。ナラティブ・セラピーの専門の方から
は、間違った理解だとお叱り覚悟で言えば、
セラピーの場を一緒に作り出していくナラ
ティブより、自分の台本のもと演出もして、

もちろん自分も出演して、クライアントが気に入る(驚かすことも含めて)ナラティブを受け取ってもらいたがっているように思います。ここまでくると私の岡田さんの流儀に対する妄想ですけども。全面的には信じないでね。既読号で書きましたが、岡田さんの立ち位置は、「料理人」であり、「ティラー(仕立屋)」「舞台作家兼演出家兼役者」であるのです。オープンダイアログについても、勉強してないと言いながら、がつつりしていると思います。また、間違った認識ならごめんなさいですが、自分(セラピスト)と相手(クライアント)との立場すら取っ払ってしまうODも、ナラティブの時と同様の理由で岡田さんの肌には合わないかと思っています。今度、会った時間聞いてみます。岡田さんにとっての臨床というか人生の基本は、「おもてなし」=ホスピタリティにあるのですね。だから自分の意に沿わないことは決してやらないわけです。これが、一面めんどくさい男でもある理由ですね。

2. 最後に

今回で私説「岡田隆介」論は終わりにしようと考えて書き始めたのですが、ここで終わると、理系で、知識欲旺盛で、お笑い好きで、クライアント思いで、シャイでおもてなし好きのイケオジと勘違いされる方もかなり多数に上るかもしれません。それもよいのですが、私の妄想も含め、さらに番外編として次回は「人間・岡田隆介」に激しく迫りたいと思います。だから、次続くののでよろしくお願いします。

家族が変わる子育てが変わる コミュニケーション のヒント

子どもの生きる力を育てる

岡田隆介

Kazuo Okada



岡田隆介

※ちよくちよくパワポのスライドとして文章内に登場する「こんなときどう言う? 家庭教育編」を本にまとめたものが**上記の本**です。私の文章を読むより、岡田さんの教えや知恵がわかりますので、Amazonでポチってお読みください!!

けふばあちゃんからの手紙

—その4— あきちゃんへ

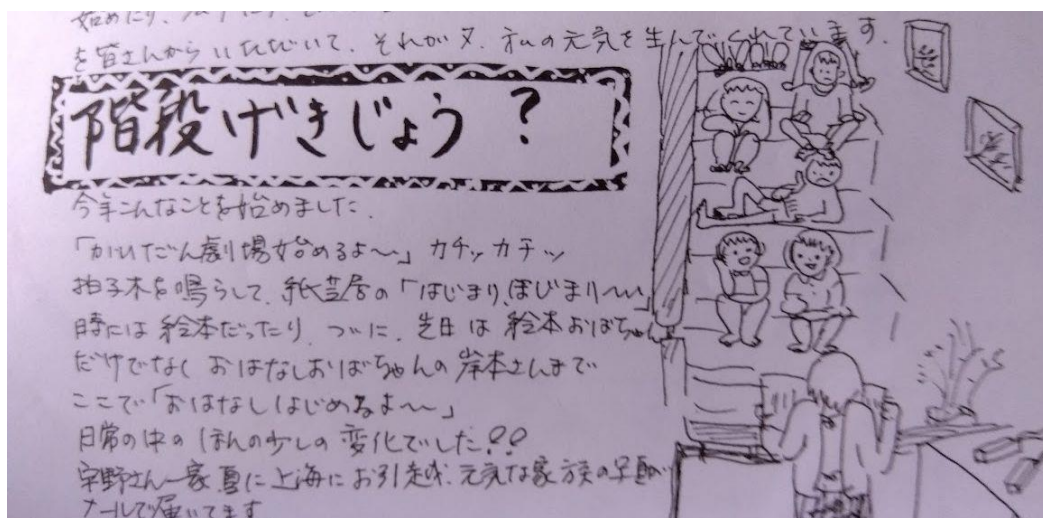
(じやりんこ文庫 乾 京子)



今年も押し詰まってきました。年々一年があつという間に過ぎていきます。今年の夏が暑くて、暑くてしかも長かったから余計秋を感じる事が少なくて、そう思うのでしょうか？

お元気ですか？ どうしていらっしゃるんですか？ けふばあちゃんは、ちいさかった頃のあきちゃんを思い出して、ちょっとニヤツとしています。あなたは、もう覚えていないかもしれませんね。こんなことがありました。

いつものように階段劇場で常連さんのまこちゃんが紙芝居をしてくれた後のことです。階段に座っていた年中さんのあきちゃんが「けふばあちゃん、わたしがよんでもいい？」と、さとうわきこさんの『るすばん』を持ってきました。



(「じやりんこ文庫」だより 37号 2006. 6. 15 より)

「あきちゃんが読んでくれるって、みんな聞いてくれるかなあ？いい？」

ひらがなを覚えたばかりのあきちゃん、一字一字確認するように「お・る・す・ば・ん」「お・か・あ・さ・ん・が……………」真ん中くらいでしびれを切らしたあきちゃんのおかあさんが、「あきちゃん、後、お母さんが替わってあげようか？」「いや、あきが読む！」

そうして、最後まで読み通しました。思わず拍手！じっと根気よく聴いていた他のみんなにも拍手！拍手！！

その時、聴衆のひとり、ことみちゃんが「わたしもよみたい！！」

「えっ、まだこの子字は読めないんです。」とおかあさん。3歳のことみちゃんに読める本を探しました。でも、結局、おかあさんとことみちゃんですら決めた本は、『はらぺこあおむし』でした。その本をもって、あちこち、リビングから和室へ、あきちゃんが読んでくれたおこたのところ……と、ことみちゃんの居心地のいい場所を見つけるのにウロウロ……最後に決めた場所、それは、まこちゃんの紙芝居を聞いていた階段の上の方でした。紙芝居の時と逆、ことみちゃんが階段の上で『はらぺこあおむし』を読みます。他のみんなは上を見上げて聞きました。毎日毎日、おかあさんに読んでもらっていたことみちゃんは、ちょっとだけおかあさんに手伝ってもらっただけで最後まで読み通すことができました。

「本当に読めたのねえ。えらかったねえ。すごいねえ。」とおかあさんは感激の涙。

まこちゃんからあきちゃんへ、そして、3歳のことみちゃんへ、子どもたちの“成長していきたい”というパワーにけふばあちゃんは、心を動かされた日でした。まこちゃんの何気ないいつもの行動が、小さい人たちの“あこがれ”になっていたんだね。あきちゃんが挑戦してくれて、それが次々伝播していったこの日、けふばあちゃんはね、「こどもたち同志の育ちあい」の現場に立ち会っているようで、とってもうれしかったんだよ。

あきちゃんは、どちらかという、おにいちゃんの陰で控えめにおかあさんにくっついていて、そんな甘えん坊さんだと思っていたのに、この日、自分の意志をちゃんと通すしっかりあきちゃんを発見した日でした。

そして、それまで遠慮がちで表情も少なかったあきちゃんのおかあさんが、他のおかさんたちとも話し込まれるようになって、「私が一人っ子で育ったから、兄妹の扱いとか、子どもがどう思っているとか分からないことがあって、迷うことがいっぱい……。」
「そんなこと、みんなそうだよ。分からないことだらけだもん。」「そうそう、そうだよね。」
おとなもね、子育てしながら自分も成長するんだあって、おとなたちは大人達で思ったんだよね。あきちゃんのおかあさんも笑顔が増えて、お菓子を焼いて持ってきてくださったりするようになったんだよ。



↑（普段のいつもの文庫）

そうそう、あの時あきちゃんが読んでくれた『おるすばん』、じゃりんこ文庫のみんなで図書館の「夏休みこどもの広場」に出演することになって、めくり絵に作ったんだよね。あっ、もう少し後のことだったかな？下絵は絵の得意なおばちゃんが描いて、みんなで色を塗って、配役決めて、あれも楽しかったなあ。

お元気でね。健やかにお過ごしください。そして、いい年をお迎えください。



1. 素朴な問題意識

—悩み苦しい多重関係—

毎年10月に入る頃から、私が住む地域は色めき立つ。1年の中で最大の行事であると言っても過言ではない、秋祭りがそこらじゅうで開催されるからだ。私はこの地域で生まれ育った。しかし、私の実家地域の祭りは盛大に行う類ではないためか、どうやら私は祭りの楽しみ方を学習できずに育ったようだ。私にとって祭りは1年の中で最大の行事ではない。祭りを見にいくなら家でゆっくりしたいと思うぐらい、祭りに熱はない。ただ、結婚して家族のつながりが増えてからはそうも言っていられなくなった。家族の一員として祭りに行かなければならないからだ（役割が与えられることもある）。今年も、例年通り気分が乗らない自分を奮い立たせて家を出、お宮周辺で車を停める場所を探すことに努力をしいられ（車がいっぱい、遅めに行く私は車を停める場所がない。だが、不思議なことに、毎年なんやかんやで停めることができてし

まう。），「（祭りに）行かん！」と急に言い出す子どもをなんとか連れて行き（祭りにいる鬼が怖いらしい）、神輿をぼお一つと見ている時、見覚えのある人が目に入ってきた。クライアント（以下CI）だ…！瞬時に姿を隠す自分があり、一緒にいる家族に怪訝な顔をされる（守秘義務の観点から、「この場にCIがいる」ということ自体悟られたらいけないので、うまくやらないといけない。これが大変）。

私は今、地方の病院心理士として臨床経験を重ねている。日々感じる最も困難な点は、今述べたような状況、つまり、臨床で関わる方との間に多重関係といえる状況が起こりやすいことだ。これまでもスーパーマーケットなどでしばしばCIと出遭ってきた。単に出遭うというシンプルなものでなく、言うことを聞かない自身の子どもの業を煮やした姿を目撃されたこともある。心理士として面接に臨む気持ちを整えた自分ではなく、子どものせいで気持ちが乱れまくった母親としての自分を、図らずもCIに見せてしまったというわけである。

なぜ多重関係といえる状況が頻発するのか。それは臨床地域が田舎であることと、自身も CI と同じ地域で生活する者であることが大きな要因であろう。ハーマンスが提唱した対話的自己論(2006)では、自己は複数のポジションから成るとされる。私の自己世界には「心理士としての私」はもちろん、「生活者としての私」も存在する。いろいろな私がいる、これ当然のことだ。しかし、ここは人との距離が近いせいか、役割が多いせいか、田舎に住む私は周囲の人にいろんな「～としての私」を知られてしまっている。そのため、状況によって適切な「○○としての私」のみを選択し、不適切(不必要)な「××としての私」を捨て去ることは難しいのである。また、対話的自己論は他者の視点も自己世界に内在化し、他者の存在すら「私」を構成する一部であると考え、状況と時間の変化に応じて「私」を構成するそれぞれの立場(「私」)に視点を移すことを可能とする。そして、それぞれの立場(「私」)に声(voice)が授けられ、視点がそれぞれの立場(「私」)を移動していくことで、それらが対話によって繋がれ(対話的關係)、自己の意味を構築するとする。対話的自己論において CI との多重関係について考えると、「CI としての私」の立場と「心理士としての私」の立場が声(voice)によって繋がれ対話的關係になるからこそ、多重関係に気づくというふうに考えることができる。CI との関係性を強く意識する心理士の特性も相まり、そこに多重関係があればそれに気づくことは必然となろう。このような対話的自己理論と田舎という環境を併せて考えれば、田舎での臨床実践では多重関係の問題はつきまとうものだといえる。

とはいっても、「こんな状況のまま、なるがままに、臨床を続けていったいいのか？」と自問してみれば、すごく悪いことをしている気分になる。さらには、多重関係のような関係が生じているケースで悩んだとしても相談しにくい(「多重関係あるんです」なんて口外したら吊るしあげられるのではないかと思うから)という悩みもある。何より、プライベートの時間でさえも CI に会ってしまうかと思うので、家を一步出れば常に「心理士の私」にならなきゃいけなくなってしまう、しんどい。

2. 多重関係と向き合う

—向き合うパワーをくれた出会い—

そんな時に、東畑開人の『日本のありふれた心理療法—ローカルな日常臨床のための心理学と医療人類学』という本に出会った。2017 年のことだ。東畑は自身の心理臨床家としての経験から、理想的とは言えない臨床環境で様々な妥協をしながら行う臨床を「日本のありふれた心理療法」と名づけた。妥協された心理療法を、心理臨床家が CI の生の現実に向き合った結果として捉えて、これらの心理療法が生成していくプロセスを人類学的視座から探究していくことが心理療法および臨床心理学に貢献していくというのが彼の主張である。この本を読んだ時、自分の臨床実践を「ダメなもの」として捉えていた自分の心が、少し緩んだ。同時に、いろんな理由から思うような(習ってきたような)臨床ができていないと感じている心理士が私だけではないということも実感できた。これだけでかなり救われた。そして、現実の臨床にしっかりと向き

合っていくことこそが自分にできることであり、かつ必要なことであると感じた。

広く知られているように、多重関係は CI の利己的な利用に繋がる恐れから元来避けるべきものとされ、日本公認心理師協会倫理綱領(2020)にも明記される。また、セラピスト自身の安全性を確保するために必要なことでもある。大学院の教育でもこう強く教わった。だが、困ったことに現実はどう。セラピスト個人の努力や都合だけでは多重関係を避けられない場合がある。「家族の一員としての私」があるので祭りには関わらなくてはいけなし、「生活者としての私」があるので、スーパーマーケットにも行かなくてはならない。他の心理士に交代してもらいたくても、その他の心理士がいない（一人職場）なんてこともあるだろう。私が所属する都道府県の臨床心理士会では、多重関係にまつわる困り事が話されることもある。多重関係を思わず持つことになってしまい、そこに悩みながら、苦しみながら（教育されてきたことと違うことをしていることの劣等感に）、心理臨床をしている心理士は私だけではない。

無論、多重関係を持ちながらの臨床を肯定したいわけではない。ただ、受けてきた心理臨床の教育と現実における多重関係の位置づけが食い違っているのも、そのズレを理解していく（ズレを埋める視点や考え方を身に着けること）ことが必要なのではないかと思うのだ。多重関係が発生しつつの臨床という「ありふれた」ものについて、「ありふれた」劣等感を持つのではなく、誠実に考えていかなくてはいけない。

3. 多重関係における海外の研究

—びっくり仰天な知見?!—

日本の心理臨床において多重関係（が存在する実践）に着目した研究は見当たらない。一方、海外にはいくつかあり、例えば Lazarus(2002)は、CI への中傷や搾取、虐待、性的接触を除く制限や禁止事項は、CI の状態にあわせて柔軟に許容することが可能かつ臨床上有用であると主張する。この見解は、CI とパーティーをしたり、長めの散歩をしたりすることが、診察室の中で明らかになることよりも多くのことを学ばせてくれたという Lazarus の経験に基づいている。心理士が CI と面接室の外で一緒に活動することは、現在の心理士教育を受けてきた私にとっては仰天することで、考えられない。ただし、過去に勤務したデイケアでの臨床経験を思い出すと、メンバーと活動（生活）を共にすることでメンバー自身をより理解していくことに繋がり、アセスメントにも深さがもたらされた。また、前述した、スーパーマーケットで CI と出遭ってしまった後の面接では、CI は笑いながら「先生も普通に怒ったりするんですねー」と安心したように話してくれた。どうやら CI は私を特別ではない“ふつう”の人間として認めてくれたようだった。その後はより対話がスムーズになった感覚がある。これらの経験から、面接室外での関係もその関係の種類や CI の状態にはよるが、治療的に有効な場合もあるのではないかと考えてくる。

また、Lazarus(2002)は、治療における境界について、それを強く求める硬い専門家主義は治療関係を育てるよりは傷つけ、疎外と緊張をもたらしがちであるとする。こ

の点に関しては臨床家として若輩者の私にも思うところがある。CI から私自身に関するパーソナルな質問を受けた時、大学院教育で習ったように「どうして知りたいのですか？」のように質問を質問で返す(話を逸らす)形で答えた時、CI は怪訝そうな表情をし、その後も信頼関係が結べない感覚が一連の面接を通じて続いたことがある。この経験からその後は、CI にはよるが、教育された面接の手続きは少し横において、常識の範囲内の内容で、かつ治療に悪影響がないと判断した質問に対してはそのまま答え、その上で、なぜそれについて尋ねるのかをこちらから質問することになっている。こうするとスムーズに治療を展開していける感覚を持っている(ただし、このようなやりとりの中で多重関係があることに気づいてしまう場合もあるのでリスクは高い)。

繰り返すが、多重関係や境界など心理臨床を行う上で取り扱い注意とされるものは、大学院教育で学んできた通りにするのが最適だ。しかし、そのお作法通りではなかなかうまくいく場合が少ないのも現実だ。まったくつらいものだ。



4. 多重関係にどう向き合えるか

—悩める私がすべきこと—

まず、避けられない多重関係によって CI に害が起こることはどうしても避けたい。これが私の率直な気持ちだし、臨床心理の倫理や大学院の教育とも一致する。精神科や心療科などまだまだ偏見が存在する田舎で、やっとこさ来院し心理士に繋がってくれた CI の頑張りを無駄にはできない。そして、頻繁に発生する多重関係にあたふたしながらも、この先も地域に心理支援を提供し続けられるよう、健康に心理士を続けられるようにしたいという私自身の思いもある。多重関係にまみれた地域の中で、どうしたら有効的に、かつ持続的に心理臨床を行っていけるのだろうか？実践から芽生えた、この疑問を探究したい。

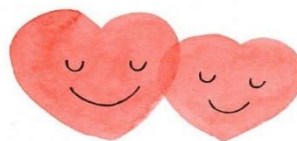
多重関係を一言でいえば、セラピストと CI との間に、職業的な関係以外の関係がある状態である。しかし、その質は様々だろう。例えば、スーパーマーケットや祭りで会うようなセラピストと CI の二者が直接的に結びつく多重関係もあるし、セラピストの家族とその CI が知り合いであるようなセラピストと CI の間に他者が介入して結びつく多重関係もある。こう考えると関係学を連想する。関係学は松村康平により提案された。「かかわり(関係)構造の分析をすすめて、人間の根源的な自己・人・物の接在共存関係状況を究明し、複雑な人間諸現象をその状況の顕在化の過程においてとらえ、関係発展の実践活動を促進する理論的枠組みを提供する」もの(松村, 1980)であり、複数の円の重なり具合によって関係性を表現する。私が経験している多重関係

を関係学のこの表現にならってみようとする
と、円がいっぱいあったり、円が付置さ
れるグラウンドがデコボコだったりツルツル
だったり黒かったり黄色かったりというよ
うなイメージが湧く（家族が関係する場合
や地域性などの文化も影響すると考えるか
ら）。

思わず「うわぁ…」と声を出してしまいそ
うになる。というか、声が出てしまってい
る。多重関係を相手に臨床を行っていくこ
との大変さと困難さが伝わってくる。とは
いえ、円の様子やグラウンドの様子を注視で
きれば、多重関係が心理臨床に及ぼす影響
理解に繋がるのではないか。加えて、より
リアリティを持った探求にするために、マ
イクロ・エスノグラフィー（箕浦, 1999）の
手法を採用することもよいかもしれない。
関係学やマイクロ・エスノグラフィー的
手法を用いて、心理臨床における多重関係
について今一度、捉えることをしてみたい。

「心理臨床における多重関係について考
えたい」ということをこのように文字にす
ることは、正直、罪を犯している感じがす
る（冗談抜きで、“まっとうな”手順の心理臨
床を行われている先生方に刺されるのでは
ないかと心配になる。いや、刺されると言
っても包丁で刺されるという意味ではない
…）。心理士になる為に受けてきた教育が強
くしみ込んでいるからだと思う。これは私
が大学院でかかった呪い（個人的見解）だ
と思うが、実際、社会に出てから戸惑う心理
士は少なくないのではないか。そうであ
れば、心理臨床の実際を含めた見解も、心理
士の養成課程に踏まえていかななくてはな
らないと思う。習った通りにはいかない場合
もあるけれど、それでも誠実に行っている

臨床に対して、必要以上に怖がったり劣等
感を抱いたり自信が持てないでいることを
止めにし、自身の目の前に座る CI のために
心理士として精一杯の役目を果たすために。
そして、いろいろ大変な（個人的見解）心理
士を職業として選ぶぐらい「こころ」の仕
事に憧れた私達が、今後も心理士を続けてい
くために。



注2) 心理シの「シ（士/師）」について。

現段階で、自身は「士」の意味合いの
方を身近に感じているので、本稿で
は「士」を使用している

注1) APA が定める多重関係は、セラピ
スト（以下 Th）が（1）CI に対して
別の役割を持っている場合、（2）CI
と密接に関わっている人、または
CI と親戚関係にある人との間に、
なんらかの関係を持っている場合、
（3）CI に対して、あるいは、CI と
密接に関わっている人、または CI
と親戚関係にある人に対して、将来、
別の関係を持つことを約束してい
る場合、とされる。

（1）は Th と CI の直接的な限定さ
れた関係であり、「狭い多重関係」、

（2）（3）は Th と CI の間に他者が
介在している複雑な関係であり、
「広い多重関係」と捉えることがで
きる。私が日常で経験する、悩まさ
れている多重関係は「広い意多重関
係」であると考えます。

- Hermans, H. & Kempen, H. (2006). *The Dialogical Self: meaning as movement*. San Diego, Calif: Academic Press.
(ハーマンス・ケンペン 溝上慎一・水間玲子・森岡正芳 (訳) (2006). 対話的自己：デカルト/ジェームズ/ミードを超えて 新曜社)
- Nagy, T. (2005). *Ethics in Plain English: An Illustration Casebook for Psychologists*. 2nd ed. Washington, D.C.: American Psychological Association. (トマス・F・ネイギー・村本詔司(監訳)・浦谷計子(訳) (2007). APA 倫理規準による心理学倫理問題事例集 創元社)
- 松村康平 (1980). 人間科学としての心理学—2つの著書の書評を中心として 応用心理学研究, 3・4, 45-65.
- 箕浦康子 (1999). フィールドワークの技法と実際
- 溝上慎一 (2008). 自己形成の心理学 他者の森をかけ抜けて自己になる 世界思想社
- 日本公認心理師協会 (2020). 日本公認心理師協会倫理綱領
- Lazarus, A. A. (2002). How certain boundaries and ethics diminish therapeutic effectiveness. Lazarus, A. A. & Zur, O. (Eds.) *Dual relationships and psychotherapy*. Springer Publishing Company. pp. 25-31.
- 東畑開人 (2017). 日本のありふれた心理療法—ローカルな日常臨床のための心理学と医療人類学— 誠信書房

生殖医療と家族援助

～LGBTQ の家族形成対応編～

荒木晃子

生殖医療現場で起きていること

先日、勤務する生殖医療施設で進行中の「LGBTQ 当事者対応のための院内改革」の一環として、医師を含めスタッフ全員で恒例の勉強会を開催した。当日は院内の待合を利用したワークショップ形式とし、はじめに簡単なレクチャー、次に総当たり戦でマンツーマンのロールプレイ 2 事例を 2 時間弱に詰め込み実施した。2 事例のうち、ひとつは筆者から提供した「ftM 患者への対応」、もう一つは事前にスタッフアンケートで寄せられた「実際に困ったケース」からの抜粋である。以前より、筆者が講師を務める勉強会では、事前にスタッフからリクエストを募り、その内容を盛り込んだ話をするのが通例となっていて、今回は新人胚培養士からの提供事例であった。

実際の医療現場では、教育による座学での学びにとどまらない出来事や困りごとが日常的に起きている。医学的な問題や技術的な課題は医師、生殖看護師、胚培養士、受付など各分野ごとに毎年開催される学術集会や専門書等で必要な知識を常に更新しているが、こと対面での患者対応となると各自の専門性を離れた対人関係におけるコミュニケーション上の困りごとに遭遇することになる。特に、職位についてまだ日の浅い新卒スタッフ、また他領域から生殖補助医療施設に

転職したばかりの看護師やスタッフたちは必ずと言っていいほど不妊患者特有の不妊心理への対応に戸惑いを覚え洗礼を受けることになる。

不妊治療を希望する患者は、身体に痛みを感じたり、体調不良や日常生活に支障が出る身体症状を持つ患者の割合は少ない。日々の生活の中で子どもが欲しくても妊娠・出産に至らないことに悩み、苦しみ、受診する割合が大半なのである。そのような患者への初期対応や、検査の結果、不妊原因が判明した際の説明、その後に続く次の治療方針を告げる際には、性別を問わず「性と生殖にかかわるプライベートな内容」に触れずには説明が不可能なのであって、過去にそういった経験のない者にとっては相当ハードルが高いという。例え不妊原因のない検査結果であっても、検査を受ける時点ですでに不妊に悩んでいるのであって、原因不明の不妊症というケースも考えられるからだ。ましてや、検査結果に大きな問題が見つかった場合は（本人に自覚のない）不妊原因にショックを受ける方もおられる。その場合の結果説明には、更に精密な検査が必要なこと、カップルで今後について話合っていたきたいこと以外に、不妊治療の次のステップ（自然妊娠→タイミング法→人工授精→体外受精（顕微授精）→・・・）に進む提案も情報提供

として告げる場合もあるだろう。この一連の説明業務は、過去に「性と生殖に関する話」をし慣れていないスタッフにとっては大きな試練となる。それは、患者の性別、対応する医療者の年齢・性別、さらにはジェンダーアイデンティを問わずに起こり得る生殖医療現場の困りごとのひとつである。

医療現場と LGBTQ 当事者

なぜ、いま、「生殖医療現場の困りごと」を記述したのか、不思議に思う方もおられるかもしれないので少し説明を加えたい。

前々回 57 号に、当事者の家族形成ニーズを紹介した。近年、セクシュアルマイノリティに関する様々な調査により、LGBTQ 当事者が社会で体験する差別、偏見、不平等などが明らかになった。幼少期から老年期に至るまで、当事者が自身のセクシュアリティに違和を感じる時期は個別だが、その瞬間以降、耐える、隠す、諦めるなどの苦悩を覚え、実際にそれらを家族関係や社会で実体験することを強いられるという。現状が変わらない限り、その苦悩は本人が自身の性別違和を自覚して以降、生殖期を経て人生を通し続くことになるのだろう。大半のトランスジェンダーが社会で出会う友人、職場仲間、恋人から伴侶へ、そして愛する人とふたりの間に生まれる子どもとの家族形成のいずれの人生ステージに、LGBTQ 当事者が困難を伴うことは想定するに難しくない。

通常、マイノリティといっても、身体的、精神的、経済的な要因、国籍、肌の色、出自、人間関係など要因は多岐にわたり、社会的不利益を被る当事者は多数存在しその多くは可視化されている。しかし「性的マイノリティ」に関してはどうだろう。医学的な疾患（もしくは

は症候群）名が明らかになっているロキタンスキー症候群、ターナー症候群、無精子症などの身体的状態にある当事者は治療が可能か否かを除けば医療の対象となる。一方、性別違和、性的指向、性表現や性行動に困難を抱えるマイノリティ当事者は、性別変更手術やホルモン療法を除き、治療の対象となっていない。つまり、トランスジェンダー当事者以外の性的マイノリティは病や疾患と認められていない（医学的定義はない＝病ではない）ため、これまで LGBTQ 当事者特有の困りごとに、大半の医療者は対応する「術」を持たない、あるいは治療対象ではないため患者対応のノウハウは必要なかったのではないだろうか。「術」とは、医療技術や医学的知識をいうのではなく、「対人対応スキル」を意味し、患者対応のノウハウとは、不妊患者に通ずる「社会的背景を踏まえ患者心理に配慮した医療者の言動・態度・院内システム」をいう。そのなかで、不妊患者の通院する生殖医療施設（少なくとも勤務する施設）には、すでにその基本システムは構築されているため、現在は LGBTQ 患者を迎えるための対応スキル、及び院内システムの構築にスタッフ一同取り組むべく努力を続けているさなかである。

医療と“性・生殖”マイノリティの関係

現在、勤務先のクリニックでは LGBTQ 当事者を受け入れる態勢の準備が進みつつあることは先に述べた。生殖補助医療の専門性を持つ内科併設の不妊クリニックなので、患者を「生殖に関するマイノリティ当事者」と表現することもできる。なかには、生殖以前の問題を抱える方もおられ、異性間かつ法的婚姻関係の有る無しにかかわらず性交渉

を望んでも成功しない、性交渉なく妊娠を目指したい、互いにスキンシップを望まないの
で医療技術で妊娠したい、など、性別にかかわらず様々なニーズをもって来院する/カウンセリングを受ける個人/カップルは、以前から
院内外に実在する。彼らは、生殖以前に、子どもとの家族形成に問題を抱えた当事者であり、社会的に言えば性的もしくは生殖に課題を持つ家族形成におけるマイノリティ当事者であるといえよう。

筆者は、性的マイノリティ(セクシュアルマイノリティ)をLGBTQ 当事者に限定した表現であるとは理解していない。性的な問題を抱える患者はLGBTQ 当事者だけとは限らないからだ。性的、かつ医学的・社会的・精神的に家族形成に関わる課題を抱える人々は、これまでも生殖医療を受診していたのであって、なかにはLGBTQ 当事者も含まれていた。同質の課題や問題を抱えた人々には、生殖医療の受療対象者として法で定められた医療を受ける権利がある筈だ。しかし実際に一部の医療現場では、性的指向や性別移行を問題として診療を拒否する、受診後に医療者間でアウティングと捉えられる情報開示がなされるなど、当事者にとっての「傷つき体験」となる医療の対応が明らかになっている。医療現場を訪れる理由は、心身に何らかの痛みを抱える患者なのであって、医療現場で更なる痛みを経験することはあってはならない。性と生殖に問題を抱える当事者を、また彼らの社会的背景を医療者が知り、理解し、必要な当事者対応のための知識と情報を会得する必要があるのではないだろうか。

編集後記

編集長(ダン シロウ)

「ついログ」初期の記事を見ていたら、『2011年2月28日 月刊ケアマネジャー誌に三年連載してきた最終回掲載号が届く。「木陰の物語」を連載中の月刊「少年育成」誌も3月で休刊になる。何かが終わると、また新たなことが始めなくなる。もともと、今はすでに新しいことを始めているので、ほどほどだ』。こんな記述があった。

連載誌が潰れた『木陰の物語』は、翌春から現在連載中の『月刊学校教育相談』誌に引っ越して13年目になる。

ここに書いている新しいものというのが当時、創刊第4号を迎えていた対人援助学マガジン。二週間後には、東日本大震災/津波/原発事故に直面している。

それが今回59号でいよいよ次号は60号。創刊十五年になる。だからなんと言うモノでもないが、少人数でスタートした学会が、15年経って会員も350名強。この会員数でマガジンには50人以上の連載執筆者がいるのだから、かなり珍しい。

先日、2024年11月2、3日に開かれた今年度大会に参加しながら、マガジン主催の企画を来年は出してみてもいいかなと思った。いろんなものが大きく変わっていている気がする今、もう一つくらい世の中に付け加えるモノを考えてもいいかなあと思った。

編集員(チバ アキオ)

京都大会を支えてくれたスタッフには、京都光華女子大学の学生さんと職員もいました。京都大会事務局のお誘いに、参加もオッケーでかわるがわる2日間、準備、受付、事務、撤収を一緒にしてくださいました。

皆さんが見ているホームページの更新は広報担当の

乾先生と学会の事務局川原さんが連絡を取って進めてくださいました。いつもこのマガジンの発刊も支えてくださっています。

情報交流会の食事も頼んでよかった。金額の枠がある中で、家庭的で、季節にちなんだメニューをケータリングで提供してくださいました。下見もしてくださって、温かい食事や飲み物の提供を実現するため、保温設備も持ち込んでくださいました。また、食品ロスの観点から持ち帰ることもできるよう容器なども準備してくださいました。

大学の職員の方々も、学会の社会的意義も考えて、土日のイベントが立て込んでいる中で、教室の利用に協力してくださいました。立て看板なども使わせていただき助かりました。

マガジン執筆の方々とも京都で会うことができました。今回はマガジン編集部チームによる大会運営でもありました。これまで行ってきたマガジン企画は大会でエントリーはできませんでした。先日のマガジン編集会議では、次回の大会はエントリーしようという話になっております。お楽しみにしてください。

…ということで、マガジン合宿を復活します。2025年2月15日(土)～16日(日)の予定です。詳細決まりましたら、またお知らせします。まだまだ、続きますよ。

編集員(オオタニ タカシ)

まさかと思うようなことが続いています。衆議院選挙の結果、トランプ大統領の再選、そして韓国での戒厳令の発令…。しかしよくよく考えると、ロシアによるウクライナ侵攻もそうであったように、世界は数年前から「まさか」が通じない時代へと突入していたのだと思います。

『変化にはよい変化も、悪い変化もある』『重要なのは変化することで、よい変化だけを起こそうというのは不可能』というのが、今号の編集会議で一番印象に残った言葉で、歴史を振り返れば納得するしかない。よい変化しか重ねてこなかったのであれば、今頃よ

ほど素晴らしい世界になっていなければ、計算が合わないですから。

昨日の学会の公募ワークショップで出ていた話題ですが、私たちは「日本人として生きる」「男性として生きる」というような大きな物語を生きると同時に、「私として生きる」という小さな物語も生きています。激しく変化する時代について話題にしながら、一方で次世代の就職話にも議論が及ぶ編集会議が、それを表現しているように感じました。

対人援助学マガジン

通巻59号

第15巻 第3号

2024年12月15日発行

<http://humanservices.jp/>

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集長宛てに

第60号は2025年03月15日

発刊の予定です。

原稿締切**2025年02月25日！**

執筆希望者、常に募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。ページ制限なしの連載誌です。必要な回数、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。執筆資格は学会員であること。現在非会員で書いていただく事になった方には、本誌は学会ニュースレターの位置づけですので、対人援助学会への入会をお願いしています。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪府中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&FAX学会専用 06-6910-0103

表紙の言葉

私が子どもの頃、野良犬や狂犬病予防の話、保健所職員の野犬狩りなどは日常的だった。『犬とり』と呼んで、輪っかにした針金を持って犬と係員が戦っている光景はよく目にした。

欧米から伝わる動物愛護の話は、絵空事に思えるほど多くの殺処分が犬猫に行われていた。それが今では、動物愛護法（1973年に議員立法で制定されたらしい）も定められ、本誌連載の保護ネコ活動のような時代になった。

このイラストはあの時代に、子どもの情操教育に良いと犬を飼い始め、必要が無くなったからと保健所に連れていくよう義母から命じられた婿養子の父親の体験談マンガ「ジョンの仕事」の一コマだ。

2024/12/15